

バージョン 2003.06.13  
Windows



## サーバー製品インストール ガイド



バージョン 2003.06.13  
Windows



## サーバー製品インストール ガイド

本書をご使用になる前に、189 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

# 目次

図	vii
---	-----

表	ix
---	----

本書について	xi
--------	----

本書の対象読者	xiii
書体の規則	xiii
関連情報	xiv
IBM Rational カスタマ サポートへの問い合わせ	xiv

## 第 1 章 インストール前に必要な作業

IBM Rational 製品の以前のリリースの削除	1
IBM Rational ClearCase での異なるバージョンのインストール	1
IBM Rational 製品の統合	2
IBM Rational Suite の統合	2
IBM Rational サーバー製品のインストールの準備	2
展開方法の選択	3
ユーザーが、リリース領域、CD、または Web ダウンロードのうちどこからインストールするかを決定	4
ユーザーがサイレント インストールを実行するかどうかの決定	5
管理者権限	5
サーバー システムとソフトウェアの要件	5
IBM Rational Suite のインストールの準備	12
IBM Rational Suite 環境の計画	14
ClearCase LT のインストールの準備	16
ClearCase LT から ClearCase への移行	17
ClearCase LT インストール チェックリスト	17
ClearCase LT サーバー コンピュータとクライアント コンピュータの概要	18
ClearCase Web サーバー	19
Windows ドメインのメンバーシップ要件	20
CLEARCASE_PRIMARY_GROUP 環境変数の設定	20
Rational Suite の一部として ClearCase LT をインストールする	20
評価目的での ClearCase LT のインストール	21
ClearCase LT サーバーの選択	22
ClearCase LT サーバーのセットアップ	23
ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストールの準備	24
ClearQuest と ClearQuest MultiSite をインストールするためのチェックリスト	24
New ClearQuest Web の構成のインストール	29
ClearQuest と ClearQuest MultiSite の構成	29
評価用 IBM Rational ClearQuest のインストール	34
データベースの種類の選択	36
ClearQuest MultiSite 用のデータベースのセットアップ	39
ClearQuest での開始ウィザードの使用法	39

DB2 クライアントのインストール	40
新規 ClearQuest Web 用の Web サーバーのインストール	40
Web ブラウザのインストール	40
VS.NET との統合の設定	41
互換性に関する問題	41
ProjectConsole のインストールの準備	42
ProjectConsole サーバーの設定	43
追加の ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェントの設定 (オプション)	44
ProjectConsole リポジトリの設定	44
ProjectConsole Template Builder のインストール	45
RequisitePro のインストールの準備	45
RequisitePro サーバーのカスタム セットアップ オプション	47
RequisitePro データベースの設定	47
RequisiteWeb の設定	48
ディスカッション用の電子メールの設定	49
IBM Rational テスト製品のインストールの準備	49
IBM Rational ManualTest Web Execution について	50
IBM Rational テスト データストアについて	50

## 第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス

Suite のライセンスと単体製品のライセンス	55
ホスト用開発システムのライセンス	55
ClearCase LT のライセンス	55
ClearQuest のライセンス	55
ClearQuest MultiSite のライセンス	55
Sybase SQL Anywhere のライセンス	56
Web クライアントのライセンス	56
UNIX 版の DevelopmentStudio 用 Windows NT コンポーネントのライセンス	56
AccountLink を使用したパーマネント ライセンス キーの要求	57
パーマネント ライセンス キーのインポート	58
テンポラリ ライセンス キーの入力	59
単一または複数のライセンス サーバーを使用するためのクライアントの設定	59

## 第 3 章 IBM Rational 製品のインストール

IBM Rational 製品の以前のリリースの削除	61
IBM Rational 製品の展開	61
セットアップ ウィザードの使用法	63
Rational_install ログ	63
レジストリ サイズ	64
インストールの中断	65
[カスタム セットアップ] ページの使用法	65
IBM Rational ライセンス サーバーの指定	67
CD または Web ダウンロードからの IBM Rational 製品のインストール	67



DB2 でのプロジェクトの作成 . . . . .	131
RequisitePro を使用するための Oracle の設定 . . . . .	131
Oracle データベース管理 . . . . .	132
RequisitePro 用の Oracle スキーマの作成 . . . . .	132
スキーマの作成 . . . . .	135
異なるデータベース内にある複数のプロジェクト の接続 . . . . .	136
Oracle にアクセスするためのデスクトップの設 定 . . . . .	138
Oracle でのプロジェクトの作成 . . . . .	138
RequisitePro を使用するための SQL Server の設定 . . . . .	138
SQL Server データベース管理 . . . . .	139
RequisitePro 用の SQL Server スキーマの作成 . . . . .	139
SQL Server でのプロジェクトの作成 . . . . .	141
Rational E-Mail Reader の設定 . . . . .	141
ディスカッション用の電子メールの設定のための 要件 . . . . .	141
RequisiteWeb の設定 . . . . .	142
前提事項 . . . . .	143
RequisiteWeb サーバーの設定 . . . . .	143
RequisiteWeb のテスト . . . . .	154
RequisiteWeb 用 RequisitePro プロジェクトの管 理 . . . . .	155
RequisiteWeb プロジェクト カタログの使用法 . . . . .	155
データベース プロジェクト . . . . .	156

## 第 8 章 インストール後に必要な作業:

### IBM Rational テスト ツールの設定 . . 157

テスト データストアの設定 . . . . .	157
新しいデータベースを作成するための前提条件 . . . . .	157
Microsoft Access テスト データストアの作成 . . . . .	157
SQL Anywhere の設定 . . . . .	157
SQL Anywhere データベース サーバーの作成 . . . . .	159
SQL Anywhere テスト データストアの作成 . . . . .	160
Microsoft Access から SQL Anywhere へのテス ト データストアの変換 . . . . .	161
SQL Anywhere データベース サーバーの管理 . . . . .	162
IBM Rational ManualTest Web Execution の設定 . . . . .	162
前提事項 . . . . .	162
Web サーバーのインストール . . . . .	162
Microsoft Internet Information Server の設定 . . . . .	163
Microsoft Personal Web Server の設定 . . . . .	166
Web サーバーのトラブルシューティング . . . . .	167

## 第 9 章 Rational Web Platform のカ

### スタマイズ . . . . . 169

RWP インストール ディレクトリ . . . . .	169
RWP 構成ファイル . . . . .	169
構成ファイルの参照用バージョン . . . . .	170
デフォルトの RWP HTTP ポートの変更 . . . . .	170
デフォルトの RWP サブレット エンジン ポ ートの変更 . . . . .	170
RWP のログの設定 . . . . .	171
ログの循環とログのクリーンアップ . . . . .	172
RWP で使用するユーザー ID の変更 . . . . .	173
Windows での RWP ユーザー アカウントの変更 . . . . .	173
RWP の停止と再開 . . . . .	174
ほかの Web サーバーから RWP へのアクセスの構 成 . . . . .	174
Apache の mod_proxy サポートの構成 . . . . .	175
Internet Information Server の URL リダイレクト の設定 . . . . .	176
RWP でセキュア ソケットを使用する構成 . . . . .	177
RWP に対する安全なアクセスの設定 . . . . .	178
RWP へのその他の変更 . . . . .	179

## 第 10 章 IBM Rational 製品の削除 181

IBM Rational ソフトウェアを削除する前に . . . . .	181
ClearCase LT サーバーから ClearCase データを 削除する前に . . . . .	182
RequisiteWeb を削除する前に . . . . .	182
IBM Rational ソフトウェアの削除 . . . . .	183
RequisiteWeb 2003.06.00 の削除 . . . . .	183
RequisiteWeb 2002.05.X の削除 . . . . .	183
ReqWeb と Jakarta の仮想ディレクトリの削除 . . . . .	183
Jakarta ISAPI フィルタの削除 . . . . .	184
IIS 管理サービスの再起動 . . . . .	184
RequisiteWeb プログラムの削除 . . . . .	184
RequisiteWeb 2001A の削除 . . . . .	185
RqTomcat サービスの停止と削除 . . . . .	185
ReqWeb と Jakarta の仮想ディレクトリの削除 . . . . .	186
RequisiteWeb 2001A の削除 . . . . .	186
Tomcat_Home と Java_Home システム変数の削 除 . . . . .	186
TestManager の除去 . . . . .	187

## 付録. 特記事項 . . . . . 189





1. ClearQuest と ClearQuest MultiSite の構成	30	2. ccweb と RWP との間の安全な通信 . . . .	178
--	----	----------------------------------	-----



# 表

1. 各製品に対応するインストレーション ガイド	xi	17. RequisitePro サーバーのインストール チェック	
2. IBM Rational Suite の統合の計画	2	リスト	46
3. IBM Rational サーバー製品のインストール前の		18. Rational RequisitePro のカスタム セットアップ	
タスク	2	オプション	47
4. IBM Rational セットアップ ウィザード展開方法	4	19. IBM Rational テスト製品のインストール チェ	
5. サーバーの要件と推奨事項	6	ックリスト	49
6. IBM Rational Suite インストール チェックリス		20. ライセンス取得のための基本タスク	53
ト	13	21. 展開方法	62
7. IBM Rational Suite で使用するサーバー	14	22. セットアップ ウィザードでのサーバーのカス	
8. IBM Rational Suite 環境のワークシート	16	タム セットアップ	65
9. ClearCase LT サーバーのインストール チェッ		23. LKAD の起動	82
クリスト	17	24. LKAD タスク	82
10. ClearQuest 評価用インストール チェックリス		25. コマンド ライン構文	84
ト	25	26. 警告とブロック	84
11. ClearQuest 管理ツール インストール チェック		27. RequisiteWeb ユーザーの作成	144
リスト	25	28. ローカル管理者グループへの ReqWebUser の	
12. ClearQuest の製造元データベースをインストー		追加	144
ルするためのチェックリスト	27	29. ReqWebUser へのネットワーク プロジェクト	
13. ClearQuest MultiSite 管理ツール インストール		アクセスの付与	148
チェックリスト	28	30. IIS を無効にする	153
14. ClearQuest でサポートされるデータベース サー		31. デフォルトの RWP サーブレット エンジン	
バー	37	ポート	171
15. ClearQuest および ClearQuest MultiSite でサポ		32. RWP ログ レベル	172
ートされるデータベース サーバー	38		
16. ProjectConsole をインストールするためのチェ			
ックリスト	42		



## 本書について

本書では、サーバーに初めて IBM Rational 製品をインストールして設定し、ライセンスを取得する場合の条件と手順について説明します。IBM Rational 環境の計画とセットアップにお役立てください。

- IBM Rational デスクトップ ソフトウェアのインストールとライセンス取得に関する手順と要件については、『*IBM Rational® Software デスクトップ製品インストール ショーガイド*』を参照してください。
- Rational Suite® 製品のアップグレードについては、『*IBM Rational Suite アップグレード ガイド*』を参照してください。

表 1 に、各製品にクライアント コンポーネントとサーバー コンポーネントが含まれるかどうかを示しています。両方のコンポーネントが含まれる場合は、『*IBM Rational Software サーバー製品インストール ショーガイド*』と『*IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ショーガイド*』を参照してください。IBM® マニュアルは、IBM Publications Center から HTML または PDF 形式でダウンロードできます。<http://www.ibm.com/> にアクセスして、検索エンジンに「IBM Publications Center」と入力します。

表 1. 各製品に対応するインストール ショーガイド

製品名	クライアント/ サーバー	参照するインストール ショーガイド
IBM Rational Suite	両方	IBM Rational Software サーバー製品 IBM Rational Software デスクトップ製品
ClearCase® LT (ClearCase Web を含む)	両方	IBM Rational Software サーバー製品 IBM Rational Software デスクトップ製品
ClearQuest®	両方	IBM Rational Software サーバー製品 IBM Rational Software デスクトップ製品
ClearQuest MultiSite	サーバー	IBM Rational Software サーバー製品
IBM Rational ManualTest Web Execution	両方	IBM Rational Software サーバー製品 IBM Rational Software デスクトップ製品
Rational Process Workbench®	デスクトップ	IBM Rational Software デスクトップ製品
Rational ProjectConsole™	両方	IBM Rational Software サーバー製品 IBM Rational Software デスクトップ製品
Purify®, PurifyPlus™, PureCoverage®, および Quantify®	デスクトップ	最新の要件とサポートされるソフトウェアについては、『 <i>IBM Rational PurifyPlus ファミリー製品リリース ノート</i> 』を参照してください。

表 1. 各製品に対応するインストール ガイド (続き)

製品名	クライアント/ サーバー	参照するインストール ガイド
QualityArchitect	デスクトップ	IBM Rational Software デスクトップ製品
RequisitePro® (RequisiteWeb を含む)	両方	IBM Rational Software サーバー製品 IBM Rational Software デスクトップ製品
Robot	デスクトップ	IBM Rational Software デスクトップ製品
Rose	デスクトップ	IBM Rational Software デスクトップ製品
Rose Data Modeler	デスクトップ	Rose Data Modeler では、データベースの製造元ごとにモデルを作成します。サポートされている製造元データベースのリストについては、『IBM Rational Software デスクトップ製品 インストール ガイド』を参照してください。Rose Data Modeler の設定方法は、どちらのインストール ガイドにも特に記載されていません。  データベースのインストールと設定については、製造元の資料を参照してください。
Rose RealTime	デスクトップ	IBM Rational Rose® RealTime には、独自のインストール ガイドがあります。
TeamTest	両方	IBM Rational Software サーバー製品 (テスト データストアの設定について) IBM Rational Software デスクトップ製品
Test Agents (UNIX/Windows)	デスクトップ	IBM Rational Software デスクトップ製品
Test Enablers	デスクトップ	IBM Rational Software デスクトップ製品
Test Manager	両方	IBM Rational Software サーバー製品 (テスト データストアの設定について) IBM Rational Software デスクトップ製品
IBM Rational Unified Process®	デスクトップ	サポートされている Web ブラウザについては、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド』を参照してください。インストール前とインストール後のその他の要件はありません。

表 1. 各製品に対応するインストール ガイド (続き)

製品名	クライアント/ サーバー	参照するインストール ガイド
XDE™ Tester	デスクトップ	XDE Tester メディア キットに収録されている XDE Tester または『XDE Tester リリース ノート』  Robot J から XDE Tester にアップグレードする方法については、『IBM Rational Suite アップグレード ガイド』を参照してください。

## 本書の対象読者

本書は、IBM Rational サーバー製品を初めてインストールするデータベース管理者、システム管理者、ClearCase 管理者を対象にしています。すべてのユーザーが、Microsoft® Windows® および UNIX® オペレーティング システム、システムとデータベースの管理方法、バージョン管理ソフトウェア、スクリプト言語についての知識があることを前提にしています。

## 書体の規則

本書では、以下の書体の規則を使用します。

- *ccase-home-dir* は、ClearCase 製品ファミリがインストールされたディレクトリを表します。デフォルトでは、このディレクトリは UNIX では `/opt/rational/clearcase`、Windows では `C:\Program Files\Rational\ClearCase` です。
- *cquest-home-dir* は、Rational ClearQuest がインストールされたディレクトリを表します。デフォルトでは、このディレクトリは UNIX では `/opt/rational/clearquest`、Windows では `C:\Program Files\Rational\ClearQuest` です。
- **太字** は、ユーザーが入力できる名前 (コマンド名、ブランチ名など) に使用します。
- *sans-serif* フォント は、ファイル名、ディレクトリ名、ファイル拡張子に使用します。
- **sans-serif 太字フォント** は、GUI 要素 (メニュー名、チェック ボックス名など) に使用します。
- 斜体 は、変数、文書の題名、用語集の用語、強調に使用します。
- モノスペース フォント は、例に使用します。ユーザー入力をプログラム出力と区別する必要がある場合、ユーザー入力には**太字**が使用されます。
- 非印刷文字は、次のように表されます。<EOF>、<NL>
- キー名とキーの組み合わせは、大文字で次のように表されます。SHIFT、CTRL+G
- [ ] 形式や構文の記述では、大カッコで囲まれた項目はオプションです。
- { } 形式や構文の記述では、中カッコで囲まれたリストの中から 1 つの項目を選択する必要があります。
- | 縦線は、選択項目リスト内の項目を区切ります。

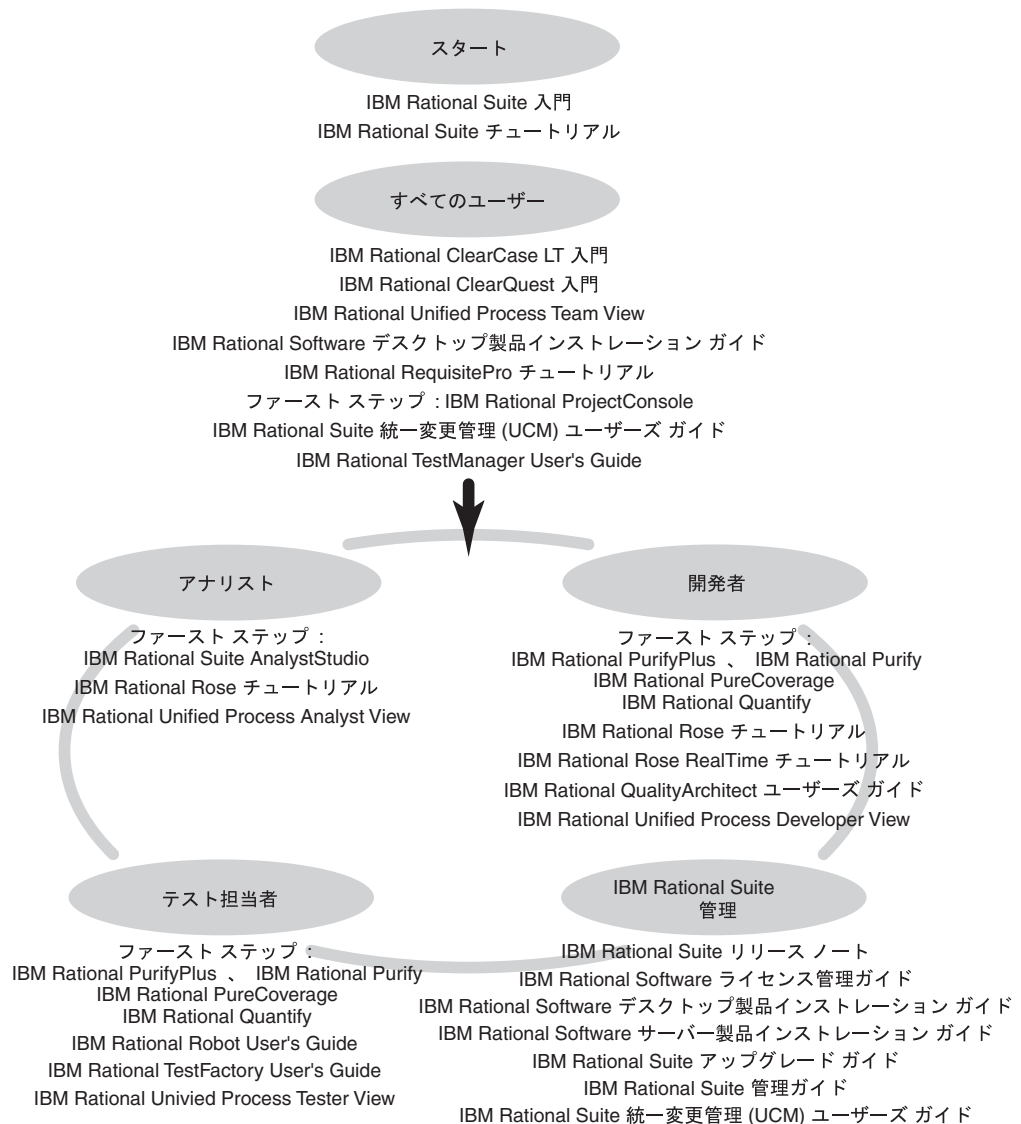
- ... 構文の記述では、省略符号は、前の項目または行を 1 回以上繰り返せることを示します。あるいは、情報の省略を示す場合もあります。

注: 特定のコンテキストでは、“\*” や “?” のようなワイルドカードとして、パス名の中で “...” を使用できます。詳しくは、**wildcards\_ccase** のリファレンス ページを参照してください。

- コマンド名またはオプション名に短形式がある場合、“スラッシュ” ( / ) 文字は、短縮された正しい略語を示します。例を次に示します。

**1sc/heckout**

## 関連情報



## IBM Rational カスタマ サポートへの問い合わせ

本製品のインストール、使用、保守に関するご質問については、以下の IBM Rational カスタマ サポートまでお問い合わせください。

サポートの資格をお持ちのすべてのお客様は、電話や電子メールによるサポートもご利用になれます。詳しくは、<http://www.ibm.com/jp/software/rational/support> をご参照ください。

IBM Rational ソフトウェア サポートのインターネット サイトでは、ご自分でサポート情報を検索することができます。詳しくは、<http://www.ibm.com/planetwide> をご参照ください。

**注:** まず次の内容に答える準備をしてから、IBM Rational カスタマ サポートにお問い合わせください。

- お名前、会社名、ICN 番号、電話番号、電子メールアドレス
- オペレーティング システム、バージョン番号、適用されているサービス パックまたはパッチ
- 製品名とリリース番号
- PMR 番号 (以前に報告した問題の続きである場合)



---

## 第 1 章 インストール前に必要な作業

この章には、Rational Suite をはじめとする IBM Rational 製品のインストールを計画する場合に役に立つ情報が含まれています。この章のチェックリストを使用することで、サーバーのインストールを行う前に要件を確認することができます。

Rational デスクトップ製品とクライアント製品をインストールするには、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』を参照してください。参照マニュアルはすべて、*Rational Solutions for Windows Online Documentation* CD-ROM にあります。または、<http://www.ibm.com/> へ移動して検索エンジンで「IBM Publications Center」と入力することにより、**IBM Publications Center** から HTML または PDF 形式のマニュアルをダウンロードできます。

- IBM Rational Suite をセットアップする場合は、2 ページの『IBM Rational 製品の統合』と 12 ページの『IBM Rational Suite のインストールの準備』を参照してください。
- この章のその他の内容については、2 ページの表 3 で順を追って説明しています。

---

### IBM Rational 製品の以前のリリースの削除

前のバージョンの Rational 製品 (IBM Rational ライセンス サーバーを含む) がインストールされている場合は、バージョン 2003.06.13 の IBM Rational 製品をインストールする前に、『IBM Rational Suite アップグレードガイド』を必ずお読みください。このガイドは、*IBM Rational Solutions for Windows Online Documentation* CD-ROM から参照するか、IBM Publications Center からダウンロードできます。ただし IBM Rational ClearCase だけは例外です。つまり、前のバージョンの ClearCase と一緒に製品をインストールできます。

**注:** フローティング ライセンスを使用している場合は、コンピュータ上の IBM Rational 製品をアップグレードする前に、ライセンス サーバー名を記録しておきます。新しい IBM Rational 製品をコンピュータにインストールした後、License Key Administrator でホスト名をリセットします。

---

### IBM Rational ClearCase での異なるバージョンのインストール

ただし、次のような場合には、異なるバージョンを IBM Rational ClearCase でインストールできます。

- 単独使用の製品または Rational Suite の一部である IBM Rational ClearQuest と、ClearCase 4.2 ～ 6.0
- IBM Rational Suite と、ClearCase 4.2 ～ 6.0
- IBM Rational XDE と、(すべてのパッチを適用した) Rational ClearCase 4.2 または 6.0

## IBM Rational 製品の統合

ここでは、IBM Rational 製品をインストールして設定する前に参照する必要がある IBM Rational のガイドについて簡単に説明します。

### IBM Rational Suite の統合

表 2 に、IBM Rational Suite の設定に関する情報の参照先を示します。

表 2. IBM Rational Suite の統合の計画

目的	参照先
統一変更管理を使用して IBM Rational Suite をセットアップする	<i>Rational Solutions for Windows Online Documentation</i> CD-ROM または <b>IBM Publications Center</b> の『 <i>IBM Rational Suite 統一変更管理 (UCM) ユーザーズ ガイド</i> 』と『 <i>IBM Rational Suite 管理ガイド</i> 』  (インストレーション ガイドを使用する必要はありません。必要な情報はすべてユーザーズ ガイドと管理ガイドに記載されています。)
Rational RequisitePro や Rational ClearQuest などの IBM Rational 製品との統合を計画し、IBM Rational Administrator の使用法を計画する  Rational Administrator は、IBM Rational Suite と共に自動的にインストールされます。	<i>IBM Rational Solutions for Windows Online Documentation</i> CD-ROM または <b>IBM Publications Center</b> の『 <i>Rational Suite 管理ガイド</i> 』。

## IBM Rational サーバー製品のインストールの準備

表 3 に、サーバー製品のインストールに関連する情報の参照先を示します。IBM Rational デスクトップ製品とクライアント製品をインストールするには、『*IBM Rational Software デスクトップ製品 インストレーション ガイド*』を参照してください。

表 3. IBM Rational サーバー製品のインストール前のタスク

目的	参照先
IBM Rational 製品をアップグレードする	1 ページの『IBM Rational 製品の以前のリリースの削除』
特定の IBM Rational 製品の統合に関する情報を参照する	2 ページの『IBM Rational 製品の統合』
IBM Rational ソフトウェアのライセンスを取得します。	53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』

表 3. IBM Rational サーバー製品のインストール前のタスク (続き)

目的	参照先
IBM Rational 製品の展開方法を決定します。  IBM Rational セットアップ ウィザードを使用して、製品を CD または IBM の Web ダウンロードから直接インストールするか、リリース領域をセットアップ (エンタープライズ レベルでの使用向けに展開) するか、またはサイレント インストールを実行します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 3 ページの『展開方法の選択』</li> <li>• 61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』</li> </ul>
Rational Suite のインストールの準備をする	12 ページの『IBM Rational Suite のインストールの準備』
ClearCase LT のインストールの準備をする	12 ページの『IBM Rational Suite のインストールの準備』
ClearQuest と ClearQuest Multisite のインストールの準備をする	24 ページの『ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストールの準備』
ProjectConsole のインストールの準備をする	42 ページの『ProjectConsole のインストールの準備』
RequisitePro のインストールの準備をする	45 ページの『RequisitePro のインストールの準備』
IBM Rational のテスト製品のインストールの準備をする	49 ページの『IBM Rational テスト製品のインストールの準備』
IBM Rational Administrator を使用する	Rational Administrator をすべての IBM Rational Suite 製品、RequisitePro、Robot、Sybase SQL Anywhere、TestManager でインストールします。IBM Rational Administrator の詳細については、『IBM Rational Suite 管理ガイド』を参照してください。
サービス リリースを適用する	85 ページの『サービス リリースの適用』
IBM Rational 製品を修復または変更する	83 ページの『製品の再インストール (変更または修復)』
IBM Rational 製品を削除する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 181 ページの『第 10 章 IBM Rational 製品の削除』</li> <li>• 80 ページの『製品を削除するためのコマンド行の使用法』</li> </ul>
IBM Rational Web Platform をカスタマイズする	169 ページの『第 9 章 Rational Web Platform のカスタマイズ』

## 展開方法の選択

IBM Rational セットアップ ウィザードにはいくつかの展開方法があります。作業環境に IBM Rational 製品のインストールを計画している場合は、管理者とユーザーにとって最も効率的な展開方法を選択してください。

表 4 に、各展開方法の説明を示します。各展開方法に関する指示については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。

表 4. IBM Rational セットアップ ウィザード展開方法

タイプ	説明
CD イメージからデスクトップ環境へのインストール	このオプションをオンにすると、製品を Rational Solutions for Windows CD からデスクトップまたはサーバーに直接インストールできます。CD-ROM をコンピュータの CD ドライブに挿入し、セットアップ ウィザードを起動します。
Web ダウンロード	<p>この方法はセットアップ ウィザードには表示されませんが、展開オプションの 1 つです。各ユーザーは IBM Rational Download and Licensing Center から製品をダウンロードできます。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <a href="https://www6.software.ibm.com/reg/rational/rational-i">https://www6.software.ibm.com/reg/rational/rational-i</a> にアクセスします (ただし、英語のみのご利用となります)。</li> <li>2. [Rational Download and Licensing Center (Rational Download and Licensing Center)] に登録します。</li> <li>3. <b>[フル製品バージョン (Full Product Versions)]</b> または <b>[パッチとサービス リリース (Patches and Service Releases)]</b> を選択します。</li> <li>4. インストールする Rational 製品を選択します。</li> <li>5. インストールする Rational 製品のバージョンを選択します。[継続] をクリックして、[ダウンロード] ページへ移動します。</li> </ol>
エンタープライズ レベルでの使用向けに展開	このオプションをオンにすると、ネットワーク リリース領域を作成し、製品のインストールをカスタマイズできます。セットアップ ウィザードで作成したサイト デフォルト ファイルを使用して、ユーザーは設定済みの構成の製品をインストールするか、異なるデフォルト値の設定された製品をインストールできます。
サイレント インストール	<p>この方法はセットアップ ウィザードには表示されませんが、展開オプションの 1 つです。サイレント インストールにより、すべてのユーザーのデスクトップに同じ製品、機能、オプションがインストールされます。サイレント インストールでは、製品を開発環境に展開する場合の作業量を減らすことができます。このオプションを使用する場合、ユーザーはセットアップ ウィザードでオプションを選択する必要はありません。</p> <p>詳しくは、78 ページの『IBM Rational 製品のサイレント インストールのセットアップ』を参照してください。</p>

## ユーザーが、リリース領域、CD、または Web ダウンロードのうちどこからインストールするか決定

インストールを開始する前に、以下のどの方法を使用するかを決定します。

- リリース領域とサイト デフォルト ファイルを作成する方法
- CD または IBM の Web ダウンロードから直接インストールする方法

リリース領域の利点は、複数のクライアントが特定のリリース領域からインストールできることです。サービス リリースが使用可能になった場合、サービス リリースをリリース領域に適用して、クライアントは、更新されたリリース領域から再インストールすることができます。

リリース領域を設定する場合は、クロス セクションのユーザーをサポートするために 1 つまたは複数のサイト デフォルト ファイルが必要かどうかを決定します。リリース領域をセットアップして 1 つまたは複数のサイト デフォルト ファイルを作成するには、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。

## ユーザーがサイレント インストールを実行するかどうかの決定

ユーザーによるリリース領域からの製品のインストールを決定した場合、サイレント インストールを実行するようユーザーに指示できます。サイレント インストールの利点は、クライアント ユーザーがオプションを選択したり、決定したりする必要がないことです。サイレント インストールにより、すべてのユーザーのデスクトップに同じデフォルト設定とオプションがインストールされます。

サイレント インストールの設定と実行方法については、78 ページの『IBM Rational 製品のサイレント インストールのセットアップ』を参照してください。

---

## 管理者権限

Windows オペレーティング システムに IBM Rational 製品をインストールするには、適切な権限を使用してログオンする必要があります。ローカル コンピュータの管理者グループのメンバーである Windows ドメイン アカウントにログオンする必要があります。実行するインストール方法 (サイレント インストールを含む) に関わりなく、正しい権限を持っている必要があります。

**注:** 適切な権限を使用してログオンしない場合は、製品のインストールが失敗します。正しくない権限が原因で失敗したインストールのログ ファイルには、データが格納されません。

---

## サーバー システムとソフトウェアの要件

表 5 に、自分の環境で IBM Rational サーバー製品を実行するための要件と推奨事項を示します。ハードウェアの一部の推奨事項を満たしていないコンピュータでもソフトウェアを実行できる場合があります。この表の推奨事項は、良好な動作性能を得るためのガイドラインです。

表 5. サーバーの要件と推奨事項

項目	要件と推奨事項
オペレーティング システム	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Microsoft Windows 2003 Enterprise Server、Service Pack なし</li> <li>• Microsoft Windows 2003 STD Edition、Service Pack なし</li> <li>• Microsoft Windows XP Professional、Service Pack 1、1a (Service Pack 2 についてはメモを参照)</li> <li>• Microsoft Windows 2000 Server、Service Pack 2、3、4</li> <li>• Microsoft Windows 2000 Advanced Server、Service Pack 2、3、4</li> <li>• Microsoft Windows 2000 Professional、Service Pack 2、3、4</li> <li>• Microsoft Windows NT 4.0 Server、Service Pack 6a + Security Rollup Package (SRP、Q299444)</li> <li>• Microsoft Windows NT 4.0 Workstation、Service Pack 6a + SRP (Security Rollup Package、Q299444) (Web サーバーとしてはサポートされません)</li> </ul> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows XP SP2 の製品版は、これらの要件の決定時点では最終テストに使用できませんでした。Windows XP SP2 サポートの最新情報を入手するには、<a href="http://www.ibm.com/jp/software/rational/support">http://www.ibm.com/jp/software/rational/support</a> にアクセスして、「Rational 製品と Windows XP SP2」を検索します。このリリースで Microsoft Windows XP SP2 が IBM Rational 製品に及ぼす影響については、『IBM Rational Suites リリースノート』の「サード パーティ製品との互換性」を参照してください。</li> <li>• ClearQuest MultiSite Shipping Server では、Windows 2000 Server Service Pack 2、3、4、Windows 2000 Advanced Server Service Pack 2、3、4、Windows NT 4.0 Server、Service Pack 6a + SRP (Q299444) のみがサポートされます。</li> <li>• ClearCase の UNIX インターオペラビリティ ソリューションと NAS (Network Attached Storage) については、『IBM Rational ClearCase インストレーション ガイド』を参照してください。</li> <li>• このリリースでは、Windows XP Home Edition はサポートされていません。</li> <li>• ClearCase UNIX プラットフォームの最新情報については、<a href="http://www.ibm.com/support">http://www.ibm.com/support</a> を参照してください。[Search Technical Support] をクリックして、「ClearCase family supported releases」と入力します。</li> </ul>

表 5. サーバーの要件と推奨事項 (続き)

項目	要件と推奨事項
ハードウェア	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 500 ～ 600 MHz 以上</li> <li>• 256 ～ 512 MB 以上の RAM: メモリ量が多いほど、よりパフォーマンスが向上します。必要なメモリ量は、同時使用のユーザー数、要求されるデータ量、データベースのサイズによって異なります。</li> <li>• 推奨 swap スペースは、搭載 RAM メモリ量の 2 倍</li> <li>• IBM Rational 単体製品用に 250 MB 以上のディスク容量</li> </ul> <p>注: New ClearQuest Web の最低限の推奨ハードウェア要件については、『New ClearQuest Web Installation Guide』を参照してください。</p>
ClearCase LT サーバー ファイルの記憶領域の要件	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearCase LT では、ソース管理下にファイルとデータベースを格納する十分なディスク容量がサーバー上に必要です。必要なディスク容量は、VOB とビューの特性、使用状況によって異なります。</li> <li>• サーバーには、ClearCase LT サーバーをロードするための十分なディスク容量に加え、ClearCase LT サーバーを介して ClearCase Web インターフェイスにアクセスするユーザーごとに 0.5 ～ 1.0 MB の空き容量が必要です。</li> </ul>
Rational Suite ディスク 容量	<ul style="list-style-type: none"> <li>• (フル インストール)、1.2 GB (標準インストール)、1.9 GB (エンタープライズ レベルでの展開)</li> <li>• Rational AnalystStudio - 1.2 GB (フル インストール)、851 MB (標準インストール)</li> <li>• Rational DevelopmentStudio - 1.4 GB (フル インストール)、1.1 GB (標準インストール)</li> <li>• Rational DevelopmentStudio for UNIX (Windows コンポーネントのみ) - 515 MB (フル インストール)、445 MB (標準インストール)</li> <li>• Rational DevelopmentStudio - RealTime Edition - 1.4 GB (フルインストール)、1.1 GB (標準インストール)</li> <li>• Rational DevelopmentStudio - RealTime Edition for UNIX (Windows コンポーネントのみ) - 515 MB (フル インストール)、445 MB (標準インストール)</li> <li>• Rational TeamTest - 645 MB (フル インストール)、583 MB (標準インストール)</li> <li>• Rational Team Unifying Platform - 1.1 GB (フル インストール)、825 MB (標準インストール)</li> </ul> <p>注: Rational ProjectConsole が Rational Suite に含まれている場合、リポジトリに 1 GB 以上が必要になります。</p>

表 5. サーバーの要件と推奨事項 (続き)

項目	要件と推奨事項
単体製品ディスク容量	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearCase LT サーバー: 264 MB (フル インストール)</li> <li>• ClearQuest MultiSite Administrator: 250 MB</li> <li>• Rational Shipping Server: 250 MB</li> <li>• ターミナル サーバー (ClearQuest): 250 MB</li> <li>• RequisitePro: 192 MB (フル インストール)、176 MB (標準インストール)</li> <li>• TestManager: 379 MB (フル/標準インストール)</li> </ul>
データベース	<p>ClearQuest データベース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM DB2 UDB Express 8.1</li> <li>• IBM DB2 UDB 7.2 (Fix Pack 8 使用)、8.1</li> <li>• ClearQuest には、Rational 製品 v8.1 用の DB2 UDB コンポーネントが同梱されています。このデータベースは、次の ClearQuest のメジャー リリースでは、すぐに使用可能な製品として SQL Anywhere の代わりに使用されます。Rational 製品 v8.1 用の DB2 UDB コンポーネントには、DB2 UDB Express v8.1 のすべての機能が含まれます。</li> <li>• Microsoft SQL Server 7.0 Service Pack 4 または SQL Server 2000 Service Pack 2、3、および最新のバージョン</li> <li>• Oracle 8.1.6、8.1.7.3、9.2、10</li> <li>• Sybase SQL Anywhere 5.5.05、8.0.1、8.0.2 (この表の Sybase SQL Anywhere のセクションを参照)</li> </ul> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Sybase SQL Anywhere と Microsoft Access では、『<i>IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド</i>』に記載されたデスクトップ オペレーティング システムもサポートしています。Windows XP Professional、Windows 2000 Professional は、小規模な開発グループ内で、SQL Anywhere または Microsoft Access のデータベース サーバーとして使用できます。</li> </ul> <p>ClearQuest では、UNIX オペレーティング システム上のデータベースもサポートしています。最新情報については、<a href="http://www.ibm.com/support/">http://www.ibm.com/support/</a> を参照してください。[Technical Support Search] をクリックして、「supported ClearQuest platforms and databases」と入力します。</p> <p>RequisitePro エンタープライズ データベース</p> <p>ClearQuest セクションにリストされているのと同じデータベースベンダーをサポートします。ただし、Sybase SQL Anywhere は除外します。</p> <p><b>注:</b> RequisitePro は、ClearQuest セクションにリストされたものと同じ製造元データベースと UNIX オペレーティング システムをサポートします。</p>

表 5. サーバーの要件と推奨事項 (続き)

項目	要件と推奨事項
データベース (続き)	<p>Rational TestManager データベース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サポートされるすべてのワークステーションと Professional Server オペレーティング システム上で稼働する Microsoft Access 2000、2002 Service Pack 1、2、2003</li> <li>Sybase SQL Anywhere 8.0.2 (この表の Sybase SQL Anywhere セクションにある追加情報を参照)</li> </ul>
	<p>ProjectConsole</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サポートされる Web サーバー要件については、この表の Web サーバーのセクションを参照してください。</li> <li>ProjectConsole は、ProjectConsole データ ウェアハウス用に ClearQuest データベースのフル セットをサポートします。</li> <li>Template Builder、レポート サーバー、収集エージェントの各要件については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド』のデスクトップ要件と推奨事項の項を参照してください。</li> </ul>
Sybase SQL Anywhere	<p>Sybase SQL Anywhere 8.0.2 は、IBM Rational Solutions for Windows のインストール CD、または IBM Web ダウンロード パッケージの一部に含まれています。これは、Rational 製品とのみ連携するように設定されています。Rational セットアップ ウィザードの [製品の選択] ボックスの [SQL Anywhere] をクリックしてください。</p> <p>Sybase から提供されている Sybase SQL Anywhere 5.5 と IBM Rational製品 (IBM Rational ClearQuest、TestFactory、Robot、ProjectConsole、TestManager、TestManager Agent) で提供されている SQL Anywhere 5.5 の両方をインストールした場合、DLL 競合エラーが発生する可能性があります。この場合、最新バージョンの Sybase SQL Anywhere にアップグレードすることをお勧めします。詳細については、IBM Rational カスタマ サポートにお問い合わせください。</p>

表 5. サーバーの要件と推奨事項 (続き)

項目	要件と推奨事項
<p>ホスト用開発システム (リモート セッション)</p>	<p>ClearCase、ClearQuest、RequisitePro、Robot、Rose、SoDA では、以下のプラットフォーム上でホスティング環境における開発をサポートしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Citrix MetaFrame 1.8、Service Pack 2</li> <li>• Citrix MetaFrame XP アプリケーション サーバー</li> <li>• Microsoft Windows 2003 Enterprise Server、Windows Terminal Services</li> <li>• Microsoft Windows 2000 Advanced Server、Windows Terminal Services、Service Pack 2、3、4</li> </ul> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearCase は Citrix MetaFrame 1.8 をサポートしません。</li> <li>• TestManager は、Citrix MetaFrame または Windows Terminal Server のどのバージョンもサポートしていません。</li> <li>• これらの製品については、フローティング ライセンスを使用する必要があります。ノードロック ライセンスはサポートされていません。</li> </ul>

表 5. サーバーの要件と推奨事項 (続き)

項目	要件と推奨事項
Web サーバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearCase Web、New ClearQuest Web、ProjectConsole Web、RequisiteWeb では、Rational Web Platform を使用します。Rational Web Platform は、この表の最初に記載したサーバーのオペレーティング システム上で動作します (Windows XP Professional および Windows 2000 Professional を除く)。</li> <li>• ClearQuest の保守性とサポートを向上させるため、ClearQuest Web ASP 機能は ClearQuest v2003.06.13 の New ClearQuest Web 機能に置き換えられます。New ClearQuest Web 機能は、複数のハードウェア プラットフォーム上に展開するための柔軟性を持つ Java(c) 技術に基づいています。ClearQuest Web ASP を引き続き使用することを選択したカスタマは、同じ Web サーバー上にある他の Rational 製品を v2003.06.13 にアップグレードしたい場合、まず ClearQuest Web ASP 機能をアンインストールしてから v2003.06.13 をインストールしない限り、アップグレードはできません。</li> <li>• ClearCase と New ClearQuest Web では、UNIX プラットフォームと LINUX プラットフォームがサポートされます。詳細については、ClearCase UNIX と新しい Rational ClearQuest Web の各『インストレーション ガイド』を参照してください。</li> </ul> <p>Rational ManualTest Web Execution の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Web サーバー上の Microsoft Internet Explorer 5.0 以上</li> <li>• Windows XP および Windows 2000 上の Microsoft Internet Information Services 5.0 (IIS 5.0)</li> <li>• Windows NT 4.0 Workstation 上の、Windows NT 4.0 Option Pack に含まれる Microsoft Personal Web Server (PWS) (Microsoft の Web サイト <a href="http://www.microsoft.com">www.microsoft.com</a> から入手可能)</li> <li>• Windows NT 4.0 Server 上の Windows NT 4.0 Option Pack の Microsoft Internet Information Server (IIS) (Microsoft の Web サイト <a href="http://www.microsoft.com">www.microsoft.com</a> から入手可能)</li> </ul> <p>Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server、Windows NT 4.0 Server を Web サーバー プラットフォームとして使用することをお勧めします。共有の、またはネットワーク上のプロジェクトは Windows XP Professional、Windows 2000 Professional、Windows NT 4.0 Workstation では使用できません。</p>
Microsoft JVM	<p>Rational セットアップ ウィザードは、このリリース内の製品と共に Microsoft JVM をインストールしません。また、以前にインストールされた Rational 製品から Microsoft JVM を削除することはありません。詳細については、製品固有のリリース ノートを参照してください。</p>
自動ライセンス キーの依頼	<p>ライセンス キー ファイルを要求および受信するためのインターネット接続。詳細については、『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』を参照してください。</p>
デュアル ブート システム	<p>Rational Suite は、2 つのオペレーティング システムが同じパーティションにあるデュアル ブート システムをサポートしていません。</p>

表 5. サーバーの要件と推奨事項 (続き)

項目	要件と推奨事項
IBM Rational のマニュアル	オンライン PDF ファイルを読むには、Adobe Acrobat Reader 4.x 以上が必要です。Adobe Acrobat Reader は、 <a href="http://www.adobe.co.jp/">http://www.adobe.co.jp/</a> から無料でダウンロードできます。
言語サポート	<p>IBM Rational Suite 英語版は、英語版以外に以下のオペレーティング システムにインストールできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 中国語 (簡体字)</li> <li>• 中国語 (繁体字)</li> <li>• オランダ語</li> <li>• フランス語</li> <li>• ドイツ語</li> <li>• ヘブライ語</li> <li>• イタリア語</li> <li>• 日本語</li> <li>• 韓国語</li> <li>• スウェーデン語</li> </ul> <p>すべての画面、メニュー、コントロール、ウィザード、レポート、ユーザー向け文書は、英語 (US) で記述されています。ただし例外として、Rational Suite v2003.06.10、v2003.06.12、v2003.06.13 の大部分は日本語に翻訳されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 中国語 (繁体字)、オランダ語、ヘブライ語、韓国語版のオペレーティング システムを使用する場合、データ (パス名など) は英語 (US) または ASCII 文字セットで入力してください。</li> <li>• 中国語 (簡体字)、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スウェーデン語版のオペレーティング システムを使用する場合、データは英語 (US) またはネイティブ言語の文字セットで入力してください。地域の日付、時間、通貨、数字の表記規則は、入出力ともサポートされています。</li> <li>• ClearCase と ClearQuest では、スペイン語とポルトガル語の文字セットがサポートされます。</li> <li>• ClearCase では、韓国語の文字セットがサポートされます。</li> </ul>

## IBM Rational Suite のインストールの準備

表 6 に、管理者として IBM Rational Suite をインストールする場合のタスクに関する情報の参照先を示します。

IBM Rational Suite インストールに関する最新情報については、*Rational Solutions for Windows Online Documentation* CD-ROM の『IBM Rational Suite リリース ノート』を参照するか、**Rational Download and Licensing Center** の [ダウンロード] ページからリリース ノートをダウンロードしてください。リリース ノートは Rational Suite のインストール処理の最後に表示されます。また、ソフトウェアをインストール後に Windows の [スタート]メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational Suite] の順にポイントし、[Rational Suite リリース ノート] を

クリックしても表示できます。

表 6. IBM Rational Suite インストール チェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	IBM Rational Suite の単体製品に対するインストール要件に従います。インストールする製品がデスクトップ製品である場合は、インストール要件は『IBM Rational Software デスクトップ製品 インストレーション ガイド』に記載されています。
	IBM Rational Suite のライセンスを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
	IBM Rational Suite 環境を計画します。サーバー構成のセットアップ方法を決定します。Rational Suite 全体をサーバーにインストールする必要はありません。Rational セットアップ ウィザードで ClearQuest 管理ツールなどの Rational Suite の機能を選択してサーバー コンピュータにインストールできます。  14 ページの『IBM Rational Suite 環境の計画』を参照してください。
	IBM Rational Suite サーバーのインストールと設定の順番を計画します。
	サーバー構成が IBM Rational Suite からインストールする製品のハードウェアとソフトウェア要件を満たしていることを確認します。5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。
	16 ページの『ClearCase LT のインストールの準備』のチェックリストを使用して、ClearCase LT サーバーを選択します。クライアント ユーザーが IBM Rational Suite をデスクトップにインストールする前に、ClearCase LT サーバーをインストールして設定します。
	24 ページの『ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストールの準備』のチェックリストを使用して、ClearQuest と ClearQuest MultiSite データベースを選択し、IBM Rational Suite 環境での Web サーバー構成を決定します。
	42 ページの『ProjectConsole のインストールの準備』のチェックリストを使用して、ProjectConsole サーバー、Template Builder、データ ウェアハウスを選択します。
	45 ページの『RequisitePro のインストールの準備』のチェックリストを使用して、RequisitePro データベース サーバーと Web サーバーを選択します。
	49 ページの『IBM Rational テスト製品のインストールの準備』のチェックリストを使用して、テスト データを格納する製造元データベースと ManualTest Web Execution 用の Web サーバーを選択します。その他の Rational テスト製品のインストール先を決定するには、『IBM Rational Software デスクトップ製品 インストレーション ガイド』を参照してください。
	IBM Rational Suite の展開方法を決定します。詳しくは、3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。
IBM Rational Suite 製品のインストール	
	Rational Suite をインストールする手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。
インストール後	
	Rational Suite の単体製品に対するインストール後の手順に従います。この章のチェックリストを使用して、インストール後のタスクを追跡します。
	87 ページの『第 4 章 インストール後に必要な作業: ClearCase LT の設定』

表 6. IBM Rational Suite インストール チェックリスト (続き)

チェック	タスク
	91 ページの『第 5 章 インストール後に必要な作業: データベースの設定とその他の ClearQuest タスク』
	119 ページの『第 6 章 インストール後に必要な作業: ProjectConsole の設定』
	127 ページの『第 7 章 インストール後に必要な作業: RequisitePro の設定』
	157 ページの『第 8 章 インストール後に必要な作業: IBM Rational テスト ツールの設定』

## IBM Rational Suite 環境の計画

Rational Suite 環境の計画を立てるために、どのコンピュータをサーバーにするのかを決定します。サーバーには、可用性が高く、メモリとディスク容量の大きなコンピュータが適しています。表 7 に、必要なサーバーの種類を示します。IBM Rational Suite DevelopmentStudio for UNIX (Windows NT コンポーネント) をインストールする場合は、同じサーバーがいくつか必要です。表 8 のワークシートを使用して、Rational Suite サーバー環境の計画を立てます。

表 7. IBM Rational Suite で使用するサーバー

サーバーの種類	説明
ライセンス サーバー	フローティング ライセンスを購入した場合は、ライセンスを管理するためのサーバーをインストールしてセットアップします。詳しくは、53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
ClearCase LT サーバー	<p>ClearCase LT は、クライアント/サーバー製品です。ClearCase LT サーバーの選択とインストールに関するガイドラインについては、16 ページの『ClearCase LT のインストールの準備』を参照してください。</p> <p>ClearQuest 管理ツールを ClearCase LT サーバーにインストールする場合は、特定の順番でインストールします。詳細については、次の項を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>39 ページの『ClearQuest での開始ウィザードの使用法』</li> <li>24 ページの『ClearCase LT サーバーと ClearQuest での開始ウィザードの使用法』</li> </ul>
IBM Rational Shipping Server	ClearCase MultiSite と ClearQuest MultiSite は、どちらも IBM Rational Shipping Server を使用して、MultiSite パッケージを転送します。ClearQuest と ClearCase MultiSite が存在する環境に Rational Shipping Server をインストールする場合、特別な考慮事項があります。推奨事項については、32 ページの『ClearQuest MultiSite 管理ツール』と 32 ページの『Rational Shipping Server』を参照してください。

表 7. IBM Rational Suite で使用するサーバー (続き)

サーバーの種類	説明
データベース サーバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 商用データベースを IBM Rational Suite 製品と共に使用する場合は、それらのデータベースを専用のコンピュータにインストールすることもできます。 ClearQuest、ProjectConsole、RequisitePro の IBM Rational ツールには市販のデータベースが必要です。</li> <li>• システムにいずれかの IBM Rational Suite 製品をインストールすると、Microsoft Access Runtime が自動的にインストールされます。</li> <li>• Sybase SQL Anywhere は、Rational Solutions for Windows のインストール CD-ROM からインストールできますが、特定の IBM Rational 製品でしか機能しないように設定されています。</li> <li>• Rational Administrator は、RequisitePro、ClearQuest、TestManager のプロジェクトとデータ ストアを管理します。Rational Administrator はすべての IBM Rational Suite 製品に含まれています。Rational Administrator の詳細については、『IBM Rational Suite 管理ガイド』を参照してください。</li> <li>• IBM Rational Suite サーバー ソフトウェアをインストールする前に、製造元データベース ソフトウェアをインストールして設定することをお勧めします。</li> </ul>
Web サーバー	<p>Web サーバー コンポーネントを使用すると、IBM Rational Suite クライアント ソフトウェアをデスクトップにインストールしていないユーザーもプロジェクト データを利用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Rational Web Platform (RWP) は、ClearCase Web、ProjectConsole、RequisiteWeb 用の Web サーバーです。RWP をカスタマイズしない限り、RWP の設定はほとんど必要ありません。RWP をカスタマイズする場合は、169 ページの『第 9 章 Rational Web Platform のカスタマイズ』を参照してください。</li> <li>• RWP は、別の Web サーバーを実行する必要のないサーバー上にインストールすることをお勧めします。別の Web サーバーを実行中のサーバーに RWP をインストールすると、ポートの競合が発生し、RWP または別の Web サーバーが開始できなくなる可能性があります。このようなインストールが不可能な場合は、別の Web サーバーでは RWP が使用していないポートを使用するように設定することをお勧めします。</li> <li>• ManualTest Web は、Microsoft Internet Information Server (IIS) 4.0 と 5.0 を使用します。</li> </ul>

表 8 のワークシートを使用して、IBM Rational Suite 環境の計画を立てます。

表 8. IBM Rational Suite 環境のワークシート

製品名	サーバー名	追加情報 (バージョン、Suite 製品または単体製品、ノードロック ライセンス、パッチまたはサービス リリース)
ライセンス サーバー		
ClearCase LT Server (ClearCase Web Server、 Rational Web Platform)		
ClearQuest + MultiSite		
管理ツール		
データベース サーバー		データベース製造元:
Web Server (オプション) (IIS)		
MultiSite 管理ツール		
Rational Shipping Server		
ProjectConsole:		
サーバー (Rational Web Platform + レポート サーバ ー + 収集エージェント)		
レポート サーバーと収集エ ージェント (オプション)		
Template Builder		
データ ウェアハウス		データベース製造元:
RequisitePro		
データベース サーバー		データベース製造元:
Web Server (オプション) (Rational Web Platform)		
テスト製品		
テスト データストア		データベース製造元:
ManualTest Web Server (IIS)		

## ClearCase LT のインストールの準備

ここでは、ClearCase LT サーバーをインストールするための準備について説明します。ClearCase LT クライアントをインストールする方法については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』を参照してください。

ClearCase LT の機能と既知の問題に関する最新情報については、*Rational Solutions for Windows Online Documentation* CD-ROM に収録されている『ClearCase LT リリース ノート』を参照してください。リリース ノートは ClearCase LT のインストール処理の最後に表示されます。また、ソフトウェアをインストール後に Windows

の [スタート]メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearCase LT] の順にポイントし、[Rational ClearCase LT readme] をクリックしても表示できます。

## ClearCase LT から ClearCase への移行

将来、ClearCase にアップグレードする場合は、ClearCase LT を同じバージョンの ClearCase にアップグレードできます。たとえば、ClearCase LT 2003.06.00 は ClearCase 2003.06.00 にアップグレードできます。インストール要件について詳しくは、『IBM Rational ClearCase インストレーション ガイド』を参照してください。

## ClearCase LT インストール チェックリスト

表 9 のチェックリストを使用して、ClearCase LT サーバー (ClearCase Web サーバーを含む) をセットアップし、必要なインストール後のタスクを実行します。

表 9. ClearCase LT サーバーのインストール チェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	IBM Rational ソフトウェアのライセンスを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
	ClearCase LT を評価する場合は、21 ページの『評価目的での ClearCase LT のインストール』を参照してください。
	ClearCase LT をクライアント/サーバー製品として理解するには、18 ページの『ClearCase LT サーバー コンピュータとクライアント コンピュータの概要』を参照してください。
	IBM Rational Web Platform ソフトウェアは ClearCase LT サーバーの任意の機能です。19 ページの『ClearCase Web サーバー』を参照してください。
	5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』と 22 ページの『ClearCase LT サーバーの選択』に記載されたシステム要件とソフトウェア要件を満たすコンピュータを選択します。  ClearCase LT クライアントのシステム要件と推奨事項については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド』の「第 1 章 インストール前に必要な作業」を参照してください。 <b>注:</b> 最適なパフォーマンスを得るには、ClearCase LT サーバーを ClearQuest 製造元データベース サーバーにインストールしないようにしてください。
	システムに対して管理者権限があることを確認します。5 ページの『管理者権限』を参照してください。
	ClearCase LT サーバーと ClearCase LT クライアントを展開する方法を決定します。3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。
	ClearCase LT サーバーになるコンピュータの名前を確認します。  ユーザーが ClearCase LT クライアントまたは ClearCase LT クライアントを含む IBM Rational Suite をインストールする前に、ClearCase LT サーバーをインストールして設定することをお勧めします。20 ページの『Rational Suite の一部として ClearCase LT をインストールする』を参照してください。

表 9. ClearCase LT サーバーのインストール チェックリスト (続き)

チェック	タスク
	ClearCase LT をインストールするすべてのコンピュータが Windows ドメインのメンバーであることと、ClearCase LT を使用するすべてのユーザーが Windows ドメインにアカウントを持っていて、少なくとも 1 つのドメイン グループ のメンバーシップを共通に持っていることを確認します。20 ページの『Windows ドメインのメンバーシップ要件』を参照してください。
	すべての ClearCase LT ユーザーが所属するドメイン グループを ClearCase ユーザー グループとして指定します。20 ページの『CLEARCASE_PRIMARY_GROUP 環境変数の設定』を参照してください。
	ClearCase LT を IBM Rational Suite のほかの製品と共に使用する場合、これらはすべて同じ Suite のバージョン番号にする必要があります。統合製品のアップグレードやデータとスキーマの変換の順序に関する詳細については、『IBM Rational Suite アップグレード ガイド』を参照してください。
	IBM Rational Suite は、複数の Windows NT バージョンを起動できるシステムにはインストールできません。ClearCase LT はそのようなシステムにインストールできますが、オペレーティング システムのバージョンごとに別のディレクトリにインストールする必要があります。詳しくは、『IBM Rational ClearCase LT リリース ノート』を参照してください。
ClearCase LT サーバーのインストール	
	ソフトウェアをインストールする前に、23 ページの『ClearCase LT サーバーのセットアップ』を参照してください。  ClearCase LT サーバーとクライアントをインストールする手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。
インストール後	
	開始ウィザードを使用して、ClearCase LT 環境を設定します。87 ページの『開始ウィザードを使用した ClearCase LT の設定』を参照してください。
	追加の ClearCase LT サーバー タスクを実行します。87 ページの『その他の設定タスク』を参照してください。

## ClearCase LT サーバー コンピュータとクライアント コンピュータの概要

ここでは、ClearCase LT のクライアント側とサーバー側について簡単に説明します。

- ClearCase LT サーバー。**すべての ClearCase LT クライアントには、VOB とビューのデータへのすべてのクライアントのアクセスを管理するため、ClearCase LT サーバー コンピュータのサービスが必要です。ClearCase LT サーバーは、サーバー プロセスを実行し、VOB とビュー記憶域の記憶領域を提供します。ClearCase LT クライアント コンピュータは、1 つの ClearCase LT サーバーにのみアクセスできます。ClearCase LT サーバーは、複数の VOB とビューをサポートできます。また、多くの ClearCase LT クライアントの要求するサービスを提供できます。
- クライアント。**各 ClearCase LT ユーザーは自分専用のコンピュータを所有します。ここで ClearCase LT クライアント プログラムを実行するため、そのコンピュータを特に ClearCase LT クライアント コンピュータと呼びます。インストー

ルされるクライアント プログラムには、コマンド、プログラム、各種のユーザー インターフェイス、その他のソフトウェア (開発ツール、IBM Rational Suite、オペレーティング システム ユーティリティなど) があります。ClearCase LT は、各クライアントにインストールする必要があります。

ClearCase LT コミュニティは、1 つの ClearCase LT サーバーと 1 つ以上の ClearCase LT クライアントで構成されます。サイトに複数の ClearCase LT コミュニティを設定できますが、コミュニティ内の各クライアントがアクセスできる ClearCase LT サーバーは 1 つだけです。ClearCase LT サーバーをインストールしなくても ClearCase LT クライアントをインストールできますが、サーバーをインストールして、クライアントからアクセス可能になるまで、クライアントは動作しません。サーバー コンピュータは適切に設定する必要があります。22 ページの『ClearCase LT サーバーの選択』を参照してください。

ClearCase LT サーバー ソフトウェアをシステムにインストールすると、ClearCase LT クライアント ソフトウェアもそのコンピュータにインストールされます。ClearCase LT クライアント ソフトウェアは、評価、管理、トラブルシューティングを簡素化するために ClearCase LT サーバーにインストールされます。小規模のワークグループのメンバーである場合は、ClearCase LT サーバーをクライアントとして使用してもかまいませんが、できる限り専用のサーバーを使用することをお勧めします。

**注:** ClearCase LT は、ClearCase システムのコンピュータにはインストールできません。

## ClearCase Web サーバー

Rational Web Platform は ClearCase LT サーバーのカスタム機能です。デフォルトでは、ClearCase LT サーバー ソフトウェアと共にインストールされません。この機能を設定する必要はありません。標準のデフォルト値を変更する必要がある場合は、169 ページの『第 9 章 Rational Web Platform のカスタマイズ』を参照してください。

クライアントが ClearCase Web サーバーにアクセスする場合は、ユーザーにサーバー名を提供します。クライアントが ClearCase Web サーバーにアクセスする方法については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』の「第 1 章 インストール前に必要な作業」を参照してください。

**注:** 別の Web サーバーを実行中のサーバーに ClearCase LT サーバーをインストールすると、ポートの競合が発生し、RWP または既存の Web サーバーが開始できなくなる可能性があります。RWP は、別の Web サーバーを実行する必要のないサーバー上にインストールすることをお勧めします。このようなインストールが不可能な場合は、別の Web サーバーでは RWP が使用していないポートを使用するように設定することをお勧めします。この設定も不可能な場合は、別の Web サーバーで使用していないポートを RWP で使用するように設定する必要があります。詳しくは、170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』を参照してください。

## Windows ドメインのメンバーシップ要件

Windows プラットフォームにインストールする ClearCase LT サーバーとクライアントは、Windows ドメインのメンバーである必要があります。Windows プラットフォームから ClearCase LT を使用するには、システムごとのローカル ユーザー アカウントではなく、ドメイン アカウントにログオンする必要があります。

サイトのすべての ClearCase LT ユーザーは、できる限り同じドメイン内にアカウントを持っていないければなりません。そうでない場合は、『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』の手順に従って、複数のドメイン内のユーザーが ClearCase データにアクセスできるように ClearCase LT を設定する必要があります。また、ドメイン内のすべての ClearCase LT ユーザーは、ClearCase LT 管理者が ClearCase ユーザー グループとして指定したドメイン グループのメンバーでなければなりません。ドメイン グループ メンバーシップ要件と一般的なドメインの詳細については、23 ページの『ClearCase LT サーバーのセットアップ』と『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』を参照してください。

**注:** コンピュータがほかの ClearCase LT クライアントまたはサーバーと通信する必要がなく、1 人のユーザーのみが使用する場合は、非ドメイン Windows コンピュータに ClearCase LT をインストールしてもかまいません。このタイプの構成は、実働環境には使用できませんが、ClearCase LT の評価を簡単に行うことができます。

## CLEARCASE\_PRIMARY\_GROUP 環境変数の設定

ClearCase LT アクセス コントロールは、ClearCase データに対するユーザーのアクセス権を判定するときに、ドメイン グループのメンバーシップ情報を考慮します。Windows では、ドメイン アカウントにログオンするユーザーに Windows ドメイン アカウント管理ツールが指定するプライマリ グループが割り当てられないことがあります。

正しく割り当てられるようにするには、正しいプライマリ グループを参照するようにユーザー環境変数 CLEARCASE\_PRIMARY\_GROUP を設定します。この変数の値は、そのユーザーをメンバーとして含む既存のドメイン グループの名前にする必要があります。すべての ClearCase ユーザーは、このグループのメンバーにする必要があります。このユーザー環境変数 (システム環境変数ではない) をすべての ClearCase コンピュータに設定する必要があります。Windows システムでは、コントロール パネルの [システム] を使用して CLEARCASE\_PRIMARY\_GROUP の値を設定します。

CLEARCASE\_PRIMARY\_GROUP と ClearCase アクセス コントロールの詳細については、『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』を参照してください。

## Rational Suite の一部として ClearCase LT をインストールする

ClearCase LT を IBM Rational Suite の一部としてインストールする場合は、特定のインストールの順番があります。ClearCase LT サーバーをインストールして設定する場合は、別のコンピュータから始めます。次に、ClearCase LT を含む Rational Suite をユーザーのデスクトップにインストールします。

ClearCase LT サーバーをインストールするには

1. セットアップ ウィザードの [製品の選択] ページで ClearCase LT を選択します。
2. 次の手順は、ClearCase LT サーバーのインストール方法によって異なります。
  - CD からインストールする場合は、[クライアント/サーバー] ページで [サーバーとクライアント ソフトウェアをインストールする] をクリックします。
  - リリース領域から ClearCase LT サーバーをインストールする場合は、サーバー オプションが自動的に選択されます。
  - ClearCase LT のリリース領域を設定する場合は、[ クライアント/サーバー] ページで [ClearCase サーバーに対して Siteprep を実行する] をクリックします。

ClearCase LT サーバーを同じコンピュータにインストールしようとする前に IBM Rational Suite をインストールする場合 (ClearCase LT を評価する場合を除き、同じコンピュータにすべての ClearCase LT ソフトウェアをインストールすることはお勧めできません)、セットアップ ウィザードによって IBM Rational Suite に含まれているクライアント ソフトウェアが検出され、ClearCase LT サーバーはインストールされません。

## 評価目的での ClearCase LT のインストール

評価の目的で、単独使用の製品または IBM Rational Suite の一部として ClearCase LT をインストールする場合は、同じコンピュータを使用して評価プロセスを簡素化できます。シングルシステムによる評価用構成をセットアップするには、次の手順に従います。

1. インストール CD-ROM のセットアップ ウィザードを使用して、同じコンピュータに ClearCase LT サーバーとクライアントをインストールします。ウィザードで次の操作を行います。
  - a. 展開方法のオプションの [CD イメージからデスクトップ環境へのインストール] をクリックします。
  - b. [クライアント/サーバー] ページで、[ サーバーとクライアント ソフトウェアをインストールする] をクリックします。この構成を使用すると、ClearCase LT を単独使用の製品として評価できます。
2. ClearCase LT を Suite の一部として評価するには、同じコンピュータ上でセットアップ ウィザードを再実行し、評価する IBM Rational Suite を選択します。

**注:** IBM Rational Suite をインストールしてから同じコンピュータに ClearCase LT サーバーをインストールした場合は、セットアップ ウィザードによって、Rational Suite に含まれているクライアント ソフトウェアが検出され、ClearCase LT サーバーはコンピュータにインストールされません。

この問題を解決するには

1. IBM Rational Suite を再インストールします。[アプリケーションの追加と削除] の [変更] オプションを使用します。[変更] をクリックします。Rational Suite 製品機能の ClearCase LT は [カスタム セットアップ] ページに一覧表示されます。詳しくは、83 ページの『製品の再インストール (変更または修復)』を参照してください。

2. ClearCase LT サーバーを再インストールします。手順 1 で示した手順を使用します。[クライアント/サーバー] ページで、[サーバーとクライアント ソフトウェアをインストールする] をクリックします。

## ClearCase LT サーバーの選択

ClearCase LT クライアントをインストールする前に、ClearCase LT サーバーをインストールすることをお勧めします。ClearCase LT サーバーの特性は、ClearCase LT コミュニティ全体のパフォーマンスと拡張性にとって非常に重要です。適切な ClearCase LT サーバーを選択することは、インストール前の重要な作業の 1 つです。

Windows 上の ClearCase LT クライアントは、Windows または UNIX のいずれかが稼働する ClearCase LT サーバーにアクセスできます。UNIX が稼働する ClearCase LT サーバーをサイトで使用する場合は、この項の残りをスキップすることができます。UNIX または Windows が稼働する ClearCase LT サーバーの設定の詳細については、『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』を参照してください。

Windows が稼働する ClearCase LT サーバーは、Windows または UNIX オペレーティング システムが稼働する ClearCase LT クライアントと完全な相互運用性があります。

ClearCase LT サーバーは、各 VOB について、サポートしている多数のサーバー プロセスを実行します。サーバーは、場合によっては何十、何百という数のプロセスをサポートし、多数のクライアントによるネットワーク アクセスをサポートする必要があるため、サーバーの物理メモリ、ストレージ、プロセッサ、ネットワーク インターフェイス ハードウェアを指定する場合は、この項のガイドラインに従うことをお勧めします。また、『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』の「VOB ホストのパフォーマンスの改善」の章で説明しているパフォーマンス チューニングの手順を使用することもできます。

**注:** ワークステーションではなく、オペレーティング システムのバリエーションである Windows サーバー (Windows 2000 Server など) を使用します。Windows では、Windows NT Workstation または Windows 2000 Professional ソフトウェアがインストールされているシステムへの同時ネットワーク アクセスを 10 システムまでに制限しています。10 を超える ClearCase LT クライアントが ClearCase LT サーバーに同時にアクセスする必要があると予想される場合は、ClearCase LT サーバーに Windows NT Advanced Server または Windows 2000 Server ソフトウェアをインストールしてください。

### サーバーの推奨事項

すべての ClearCase LT クライアントが十分なパフォーマンスを発揮するために、以下の要件を満たすコンピュータに ClearCase LT サーバー ソフトウェアをインストールすることをお勧めします。

- **物理メモリ (RAM)。** 128 MB 以上、またはサーバーがサポートするすべての VOB データベース サイズの半分のいずれか大きい方を推奨します。この量に対し、VOB データベース サイズにかかわらず、VOB ごとに 7 MB のメモリを追加する必要があります。

- **ディスク容量。**VOB データベースは 1 つのディスク パーティション内に収めなければなりません。VOB データベースは開発が進みプロジェクトが成長するにつれて増大します。VOB のサイズを試算する目安というのはありませんが、『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』の付録 F には VOB サーバーのディスク容量の要件を確立する場合に役に立つガイドラインが記載されています。
- **処理能力。**ClearCase LT サーバーには十分な CPU 処理能力が必要です。ここで言う十分な処理能力の定義は、ハードウェア アーキテクチャによって異なります。ClearCase LT や同様の業務用アプリケーションでは、サーバーの CPU 処理能力はクライアントの操作パフォーマンスを左右する重要な要素です。
- **高 可用性。**ClearCase LT サーバーは、頻繁に再起動したりオフラインにする必要がない、強力なシステムである必要があります。ネットワークを介して簡単にアクセス可能でなければなりません。つまり、ClearCase LT クライアントと同じサブネット上にあるか、クライアントから多くても 2 つのネットワーク ホップでアクセスできる必要があります。
- **ネットワークの接続性。**VOB へアクセスすると、ほとんど毎回 ClearCase LT サーバーのネットワーク インターフェイスがロードされるため、サーバーへのネットワーク接続には高帯域 (100 MB/秒以上) の接続を使用することが大切です。

**注:** 実働中に最適なパフォーマンスを得るには、専用のコンピュータに ClearCase LT サーバーをインストールすることをお勧めします。ただし、評価の目的や少人数のチームの場合には、ClearCase LT サーバーと Rational Suite を同じコンピュータにインストールして実行することもできます。

## ClearCase LT サーバーのセットアップ

ClearCase LT サーバー ソフトウェアを初めてインストールした後、開始ウィザードが起動します。既存の ClearCase LT サーバーを新しいバージョンにアップグレードする場合や、開始ウィザードで既に設定済みのコンピュータに ClearCase LT サーバーを再インストールする場合は、開始ウィザードは起動しません。

開始ウィザードによって、初期プロジェクトの UCM オブジェクトを保存する VOB と、このプロジェクトのソース コード (ファイルとディレクトリ) を保存する VOB の 2 つの VOB が作成されます。詳しくは、24 ページの『ClearCase LT サーバーでの開始ウィザードの使用法』を参照してください。

ClearCase アクセス コントロールでは、VOB を作成するユーザーとその VOB にアクセスするすべてのユーザーが、ClearCase ユーザー グループのメンバーでなければなりません。詳しくは、20 ページの『CLEARCASE\_PRIMARY\_GROUP 環境変数の設定』を参照してください。

ClearCase LT サーバーのローカル管理者であり、ClearCase ユーザー グループのメンバーでもあるユーザーとしてログオンできる場合は、そのようにログオンしてください。そうすると、ClearCase LT サーバーのインストールとセットアップが簡単に行えます。

この 2 つのグループ メンバーシップを持つユーザーとしてログオンできない場合でも、ローカル管理者権限を使用して ClearCase LT をインストールできます。いったんログアウトして、ClearCase ユーザー グループのメンバーとしてログオンするまでは、サーバーのセットアップは完了できません。

## ClearCase LT サーバーでの開始ウィザードの使用法

開始ウィザードを使用して、単一のサーバーに標準 ClearCase LT 環境をセットアップします。ClearCase LT サーバーを初めてインストールした後は、開始ウィザードが自動的に起動します。オンライン ヘルプを使用して、次のタスクを完了します。

- ClearCase LT ソフトウェアの構成管理をセットアップします。
  - ClearCase VOB とビューの記憶ディレクトリの作成
  - ClearCase プロジェクト VOB の作成
  - ClearCase 初期コンポーネント VOB の作成
  - ClearCase 初期プロジェクトの作成
- ClearCase LT サーバー上のみでの ClearCase LT クライアントの設定

## ClearCase LT サーバーと ClearQuest での開始ウィザードの使用法

ClearQuest 管理ツールと ClearCase LT サーバーを同じコンピュータ上にインストールする場合、開始ウィザードは ClearCase LT サーバーを設定し、ClearQuest で次のタスクを実行します。

- スキーマ リポジトリとユーザー データベースの作成
- UCM と ClearCase LT の統合の有効化
- ユーザー アカウントの作成

開始ウィザードのすべての機能を使用するには、インストールを順番に実行することをお勧めします。詳しくは、24 ページの『ClearCase LT サーバーでの開始ウィザードの使用法』を参照してください。

---

## ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストールの準備

ここでは、ClearQuest と ClearQuest MultiSite サーバーをインストールするための準備と計画について説明します。ClearQuest クライアント (ネイティブまたは Web) をインストールする方法については、『IBM Rational Software デスクトップ製品 インストレーション ガイド』を参照してください。

ClearQuest と ClearQuest MultiSite の機能と既知の問題に関する最新情報については、Rational Solutions for Windows Online Documentation CD-ROMに収録されている IBM ClearQuest と ClearQuest MultiSite リリース ノートを参照してください。リリース ノートは ClearQuest のインストール処理の最後に表示されます。また、ソフトウェアをインストール後に Windows の [スタート]メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[Rational ClearQuest リリース ノート] をクリックしても表示できます。

## ClearQuest と ClearQuest MultiSite をインストールするためのチェックリスト

後に示すチェックリストを使用して、ClearQuest と ClearQuest MultiSite 環境をセットアップし、必要なインストール後のタスクを実行します。

- 25 ページの表 10
- 25 ページの表 11

- 27 ページの表 12
- 28 ページの表 13

ネイティブ クライアントに対して ClearQuest をインストールするためのチェックリストについては、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』の「第 1 章 インストール前に必要な作業」を参照してください。

ClearQuest と ClearQuest MultiSite 環境のコンポーネントの詳細については、29 ページの『New ClearQuest Web の構成のインストール』を参照してください。

表 10 を使用して、ClearQuest を評価します。評価版にはサンプル データベースが含まれています。

表 10. ClearQuest 評価用インストール チェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	ClearQuest 評価用ライセンス キーを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
	ClearQuest 評価用コンピュータのシステムとソフトウェアの要件を確認します。5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。クライアントのシステム要件と推奨事項については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』の「第 1 章 インストール前に必要な作業」を参照してください。
	コンピュータに対して管理者権限があることを確認します。5 ページの『管理者権限』を参照してください。
評価用 ClearQuest のインストールと設定	
	評価用に ClearQuest 機能を CD-ROM または Web ダウンロードから直接インストールします。34 ページの『評価用 IBM Rational ClearQuest のインストール』を参照してください。

表 11. ClearQuest 管理ツール インストール チェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	IBM Rational ソフトウェアのライセンスを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
	ClearQuest 管理ツールをインストールする前に、空の製造元データベースをインストールして設定します。表 12 を使用して、次のタスクを実行します。製造元データベースを設定後、このチェックリストに戻ります。

表 11. ClearQuest 管理ツール インストール チェックリスト (続き)

チェック	タスク
	<p>ClearQuest と ClearQuest MultiSite 設定を計画します。29 ページの『New ClearQuest Web の構成のインストール』を参照してください。次の推奨事項を検討します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearQuest 管理ツール (ClearQuest MultiSite 管理ツールを含む) は、製造元データベース サーバーまたは別のコンピュータにインストールできます。ClearQuest 管理ツールを ClearCase LT サーバーと同じコンピュータにインストールする場合は、39 ページの『ClearQuest での開始ウィザードの使用法』を参照してください。</li> <li>• New ClearQuest Web 用のデータベース サーバーと ClearQuest Web Application サーバーを別のコンピュータにインストールすることをお勧めします。詳細については、『IBM Rational New ClearQuest Web インストレーション ガイド』を参照してください。</li> <li>• 最適なパフォーマンスを得るには、ClearQuest Web Application サーバーを ClearCase LT サーバーにインストールしないようにしてください。</li> </ul>
	<p>ClearQuest Server のシステムとソフトウェアの要件を確認します。インストール前の要件については、以下を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』クライアントのシステム要件と推奨事項については、『IBM Rational Software デスクトップ製品 インストレーション ガイド』の「第 1 章 インストール前に必要な作業」を参照してください。</li> <li>• 41 ページの『VS.NET との統合の設定』</li> <li>• 41 ページの『互換性に関する問題』</li> </ul>
	<p>コンピュータに対して管理者権限があることを確認します。5 ページの『管理者権限』を参照してください。</p>
	<p>ClearQuest 管理ツールと ClearQuest クライアント ソフトウェアの展開方法を決定します。3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。</p> <p><b>注:</b> ClearQuest Windows クライアントで電子メールによる通知を有効にすることができます。『IBM Rational Software デスクトップ製品 インストレーション ガイド』の手順を参照するようにユーザーに指示してください。</p>
ClearQuest 管理ツールのインストール	
	<p>ClearQuest 管理ツールとその他の ClearQuest ソフトウェアをインストールする手順については、67 ページの『CD または Web ダウンロードからの IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。</p> <p>ClearQuest をまだ設定しない場合、または ClearQuest 管理ツールと ClearCase LT サーバーを同じコンピュータにインストールする前に製造元データベースのインストールと設定を行わなかった場合は、開始ウィザードのデータベース設定ページはスキップしてください。</p> <p>ClearQuest メンテナンス ツール (117 ページの『ClearQuest データベースの作成』を参照) を使用して、ClearQuest スキーマ リポジトリとユーザー データベースを後で設定します。</p>
インストール後	

表 11. ClearQuest 管理ツール インストール チェックリスト (続き)

チェック	タスク
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearQuest 管理ツールが DB2 データベースにアクセスする場合は、管理ツールをインストールしたコンピュータに DB2 クライアント ソフトウェアをインストールして、DB2 の別名を作成します。</li> </ul> <p>110 ページの『ClearQuest データベースの作成』を参照してください。</p>
	<p>ClearQuest スキーマ リポジトリとユーザー データベースを設定します。開始ウィザード (管理ツールが ClearCase LT サーバー上にある場合) または ClearQuest メンテナンス ツールを使用して、ClearQuest データベース (スキーマ リポジトリとユーザー データベース) を作成できます。</p> <p>ClearQuest メンテナンス ツールを使用する場合は、110 ページの『ClearQuest の必須の設定手順』と 110 ページの『ClearQuest データベースの作成』を参照してください。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearQuest クライアントで DB2 バージョン 7.x データベースにアクセスする場合は、DB2 クライアント ソフトウェアをデスクトップにインストールし、DB2 の別名を作成するようユーザーに指示します。</li> </ul> <p>クライアント ユーザー向けの手順の説明は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストレーション ガイド』の「インストール前に必要な作業」と「インストール後に必要な作業」の章に記載されています。</p>
	<p>ClearQuest 接続プロファイル (スキーマ リポジトリとの接続方法) をクライアント ユーザーに送信します。</p> <p>ユーザーが独自の接続を作成できるよう (114 ページの『新規接続の作成』を参照) スキーマ リポジトリ情報をユーザーに提供するか、またはユーザーがクライアントにインポートできる接続プロファイルを作成します (115 ページの『接続プロファイルの作成』と 116 ページの『接続プロファイルのインポート』を参照)。</p>
	<p>ネイティブ ClearQuest クライアントにログインできることをクライアント ユーザーに知らせます。116 ページの『ClearQuest へのログイン』を参照してください。</p>
	<p>ユーザーが電子メールによる通知を送受信できることを確認します。117 ページの『電子メール通知を受信するための ClearQuest クライアントの設定』および 117 ページの『電子メール通知を送信するための ClearQuest クライアントの設定』を参照してください。</p>
	<p>ClearQuest ユーザー グループに登録します (オプション)。110 ページの『Rational ユーザー グループへの加入』を参照してください。</p>

表 12 を使用して、製造元データベース ソフトウェアを選択し、インストールします。製造元データベース ソフトウェアをインストールした後、ClearQuest に対して設定し、ClearQuest ユーザー データベースとスキーマ リポジトリをセットアップします。

表 12. ClearQuest の製造元データベースをインストールするためのチェックリスト

チェック	タスク
インストール前	

表 12. ClearQuest の製造元データベースをインストールするためのチェックリスト (続き)

チェック	タスク
	<p>ClearQuest データベース (スキーマ リポジトリとユーザー データベース) を設定するために、ClearQuest ソフトウェアを製造元データベース サーバーにインストールする必要はありません。</p> <p><b>注:</b> 最適なパフォーマンスを得るには、ClearQuest 製造元データベースを ClearCase LT サーバーにインストールしないようにしてください。</p>
	<p>データベース製造元を選択します。以下を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 34 ページの『評価用 IBM Rational ClearQuest のインストール』</li> <li>• 5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』のデータベースの製造元のリスト</li> <li>• 38 ページの表 15</li> <li>• 39 ページの『ClearQuest MultiSite 用のデータベースのセットアップ』および 38 ページの表 15。</li> </ul> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearQuest MultiSite は Microsoft Access と SQL Server Anywhere をサポートしていません。ClearQuest データベースを複製する場合は、これらのデータベースの製造元を選択しないでください。</li> <li>• 新規 ClearQuest Web は Microsoft Access をサポートしていません。</li> </ul>
製造元データベースのインストール	
	<p>製造元データベースをデータベース サーバーにインストールします。手順については、製造元のマニュアルを参照してください。</p> <p><b>注:</b> 製造元データベース ソフトウェアをインストールする前に、91 ページの『第 5 章 インストール後に必要な作業: データベースの設定とその他の ClearQuest タスク』の特別な考慮事項をお読みください。</p>
インストール後	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー アカウントを設定します。IBM Rational ClearQuest 管理ガイドを参照してください。</li> <li>• 空の製造元データベースを設定します。91 ページの『第 5 章 インストール後に必要な作業: データベースの設定とその他の ClearQuest タスク』を参照してください。</li> </ul> <p><b>注:</b> ClearQuest スキーマ リポジトリとユーザー データベースを設定しないでください。これらのタスクは、ClearQuest 管理ツールをインストールしてから実行できます。25 ページの表 11を参照してください。</p>

表 13 のチェックリストを使用して、ClearQuest MultiSite 管理ツールをインストールします。このチェックリストでは、ClearQuest 管理ツールをインストール済みで、製造元データベースを設定してあり、ClearQuest スキーマ リポジトリとデータベースも設定済みであることを想定しています (表 11 と 表 12 を参照)。

表 13. ClearQuest MultiSite 管理ツール インストール チェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	<p>IBM Rational ソフトウェアのライセンスを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。</p>

表 13. ClearQuest MultiSite 管理ツール インストール チェックリスト (続き)

チェック	タスク
	サーバーに対して管理者権限があることを確認します。
	ClearQuest MultiSite 管理ツールと Rational Shipping Server の展開方法を決定します。3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。
ClearQuest MultiSite のインストール	
	ClearQuest MultiSite 管理ツールと Rational Shipping Server をインストールする手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。
インストール後	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>ClearQuest MultiSite 管理ツールが DB2 データベースにアクセスする場合は、管理ツールをインストールしたコンピュータに DB2 クライアント ソフトウェアをインストールして、DB2 の別名を作成します。</li> </ul> <p>40 ページの『DB2 クライアントのインストール』を参照してください。</p>
	<p>ClearQuest MultiSite を設定するには、以下を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>93 ページの『ClearQuest MultiSite のデータベースの設定』</li> <li>117 ページの『ClearQuest MultiSite の必須の設定手順』</li> <li>117 ページの『ClearQuest MultiSite のオプションの設定手順』</li> </ul>

## New ClearQuest Web の構成のインストール

New ClearQuest Web のインストール方法については、『IBM Rational New ClearQuest Web インストレーション ガイド』を参照してください。

## ClearQuest と ClearQuest MultiSite の構成

ClearQuest では、クライアント ユーザーと ClearQuest 管理者をサポートします。ここでは、ClearQuest Windows 構成に含まれる、以下の基本的な ClearQuest コンポーネントについて説明します。

- ClearQuest 管理ツール
- ClearQuest データベース サーバー
- ClearQuest ネイティブ クライアント

ClearQuest MultiSite 製品には、さらに以下のコンポーネントがあります。

- ClearQuest MultiSite 管理ツール
- Rational Shipping Server

次の図に、ClearQuest と ClearQuest MultiSite の可能な構成の 1 つを示します。クライアント ソフトウェアをネイティブ クライアントと ClearQuest 管理者コンピュータ (すべての 管理ツールを同じコンピュータにインストールする場合)、にインストールします。Rational Shipping Server ソフトウェアは別のサーバー (同期サーバー) にインストールできます。矢印は、コンポーネント間の通信を示します。

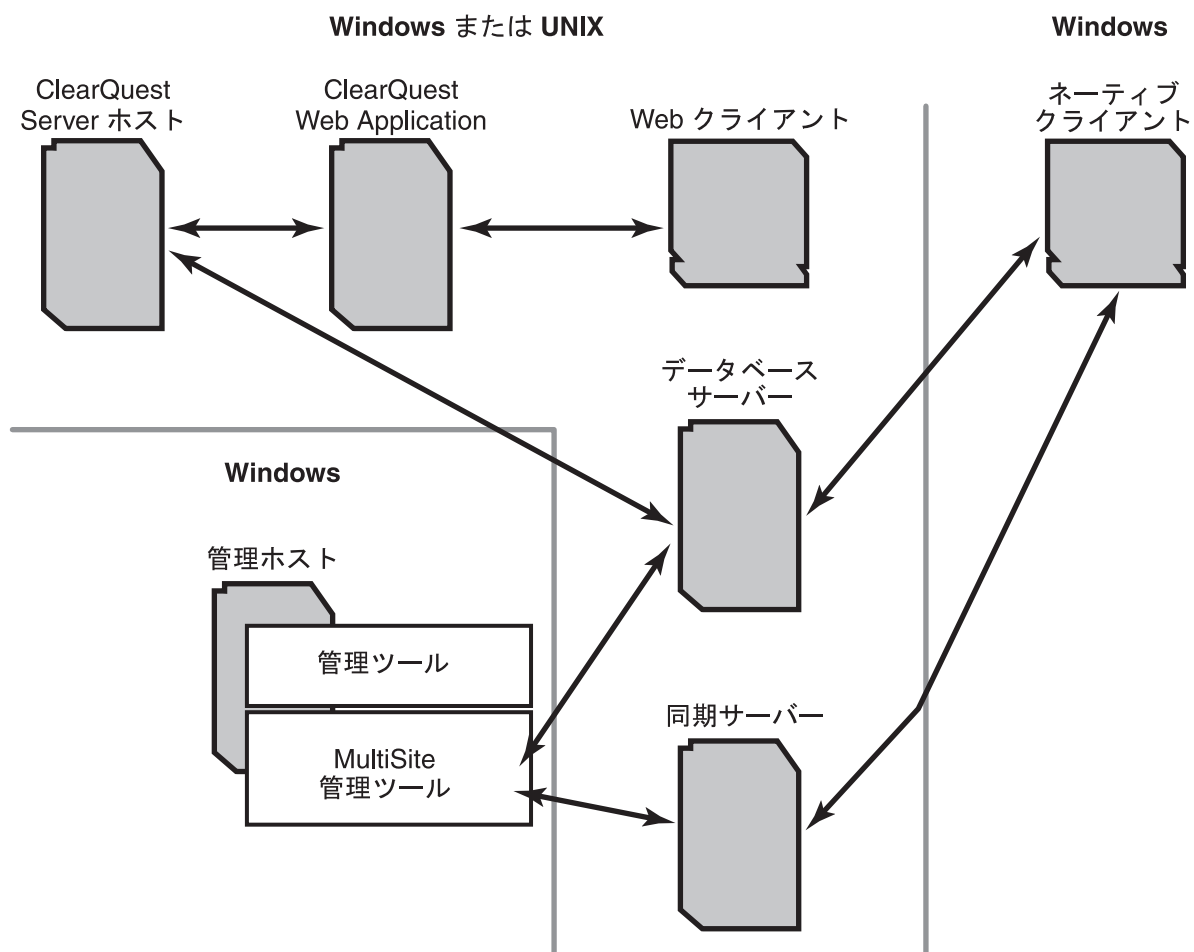


図 1. ClearQuest と ClearQuest MultiSite の構成

## ClearQuest 管理ツール

ClearQuest 管理者は、ClearQuest 管理ツールを使用して、ClearQuest スキーマ リポジトリにアクセスします。ClearQuest 管理者はこれらのツールを使用して、スキーマ リポジトリを作成したり変更することができます。

ClearQuest 管理ツール (ClearQuest MultiSite 管理ツールを含む) は、製造元データベース サーバーまたは別のコンピュータにインストールできます。

ClearQuest 管理ツールが DB2 データベースにアクセスする場合は、管理ツールをインストールしたコンピュータに DB2 クライアント ソフトウェアをインストールします。

## ClearQuest データベース サーバー

ClearQuest と ClearQuest MultiSite のスキーマ リポジトリとユーザー データベースをサポートする製造元データベースは、Windows または UNIX プラットフォームにインストールできます。詳しくは、37 ページの『ClearQuest でサポートされるデータベース サーバー』を参照してください。

製造元データベースと ClearQuest Web は別のコンピュータにインストールすることをお勧めします。データベース サーバーに ClearQuest ソフトウェアをインストールする必要はありません。

## ClearQuest クライアント (ネイティブまたは Web)

ClearQuest クライアント ユーザーは、ClearQuest ネイティブ クライアントまたは新規 ClearQuest Web クライアントのいずれかを使用して、ClearQuest ユーザー データベースにアクセスします。ClearQuest ネイティブ クライアント のユーザーと新規 ClearQuest Web クライアントのユーザーは、ClearQuest データベース内で ClearQuest レコードを作成したり更新したりすることができます。

クライアントから ClearQuest ユーザー データベースにアクセスするには、ユーザーはデスクトップに、ClearQuest クライアントまたはサポートされている Web ブラウザをインストールする必要があります。ClearQuest ネイティブ クライアントをインストールする場合は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ション ガイド』の「第 1 章 インストール前に必要な作業」を参照してください。New ClearQuest Web クライアントをインストールする場合は、『IBM Rational New ClearQuest Web インストール ション ガイド』を参照してください。

ClearQuest ネイティブ クライアントが DB2 データベースにアクセスする場合は、クライアント コンピュータに DB2 クライアント ソフトウェアをインストールします。

**注:** リリース領域を作成し、サイト デフォルト ファイルを使用して ClearQuest クライアント ユーザーに ClearQuest ネイティブ クライアントをインストールさせる場合、サイト準備プロセスでは自動的に接続プロファイルはインポートされません。ユーザーは ClearQuest メンテナンス ツールで cqprofile.ini という接続プロファイルをインポートする必要があります。この手順については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ション ガイド』で説明しています。サイト デフォルト ファイルへインストール後のコマンドを追加することにより、クライアント ユーザーがプロファイルをインポートする必要がないようにすることができます。詳しくは、72 ページの『サイト デフォルト ファイルへのインストール後のコマンドの追加』を参照してください。

**ClearQuest Windows クライアントでの Crystal Reports の使用:** IBM Rational ClearQuest では、Crystal Reports レポート ソフトウェアと統合することにより、次のことを実行できます。

- レポート形式を作成します。レポート作成者は、Crystal Reports Developers Edition を介して入手できる Crystal Reports Designer を使用して、新規レポートの作成や既存のレポートのレイアウト編集を実行できます。
- レポートを実行、表示、および印刷します。ClearQuest Windows および ClearQuest Web クライアントのユーザーは、ClearQuest レコードのセットでレポートを実行できます。
- レコードを印刷します。ClearQuest Windows クライアントのユーザーは、クエリー結果から ClearQuest レコードを選択し、レポート形式を使用してレコードを印刷することができます。

レポートの詳細については、Rational ClearQuest クライアントのオンライン ヘルプを参照してください。

### **ClearQuest Windows クライアントでの Crystal Reports のインストール:**

Rational ClearQuest バージョン 2003.06.13 では、レポートの実行と表示に必要な Crystal Report ファイルは ClearQuest とともに組み込まれており、ClearQuest Windows クライアントとともに自動的にインストールされます。インストールされるファイルは、Crystal Reports バージョン 10.0 に基づいています。

ただし、新規レポート書式を作成し、既存レポート書式を編集するには、Crystal Reports Professional Edition か、Crystal Designer バージョン 10.0 が含まれるその他の Crystal Edition を購入する必要があります。Crystal Reports Professional Edition のコピーを入手するには、<http://japan.businessobjects.com/> の Business Objects に連絡してください。New ClearQuest Web クライアントに必要な Crystal Reports ファイルをインストールする場合は、『IBM Rational New ClearQuest Web インストール ショーガイド』を参照してください。

### **ClearQuest MultiSite 管理ツール**

ClearQuest MultiSite を使用する場合は、Windows プラットフォームに ClearQuest MultiSite 管理ツールをインストールする必要があります。

MultiSite 管理ツールと Rational Shipping Server のインストール先は選択することができます。推奨するコンポーネントのインストール先を以下に示します。

- MultiSite 管理ツールと ClearQuest 管理ツールは ClearQuest 管理コンピュータと呼ばれる 1 台のコンピュータにインストールします。Rational Shipping Server は別のコンピュータ (同期サーバー) にインストールします。ClearQuest データベース サーバーにはコンポーネントをインストールしません。
- MultiSite 管理ツール、ClearQuest 管理ツール、Rational Shipping Server を、ClearQuest データベース サーバーにインストールします。データベース サーバーに余分な作業を処理できるだけの十分なメモリと CPU 処理能力がある場合のみ、このようにインストールしてください。
- MultiSite 管理ツール、ClearQuest 管理ツール、Rational Shipping Server を、ClearQuest 管理者のコンピュータとして指定されたコンピュータにインストールします。

ClearQuest 管理ツールが DB2 データベースにアクセスする場合は、管理ツールをインストールしたコンピュータに DB2 クライアント ソフトウェアをインストールします。

**注:** ClearQuest MultiSite 管理ツールを、SQL Server 7.0 または 2000 データベースと同じコンピュータにインストールする場合、SQL Server クライアント ソフトウェアもインストールされていないと、ClearQuest MultiSiteClient コマンドを実行できないことがあります。

### **Rational Shipping Server**

ClearCase MultiSite と ClearQuest MultiSite は、どちらも Rational Shipping Server を使用して、MultiSite パケットを転送します。Rational Shipping Server は、ほかのサイトにデータのレプリカを作成するために使用されるコンピュータにのみインストールする必要があります。ClearQuest と ClearCase MultiSite が存在する環境に Rational Shipping Server をインストールする場合、特別な考慮事項があります。

1 台のコンピュータで Shipping Server、ClearCase と ClearQuest の両方の製品を実行するように設定しないでください。これは、ClearCase または ClearQuest のいずれかをコンピュータから削除したときに、両方の製品で使用する Shipping Server が削除され、削除しなかったもう一方の製品が動作しなくなるためです。

ClearCase MultiSite と ClearQuest の両方を Rational Shipping Server と共に同じコンピュータにインストールする必要がある場合は、次の点に注意してください。

- ClearCase を先にインストールします。
- いずれかの製品を削除する必要がある場合は、両方の製品を削除します。

**注意:** クライアント コンピュータのサイトのデフォルト ファイルで、ClearQuest Shipping Server のインストールが指定されていないことを確認してください。ClearQuest と Shipping Server が既にインストールされているコンピュータに ClearCase をインストールしようとすると、インストールは失敗します。

**注:** この制限は ClearCase LT には適用されません。これは、ClearCase LT MultiSite 製品が存在していないためです。Rational Shipping Server は、Rational Solutions for Windows CD-ROM または IBM Web ダウンロード パッケージから、ClearCase LT サーバーにインストールできます。Rational ClearQuest を選択する場合、セットアップ ウィザードの [カスタム セットアップ] ページで [Shipping Server] を選択します。83 ページの『製品の再インストール (変更または修復)』を参照してください。

## **Rational Suite Enterprise での Shipping Server のインストール**

Rational Suite Enterprise を Shipping Server オプションを指定して CD から、または IBM Web ダウンロード パッケージからインストールする場合は、次の表に示すタスクを実行してください。ClearCase がすでにインストール済みの場合は、ClearCase の深刻な問題を引き起こす原因になるので、これらのタスクは実行しないでください。

**注:** これらのオプションは、ClearQuest と Shipping Server を CD または IBM Web ダウンロード パッケージからインストールする場合にのみ必要です。Suite Enterprise リリース領域からこれらの製品コンポーネントをインストールする場合は、以下のタスクを無視してください。

条件	タスク
システムが ClearCase と ClearQuest の両方と Shipping Server を実行する場合	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ClearCase を先にインストールします。両方を同じシステムにインストールしなければならない場合は、バージョンと ClearCase 製品が同一であることを確認します。たとえば、システム上の ClearCase 製品は、ClearCase LT ではなく ClearCase でなければなりません。また、その ClearCase 製品はサーバーであるか、ローカル VOB とビューが有効でなければなりません。</li> <li>2. ClearQuest と Shipping Server をインストールします。ClearCase がインストールされたシステム (特に、2003.06.00 よりも前の Rational 製品があるシステム) に ClearQuest Shipping Server をインストールしないようにしてください。</li> </ol> <p>注: システム上の ClearCase に ALBD がない場合、そのシステムには Shipping Server をインストールしないでください。Shipping Server は ALBD をインストールするので、(たとえば) ClearCase LT がインストールされる場合、ALBD は実行中であるとみなされるため、システムが動作しなくなります。</p>
CD または Web ダウンロード パッケージから ClearQuest と Shipping Server をインストールした後	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Shipping Server が動作しないことを、コマンド <code>shipping_server -ver noname</code> を使用して確認します。</li> </ol> <p>Warning: Can not find a group named "clearcase". shipping_server 2003.06.13 (date and time)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2. CQ_SS.reg ファイルを適用し (IBM Rational ソフトウェア サポートにご連絡ください)、Shipping Server が動作することを、<code>shipping_server -ver</code> を使用して確認します。</li> </ol> <p>shipping_server 2003.06.00 (date and time)</p>

## 評価用 IBM Rational ClearQuest のインストール

次の手順では、データベース サーバーとクライアントとして 1 台のコンピュータを使用することを想定しています。

評価用 ClearQuest をインストールするには

1. ローカル コンピュータに対する管理者権限を持つユーザーとしてログインします。

2. Rational Solutions for Windows Disc 1 をコンピュータの CD-ROM ドライブに挿入します。 IBM Download Director または zip ファイルを使用してソフトウェアをダウンロードした場合は、Download Director または zip ファイルのいずれかからファイルを抽出した後に Setup.exe をクリックします。

IBM Rational セットアップ ウィザードが自動的に起動します。

コンピュータで自動実行が無効になっている場合は、Windows の [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックし、次のように入力します。

*cd\_drive: %Setup.exe* (*drive* は、CD-ROM ドライブのドライブ名です。)

3. [Rational セットアップ ウィザード] ページが表示されます。[次へ] をクリックするとインストールが開始され、次の画面に進みます。
4. [製品の選択] ページに、インストールできるすべての製品が一覧表示されます。
5. [展開方法] ページで、[CD イメージからデスクトップ環境へのインストール] をクリックします。
6. [使用許諾契約] ページで、IBM Rational の使用許諾契約に同意するかどうかを選択します。
  - 使用許諾契約に同意すると、インストール ウィザードが続行します。
  - 使用許諾契約に同意しない場合は、[キャンセル] をクリックしてから [完了] をクリックし、セットアップ ウィザードを終了します。コンピュータへのインストールを変更する方法については、83 ページの『製品インストールのキャンセル』を参照してください。
7. [インストール先のフォルダ] ページで、ウィザードで IBM Rational 製品をインストールするディレクトリを指定します。保存場所を変更する場合は、[変更] をクリックします。

**注:** インストール ウィザードでは、すべての IBM Rational 製品を同じディレクトリにインストールする必要があります。

8. [カスタム セットアップ] ページに、ソフトウェアのインストールに対して設定された機能オプションが表示されます。IBM Rational ClearQuest のすべての機能をクリアします。

機能をクリアする場合、または新しい機能を選択する場合は、[ヘルプ] をクリックします。

**注:** ディスク容量の要件については、5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。[カスタム セットアップ] ページに表示されている数字やページ上の [Space] ボタンで表示される数字を使用しないでください。

9. これらのページには、情報を入力する必要はありません。(設定ウィザードの [Default Connection Profile] と [Email Transport Provider]。 ) [ヘルプ] を使用して、情報を入力します。[完了] をクリックします。
10. インストールを開始するには、[プログラムをインストールする準備ができました] ページの [インストール] をクリックします。

11. セットアップ ウィザードでコンピュータの再起動が必要な場合は、[Windows の再起動] ページが表示されます。セットアップ プログラムの実行中に、インストールに必要なファイルが使用中だった場合や、コンピュータに共有コンポーネントをインストール必要がある場合は、コンピュータの再起動が必要になる可能性があります。

[再起動する] または [再起動しない] を選択します。[再起動しない] を選択した場合、Windows を再起動しないとインストールが完了できないという内容のメッセージが表示されます。

Windows の再起動後、インストール プロセスの残りの部分が自動的に開始します。

12. [セットアップが完了しました] ページが表示されたら、readme ファイルに書かれている新機能と既知の問題に関する最新情報を確認することをお勧めします。これらの情報は、IBM developerWorks の Web ページでも参照できます。  
[完了] をクリックし、インストールを終了します。
13. License Key Administrator で IBM Rational ライセンス キーをインポートまたは入力します。この手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。
14. 評価用データベース (Microsoft Access ランタイム ファイル) をセットアップするには
  - a. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[Rational ClearQuest 評価データベースの作成] をクリックします。
  - b. [Rational ClearQuest: 評価データベースの作成] ダイアログ ボックスで、[評価データベースの作成] をクリックします。スキーマ リポジトリとデータベースを作成したら、[終了] をクリックします。
  - c. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software] をポイントして、[Rational ClearQuest] をクリックします。
  - d. ユーザー データベースにログインするには、ユーザー ID **admin** を入力し (パスワードは必要ありません)、データベースのドロップダウン ボックスで [SAMPL] を選択します。
  - e. [すべての障害] をクリックして、サンプル データベース内のすべての障害を表示します。

## データベースの種類の選択

ClearQuest データベースの製造元を選択するときは、サポートされている特定のバージョンについて 5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。

ClearQuest では、次のデータベースをサポートしています。

- エントリ レベル データベース製品: Microsoft Access (ランタイム ファイルは ClearQuest に付属しています。ランタイム ファイルは Microsoft Access のフルバージョンではありません。)

- ミドル レベル データベース製品: Sybase SQL Anywhere (*Rational Solutions for Windows*) CD-ROM で別の製品としてこのデータベースを選択します。このソフトウェアは ClearQuest に同梱されていません。)
- ハイエンド データベース製品: Windows 上の Microsoft SQL Server、Windows と UNIX 上の DB2、Windows と UNIX 上の Oracle

いずれのデータベース製造元が最も自分のニーズに適しているか、また同時にデータベースを使用するユーザー数を予測するには、以下の一般的なガイドラインを使用します。

- 初期テストと初期評価を行う場合、または小規模なグループ (ユーザー 5 人未満) の場合は、エントリ レベル データベース製品を使用できます。
- 中規模のグループ (ユーザー 5 ～ 20 人) の場合は、ミドル レベル データベース製品を使用できます。
- 大規模なグループ (ユーザー 21 人以上) の場合、大量のデータを処理する場合、パフォーマンスを向上させたい場合は、ハイエンド データベース製品を使用します。

**注:** ClearQuest データベースには、複数のデータベース製造元を使用できます。たとえば、スキーマ リポジトリとユーザー データベースには、Oracle または Microsoft SQL Server データベースを使用し、テスト データベースには Microsoft Access データベースを使用できます。ただし、ClearQuest MultiSite を使用する場合は、大文字/小文字の区別に関する製造元間のルールに不整合があるため、複数のデータベース製造元の使用はお勧めしません。

## ClearQuest でサポートされるデータベース サーバー

Windows 上の ClearQuest と ClearQuest MultiSite では、表 14 および 表 15 のオペレーティング システムとデータベース製造元をサポートしています。

**注:** ClearQuest MultiSite は Microsoft Access、SQL Anywhere、または DB2 UDB Express データベースをサポートしていません。

表 14. ClearQuest でサポートされるデータベース サーバー

	SQL Anywhere			Access		
	5.5.05	8.0.1	8.0.2	2000	2002 SP1, 2	2003
バージョン						
Windows 2003 Server、SP、SP1 なし			X			X
Windows 2000 ProSP 2、3、4、5	X	X	X	X	X	X
Windows 2000 Server、SP 2、3、4、5	X	X	X	X	X	X
Windows 2000 Advanced Server、SP 2、3、4、5	X	X	X	X	X	

表 14. ClearQuest でサポートされるデータベース サーバー (続き)

	SQL Anywhere			Access		
Windows XP SP 1、2	X	X	X	X	X	X
Windows NT 4. 0 Server SP 6a、SRP	X	X	X	X	X	
Windows NT 4.0 Work station SP 6a、SRP	X	X	X	X	X	

表 15. ClearQuest および ClearQuest MultiSite でサポートされるデータベース サーバー

	Microsoft SQL Server		Oracle (32 ビット)			Oracle (64 ビット)	DB2		
バージョン	7.0 SP 4	2000 SP 2、3	8.1.6	8.1.7.3	9.2	10	UDB 7.2 (Fix Pack 8 適用済み)	UDB 8.1	UDB Express 8.1 (MultiSite ではサポートされない)
Windows 2003 Server、SP、SP1 なし		X			X	X (32 ビット)		X	X
Windows 2000 Pro SP 2、3、4、5									
Windows 2000 Server、SP 2、3、4、5	X	X	X	X	X	X (32 ビット)	X	X	X
Windows 2000 Advanced Server、SP 2、3、4、5	X	X	X	X	X	X (32 ビット)	X	X	X
Windows XP SP 1、2					X	X (32 ビット)			
Windows NT 4.0 Server SP 6a、SRP	X	X	X	X	X	X (32 ビット)	X	X	X
Windows NT 4.0 Work station SP 6a、SRP	X	X	X	X	X	X (32 ビット)	X	X	X
Solaris 2.6			X	X	X				
Solaris 7			X	X	X				
Solaris 8			X	X	X	X			
Solaris 9			X	X	X	X			

表 15. ClearQuest および ClearQuest MultiSite でサポートされるデータベース サーバー (続き)

	Microsoft SQL Server		Oracle (32 ビット)			Oracle (64 ビット)	DB2		
HP-UX 11.00 QPK1100			X	X	X				
HP-UX 11.11 Gold QPK11i、Bundle 11i			X	X	X	X			
AIX 4.3.3			X	X	X				
AIX 5.1				X	X	X	X	X	
AIX 5.2 (RISC)				X	X	X	X	X	
Red Hat Pro Linux 7.1				X					
Red Hat Pro Linux 7.2							X	X	X
Red Hat Pro Linux 7.3							X	X	X
Red Hat Pro Linux 8.0								X	X
Red Hat Enterprise Linux 2.1				X	X	X (32 ビット および 64 ビット)		X	X
Red Hat Enterprise Linux 3.0					X	X		X	X
SUSE LINUX Enterprise Server 8				X	X	X (32 ビット)		X	X

## ClearQuest MultiSite 用のデータベースのセットアップ

既存の ClearQuest スキーマ リポジトリとユーザー データベースのレプリカを作成する場合は、新しいサイトで空の製造元データベースを作成します。新しいサイトで ClearQuest データベースは作成しないでください。詳しくは、117 ページの『ClearQuest MultiSite の必須の設定手順』を参照してください。

## ClearQuest での開始ウィザードの使用法

ClearQuest で開始ウィザードを使用して、障害と変更依頼データベース、UCM (統一変更管理) の初期環境、ユーザー アカウントを作成できます。ウィザードのすべての機能を使用するには、ClearCase LT サーバーと ClearQuest 管理コンピュータに指定されたサーバー コンピュータに順番にインストールする必要があります。

次の表では、サポートされている製造元ソフトウェアがデータベース サーバー上に設定され、インストールされていることを想定しています。

インストールの順序	開始ウィザードのアクティビティ
最初に、ClearQuest 管理ツール	開始ウィザードは、ClearCase LT ソフトウェアのインストール後に自動的に起動します。ウィザードを使用すると、次のことができます。
次に、ClearCase LT サーバーとクライアント ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ClearCase VOB とビューの記憶ディレクトリの作成</li> <li>• ClearCase プロジェクト VOB の作成</li> <li>• ClearCase 初期コンポーネント VOB の作成</li> <li>• ClearCase 初期プロジェクトの作成</li> <li>• 障害と変更依頼データベースの作成</li> <li>• UCM 初期環境の作成</li> <li>• ClearQuest ユーザー アカウントの作成</li> </ul>

注: ClearCase LT の代わりに ClearCase をインストールする場合は、ClearCase を最初にインストールしてから ClearQuest をインストールします。開始ウィザードを起動するには、[スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearCase]、[管理] の順にポイントして、[開始ウィザード] をクリックします。ウィザードが ClearQuest の設定タスクを実行します。

## DB2 クライアントのインストール

DB2 ClearQuest データベースにアクセスするには、DB2 クライアント ソフトウェアを ClearQuest Windows クライアントと ClearQuest 管理ツール コンピュータ (該当する場合) にインストールします。

- DB2 ClearQuest データベース用の DB2 クライアント ソフトウェアをインストールするときには、IBM DB2 データベースのマニュアルを参照してください。別名を作成する場合は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ション ガイド』を参照してください。

注: DB2 Administration Client をすべてのコンピュータにインストールする必要があります。

## 新規 ClearQuest Web 用の Web サーバーのインストール

New ClearQuest Web 機能を使用する場合は、『IBM Rational New ClearQuest Web インストール ション ガイド』を参照してください。

## Web ブラウザのインストール

New ClearQuest Web 機能を使用する場合は、ClearQuest Web クライアントを使用するすべてのクライアント コンピュータに適切なバージョンのブラウザがインストールされていることを確認します。サポートされるブラウザについては、5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』および『IBM Rational New ClearQuest Web インストール ション ガイド』を参照してください。

## VS.NET との統合の設定

ClearCase LT をインストールすると、ClearQuest と VS.NET の統合はインストール時に自動的に設定されます。ClearQuest のインストール後、VS.NET を起動すると、ワークスペース ツリーとアクティビティ グリッドのコントロールが ClearQuest との統合をサポートします。

## 互換性に関する問題

### IBM Rational 製品との互換性

この Rational ClearQuest 2004.06.13 バージョンは、他のすべての Rational Suite バージョン 2004 製品と互換性があります。バージョン 2003.06.00 以前のリリースの ClearQuest または Rational Suite とは互換性がありません。

### SQL Server 2000 のインストール

Microsoft SQL Server 2000 のインストール プロセスでは、Windows のみの認証か混合モード (Windows と SQL Server) の認証かを選択するオプションが用意されています。ClearQuest を正しく機能させるために、混合モードの認証を選択します。

Microsoft SQL Server 2000 のインストール プロセス中に、データベース インスタンス名の入力を要求されます。データベース インスタンス名は、インストール対象のコンピュータの名前と同じにする必要があります。インスタンス名は空白のままにして、デフォルトの名前を使用します。インスタンス名が必須の場合は、以下のような問題が発生します。

- 以前のバージョンの MDAC (2.1.2 など) を実行するクライアントはデータベースに接続できません。
- データベース インスタンス名を指定した場合、UNIX クライアントは SQL Server データベースに接続できません。
- SQL Server クライアントをクライアント コンピュータにインストールするか、手動でレジストリを編集する必要があります。Microsoft のホワイト ペーパー『SQL Server 2000 へのアップグレード』の抜粋を次に示します。

SQL Server 7.0 以前から SQL Server クライアントの接続性コンポーネントを使用している場合は、クライアント ネットワーク ユーティリティでエイリアスを設定してから SQL Server 2000 の名前付きインスタンスに接続する必要があります。たとえば、SQL Server 7.0 クライアントで SQL Server 2000 の名前付きインスタンスに接続するには、`¥¥computername¥pipe¥MSSQL$instancename¥sql¥query` を指すエイリアスを追加します。computername¥instancename の形式のエイリアス名を使用する場合、クライアントは SQL Server 2000 クライアントと同様の方法でこの名前を指定することにより接続が可能になります。TCP/IP ソケットと NWLink IPX/SPX Net-Libraries の場合は、クライアント ネットワーク ユーティリティを使用して、名前付きインスタンスが待機するポート アドレスを指定するクライアントのエイリアスを定義する必要があります。

詳細については、Microsoft のサポートの Web サイト (<http://support.microsoft.com>) をご覧ください。

## ProjectConsole のインストールの準備

ここでは、Web サーバー、レポート サーバー、収集エージェント コンピュータに ProjectConsole ソフトウェア、リポジトリ、Template Builder をインストールしてセットアップする方法について説明します。この情報は、開発チーム全体で使用する ProjectConsole のセットアップを担当する管理者を対象にしています。

ProjectConsole と Template Builder のインストールに関する最新情報については、Rational Solutions for Windows Online Documentation CD-ROM に収録されている『IBM Rational Suite リリース ノート』を参照するか、IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。リリース ノートは Rational Suite のインストール処理の最後に表示されます。また、ソフトウェアをインストール後に Windows の [スタート]メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational Suite] の順にポイントし、[Rational Suite リリース ノート] をクリックしても表示できます。

表 16 のチェックリストを使用して、ProjectConsole をセットアップして、必要なインストール後のタスクを実行します。

表 16. ProjectConsole をインストールするためのチェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	Rational ソフトウェアのライセンスを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
	ProjectConsole サーバー コンピュータとデータ ウェアハウスのシステムとソフトウェアの要件を確認します。5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。
	サーバー コンピュータに対して管理者権限があることを確認します。5 ページの『管理者権限』を参照してください。
	追加の ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェントが必要かどうかを決定します。次の項を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 43 ページの『ProjectConsole サーバーの設定』</li><li>• 44 ページの『追加の ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェントの設定 (オプション)』</li></ul>
	ProjectConsole サーバー、追加のレポート サーバーと収集エージェント (必要な場合)、Template Builder を環境に展開する方法を決定します。これらの機能はデフォルトで、Rational Suite のインストールに含まれています。3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。
	データ ウェアハウス ソフトウェアを選択します。次の項を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 44 ページの『ProjectConsole リポジトリの設定』</li><li>• 5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』</li><li>• 37 ページの『ClearQuest でサポートされるデータベース サーバー』</li><li>• 41 ページの『SQL Server 2000 のインストール』</li></ul>

表 16. ProjectConsole をインストールするためのチェックリスト (続き)

チェック	タスク
	<p>製造元データベース ソフトウェアをインストールして設定します。インストールの手順については、製造元のマニュアルを参照してください。それから、91 ページの『第 5 章 インストール後に必要な作業: データベースの設定とその他の ClearQuest タスク』を参照してください。製造元データベースの設定手順を使用します。ただし、ClearQuest スキーマ リポジトリとユーザー データベースの設定手順は使用しないでください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• SQL Anywhere 8.0.2 ソフトウェアは、Rational Solutions for Windows のインストール CD-ROM では、別製品として表示されますが、ProjectConsole サーバーのコンポーネントと共に自動的にインストールされます。</li> <li>• Oracle または DB2 をデータ ウェアハウス サーバーとして使用している場合は、Oracle または DB2 クライアント ソフトウェアを別のレポート サーバーと収集エージェント コンピュータにインストールし、データベース エイリアス (別名) を作成します。40 ページの『DB2 クライアントのインストール』を参照してください。</li> <li>• データベース クライアント ソフトウェアを ProjectConsole Web クライアントにインストールしないでください。</li> </ul>
	<p>Template Builder ソフトウェアのインストール先を決定します。45 ページの『ProjectConsole Template Builder のインストール』を参照してください。</p>
ProjectConsole コンポーネントのインストール	
	<p>ProjectConsole ソフトウェアをインストールする手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。</p>
インストール後	
	<p>ProjectConsole サーバー、追加の ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェント (オプション) を設定します。</p> <p>119 ページの『第 6 章 インストール後に必要な作業: ProjectConsole の設定』を参照してください。</p>
	<p>ProjectConsole セキュリティ データベースを設定します。119 ページの『第 6 章 インストール後に必要な作業: ProjectConsole の設定』を参照してください。</p>
	<p>データ ウェアハウスとリポジトリを設定します。119 ページの『第 6 章 インストール後に必要な作業: ProjectConsole の設定』を参照してください。</p>
	<p>ProjectConsole サーバーにログインするようユーザーに指示します。『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールレーション ガイド』を参照してください。</p> <p><b>注:</b> Designer または Dashboard を起動するには、cookie を有効にする必要があります。これは、すべてのブラウザ タイプに当てはまります。</p>

## ProjectConsole サーバーの設定

ProjectConsole サーバーは、Rational Web Platform (RWP)、レポート サーバー、データ収集エージェントを組み合わせたものです。

ProjectConsole サーバーをセットアップするには

1. Rational Suite と ProjectConsole コンポーネントをインストールします。Rational Web Platform、レポート サーバー、データ収集エージェントはサーバー コンピュータに自動的にインストールされます。

2. ProjectConsole サーバーを使用してデータを収集するには、サーバー コンピュータでレポート サーバーと収集エージェント ソフトウェアを設定します。レポート サーバーと収集エージェントとして追加のコンポーネントをセットアップするかどうかは、オプションです。

収集エージェントは、ProjectConsole サーバーが Rational プロジェクトや Microsoft Project のプロジェクト データにアクセスできるようにします。収集エージェントは、Web サーバーのためにこれらのデータ リポジトリから成果物を収集して、データ ウェアハウスに成果物を保存します。

**注:** 別の Web サーバーを実行中のサーバーに RWP をインストールすると、ポートの競合が発生し、RWP または別の Web サーバーが開始できなくなる可能性があります。RWP は、別の Web サーバーを実行する必要のないサーバー上にインストールすることをお勧めします。このようなインストールが不可能な場合は、別の Web サーバーでは RWP が使用していないポートを使用するように設定することをお勧めします。この設定も不可能な場合は、別の Web サーバーで使用していないポートを RWP で使用するよう設定する必要があります。詳しくは、170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』を参照してください。

## 追加の ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェントの設定 (オプション)

追加のコンピュータを ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェントとしてセットアップして実行するには、以下のタスクを実行します。

- ProjectConsole レポート サーバーとデータ収集エージェント ソフトウェアをインストールします。セットアップ ウィザードでその他のすべての機能をクリアすることで、これらの機能を単独使用の製品としてインストールできます。
- 収集エージェント ソフトウェアを設定します。120 ページの『ProjectConsole サービスの設定』を参照してください。

## ProjectConsole リポジトリの設定

ProjectConsole リポジトリは、収集されたデータ、ナビゲーション ツリー構造情報、ユーザー (とグループ) 認証情報を ProjectConsole で保存するために使用されます。

セキュリティ データベースは、SQL Anywhere 8.0.1 ソフトウェアから作成されます。SQL Anywhere は、ProjectConsole サーバーのコンポーネントと共に自動的にインストールされます。このデータベースには、すべてのユーザーとグループの ProjectConsole ナビゲーション ツリー構造情報と認証情報が含まれています。

### データ ウェアハウスの準備

ProjectConsole サーバーをインストールして、データ ウェアハウスを作成してある場合のみ、リポジトリを作成します。データ ウェアハウスは、ProjectConsole が、IBM Rational 単体製品やソフトウェア開発ツールから収集されたデータを保存するデータベース サーバーです。ProjectConsole メンテナンス ツールを使用してデータ ウェアハウスを管理します。

実働環境で ProjectConsole の使用を開始する場合は、SQL Anywhere、SQL Server、Oracle、DB2 を使用して、新しいデータ ウェアハウスを作成することをお勧めします。Microsoft Access (ランタイム ファイルのみ) は、デモ用に提供されています。Microsoft Access データベースを使用することもできますが、エンタープライズ規模のデータ ウェアハウスには SQL Anywhere、SQL Server、Oracle、DB2 の方がより強力に適合します。

ProjectConsole データ ウェアハウスのデータベースの要件と準備作業は、Rational ClearQuest の場合と同じです。

## ProjectConsole Template Builder のインストール

ProjectConsole レポート テンプレートの作成または変更を行うコンピュータに Template Builder をインストールすることができます。Template Builder は、ProjectConsole サーバー、ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェント コンピュータ、Web サーバー コンポーネントまたはレポート サーバーと収集エージェント ソフトウェアのいずれもインストールされていないコンピュータにインストールできます。Template Builder で作成したテンプレートをテストするには、Template Builder コンピュータにソースとなる単体製品をインストールする必要があります。

Template Builder テンプレートを使用してレポートを生成する場合は、ProjectConsole サーバーに Template Builder をインストールする必要はありません。

ProjectConsole レポート サーバーと収集エージェント ソフトウェアもインストールされていないコンピュータで、Template Builder を使用してテンプレートを作成する場合は、サーバー コンピュータの ProjectConsole のインストール ディレクトリにある Templates フォルダにテンプレートを保存します。

**注:** レポート サーバーと収集エージェント ソフトウェアがインストールされているコンピュータに Template Builder をインストールする場合は、Web サーバーでテンプレートを保存する必要はありません。

---

## RequisitePro のインストールの準備

Rational RequisitePro にはデータベース サーバーと Web サーバー (オプション) が含まれています。ここでは、これらの RequisitePro 機能をインストールしてセットアップする方法について説明します。

RequisitePro の機能と既知の問題に関する最新情報については、Rational Solutions for Windows Online Documentation CD-ROM に収録されているリリース ノートを参照するか、IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。リリース ノートは RequisitePro インストール処理の最後に表示され、RequisitePro を初めて起動した場合に表示される **Let's Go Rational RequisitePro** アプリケーションの中のリンクからも参照できます。プログラムのインストール後に、Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational RequisitePro] の順にポイントし、[リリース ノート] をクリックすると、リリース ノートを表示できます。

表 17 のチェックリストを使用して、RequisitePro と RequisiteWeb (オプション) をセットアップし、必要なインストール後のタスクを実行します。

表 17. *RequisitePro* サーバーのインストール チェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	Rational ソフトウェアのライセンスを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
	RequisitePro サーバーとクライアント ソフトウェアをユーザーに展開する方法を決定します。3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。
	製造元データベースを選択し、RequisitePro データベースのシステム要件とソフトウェア要件を確認します。次の項を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』</li> <li>47 ページの『RequisitePro データベースの設定』</li> </ul>
	RequisiteWeb サーバーをインストールしてセットアップするかどうかを決定します。RequisiteWeb のシステム要件とソフトウェアの要件を確認します。次の項を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』</li> <li>48 ページの『RequisiteWeb の設定』</li> </ul> <p>注: RequisitePro クライアント ユーザーも RequisiteWeb を使用できます。</p>
	サーバーに対して管理者権限があることを確認します。5 ページの『管理者権限』を参照してください。
	IBM Rational E-Mail Reader を使用するかどうかを決定します。49 ページの『ディスカッション用の電子メールの設定』を参照してください。 <p>注: RequisitePro クライアント ユーザーも RequisiteWeb を使用できます。</p>
	各 RequisitePro サーバーのインストールでのインストール オプションをプレビューします。47 ページの『RequisitePro サーバーのカスタム セットアップ オプション』を参照してください。
RequisitePro のインストール	
	製造元データベースをデータベース サーバーにインストールします。手順については、製造元のマニュアルを参照してください。
	RequisitePro (データベースの設定と Web サーバー機能) サーバーとクライアントのインストール手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。
インストール後	
	RequisitePro データベースを設定します。127 ページの『IBM Rational RequisitePro 用の DB2 の設定』、131 ページの『RequisitePro を使用するための Oracle の設定』、または 138 ページの『RequisitePro を使用するための SQL Server の設定』を参照してください。
	DB2 または Oracle ソフトウェアをデータベース サーバー用に選択する場合は、データベース クライアント ソフトウェアを RequisiteWeb サーバーにインストールし、エイリアスを作成します。 <p>48 ページの『DB2 および Oracle データベース クライアント ソフトウェアのインストール』および 138 ページの『RequisitePro の各クライアントでのデータベースのエイリアスの定義』も参照してください。</p>

表 17. *RequisitePro* サーバーのインストール チェックリスト (続き)

チェック	タスク
	<i>RequisitePro</i> クライアントで DB2 または Oracle データベースにアクセスする場合は、データベース クライアント ソフトウェアをデスクトップにインストールし、各クライアントにエイリアスを作成するようユーザーに指示します。
	<i>RequisiteWeb</i> サーバーを設定します。142 ページの『 <i>RequisiteWeb</i> の設定』を参照してください。
	ユーザーに <i>RequisiteWeb</i> URL (オプション) を通知して、 <i>RequisiteWeb</i> にログインできるようにします。『 <i>Rational Software</i> デスクトップ製品』を参照してください。
	<i>RequisitePro</i> ディスカッション用の電子メールを設定します。141 ページの『 <i>Rational E-Mail Reader</i> の設定』を参照してください。
	<i>Rational Administrator</i> は <i>RequisitePro</i> と一緒にインストールされます。 <i>Rational Administrator</i> の詳細については、『 <i>IBM Rational Suite</i> 管理ガイド』を参照してください。

## RequisitePro サーバーのカスタム セットアップ オプション

表 18 に、*RequisitePro* サーバーのインストール時のカスタム セットアップ オプションを示します。

表 18. *Rational RequisitePro* のカスタム セットアップ オプション

オプション	説明
データベースの設定	このオプションには、スキーマ作成スクリプトとセットアップ方法が含まれています。
サンプル プロジェクト	このオプションには、 <i>RequisitePro</i> をすぐに使い始めるためのサンプル プロジェクトのセットが含まれています。
<i>RequisiteWeb</i> 用の Web サーバー コンポーネント	このオプションには、 <i>RequisiteWeb</i> サーバー プログラム ファイルとセットアップ方法が含まれています。

## RequisitePro データベースの設定

*RequisitePro* は、DB2、Oracle、Microsoft SQL Server および Microsoft Access データベースで使用できます。DB2、Oracle または Microsoft SQL Server データベースで *RequisitePro* プロジェクトを作成してアクセスするには、データベース サーバーでスキーマを設定します。データベース ソフトウェアのインストールについては、DB2、Oracle、または Microsoft のマニュアルを参照してください。

**RequisitePro** プロジェクト用 **DB2、Oracle** または **SQL Server** データベースの設定方法については、127 ページの『第 7 章 インストール後に必要な作業: **RequisitePro** の設定』を参照してください。*RequisitePro* データ トランスポート ウィザードを使用すると、*Rational RequisitePro* のプロジェクトをあるデータベースから別のデータベースに移動することができます。

## データベース構成スクリプトのインストール

DB2、Oracle または SQL Server データベースをセットアップする場合、RequisitePro のデフォルト インストールを選択すると、セットアップ ウィザードによって、ローカル サーバーの以下の場所にスキーマ作成スクリプトがインストールされます。

- C:\Program Files\Rational\RequisitePro\database\db2
- C:\Program Files\Rational\RequisitePro\database\oracle
- C:\Program Files\Rational\RequisitePro\database\sqlserver

## DB2 および Oracle データベース クライアント ソフトウェアのインストール

DB2 または Oracle データベース上の RequisitePro プロジェクトにアクセスするユーザーの場合、データベース クライアント ソフトウェアをデスクトップにインストールする必要があります。

RequisiteWeb ユーザーは、RequisitePro ソフトウェアまたは Oracle クライアント ソフトウェアをデスクトップにインストールする必要はありません。DB2 または Oracle データベースにアクセスする RequisitePro Web サーバーを設定するには、データベース クライアント ソフトウェアを Web サーバーにインストールします。

DB2 または Oracle クライアント ソフトウェアをインストールするには、データベース製品のマニュアルに従ってください。

## RequisiteWeb の設定

Rational RequisiteWeb によって、クライアントはイントラネットで RequisitePro プロジェクト要求を読み取り、作成、修正することができます。RequisiteWeb では、RequisitePro プロジェクト データへのクライアントのアクセスに、Rational Web Platform (RWP)、Netscape Navigator、Microsoft Internet Explorer を使用します。RequisiteWeb は、Windows サーバーにインストールする必要があります。Rational セットアップ ウィザードで選択する [カスタム セットアップ] オプションについては、47 ページの『RequisitePro サーバーのカスタム セットアップ オプション』を参照してください。データベースを設定し、RequisiteWeb コンポーネントを Web サーバーにインストールしたら、142 ページの『RequisiteWeb の設定』を参照してください。

**注:** 別の Web サーバーを実行中のサーバーに RWP をインストールすると、ポートの競合が発生し、RWP または別の Web サーバーが起動できなくなる可能性があります。RWP は、別の Web サーバーを実行する必要のないサーバー上にインストールすることをお勧めします。このようなインストールが不可能な場合は、別の Web サーバーでは RWP が使用していないポートを使用するように設定することをお勧めします。この設定も不可能な場合は、別の Web サーバーで使用していないポートを RWP で使用するように設定する必要があります。詳しくは、170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』を参照してください。

## ディスカッション用の電子メールの設定

Rational E-mail Reader は、電子メール ハンドラを各 E-Mail プロジェクトに関連付けることで、RequisitePro との完全な電子メール統合を提供するツールです。最初のディスカッション項目とその応答は、RequisitePro データベースに自動的に保存され、電子メールを介してディスカッションの関係者に送信されます。関係者は、RequisiteWeb 内から、または電子メールのどちらでもディスカッション項目に応答できます。詳しくは、141 ページの『Rational E-Mail Reader の設定』を参照してください。

## IBM Rational テスト製品のインストールの準備

ここでは、IBM Rational テスト製品をインストールする前に知っておく必要のある情報について説明します。Rational テスト製品をインストールすると、IBM Rational TestManager を使用して、計画、設計、開発、実行、分析のすべてのテスト作業を管理できるだけでなく、Windows アプリケーションの機能テストとパフォーマンステストの両方を計画、開発、実行することができます。

IBM Rational テスト製品の機能と既知の問題に関する最新情報については、Rational Solutions for Windows Online Documentation CD-ROM に収録されているリリースノートを参照するか、IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。リリースノートは、各製品のインストール処理の最後に表示されます。テスト製品のインストール後、Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational <testing product>]、[Rational Test] を順にポイントし、[Rational <testing product> readme] をクリックすると、リリースノートを表示できます。

表 19 のチェックリストを使用して、テスト環境を設定し、インストール後のタスクを実行します。

表 19. IBM Rational テスト製品のインストール チェックリスト

チェック	タスク
インストール前	
	IBM Rational テスト製品のライセンス キーを取得します。53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』を参照してください。
	サーバー システムに対して管理者権限があることを確認します。5 ページの『管理者権限』を参照してください。
	IBM Rational テスト製品のシステムとソフトウェアの要件を確認します。5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。
	テスト製品を環境に展開する方法を決定します。3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。
	すべてのコンピュータに TCP/IP がインストールされていることを確認します。更新内容をネットワーク ソフトウェアにインストールします。
	コンピュータが互いに通信していることを確認します (問題がある場合は、ネットワーク管理者に連絡してください)。
	IBM Rational Test データストアに必要なデータベース タイプを決定します。詳しくは、50 ページの『IBM Rational テスト データストアについて』を参照してください。

表 19. IBM Rational テスト製品のインストール チェックリスト (続き)

チェック	タスク
	「File and Printer Sharing for Microsoft Networks」の一部として「Server」Service または LanMan Service があることを確認します。これは、TestManager の必須コンポーネントである Nutcracker を実行するために必要です。
	Microsoft Access テスト データストアを SQL Anywhere テスト データストアに変換する場合は、51 ページの『Microsoft Access テスト データストアの変換』を参照してください。
	ClearQuest データベースを IBM Rational Administrator プロジェクトに添付するかどうかを決定します。Rational Administrator の使用法の詳細については、『IBM Rational Suite 管理ガイド』を参照してください。Rational Administrator は RequisitePro、Robot、SQL Anywhere、TestManager、Rational Suite 製品に含まれています。
IBM Rational テスト製品のインストール	
	Rational ManualTest Web、Sybase SQL Anywhere、その他のテスト製品 (Microsoft Access と Rational Administrator を含む) のインストール手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。 注: Sybase SQL Anywhere の場合は、最適なパフォーマンスを得るために、専用サーバーの使用をお勧めします。すべてのクライアントが、このコンピュータへのネットワーク アクセスが可能である必要があります。
インストール後	
	ManualTest Web Execution 用の Web サーバーをセットアップする方法については、162 ページの『IBM Rational ManualTest Web Execution の設定』を参照してください。
	テスト データストアを作成します。157 ページの『テスト データストアの設定』と IBM Rational Suite 管理ガイドを参照してください。  Microsoft Access テスト データストアを SQL Anywhere テスト データストアに変換する場合は、『161 ページの『Microsoft Access から SQL Anywhere へのテスト データストアの変換』』を参照してください。

## IBM Rational ManualTest Web Execution について

手動テスト スクリプトは、テスト担当者が実行するテスト命令のセットです。手動テスト スクリプトは、IBM Rational ManualTest を使用して入力されたステップと検証ポイントで構成されます。手動テスト スクリプトを作成し、テスト ケース実装を作成してテスト ケースと関連付けた後は、Web ブラウザからテスト ケースを実行できます。手動テスト スクリプトの作成とテスト ケースの実装の詳細については、『IBM Rational TestManager User Manual』を参照してください。

## IBM Rational テスト データストアについて

IBM Rational Test データストアには、ユーザー、グループ、コンピュータに関する情報だけでなく、スイート、テスト計画、テスト ケース、レポート、テスト ログ、スクリプトなどの機能とパフォーマンスに関するテスト アセットと成果物が保

存されます。Rational Administrator から新しいテスト データストアを作成する場合には、Microsoft Access または Sybase SQL Anywhere のどちらのデータベース エンジンを使用するかを選択できます。

**注:** Rational Administrator は RequisitePro、Robot、Sybase SQL Anywhere、TestManager、Rational Suite 製品に含まれています。Rational Administrator については、『IBM Rational Suite 管理ガイド』を参照してください。

- **Sybase SQL Anywhere** - これは、テスト データストア用のデフォルトのデータベース エンジンです。2 人以上のユーザーがテスト データストアに同時にアクセスする場合は、このタイプのデータベース エンジンを使用することをお勧めします。SQL Anywhere データベース サーバーのデータベースには、同等サイズの Microsoft Access データベースよりも高速にアクセスできます。ただし、SQL Anywhere データベースは、Microsoft Access データベースと比較してメンテナンスの手間がかかります。
- **Microsoft Access** - ランタイム ファイルは Rational ソフトウェアのインストール時に自動的にインストールされます (Microsoft Access ランタイム ファイルは Microsoft Access のフル バージョンではありません)。テスト データストアへの同時アクセスが必要ない場合や非常に限られている場合には、Microsoft Access を使用することをお勧めします。Microsoft Access は比較的保守に手間のかからないデータベースですが、シングル ユーザー アクセスに適します。

## Microsoft Access テスト データストアの変換

Microsoft Access テスト データストアを SQL Anywhere テスト データストアに変換する場合は、次のタスクを実行します。

- Sybase SQL Anywhere ソフトウェアをインストールします。
- 変換を開始する前に、テスト データストアをバックアップします。

**注:** SQL Anywhere テスト データストアを Microsoft Access テスト データストアに変換することはできません。

## SQL Anywhere データベース ソフトウェアのインストール

SQL Anywhere データベース サーバー ソフトウェアをインストールすると、ネットワーク接続されたクライアント/サーバー環境内の Rational プロジェクトやテスト データストアを管理するために必要な IBM Rational Administrator などの IBM Rational コンポーネントもインストールされます。ただし、サーバー ソフトウェアのインストールと共に、購入した IBM Rational 製品もフル インストールすることを強くお勧めします。SQL Anywhere データベース サーバー ソフトウェアは、SQL Anywhere データベース サーバー用のツール、サンプル、関係するライブラリ ファイルを備えています。

- インストール手順については、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。[製品の選択] ページで SQL Anywhere を選択します。

**注:** 最適なパフォーマンスを得るには、専用のコンピュータを使用してください。すべてのクライアントが、このコンピュータへのネットワーク アクセスが可能である必要があります。

- SQL Anywhere の設定については、157 ページの『第 8 章 インストール後に必要な作業: IBM Rational テスト ツールの設定』を参照してください。



## 第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス

この章では、IBM Rational 製品のライセンスを初めて取得するユーザーを対象にライセンスの概要を説明します。ライセンス キーの要求とインストールは IBM Rational 製品をインストールする前でも後でもできます。ほとんどの IBM Rational 製品は、ライセンス キーを取得しないと起動できません。

『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』には、Web ベースのライセンス マネージャである AccountLink、IBM Rational Common Licensing、License Key Administrator (LKAD)、および代替のライセンス サーバーの説明があります。また、フローティング ライセンス キー、指定ユーザー フローティング ライセンス キー、ノードロック ライセンス キーの要求、インストール、アップグレード、移動の手順も示されています。

この章では、以下の製品固有のライセンス情報について説明します。

- 55 ページの『Suite のライセンスと単体製品のライセンス』
- 55 ページの『ホスト用開発システムのライセンス』
- 55 ページの『ClearCase LT のライセンス』
- 55 ページの『ClearQuest のライセンス』
- 55 ページの『ClearQuest MultiSite のライセンス』
- 56 ページの『Sybase SQL Anywhere のライセンス』
- 56 ページの『Web クライアントのライセンス』
- 56 ページの『UNIX 版の DevelopmentStudio 用 Windows NT コンポーネントのライセンス』

表 20 に、ライセンス取得のための基本タスクの手順を示します。

表 20. ライセンス取得のための基本タスク

目的	タスク
パーマネントまたは TLA (期限付き使用許諾) ライセンス キーを取得する。期限付き使用許諾とは、有効期限が設定されているライセンス キーのこと。	『Important Licensing and Installation Information』のドキュメントか、『ライセンス証書』証明書を使用して、AccountLink の IBM Rational の Web ベース ライセンス キー管理ツールからパーマネント ライセンス キーを要求してください。 <a href="https://www6.software.ibm.com/reg/rational/rational-i">https://www6.software.ibm.com/reg/rational/rational-i</a> にアクセスします (ただし、英語のみのご利用となります)。[ライセンス キーの要求と管理 (Request and Manage License Keys)] をクリックします。57 ページの『AccountLink を使用したパーマネント ライセンス キーの要求』を参照してください。
評価用ライセンス キーを取得する。	IBM Rational の営業担当からライセンス キーを取得します。

表 20. ライセンス取得のための基本タスク (続き)

目的	タスク
<p>ノードロック ライセンス キーをデスクトップ コンピュータにインストールする。</p>	<p>LKAD ウィザードを使用して、ライセンス キーをインストールします。LKAD ウィザードは、インストールが終了したときに起動されます。また、[スタート] メニューの [Rational Software] から起動することもできます。58 ページの『パーマネント ライセンス キーのインポート』および 59 ページの『テンポラリ ライセンス キーの入力』を参照してください。</p> <p><b>注:</b> 許可ユーザー ライセンスをすでに購入済みの場合、複数のマシンで同時に使用するための複数のノードロック キーをリクエストできます。</p>
<p>IBM Rational ライセンス サーバーにフローティング ライセンス キーか指定ユーザー ライセンス キーをインストールする。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. IBM Rational ライセンス サーバー ソフトウェアをインストールします。ライセンス サーバー ソフトウェアを使用するには、ライセンス キーは不要です。『<i>IBM Rational Software ライセンス管理ガイド</i>』にある手順を参照するか、61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』のインストール手順に従ってください。本書のインストール手順を使用する場合は、[製品の選択] ページで [Rational ライセンス サーバー] を選択します。</li> <li>2. LKAD ウィザードを使用して、ライセンス キーをインストールします。LKAD ウィザードは、インストールが終了したときに起動されます。また、[スタート] メニューの [Rational Software] から起動することもできます。58 ページの『パーマネント ライセンス キーのインポート』および 59 ページの『テンポラリ ライセンス キーの入力』を参照してください。</li> <li>3. ライセンス サーバーを起動します。『<i>IBM Rational Software ライセンス管理ガイド</i>』または License Key Administrator のヘルプを参照してください。</li> <li>4. ライセンス サーバーの名前をユーザーに通知します。59 ページの『単一または複数のライセンス サーバーを使用するためのクライアントの設定』を参照してください。</li> </ol>
<p>IBM Rational ライセンス サーバーからライセンスを要求するように、クライアントのデスクトップ コンピュータを設定する。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. リリース領域とサイトのデフォルト ファイルを作成します。69 ページの『リリース領域とサイト デフォルト ファイルの作成』を参照してください。</li> <li>2. リリース領域へのショートカットをユーザーに通知します。または</li> <li>3. Rational ライセンス サーバーの名前をユーザーに通知します。ユーザーは、LKAD ウィザードを使用して、ライセンス サーバーを指定することができます。LKAD ウィザードは、インストールが終了したときに起動されます。59 ページの『単一または複数のライセンス サーバーを使用するためのクライアントの設定』を参照してください。</li> </ol>

---

## Suite のライセンスと単体製品のライセンス

IBM Rational ライセンス キーには、そのライセンスが IBM Rational Suite DevelopmentStudio などの Rational Suite のライセンスを有効にするか、IBM Rational Purify などの単体製品ライセンスを有効にするかが示されます。IBM Rational Suite ライセンス キーを使用すると、Rational Suite に含まれるすべての製品を同時に実行できます。Rational Suite ライセンス キーにより、単一のフローティング ライセンスまたはノードロック ライセンスはチェックアウトされます。

---

## ホスト用開発システムのライセンス

5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』に記載されているホスト用開発システムをサポートする IBM Rational 製品には、フローティング ライセンスが必要です。

---

## ClearCase LT のライセンス

ここでは、ClearCase LT のライセンスについて説明します。

- ClearCase LT サーバーと ClearCase LT クライアントが別のコンピュータにインストールされている場合は、個別のフローティング ライセンスが必要です。ClearCase LT を評価する場合は、ClearCase LT サーバーがサーバーとクライアントの両方の役割を果たすので、フローティング ライセンスは 1 つのみでかまいません。
- ClearCase LT では、ノードロック Rational Suite ライセンス キーが使用できます。ノードロック ライセンスをインストールした後、[ライセンスの使用状況] を使用して、ClearCase LT が Rational Suite キーを使用するように指定します。Rational では、ClearCase LT 用の単独使用ノードロック ライセンスは提供していません。[ライセンスの使用状況] の詳細については、『*IBM Rational Software ライセンス管理ガイド*』または License Key Administrator のヘルプを参照してください。

---

## ClearQuest のライセンス

ClearQuest ネイティブ クライアントごとにフローティング ライセンスまたはノードロック ライセンスへのアクセス権が必要です。

---

## ClearQuest MultiSite のライセンス

ClearQuest MultiSite では、ClearQuest ライセンスと ClearQuest MultiSite ライセンスの両方が必要です。レプリカ データベースにアクセスするには、ClearQuest ライセンスと ClearQuest MultiSite ライセンスの両方が必要です。

サイトに必要な ClearQuest MultiSite のライセンス数は、レプリカ データベースにアクセスする開発者の数によって計算できます。開発者全員がレプリカ データベースにアクセスする場合は、ClearQuest ライセンスと同数の ClearQuest MultiSite ライ

センスが必要です。開発者全員がレプリカ データベースにアクセスするわけではない場合は、開発者総数より少ない数の ClearQuest MultiSite ライセンスを購入します。

たとえば、2 つのサイトを持つ会社で、A サイトには 20 名の開発者、B サイトには 5 名の開発者がおり、A サイトには 3 つのデータベースがあり、この中の 2 つについて B サイトにレプリカを作成し、残りの 1 つについてはレプリカを作成しないケースを考えます。A サイトの開発者の中の 5 名は非レプリカ データベースにのみアクセスし、残りの 15 名はすべてのデータベースを使用して作業します。サイト B の開発者全員が、レプリカ データベースにアクセスします。このケースでは、次の数のライセンスを購入する必要があります。

サイト	ClearQuest の ライセンス数	ClearQuest MultiSite の ライセンス数
A	20	15
B	5	5

注: この例では、ユーザー全員に ClearQuest ライセンスを購入することを前提にしています。ユーザー数より少ない ClearQuest ライセンスを購入した場合は、同じ数の ClearQuest MultiSite ライセンスも購入します。たとえば、B サイトで ClearQuest を 3 ライセンス購入した場合は、ClearQuest MultiSite も 3 ライセンス購入します。

---

## Sybase SQL Anywhere のライセンス

Rational Solutions for Windows CD に収録されている、または IBM Web ダウンロード パッケージに含まれている SQL Anywhere データベース ソフトウェアの使用には、別のライセンスは必要ありません。これは、IBM Rational 製品とのみ連携するように設定されています。

---

## Web クライアントのライセンス

ClearCase Web、新規 ClearQuest Web、ManualTest Web、ProjectConsole、RequisiteWeb を使用するには、ライセンス管理者が Rational ライセンス サーバーにフローティング ライセンスをインストールする必要があります。Rational Web Platform サーバーは、Web クライアントごとに Rational ライセンス サーバーからライセンス キーを要求します。Web クライアントを使用するために、デスクトップにライセンス キーをインストールする必要はありません。

---

## UNIX 版の DevelopmentStudio 用 Windows NT コンポーネントのライセンス

UNIX 上で DevelopmentStudio 用 Windows NT コンポーネントを稼働するには、AccountLink (<https://www6.software.ibm.com/reg/rational/rational-i>) からフローティング ライセンスを要求します (ただし、英語のみのご利用となります)。Rational Download and Licensing Center に登録したら、[ライセンス キーの要求と管理 (Request and Manage License Keys)] をクリックします。AccountLink からパ

ーマネント ライセンス キー ファイルを受け取ったら、IBM Rational ライセンス サーバーにそのファイルをインポートします。

- UNIX ライセンス サーバーは、Windows クライアントと UNIX クライアントにフローティング ライセンスを提供できます。UNIX システムに Rational ライセンス サーバーをセットアップする方法については、『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』を参照してください。
- Windows ライセンス サーバーは、Windows クライアントと UNIX クライアントにフローティング ライセンスを提供できます。

---

## AccountLink を使用したパーマネント ライセンス キーの要求

AccountLink では、Windows 製品と UNIX 製品のパーマネント ノードロック ライセンス キー、フローティング ライセンス キー、指定ユーザー フローティング ライセンス キーの申し込みと返却を行います。『Important Licensing and Installation Information』のドキュメントか、『ライセンス証書』証明書を使用して、必要な情報を指定します。

注: AccountLink では、テンポラリ ライセンス キーの処理はサポートされていません。

AccountLink のインターフェイスでは、次の 3 つのライセンス処理が可能です。

### 処理

#### ライセンス キーの取得

### 説明

特定のマシンに 1 つまたは複数のライセンス キーを登録します。パーマネント キーを申し込むには、各コンポーネントに必要なライセンス キー タイプ、製品アカウント番号、ホスト名とホスト ID、ライセンス サーバーまたはクライアントのイーサネット アドレスのいずれかが必要です。

次のものを登録できます。

- IBM Rational ライセンス サーバーからライセンスが提供される Windows 対応または UNIX 対応の IBM Rational 製品。
- Windows または UNIX システムの単一、複数、または代替 IBM Rational ライセンス サーバー。
- リモートの Windows または UNIX コンピュータ。ライセンス キーを要求しているコンピュータで操作を実行する必要はありません。

ホスト名とホスト ID の詳細については、『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』を参照してください。代替サーバー環境用にパーマネント ライセンス キーの順序を指定する場合は、代替サーバーのホスト ID を次の順序で指定します。

- プライマリ ライセンス サーバー
- セカンダリ ライセンス サーバー
- ターシャリ (バックアップ) ライセンス サーバー

クライアントでは、この順序で代替サーバーと通信が行われます。

#### ライセンス キーの返却

既存のライセンス キーをアカウントに返却します。これにより、アカウントに登録された製品の数調整され、他のコンピュータ用のライセンス キーを取得できるようになります。ライセンス キーの返却の詳細については、『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』を参照してください。

#### ライセンス ファイルのコピーの要求

この要求により、指定したホストに現在登録されている最新のライセンス キーが提供されます。この処理は、ハード ディスクを再フォーマットした場合、システム上でソフトウェアの復旧を行う必要がある場合、またはライセンス キーが破損した場合に必要なことがあります。この処理では、ライセンス キーの返却や追加の必要はありません。

---

## パーマネント ライセンス キーのインポート

ライセンス キー ファイルは、License Key Administrator (LKAD) または LKAD ウィザードを使用して、Rational 製品のインストール後にデスクトップにインポート (ノードロック ライセンスの場合) するか、ライセンス サーバー ソフトウェアのインストール後に、ライセンス サーバーにインポート (フローティング ライセンスの場合) します。指定ユーザー フローティング ライセンス キーをインストールする方法については、『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』を参照してください。

**注:** LKAD または LKAD ウィザードでライセンス キー情報をインポートするには、対象のコンピュータのローカル管理者権限が必要です。

LKAD でライセンス キー ファイルをインポートするには

1. メニュー バーで、[ライセンス キー] の [ライセンス キーのインポート] をクリックします。
2. [ライセンス キーのインポート] ダイアログ ボックスで、\*.upd または \*.txt ファイル (ライセンス キー ファイル) を見つけて強調表示します。
3. [開く] をクリックします。ライセンス キー ファイルのデフォルトの場所は、`<Install Path>\Rational\common` です。
4. [インポートの確認] ダイアログ ボックスで、[インポート] をクリックします。

#### その他の方法

- 使用する電子メール プログラムで添付ファイルからのプログラム起動がサポートされている場合は、IBM Rational から送信された電子メールの添付ファイル .upd または .txt をダブルクリックします。添付ファイルを開くかどうか確認するダイアログ ボックスで、開くことを選択します。[インポートの確認] ダイアログ ボックスで、[インポート] をクリックします。

- 添付ファイルを任意のフォルダに保存し、ライセンス ファイルをダブルクリックします。
- LKAD ウィザードを使用します。

---

## テンポラリ ライセンス キーの入力

テンポラリ ライセンス キーは、License Key Administrator (LKAD) で入力できます。テンポラリ フローティング キーを入力する場合は、IBM Rational ライセンス サーバー ソフトウェアをインストールした後で入力してください。

**注:** LKAD または LKAD ウィザードでライセンス キー情報をインポートするには、対象のコンピュータのローカル管理者権限が必要です。

LKAD でライセンス情報を入力するには

1. License Key Administrator の [ライセンス キー] メニューの [ライセンスの入力] をクリックします。
2. ライセンスの種類を選択します。
3. 次のダイアログ ボックスでは、次の情報を入力します。
  - 製品名
  - 有効期限
  - ライセンス キー
  - 数量 (フローティング ライセンス キーをインストールする場合)
4. [完了] をクリックします。License Key Administrator は、入力した情報を `<Install Path>\Rational\common` にあるライセンス キー ファイル\*.dat に追加します。

---

## 単一または複数のライセンス サーバーを使用するためのクライアントの設定

クライアントのデスクトップの License Key Administrator (LKAD) で、ライセンス サーバーのホスト名を入力します。ライセンス サーバーを指定する前に、ライセンス管理者から、どのライセンス サーバーを開始するのか説明を受ける必要があります。

次の手順に従って、単一または複数のライセンス サーバーをデスクトップ コンピュータで指定します。次の手順は、代替サーバーの入力には使用しないでください。

クライアントのデスクトップでライセンス サーバーのホスト名を入力するには

1. [設定] メニューの [クライアント/サーバーの構成] をクリックします。
2. [サーバーの追加] をクリックします。
3. [サーバーの種類] の横にある [単一] がデフォルト値です。[New-Server] をクリックし、[サーバー名] の横にある [値] カラムにライセンス サーバーのホスト名を入力します。ホスト名を入力してから、[Enter] を押します。

追加サーバー

- システム管理者から追加ライセンス サーバーのホスト名を知らされている場合、  
[サーバーの追加] をクリックし、各サーバーのホスト名を入力します。
4. サーバーをすべて入力したら、**[OK]** をクリックします。

---

## 第 3 章 IBM Rational 製品のインストール

IBM Rational 製品の初期インストールとアップグレード インストールには、IBM Rational インストール プログラムを使用します。この章では、IBM Rational セットアップ ウィザードの詳細と、ウィザードを使用した Rational 製品の Rational Solutions for Windows CD-ROM からの直接展開、IBM Web サイトからの展開、ネットワーク上のリリース領域からの展開、サイレント インストール モードでの展開方法について説明します。これらの方法については、3 ページの『展開方法の選択』を参照してください。Rational ソフトウェアの前のリリースからアップグレードする場合は、『IBM Rational Suite アップグレード ガイド』を参照してください。

**注:** デスクトップまたはクライアント ソフトウェアのインストールと構成の詳細については、『IBM Rational Software デスクトップ製品 インストレーション ガイド』を参照してください。

---

### IBM Rational 製品の以前のリリースの削除

前のバージョンの Rational 製品 (IBM Rational ライセンス サーバーを含む) がインストールされている場合は、バージョン 2003.06.13 の IBM Rational 製品をインストールする前に、『IBM Rational Suite アップグレード ガイド』を必ずお読みください。このガイドは、IBM Rational Solutions for Windows Online Documentation CD-ROM から参照するか、IBM Publications Center からダウンロードできます。ただし IBM Rational ClearCase だけは例外です。つまり、前のバージョンの ClearCase と一緒に製品をインストールできます。

**注:** フローティング ライセンスを使用している場合は、コンピュータ上の IBM Rational 製品をアップグレードする前に、ライセンス サーバー名を記録しておきます。新しい IBM Rational 製品をコンピュータにインストールした後、License Key Administrator でホスト名をリセットします。

---

### IBM Rational 製品の展開

表 21 を参照し、ユーザー用に選択した展開方法に応じて、適切な手順を確認してください。参照先の項を、示されている番号順に読んでください。ClearCase LT または ClearQuest の評価版をインストールするには、21 ページの『評価目的での ClearCase LT のインストール』または 34 ページの『評価用 IBM Rational ClearQuest のインストール』を参照してください。

表 21. 展開方法

方法	参照先。
IBM Rational Solutions for Windows CD-ROM から直接インストールする方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 63 ページの『セットアップ ウィザードの使用法』</li> <li>• 65 ページの『[カスタム セットアップ] ページの使用法』</li> <li>• 67 ページの『IBM Rational ライセンス サーバーの指定』</li> <li>• 67 ページの『CD または Web ダウンロードからの IBM Rational 製品のインストール』</li> <li>• 81 ページの『インストール後のタスク』</li> </ul>
IBM Web サイトからソフトウェアをダウンロードする方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 次のサイトへ移動します。 <a href="http://www.rational.com/licensing">www.rational.com/licensing</a></li> <li>2. [Rational Download and Licensing Center (Rational Download and Licensing Center)] を選択し、IBM Web メンバーシップに登録します。</li> <li>3. [フル製品バージョン (Full Product Versions)] または [パッチとサービス リリース (Patches and Service Releases)] を選択します。</li> <li>4. インストールする Rational 製品を選択します。</li> <li>5. インストールする Rational 製品のバージョンを選択します。[継続] をクリックして、[ダウンロード] ページへ移動します。</li> </ol>
セットアップ ウィザードを使用してリリース領域とサイト デフォルト ファイルを作成する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 63 ページの『セットアップ ウィザードの使用法』</li> <li>• 67 ページの『IBM Rational ライセンス サーバーの指定』</li> <li>• 69 ページの『リリース領域とサイト デフォルト ファイルの作成』</li> </ul>
リリース領域に複数のサイト デフォルト ファイルを作成する。	73 ページの『複数の sitedef ファイルを作成する SitePrep ウィザードの実行』
ネットワークのリリース領域からインストールする (標準構成を使用する場合、またはデスクトップに合わせてクライアント構成をカスタマイズする場合)。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 74 ページの『リリース領域からの IBM Rational 製品のインストール』</li> <li>• 81 ページの『インストール後のタスク』</li> </ul>
製品のインストールをキャンセルする。	83 ページの『製品インストールのキャンセル』、または 80 ページの『サイレント インストールのキャンセル』。
製品を再インストールする (変更または修復)。	83 ページの『製品の再インストール (変更または修復)』
リリース領域でサイレント インストールを設定する。	78 ページの『IBM Rational 製品のサイレント インストールのセットアップ』

表 21. 展開方法 (続き)

方法	参照先。
サイレント インストールを実行する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 79 ページの『サイレント インストールの実行』</li> <li>• 81 ページの『インストール後のタスク』</li> </ul>
製品を削除する。	181 ページの『第 10 章 IBM Rational 製品の削除』、または 80 ページの『製品を削除するためのコマンド行の使用法』。
コマンド ライン構文を使用する。	84 ページの『コマンド ライン構文』
インストールをトラブルシューティングする。	84 ページの『Rational セットアップ ウィザードの警告とブロック』
サービス リリースを適用する。	85 ページの『サービス リリースの適用』

## セットアップ ウィザードの使用法

IBM Rational セットアップ ウィザードを使用して IBM Rational Software 製品をインストールします。セットアップ ウィザードは、ご購入の製品に付属しているか、またはソフトウェアをダウンロードすることで使用できます。

### Rational\_install ログ

セットアップ ウィザードでは、エラーの概要は表示されません。Rational\_install.log という名前のインストールのログに、すべてのインストール操作が記録されます。ユーザーとカスタマ サポート担当者は、このログを使用して、インストールに関する大部分のエラーを追跡することができます。

デフォルトの設定では、インストール ログ ファイルは、TEMP ディレクトリに置かれます。ディレクトリの場所は、コンピュータに設定された TEMP 環境変数により異なります。場所を検索するには、コマンド ウィンドウを開き、MS-DOS プロンプトで **echo %TEMP%** と入力します。

このフォルダとファイルは非表示にすることができます。これらを Windows エクスプローラで表示するには、[すべてのファイルとフォルダを表示する] をオンにします。

**注:** インストール ログは累積されません。別のインストールを実行したり、インストールの修復または変更を実行したりすると、既存のログ ファイルが上書きされます。ログを保存する必要がある場合は、別の製品をインストールする前に、ログ ファイルを別の場所にコピーするかログ ファイルの名前を変更してください。

### IBM Rational セットアップ ウィザードの開始前の注意点

システムで IBM Rational セットアップ ウィザードを実行する場合の一般要件は、次のとおりです。

- インストールを開始する前に、SQL Anywhere サービスなどを含む、すべてのアプリケーションを停止します。
- Rational 製品をインストールする前に、管理者権限があることを確認します。

- Windows オペレーティング システムで Rational セットアップ ウィザードを使用するには、ローカル コンピュータに対する Windows 管理者権限が必要です。次のユーザーのいずれかを使用してログインします。
  - ローカル管理者
  - ローカル管理者グループのメンバー
  - ローカル管理者グループのメンバーであるドメイン管理者
- すべてのウィルス対策ソフトウェアを無効にします。これらのプログラムは通常バックグラウンドで実行されるため、インストール アプリケーションのパフォーマンスを妨げることがよくあります。これは、インストールされる各ファイルがウィルス対策ソフトウェアによってチェックされるためです。
- システムが最小要件を満たし、オペレーティング システムが適切であることを確認します。
- セットアップ ウィザードは、デフォルトのインストール パスとして `C:\Program Files\Rational` を使用します。
- Rational セットアップ ウィザードを使用すると、インストール用に別のドライブを指定している場合でも Microsoft の主要コンポーネントとその他のファイルはオペレーティング システムと同じドライブ (通常は `C:\` ドライブ) にインストールされます。これらのファイルに必要なハード ドライブの一時ディスク容量は、5 ～ 15 MB です。
- Rational セットアップ ウィザードでは、すべての IBM Rational 製品を同じディレクトリにインストールする必要があります。Rational 製品を既にコンピュータにインストールしてある場合は、セットアップ ウィザードによって、その他の Rational 製品も同じディレクトリにインストールされます。
- Windows 9.x では、Rational ソフトウェアをネットワーク上にインストールしないでください。インストール時に、オペレーティング システムによってロックされているファイルを、コンピュータを再起動してインストールしなければならないことがあります。この場合、コンピュータを再起動することで、これらのファイルのロックは解除され、再ロックされる前にファイルを上書きできるようになります。ネットワーク接続は確立されていないため、Rational ソフトウェアをネットワーク上にインストールすると、このアクションが妨げられます。
- レジストリとシステム ディレクトリの最新のバックアップがあることを確認します。
- このリリース 2003.06.13 をマルチプロセッサ マシン上にインストールする場合は、ソフトウェアをインストールする前にその他の処理を使用不可にします。その他のプロセッサを使用不可にする方法については、コンピュータの製造メーカーに問い合わせてください。
- Microsoft Windows 上で動作するユーザー インターフェイス マネージャやデスクトップ環境をすべて終了します。

## レジストリ サイズ

インストール中に次のシステム エラーが発生した場合は、指示に従ってください。  
 「レジストリの最大サイズが小さすぎます。Windows を正常に稼働させるために、レジストリの最大サイズを増やしてください。詳しくは [ヘルプ] を参照してください。」

## インストールの中断

インストールを途中で中断すると、コンピュータが不安定な状態になります。インストール中にセットアップ ウィザードのウィンドウを閉じようとする、インストールを途中で終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

## [カスタム セットアップ] ページの使用法

製品をインストール CD からインストールする場合、IBM Web ダウンロード パッケージからインストールする場合、またはリリース領域からのインストール時に設定をカスタマイズする場合に、製品に対応する適切なサーバー機能をインストールするには、表 22 を参照してください。

**[カスタム セットアップ]** ページには、インストールする製品の機能が一覧表示されます。Rational Suite 製品の機能リストには、IBM Rational 単体製品が含まれます。**[カスタム セットアップ]** ページを表示する方法については、67 ページの『CD または Web ダウンロードからの IBM Rational 製品のインストール』の手順 9 (68 ページ)を参照してください。

**注:** ディスク容量の要件については、5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。[カスタム セットアップ] ページに表示されている数字は無視してください。また、そのページの [Space] ボタンは使用しないでください。

表 22. セットアップ ウィザードでのサーバーのカスタム セットアップ

インストールする製品	製品の選択	カスタム オプション	メモ
Rational Suite Edition	IBM Rational Suite	選択した Suite エディションに含まれる製品が表示されます。たとえば ClearQuest を選択すると、ClearQuest 管理ツール、Web サーバーなどが表示されます。	<ul style="list-style-type: none"><li>ClearCase LT サーバーはインストールされません。</li><li>Rational Suite の各製品に対して、[カスタム オプション] 列に表示されている機能をインストールできます。</li></ul>
ClearCase LT サーバー	ClearCase LT	<ul style="list-style-type: none"><li>ClearCase Microsoft Visual Studio.NET</li><li>Web サーバー</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li><b>CD-ROM または Web からインストールする場合:</b> [クライアント/サーバー] ページで、ClearCase LT サーバーに対するサーバーとクライアント ソフトウェアのオプションを選択します。</li><li><b>リリース領域を作成する場合:</b> [クライアント/サーバー] ページの [Siteprep ClearCase Server] を選択します。</li></ul>
ClearQuest 管理ツール	ClearQuest	管理ツール	ClearQuest の構成を計画する場合は、24 ページの『ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストールの準備』を参照してください。その他の ClearQuest の機能は必要ありません。

表 22. セットアップ ウィザードでのサーバーのカスタム セットアップ (続き)

インストールする製品	製品の選択	カスタム オプション	メモ
ClearQuest MultiSite 管理ツール	ClearQuest	MultiSite 管理ツール	ClearQuest の構成を計画する場合は、24 ページの『ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストールの準備』を参照してください。その他の ClearQuest の機能は必要ありません。
ClearQuest データベース	SQL Anywhere 8.0.2	メモを参照してください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• セットアップ ウィザードの [製品の選択] ページで、[Rational ClearQuest] を選択しないでください。SQL Anywhere は別の製品としてインストールしてください。</li> <li>• ほかの製造元データベース ソフトウェアをインストールする場合は、データベース製造元のマニュアルを参照してください。</li> <li>• 製造元データベースをインストールする場合、ClearQuest の機能は必要ありません。</li> </ul>
ClearQuest MultiSite	Rational Shipping Server	メモを参照してください。	ClearQuest の構成を計画する場合は、24 ページの『ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストールの準備』を参照してください。その他の ClearQuest の機能は必要ありません。
New ClearQuest Web	ClearQuest	ClearQuest Server と ClearQuest Web Application	New ClearQuest Web の構成を計画する場合は、『IBM Rational New ClearQuest Web インストールガイド』を参照してください。
ManualTest Web Execution	すべての Rational Suite、Robot、TeamTest、TestManager	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Web サーバー コンポーネント</li> <li>• Rational ManualTest Web Execution</li> </ul>	ほかの IBM Rational テスト製品をサーバーにインストールする必要はありません。ほかのすべての機能をクリアできます。
ProjectConsole ソフトウェア	すべての Rational Suite	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ProjectConsole の Web Server Components (Report Server と Data Collection Agent ソフトウェアを含む)</li> <li>• ProjectConsole の Report Server と Data Collection Agent (ほかのエージェントを追加する場合は、このオプションを選択)</li> <li>• ProjectConsole の Template Builder</li> </ul>	<p>ProjectConsole はすべての Rational Suite 製品に含まれています。</p> <p>Rational Suite のリリース領域を作成する場合は、ProjectConsole Web サーバー コンポーネントを選択しないでください。それらを選択すると、そのリリース領域からインストールするすべてのユーザーのコンピュータに ProjectConsole Web サーバー コンポーネント (および Rational Web Platform) ソフトウェアがロードされ、実行されます。</p>
RequisitePro データベース	RequisitePro	<ul style="list-style-type: none"> <li>• データベースの設定</li> <li>• サンプル プロジェクト</li> </ul>	RequisitePro をクライアントにインストールする場合は、Database Setup をインストールする必要はありません。

表 22. セットアップ ウィザードでのサーバーのカスタム セットアップ (続き)

インストールする製品	製品の選択	カスタム オプション	メモ
RequisiteWeb	RequisitePro	<ul style="list-style-type: none"> <li>Web サーバー コンポーネント</li> <li>Rational RequisiteWeb</li> </ul>	既に JIntegra をインストールしたコンピュータには、RequisiteWeb をインストールしないでください。

## IBM Rational ライセンス サーバーの指定

フローティング ライセンスを使用する場合は、セットアップ ウィザードでライセンス サーバー名を入力できます。リリース領域からのインストールや、サイレントインストールの実行をユーザーが行う場合は、管理者がライセンス サーバー名を入力します。製品の使用にライセンス キーが必要であるにもかかわらず、サーバー名を指定しなかった場合は、インストール処理の最後に License Key Administrator (LKAD) が開始されます。

## CD または Web ダウンロードからの IBM Rational 製品のインストール

この項では、IBM Rational Solutions for Windows CD-ROM または IBM Web サイトからダウンロードしたソフトウェア パッケージを使用した Rational 製品の標準インストールについて説明します。展開方法に関わらず、セットアップ ウィザードの指示に従って、ソフトウェアをインストールします。ClearCase LT または ClearQuest の評価版をインストールするには、21 ページの『評価目的での ClearCase LT のインストール』または34 ページの『評価用 IBM Rational ClearQuest のインストール』を参照してください。

1. ローカル コンピュータに対する管理者権限を持つユーザーとしてログインします。
2. IBM Rational Solutions for Windows Disc 1 をコンピュータの CD-ROM ドライブに挿入します。Download Director または zip ファイルを使用してソフトウェアをダウンロードした場合は、Download Director または zip ファイルのいずれかからファイルを抽出した後に Setup.exe をクリックします。

セットアップ ウィザードが自動的に起動します。

セットアップ ウィザードが自動的に起動されない場合は、Windows の [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「cd\_drive:¥Setup.exe」と入力します。cd\_drive は CD-ROM ドライブのドライブ文字です。

3. セットアップ ウィザードの [開始 (Welcome)] ページが表示されます。[次へ] をクリックするとインストールが開始され、次の画面に進みます。
4. [製品の選択] ページに、インストールできるすべての製品が一覧表示されます。インストールする製品を選択します。
5. [展開方法] ページの [CD イメージからデスクトップ環境へのインストール] をオンにします。

6. ClearCase LT をインストールする場合は、[クライアント/サーバー] ページが表示されます。クライアント上のクライアント ソフトウェアは、サーバーとクライアント ソフトウェアをインストールして設定するまで動作しません。
  - サーバー ソフトウェアをインストールして設定する場合は、[サーバーとクライアント ソフトウェアをインストールする] をオンにします。
  - クライアント ソフトウェアをインストールする場合は、[クライアント ソフトウェアのみをインストールする] をオンにします。
7. [使用許諾契約] ページで、IBM Rational の使用許諾契約に同意するかどうかを選択します。
  - 使用許諾契約に同意すると、インストール ウィザードが続行します。
  - 使用許諾契約に同意しない場合は、[キャンセル] をクリックしてから [完了] をクリックし、セットアップ ウィザードを終了します。コンピュータへのインストールを変更する方法については、83 ページの『製品インストールのキャンセル』を参照してください。
8. [インストール先のフォルダ] ページで、IBM Rational 製品をインストールするディレクトリを指定します。インストール先を変更する場合は、[変更] をクリックします。

**注:** インストール ウィザードでは、すべての IBM Rational 製品を同じディレクトリにインストールする必要があります。

9. [カスタム セットアップ] ページに、ソフトウェアのインストールに対して設定された機能オプションが表示されます。このページに表示されたデフォルトの標準機能をそのまま使用することも、インストールをカスタマイズすることもできます。インストールする製品の機能については、65 ページの『[カスタム セットアップ] ページの使用法』の表を参照してください。

機能をクリアする場合、または新しい機能を選択する場合は、[ヘルプ] をクリックします。

**注:** ディスク容量の要件については、5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。[カスタム セットアップ] ページに表示されている数字は無視してください。また、そのページの [Space] ボタンは使用しないでください。

10. 選択した製品に応じて、ウィザードに 1 つまたは複数のカスタム構成のページが表示されます。セットアップ ウィザードのこのセクションの説明を参照するには、[ヘルプ] をクリックします。
  - ウィザードの各ページで、必要な情報を入力します (すべての必須入力情報はウィザードの左パネルに赤点付きで表示されます)。
  - ページを移動するには、[次へ] をクリックしてページを順に参照するか、左側のペインのページ タイトルをクリックして目的のページに直接アクセスします。

最後のページの設定が完了したら、[完了] をクリックします。

11. インストールを開始するには、[プログラムをインストールする準備ができました] ページの [インストール] をクリックします。
12. セットアップ ウィザードでコンピュータの再起動が必要な場合は、[Windows の再起動] ページが開きます。IBM Rational セットアップ プログラムの実行中

に、インストールに必要なファイルが使用中だった場合や、コンピュータに共有コンポーネントをインストール必要がある場合は、コンピュータの再起動が必要になる可能性があります。

[再起動する] または [再起動しない] を選択します。[再起動しない] を選択した場合、Windows を再起動しないとインストールが完了できないという内容のメッセージが表示されます。

Windows の再起動後、インストール プロセスの残りの部分が自動的に開始します。

13. [セットアップが完了しました] ページが開いたら、readme ファイルに書かれている新機能と既知の問題に関する最新情報を確認することをお勧めします。これらの情報は、IBM developerWorks の Web ページでも参照できます。[完了] をクリックし、インストールを終了します。

---

## リリース領域とサイト デフォルト ファイルの作成

リリース領域には、サイト デフォルト ファイルと、以降のインストールで使われるすべてのファイルが保存されています。たとえば、リリース領域のセットアップの一環として、クライアント ソフトウェア、ライセンス サーバーなどの情報を指定します。この情報はサイト デフォルト ファイルに保存され、ClearCase LT、ClearQuest などの IBM Rational 製品がクライアントにインストールされるときに使用されます。

サイト デフォルト ファイルを作成するには、次の 2 つの方法があります。どちらの方法を使用しても、ネットワーク上の共有設定されたディレクトリに製品ファイルのディスク イメージが作成されます。第 1 の方法 (エンタープライズ レベルでの使用向けに展開) では、リリース領域を作成します。第 2 の方法 (SitePrep ウィザード) では、リリース領域を作成しません。また、この方法を使用して、サイト デフォルト ファイルの作成後に、コンピュータに製品をインストールします。

- IBM Rational Solutions for Windows CD-ROM でセットアップ ウィザードを実行するか、IBM Download Director またはパッケージ zip ファイルのいずれかからファイルを抽出した後に Setup.exe をクリックします。詳しくは、70 ページの『セットアップ ウィザードを使用したリリース領域とサイト デフォルトファイルの作成』を参照してください。

**注:** CD-ROM からリリース領域を作成する場合は、2 番目の CD-ROM のコピーが完了した後に最初の CD-ROM を入れ替えなければならない場合があります。

- SitePrep ウィザードを複数回実行して、サイト デフォルト ファイルを複数作成します。詳しくは、73 ページの『複数の sitedef ファイルを作成する SitePrep ウィザードの実行』を参照してください。

**注:** セットアップ ウィザードの [エンタープライズ レベルでの使用向けに展開] オプションや SitePrep ウィザードは、Windows 9x のコンピュータ上では使用しないでください。Windows 9x システムでは、サイト デフォルト ファイルやリリース領域を作成できません。

## セットアップ ウィザードを使用したリリース領域とサイト デフォルトファイルの作成

この項では、セットアップ ウィザードを使用したリリース領域の作成とサイト デフォルト ファイルの保存方法について説明します。サイト デフォルト ファイルには、CQdevelopers.dat など、意味のある名前を付けることができます。名前を指定しなかった場合、デフォルトのファイル名は sitedefs.dat になります。

sitedefs.developers.dat のように、追加のサフィックスを名前の後ろに付けないようにしてください。

エンタープライズ レベルのインストールの場合、リリース領域の最大ルート パスは、約 30 ～ 35 文字です。この文字の長さ制限は、インストールする製品と、各インストールにおけるファイルのパスの長さによって異なります。また、ルート パスが最大値を超えた場合に表示されるエラー メッセージも異なる場合があります。

このリリース領域を使用して、IBM Rational のサーバーをインストールできます。クライアント ユーザーはこのリリース領域を使用して、IBM Rational 製品を自分のデスクトップにインストールできます。

リリース領域にサービス リリースを適用する場合は、次の手順の終わりにある指示を参照してください。

1. リリース領域ディレクトリを共有に設定します。そのディレクトリがあるドライブが既に共有に設定されていても、ディレクトリ自体を共有に設定にすると、製品リリース領域を簡単に検索できるようになります。
  - a. Windows エクスプローラでネットワークのリリース領域を右クリックし、ディレクトリのショートカット メニューを表示します。
  - b. [共有] をクリックします。[プロパティ] ページが表示されます。
  - c. [共有] タブの [このフォルダを共有する] をオンにし、意味のある共有名 (たとえば、ClearQuest 6.0 Release Area など) を入力します。

**注:** セットアップ ウィザードでは、リリース領域がネットワーク共有として作成されている場合のみ、サイト デフォルト ファイルのショートカットを作成します。ショートカットは、sitedefs または CQdevelopers のようにサフィックス .dat のない名前で、リリース領域に表示されます。

2. ローカル コンピュータに対する管理者権限を持つユーザーとしてログインします。
3. IBM Rational Solutions for Windows Disc 1 をコンピュータの CD-ROM ドライブに挿入します。Download Director または zip ファイルを使用してソフトウェアをダウンロードした場合は、Download Director または zip ファイルのいずれかからファイルを抽出した後に Setup.exe をクリックします。

セットアップ ウィザードが自動的に起動します。

セットアップ ウィザードが自動的に起動されない場合は、Windows の [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「cd\_drive:¥Setup.exe」と入力します。cd\_drive は CD-ROM ドライブのドライブ文字です。

セットアップ ウィザードの指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

[次へ] をクリックしてページを開きます。

4. [製品の選択] ページに、インストールできるすべての製品が一覧表示されます。リリース領域を作成する製品を選択します。[次へ] をクリックします。
5. [展開方法] ページで [エンタープライズ レベルでの使用向けに展開] オプションをオンにします。[次へ] をクリックします。
6. 選択した製品に応じて、ウィザードに 1 つまたは複数のカスタム設定のページが表示されます。ウィザードのこのセクションの説明を参照するには、[ヘルプ] をクリックします。

ウィザードの各ページで、必要な情報を入力します (すべての必須入力情報はウィザードの左パネルに赤点付きで表示されます)。

ページを移動するには、[次へ] をクリックしてページを順に参照するか、左側のペインのページ タイトルをクリックして目的のページに直接アクセスします。

7. [完了] ページでは、[説明] ページと [リリース領域の作成] ページのすべての情報を設定するように要求するメッセージが表示されます。[インストールの開始] の設定は任意です。
  - a. [説明] ページで、ユーザーに関する説明を入力します。終了したら、[次へ] をクリックします。
  - b. [リリース領域の作成] ページで、リリース領域の場所と作成するサイト デフォルト ファイル (\*.dat) の名前を入力します。

**注:** マルチバイト文字は使用しないでください。

- ここで入力したサイト デフォルトに基づいてソフトウェアをコンピュータにインストールする場合は、[次へ] をクリックし、[インストールの開始] ページに進みます。これらの設定値を使用して [インストールの開始] を選択します。サイト デフォルト情報をファイルに保存し、コンピュータへのインストールを続行します。[完了] をクリックしてから [次へ] をクリックします。

72 ページの『コンピュータへの製品のインストール』に進んで、残りの手順を実行します。

- リリース領域を作成するだけの場合は、[完了] をクリックし [次へ] をクリックして、サイト デフォルト ファイルを作成します。
8. [セットアップが完了しました] ページが開いたら、readme ファイルに書かれている新機能と既知の問題に関する最新情報を確認することをお勧めします。これらの情報は、IBM developerWorks の Web ページでも参照できます。[完了] をクリックし、リリース領域のインストールを終了します。

このリリース領域からの製品のインストール方法の詳細については、74 ページの『リリース領域からの IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。

**注:** ご使用の環境で Rational の製品にサービス リリースを適用する場合は、ユーザーがデスクトップに初めて製品をインストールするときと同じように、リリース領域を再作成する必要があります。この新しいリリース領域は、次のことに使用できます。

- Rational デスクトップ製品を更新する
- Rational デスクトップ製品をインストールする

この新しいリリース領域の作成後、「古い」リリース領域は使用不可にすることをお勧めします。これによって、前のバージョンの Rational 製品へのアクセスを回避しつつ、前のバージョンの Rational 製品へのシステムの復元を必要とするユーザーがいる場合にはアクセスを許可することができます。

## サイト デフォルト ファイルへのインストール後のコマンドの追加

インストール後のコマンドを `sitedefs.dat` ファイルに追加することにより、ユーザーが ClearQuest メンテナンス ツールを介して既存のデータベース接続を復元しなくてもよいように適切なパラメータで `ClearQuest installutil` プログラムを実行することができます。`sitedefs.dat` ファイルのプロパティ セクションに次のコマンドを入力する必要があります: `POST_INSTALL_CMD = [installdir]¥ClearQuest¥installutil.exe clientregisterschemarepo -dbset [dbsetname] [VendorString] [Server] [DatabaseName] [ReadOnlyLogin] [ReadOnlyPassword] ""`

各パラメータの内容は次のとおりです。

- `installdir` は、製品をインストールするために Site Preparation ツールに入力した場所です。
- `dbsetname` は、ClearQuest メンテナンス ツールを開始したときに表示される名前です。
- `VendorString` はデータベースのタイプです (Access や SQL\_Server など)。
- `Server` はデータベース サーバーの名前です。
- `DatabaseName` はデータベースの名前です。
- `ReadOnlyLogin` はデータベースの読み取り専用ログイン IDです。
- `ReadOnlyPassword` は、暗号化されていないデータベースの読み取り専用パスワードです。

前述のデータのほとんどは `cqprofile.ini` で入手できます。読み取り専用のログインパラメータとパスワード パラメータをこのコマンドで使用して、ユーザーの権限を ClearQuest データベース内の権限に設定します。パスワードは暗号化せずに入力する必要があります。これは、`cqprofile.ini` ファイルでは暗号化されて表示されます。コマンドの最後のパラメータ ("" ) は入力する必要がありますが、これは将来の利用のために予約されています。

## コンピュータへの製品のインストール

リリース領域を作成する場合は、デスクトップに製品をインストールするオプションがあります。

1. [インストールの開始] ページで、[Launch installation after saving site defaults information] をクリックし、[完了]、[次へ] の順にクリックします。
2. [Rational Setup Wizard Completed] ページが表示されたら、[完了] をクリックして、リリース領域のインストールを完了します。
3. インストールが開始されたら、[次へ] をクリックします。[使用許諾契約] ページで、IBM Rational の使用許諾契約に同意するかどうかを選択します。
  - 使用許諾契約に同意すると、セットアップ ウィザードが続行します。

- 使用許諾契約に同意しない場合は、[キャンセル] をクリックしてから [完了] をクリックし、セットアップ ウィザードを終了します。コンピュータへのインストールを変更する方法については、83 ページの『製品インストールのキャンセル』を参照してください。
  - 4. [インストール先のフォルダ] を指定して [次へ] をクリックするか、[変更] をクリックしてインストール先を変更します。
  - 5. 以前に入力した [リリース領域の説明] が [サイトのデフォルト構成] ページに表示されます。設定したサイト デフォルトをコンピュータにインストールするかどうかを決定します。[標準構成を使用する] (設定済みのサイト デフォルト) または [独自のカスタム クライアント構成を作成する] をオンにします。
    - [独自のカスタム クライアント構成を作成する] をオンにした場合は、次の処理を実行します。
      - [カスタム セットアップ] ページに、選択する製品の機能が表示されます。詳しくは、65 ページの『[カスタム セットアップ] ページの使用法』を参照してください。
- 注:** ディスク容量の要件については、5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照してください。
- [カスタム セットアップ] ページに表示されている数字やページ上の [Space] ボタンで表示される数字を使用しないでください。
- [次へ] をクリックすると、既存のサイトのデフォルト値を変更できます。(サイトのデフォルト値に対する変更は、現在処理中のインストールにのみ適用されます)。値を変更したら、[完了] をクリックし、[インストール] をクリックして、インストールを開始します。
  - [標準構成を使用する] をオンにした場合は、既存のサイト デフォルト値の機能がインストールに使用されます。[次へ] をクリックし、[インストール] をクリックして、インストールを開始します。
6. セットアップ ウィザードでコンピュータの再起動が必要な場合は、[Windows の再起動] ページが開きます。セットアップ プログラムの実行中に、インストールに必要なファイルが使用中だった場合や、コンピュータに共有コンポーネントをインストール必要がある場合は、コンピュータの再起動が必要になる可能性があります。

[再起動する] または [再起動しない] を選択します。[再起動しない] を選択した場合、Windows を再起動しないとインストールが完了できないという内容のメッセージが表示されます。

Windows の再起動後、インストール プロセスの残りの部分が自動的に開始します。

7. [セットアップが完了しました] ページが開いたら、readme ファイルに書かれている新機能と既知の問題に関する最新情報を確認することをお勧めします。これらの情報は、IBM developerWorks の Web ページでも参照できます。[完了] をクリックし、インストールを終了します。

## 複数の sitedef ファイルを作成する SitePrep ウィザードの実行

サイトに複数のサイト デフォルト ファイルが必要になる場合があります。たとえば、データベース管理者のグループとクライアント ユーザー グループの 2 つのグ

ループの両方が ClearQuest を使用する環境で、グループ別のデフォルト設定 (ClearQuest の機能など) を使用して作業する必要がある場合は、グループごとに 1 つのサイト デフォルト ファイルを作成できます。

リリース領域に複数のサイト定義ファイルを作成するには

1. 70 ページの『セットアップ ウィザードを使用したリリース領域とサイト デフォルトファイルの作成』の手順に従って、1 つめのリリース領域を作成します。1 つめのユーザー グループに関連するサイト固有のパラメータを使用して、この領域をセットアップします。
2. [ファイル] メニューの [開く] をクリックするか、コマンド **siteprep.exe** <sitedefs.dat> を入力して、手順 1 で作成したサイト デフォルト ファイル (sitedefs.dat など) を選択します。SitePrep ウィザードで sitedefs.dat に設定された値が表示されます。両方のグループに適用される値はそのまま使用しますが、必要に応じて 2 つめのグループの値を変更します。

**注:** リリース領域の siteprep.exe をダブルクリックするか、サイト デフォルト ファイル名を指定しないでコマンド **siteprep.exe** を入力すると、SitePrep ウィザードが開始されますが、既存のサイト デフォルト ファイルに設定した値は表示されません。

3. [ファイル] メニューの [名前を付けて保存] をクリックし、新しいサイト デフォルト ファイルを保存します。新しいサイト デフォルト ファイルの名前とフォルダを入力します。
  - コマンド ラインでサイトの準備を開始し、サイト デフォルト ファイルに対するファイル名の引数を、たとえば sitedefs.dat と指定した場合は、[フォルダ] ボックスと [ファイル名] ボックスにこの情報が表示されます。変更したサイト デフォルト ファイルは、sitedefs\_cqclient.dat などの新しいファイル名を付けて保存できます。
  - ファイル名を事前に指定しなかった場合、[ファイル名] ボックスは空白になります。ファイル名として、リリース領域に現在存在していないファイル名を入力します。

**注:** 既存のサイト デフォルト ファイルの名前を入力した場合は、警告メッセージが表示されます。既存のファイルを上書きするか、別のファイル名を指定して、新しいサイト デフォルト ファイルを作成することができます。

必要に応じて、この方法で新しいサイト デフォルト ファイルを作成できます。

---

## リリース領域からの IBM Rational 製品のインストール

管理者が指定したリリース領域からユーザーが製品をインストールするときは、ほとんどの場合、インストール画面に表示されるデフォルトをそのまま使用します。デフォルトを使用しない場合は、変更する前に管理者に問い合わせてください。

**注:** リリース領域からアップグレードしている場合は、いくつかのダイアログに、新規インストールではなくアップグレードが表示されることがあります。コンピュータ上のすべての Rational 製品がバージョン 2003.06.13 に更新されたことを確認します。更新されたバージョン番号は、このアップグレードで製品の変更が適用されたかどうかに関わらず、すべての Rational 製品に表示されます。

リリース領域からのインストールの手順は、次のとおりです。

1. セットアップ ウィザードまたは SitePrep ウィザードを使用して、リリース領域に 1 つまたは複数のサイト デフォルト ファイルを作成します。ユーザーに、サイト デフォルト ファイルへのパスを提供するか、セットアップ ウィザードで作成したサイト デフォルト ファイルへのショートカットをクリックしてもらいます。この手順については、70 ページの『セットアップ ウィザードを使用したリリース領域とサイト デフォルトファイルの作成』を参照してください。
2. これで、ユーザーはコマンド ラインまたはショートカットからリリース領域にアクセスできるようになります。コマンド ラインまたはショートカットを使用して、セットアップ ウィザードをデスクトップで開始します。セットアップ ウィザードでは、サイト デフォルト ファイルの設定を使用して、製品をインストールします。
3. リリース領域から製品をインストールする場合、ユーザーは、管理者が設定した標準構成を使用することも、デスクトップに合わせて標準のクライアント構成をカスタマイズすることもできます。詳細については、次の項の手順を参照してください。

**注:** ユーザーがコマンド プロンプトで `siteprep.exe` のみを入力するか、`siteprep.exe` をクリックすると、セットアップ ウィザードは `sitedefs.dat` (デフォルトのサイト デフォルト ファイル名) の設定を使用します。`developers_cq.dat` などの別のサイト デフォルト ファイルを使用する場合は、ファイル名に `developers_cq.dat` を指定するか、`developers_cq` または `developers_cq.lnk` などの特定のショートカットをクリックして、ウィザードがこのファイルを使用するように指定します。

ユーザーが (サイト デフォルト ファイル名を指定しないで) `siteprep.exe` をクリックした場合、`sitedefs.dat` という名前のサイト デフォルト ファイルがリリース領域にないと、SitePrep ウィザードが開始され、新しいサイト デフォルト ファイルが作成されます。

## 標準構成の使用方法

以下の操作を行う前に、前の段落の概要情報をお読みください。ユーザーまたは管理者は、製品をリリース領域からインストールする前に、リリース領域とサイト デフォルト ファイルを作成する必要があります。

リリース領域からデフォルトの構成をインストールするには

1. ローカルの管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
2. 特定のサイト デフォルト ファイルの設定を使用して製品をインストールするには、コマンド ラインでサイト デフォルト ファイルの名前を指定するか、リリース領域で関連するサイト デフォルトのショートカットをクリックします。たとえば、**`sitedefs_cqclient.dat`** の設定を使用して ClearQuest をインストールする場合は、コンピュータのネットワーク ドライブを共有リリース領域にマッピングします。次に、次のいずれかの処理を実行します。
  - Windows の DOS プロンプトで **`cd`** コマンドを入力し、リリース領域のルート ディレクトリに移動します。次に、たとえば `setup.exe sitedefs_cqclient.dat` と入力します。

- Windows エクスプローラ で、マッピングされたドライブを展開し、`sitedefs_cqclient.lnk` や `sitedefs_cqclient` などのショートカットをクリックして起動します。
3. IBM Rational セットアップ ウィザードの指示に従って、ソフトウェアをインストールします。各ページで [次へ] をクリックし、次のページを開きます。詳細については、[ヘルプ] をクリックしてください。

[使用許諾契約] ページに、IBM Rational Software の使用許諾契約が表示されます。

- 使用許諾契約に同意して [次へ] をクリックすると、インストールが続行されます。
- 使用許諾契約に同意しない場合は、インストールを続行できません。[キャンセル] をクリックすると、インストールが終了します。この場合、システムは変更されません。システムは、Rational セットアップ ウィザードの起動前の状態に戻ります。

**注:** 適切なバージョンの Windows インストーラ ソフトウェアがコンピュータにインストールされていない場合は、セットアップ ウィザードを使用してインストールできます。インストールをキャンセルしても、Windows インストーラの更新バージョンは削除されません。コンピュータの再起動が必要な場合もあります。

4. [インストール先のフォルダ] ページに、デフォルトのインストール先フォルダが表示されます。別のインストール先フォルダを選択する場合は、[変更] をクリックします。[次へ] をクリックします。
5. [サイトのデフォルト構成] ページで、[標準構成を使用する] をオンにします。製品に対するデフォルトの機能と既存のサイトのデフォルト値が、クライアントのインストールに使用されます。[次へ] をクリックします。
6. [インストール] をクリックし、クライアント デスクトップでインストールを開始します。
7. セットアップ ウィザードでコンピュータの再起動が必要な場合は、[Windows の再起動] ページが開きます。Rational セットアップ ウィザードの実行中に、インストールに必要なファイルが使用中だった場合や、コンピュータに共有コンポーネントをインストールする必要がある場合は、コンピュータの再起動が必要になる可能性があります。

[再起動する] または [再起動しない] を選択します。[再起動しない] を選択した場合、Windows を再起動しないとインストールが完了できないという内容のメッセージが表示されます。

Windows の再起動後、インストール プロセスの残りの部分が開始します。

8. [セットアップが完了しました] ページが開いたら、`readme` ファイルに書かれている新機能と既知の問題に関する最新情報を確認することをお勧めします。これらの情報は、IBM developerWorks の Web ページでも参照できます。[完了] をクリックし、インストールを終了します。

## ユーザー独自の構成のカスタマイズ

以下の手順を実行する前に、この項で説明している製品のインストールの概要を読んでください。ユーザーまたは管理者は、製品をリリース領域からインストールする前に、リリース領域とサイト デフォルト ファイルを作成する必要があります。

特定のコンピュータに合わせて構成をカスタマイズするには

1. ローカルの管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
  2. 特定のサイト デフォルト ファイルの設定を使用して IBM Rational 製品をインストールするには、コマンド ラインでサイト デフォルト ファイルの名前を指定するか、リリース領域で関連するサイト デフォルトのショートカットをクリックします。たとえば、`sitedefs_cqclient.dat` の設定を使用して ClearQuest をインストールする場合は、コンピュータのネットワーク ドライブを共有リリース領域にマッピングします。次に、次のいずれかの処理を実行します。
    - Windows の DOS プロンプトで `cd` コマンドを入力し、リリース領域のルート ディレクトリに移動します。次に、たとえば `setup.exe sitedefs_cqclient.dat` と入力します。
    - Windows エクスプローラ で、マッピングされたドライブを展開し、`sitedefs_cqclient.lnk` や `sitedefs_cqclient` などのショートカットをクリックして起動します。
  3. セットアップ ウィザードが起動します。ウィザードの指示に従って、ソフトウェアをインストールします。各ページで [次へ] をクリックし、次のページを開きます。 詳細については、[ヘルプ] をクリックしてください。
  4. [使用許諾契約] ページに、IBM Rational Software の使用許諾契約が表示されます。
    - 使用許諾契約に同意して [次へ] をクリックすると、インストールが続行されます。
    - 使用許諾契約に同意しない場合は、インストールを続行できません。[キャンセル] をクリックすると、インストールが終了します。 この場合、システムは変更されません。システムは、セットアップ ウィザードの起動前の状態に戻ります。
- 注:** 適切なバージョンの Windows インストーラ ソフトウェアがコンピュータにインストールされていない場合は、セットアップ ウィザードを使用してインストールできます。インストールをキャンセルしても、Windows インストーラの更新バージョンは削除されません。コンピュータの再起動が必要な場合もあります。
5. [インストール先のフォルダ] ページに、デフォルトのインストール先フォルダが表示されます。別のインストール先フォルダを選択する場合は、[変更] をクリックします。
  6. [サイトのデフォルト構成] ページで、[カスタム クライアント構成を作成する] をオンにします。
    - [カスタム セットアップ] ページに、選択する製品の機能が表示されます。製品の機能の詳細については、「[カスタム セットアップ] ページの使用法」を参照してください。

**注:** ディスク容量の要件については、本書の「インストール前に必要な作業」の章で、「システムとソフトウェアの要件」の表を参照してください。  
[カスタム セットアップ] ページに表示されている数字やページ上の [Space] ボタンで表示される数字を使用しないでください。

- [次へ] をクリックすると、既存のサイトのデフォルト値を変更できます。(サイトのデフォルト値に対する変更は、現在処理中のインストールにのみ適用されます)。設定が終了したら、[Done] をクリックします。
7. [インストール] をクリックし、クライアント デスクトップでインストールを開始します。
  8. セットアップ ウィザードでコンピュータの再起動が必要な場合は、[Windows の再起動] ページが開きます。Rational セットアップ ウィザードの実行中に、インストールに必要なファイルが使用中だった場合や、コンピュータに共有コンポーネントをインストール必要がある場合は、コンピュータの再起動が必要になる可能性があります。

[再起動する] または [再起動しない] を選択します。[再起動しない] を選択した場合、Windows を再起動しないとインストールが完了できないという内容のメッセージが表示されます。

Windows の再起動後、インストール プロセスの残りの部分が自動的に開始します。

9. [セットアップが完了しました] ページが開いたら、readme ファイルに書かれている新機能と既知の問題に関する最新情報を確認することをお勧めします。これらの情報は、IBM developerWorks の Web ページでも参照できます。[完了] をクリックし、インストールを終了します。

---

## IBM Rational 製品のサイレント インストールのセットアップ

サイレント インストールは、Rational 製品をユーザーの介入なしにクライアント コンピュータにインストールする方法です。この方法を使用すると、管理者が製品を展開する場合の作業量が大幅に削減されます。また、サーバーとデスクトップのそれぞれに適切なソフトウェア構成でインストールできます。

この項では、サイレント インストールをセットアップし実行する方法について説明します。基本的な手順を以下のリストに示します。

1. サイト デフォルト ファイルとリリース領域 (オプション) をネットワーク上に作成します。
  - a. セットアップ ウィザードで [エンタープライズ レベルでの使用向けに展開] オプションをオンにして、ユーザーに製品を展開するためのサイト デフォルト ファイルとリリース領域を作成します。手順については、69 ページの『リリース領域とサイト デフォルト ファイルの作成』を参照してください。

CD-ROM イメージ内または IBM ダウンロード パッケージの siteprep.exe をダブルクリック (またはコマンド ラインで siteprep.exe を実行) して SitePrep ウィザードを起動し、リリース領域を作成しないでサイト デフォルト ファイルを作成することもできます。

- b. ユーザーごとにサイト デフォルト ファイルをカスタマイズできます。詳しくは、73 ページの『複数の sitedef ファイルを作成する SitePrep ウィザードの実行』を参照してください。
2. **setup.exe /g** コマンドを使用してセットアップ ウィザードを起動し、サイト デフォルト ファイルをテストします。インストールの処理中、インストール画面はコンピュータ上に表示されません (コマンドの構文については、79 ページの『サイレント インストールの実行』を参照。)

このファイルを使用して、Rational セットアップ ウィザードがコンピュータの特定のディレクトリにプログラム ファイルをインストールします。コンピュータの再起動が必要な場合は、自動的に再起動されます。システムの再起動後は、手動でログオンする必要があります。その後、インストーラが再起動し、終了します。インストールの終了時にも、インストールの完了画面は表示されません。

管理者がサイト デフォルト ファイルでライセンス サーバーを指定しなかった場合、管理者またはユーザーはセットアップ ウィザードの終了後に手動でライセンスを設定しなければならない場合があります。

3. ユーザーがコンピュータ上でサイレント インストールを実行できるように、ユーザーに次の情報を提供します。
- リリース領域にあるサイト デフォルト ファイルと **setup.exe** 実行可能ファイルへのパス、またはサイト デフォルト ファイルへのショートカット (ショートカットには **.dat** というサフィックスは付きません)
  - サイレント インストールのコマンド
  - インストール ディレクトリ (セットアップ ウィザードがユーザーのデスクトップにファイルをインストールする場所)。
  - ライセンス キー情報 (必要な場合)。
  - ユーザーがすべての IBM Rational 製品をデスクトップから削除したことを必ず確認してください。サイレント インストールを実行するユーザーには、以前のバージョンの IBM Rational 製品を削除するように通知するメッセージは表示されません。すべての製品を削除するまで、インストールは実行されません。メッセージはユーザーのインストール ログ ファイルに保存されます。インストール処理が失敗した場合は、ログ ファイルを確認してください。ログ ファイルの詳細については、63 ページの『Rational\_install ログ』を参照してください。

注: setup.exe コマンド ライン パラメータの詳細については、84 ページの『コマンド ライン構文』を参照するか、「**setup / ?**」と入力してください。

## サイレント インストールの実行

サイト デフォルト ファイルを作成後、次のコマンドを入力してファイルをテストします。<local drive>:¥ は、マッピングされたドライブまたは **setup.exe**へのパスです。setup.exe とコマンド **/g** の間、**/g** と **sitedefs.dat** ファイルへのパス **C:¥sitedefs.dat** との間にはスペースが必要です。

<local drive>:¥**setup.exe /g** <C:¥sitedefs.dat>

**注:** サイレント インストールを実行するときに、ファイルをコンピュータ上のディスク ドライブにマッピングしていない場合は、`setup.exe` と `<sitedefs.dat>` の両方に対して絶対パス名を指定する必要があります。

デフォルトで、インストール ログ ファイル (`rational_install.log`) がコンピュータの TEMP ディレクトリに作成されます。Temp ディレクトリを検索するには、コマンド プロンプトを起動し、「**echo %TEMP%**」と入力します。ディレクトリの場所は、コンピュータに設定された `system` 環境変数により異なります。

**注:** セットアップ ウィザードでデスクトップ上のディスク容量の不足が検出された場合、ウィザードはインストールをキャンセルし、TEMP ディレクトリ内の `Rational_install.log` にエラーを記録します。

ローカル コンピュータの管理者グループのメンバーである Windows ドメイン アカウントにログオンしていない場合は、製品のインストールが失敗します。ユーザーが適切な権限でログインしていないと、一部のセットアップ ウィザード コンポーネントはインストールされません。このコンポーネントは、ログ情報をインストール ログ ファイルに記録しません。

---

## サイレント インストールのキャンセル

サイレント インストールをキャンセルするコマンドはありません。

---

## 製品を削除するためのコマンド行の使用法

現在のリリース (2003.06.10) の Rational 製品を削除するには、次のコマンドを使用します。これらのコマンドを実行しても、以前のバージョンの Rational 製品は削除されません。

`<local drive>:¥msiexec.exe /X <path to product>.msi /qn`

変数 `<local drive>:¥` は、マッピングされたドライブまたは `msiexec.exe` へのパスにする必要があります。変数 `<path to product>.msi` (`ClearQuest.msi` など) は、インストールの処理中などに ClearQuest によって使用されるネットワーク全体のリリース領域にある MSI ファイルへのパスです。MSI ファイルは、リリース領域内の Setup ディレクトリにあります。コマンド `/x` はアンインストール処理を示し、`/qn` はアンインストールの処理中にユーザー インターフェイスが表示されないことを示します。

**注:** サイレント アンインストールを実行する場合、ファイルをコンピュータ上のディスク ドライブにマッピングしていない場合は、`msiexec.exe` と `<path to product>.msi` の両方に対して絶対パス名を指定する必要があります。

`msiexec.exe` コマンドと関連するコマンド ライン オプションの詳細については、<http://www.microsoft.com/windows/reskits/webresources/default.asp> サイトで Microsoft Windows Installer Platform Software Developer's Kit のマニュアルを参照してください。ただし、このサイトは英語のみでのご利用となります。

---

## インストール後のコマンドの使用法

**POST\_INSTALL\_CMD** **POST\_INSTALL\_CMD** は、winword.exe または cscript.exe などのプロセスや実行可能ファイルを実行するために使用します。このプロパティを設定すると、インストールが完了した後に指定のコマンドが実行されます。そのコマンドに引数を含めるには、**POST\_INSTALL\_CMD** のほかに **POST\_INSTALL\_CMD\_ARGS** も使用します。

この後に続く 2 つの項に説明される手順に従う前に、これらの要件をお読みください。

- **POST\_INSTALL\_CMD\_ARGS** プロパティに arguments ファイルを入力します。
- arguments ファイルが IBM Rational ディレクトリのサブフォルダ内にある場合は、そのファイルへのパスを含めます。

### コマンド ラインでの post\_install\_cmd の実行

コマンド ラインでコマンドを指定するには、setup.exe の /V コマンドを使用します。

例:

```
setup.exe /V POST_INSTALL_CMD=<notepad.exe>
```

```
POST_INSTALL_CMD_ARGS=<myfile.txt>
```

### サイトのデフォルトが指定されたファイルの変更によるコマンドの実行

.dat ファイルにコマンドを指定するには、ファイルの [プロパティ] セクションでプロパティを追加または変更します。[プロパティ] セクションがない場合は、ファイルにセクションを追加してください。.dat ファイルからインストール後のコマンドを実行する場合は、この実行可能ファイルのフル パス名を指定してください。

例:

...

...

[プロパティ]

```
POST_INSTALL_CMD=<notepad.exe>
```

```
POST_INSTALL_CMD_ARGS=<myfile.txt>
```

...

...

---

## インストール後のタスク

次の項で説明する内容は、すべての展開タイプに適用されます。

## ライセンス

インストールの完了後に License Key Administrator (LKAD) が開始されなかった場合、製品はライセンスされているか、ライセンスの必要がないかのどちらかです。82 ページの『製品のインストール チェックリスト』に進みます。

製品のインストールの最後に LKAD が起動する理由を、以下の表に示します。

表 23. LKAD の起動

展開タイプ	理由
CD-ROM イメージまたは Web ダウンロードからデスクトップへのインストール	<ul style="list-style-type: none"><li>• セットアップ ウィザードで IBM Rational ライセンス サーバーを指定しなかったか、</li><li>• ノードロック ライセンス キーが必要な製品である。</li></ul>
リリース領域からのインストール (エンタープライズ レベルでの使用向けに展開)	<ul style="list-style-type: none"><li>• サイト デフォルト ファイルの作成時に IBM Rational ライセンス サーバー名を指定しなかった。または</li><li>• ノードロック ライセンス キーが必要な製品である。</li></ul>
サイレント インストール	<ul style="list-style-type: none"><li>• サイト デフォルト ファイルの作成時に IBM Rational ライセンス サーバー名を指定しなかった。</li><li>• ノードロック ライセンス キーが必要な製品である。</li></ul>

LKAD が起動された場合は、管理者またはユーザーが次のタスクを実行して製品のライセンスを取得する必要があります。

表 24. LKAD タスク

設定するライセンス キー	タスク	参照先。
フローティング ライセンス キー	LKAD で Rational ライセンス サーバーの名前を入力する。	<ul style="list-style-type: none"><li>• 53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』</li><li>• 『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』</li><li>• LKAD ヘルプ</li></ul>
ノードロック ライセンス キー	LKAD でノードロック ライセンス キーをインポートする。	<ul style="list-style-type: none"><li>• 53 ページの『第 2 章 IBM Rational 製品のライセンス』</li><li>• LKAD ヘルプ</li></ul>

## 製品のインストール チェックリスト

製品のインストール後すぐにインストール後のタスクを実行します。製品の設定が必要かどうか不明な場合は、1 ページの『第 1 章 インストール前に必要な作業』を参照して、製品のインストール チェックリストを探してください。

---

## 製品インストールのキャンセル

インストールの処理中または完了前に [キャンセル] をクリックした場合、システムは変更されません。システムは、セットアップ ウィザードの起動前の状態に戻ります。

**注:** 適切なバージョンの Windows インストーラ ソフトウェアがコンピュータにインストールされていない場合は、セットアップ ウィザードを使用してインストールできます。インストールをキャンセルしても、Windows インストーラの更新バージョンは削除されません。コンピュータの再起動が必要な場合もあります。

---

## 製品の再インストール (変更または修復)

Rational のインストールを修正または修復するには、[アプリケーションの追加と削除] を使用します。

**注:** 製品の修復インストールまたは変更インストールを行う前に、元のインストールのログを別の場所に保存するか、名前を変更する必要があります。このようにしないと、ログが上書きされます。

製品を削除する方法については、181 ページの『第 10 章 IBM Rational 製品の削除』を参照してください。

1. 管理者権限を持つユーザーとして、製品をインストールするローカル コンピュータにログインします。
2. [スタート] ボタンをクリックし、[設定] をポイントします。次に、[コントロール パネル] をクリックし、[アプリケーションの追加と削除] をクリックします。
3. IBM Rational 製品を選択して、[変更] をクリックします。
  - 変更: このオプションをオンにすると、インストールする製品と製品の機能を変更できます。セットアップ ウィザードで、機能を選択または選択解除するための [カスタム セットアップ] ページが表示されます。たとえば、ClearQuest MultiSite 管理ツールを ClearQuest クライアントのインストールに追加し、この機能なしでクライアントをインストールするとします。ClearQuest クライアントを再インストールするには、[カスタム セットアップ] ページでこの製品機能を選択解除し、ClearQuest クライアントを再インストールします。

[カスタム セットアップ] ページで [修正] をクリックしてから [次へ] をクリックし、機能を選択または選択解除します。[次へ] をクリックし、[インストール] をクリックして、インストールを開始します。

- 修復: このオプションをオンにすると、損傷したレジストリを修復したり、誤って削除した可能性があるファイルを置き換えたりすることができます。このオプションをオンにしても、完了していないインストールや失敗したインストールを修復することはできません。

**注:** [カスタム セットアップ] ページの [ディスク] ボタンをクリックすると、致命的なエラーが発生します。セットアップ ウィザードが修正操作を中止するのを防ぐには、[ディスク] ボタンをクリックしないでください。

修復を開始するには、[修復] をクリックしてから [次へ] をクリックし、[インストール] をクリックします。処理の最後に、修復のステータスが表示されます。

## コマンド ライン構文

この項では、setup.exe の構文について説明します。

表 25. コマンド ライン構文

Setup.exe コマンド パラメータ	説明
<b>setup</b>	IBM Rational セットアップ ウィザードを開始します。
<ローカル ドライブ>	setup.exe へのパスを指定します。
<b>/g</b>	サイレント インストール セッションを開始します。
<sitedefs.dat へのパス>	サイト デフォルト ファイルのパスを指定します。
<b>msiexec.exe /x</b>	サイレント アンインストール セッションを開始します。
<b>/qn</b>	処理中にユーザー インターフェイスを表示しないことを指定します。
<product>.msi へのパス	製品の MSI ファイルへのパスを指定します。MSI ファイルは、インストール処理中などに ClearQuest によって使用されます。MSI ファイルはリリース領域の Setup ディレクトリにあります。
<b>/l</b>	インストール ログ ファイルの名前と場所を指定します。デフォルトでは、Rational_install.log という名前のインストール アクティビティ ログは TEMP ディレクトリにあります。

たとえば、サイト デフォルト ファイルを作成するには、次のコマンドをコマンドラインで入力します。

```
<local drive>:\*setup <path to sitedefs.dat>
```

## Rational セットアップ ウィザードの警告とブロック

インストール処理中にブロックまたは警告が発生した場合、メッセージ全体を記憶していないときは、次の表で確認してください。

表 26. 警告とブロック

警告/ブロック	解決法
この製品を、サポートされていないオペレーティング システムにインストールしようとしています。	サポートされているオペレーティング システムにインストールしてください。IBM Rational 製品のリリース ノートを参照して、サポートされているオペレーティング システムとサービス パックのリストを確認してください。

表 26. 警告とブロック (続き)

警告/ブロック	解決法
サポートされていないブラウザがインストールされているシステムに、この製品をインストールしようとしています。	Rational Unified Process、ProjectConsole、Rose、Web Publisher、XDE Web Publisher を使用する前に、IBM Rational 製品のリリース ノートを参照して、サポートされているブラウザのリストを確認してください。
SiteCheck と互換性のないバージョンの Office がインストールされているシステムに、この製品をインストールしようとしています。	IBM Rational 製品の『リリース ノート』を参照して、サポートされているバージョンの完全なリストを確認してください。
サポートされていないバージョンの WebSphere Studio に、この製品をインストールしようとしています。	サポートされているバージョンを使用してください。サポートされるオペレーティング システムの完全なリストについては、『リリース ノート』を参照してください。
MDAC と ODBC	適切な MDAC ドライバと ODBC ドライバがコンピュータにインストールされていない場合、セットアップ ウィザードはバージョン 2.7 の Microsoft Data Access Components (MDAC) と Open Database Connectivity (ODBC) の各ドライバをインストールします。詳細については、Microsoft Knowledge Base の記事 216149 を参照してください。

## サービス リリースの適用

IBM Rational Software サービス リリースを検索するには、次の手順を実行します。

1. <https://www6.software.ibm.com/reg/rational/rational-i> で、Rational Download and Licensing Center にログインします。
2. [パッチとサービス リリース (Patches and Service Releases)] を選択します。
3. インストールする Rational 製品を選択します。
4. インストールする Rational 製品のバージョンを選択します。[継続] をクリックして、[ダウンロード] ページへ移動します。

サービス リリース ノートは、[ダウンロード] ページからもダウンロードできます。リリース ノートには、サービス リリースの機能、制限事項、手順が記載されています。この情報を使用して、Rational サービス リリースをインストールしてください。

### 注:

- リリース領域にサービス リリースを適用する場合は、69 ページの『リリース領域とサイト デフォルト ファイルの作成』の指示を参照してください。
- サービス リリースを 2003.06.13 Rational Suite リリースに適用する際、...¥Classics¥Projects¥... フォルダ内の 1 つ以上のファイルに対して「ソース ファイルが見つかりません」という警告を受け取る場合があります。これらの警告は無視してかまいません。なぜなら、それらのファイルは

ProjectConsole Web サーバー コンポーネントが ProjectConsole のサンプルサイトにアクセスするときのみ使用するファイルだからです。

---

## 第 4 章 インストール後に必要な作業: ClearCase LT の設定

ClearCase LT サーバーの初期インストールが終了したら、開始ウィザードを実行し、ClearCase LT の管理下に置く既存のファイルをインポートし、オペレーティング環境に対して必要な調整を行います。ClearCase Web インターフェイスを設定するには、87 ページの『開始ウィザードを使用した ClearCase LT の設定』を参照してください。

注: 既存のインストールをアップグレードする場合は、これらの手順は必要ありません。

---

### 開始ウィザードを使用した ClearCase LT の設定

開始ウィザードでは、標準的なサイトのデフォルトを使用して ClearCase LT 環境を設定します。このウィザードは、CD から直接またはリリース領域からサーバーをインストールした後、自動的に起動されます。ウィザードの画面を移動するには、[次へ] または [戻る] をクリックします。ウィザードのフィールドに入力する際に不明な点がある場合は、ウィザード ウィンドウの左側にあるオンライン ヘルプを参照してください。

### 開始ウィザードのキャンセルと再実行

開始ウィザードは、いつでも安全にキャンセルできます。再実行するには、Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[ClearCase]、[管理] の順にポイントし、[開始ウィザード] をクリックします。

ウィザードでは、[要約] 画面が表示されるまでは、設定は実行されません。

---

### その他の設定タスク

Rational ClearCase LT サーバーの初期インストールが終了したら、次の追加タスクを実行します。

1. 『IBM Rational ClearCase LT Release Notes』を読んでいない場合は、目を通すことをお勧めします。ClearCase LT の機能と既知の問題に関する最新情報が記載されています。
2. ClearCase LT をクライアント コンピュータにインストールする場合は、『*IBM Rational Software デスクトップ製品インストールレーション ガイド*』の手順に従います。
3. ClearCase LT では、サード パーティのさまざまな構成管理システムやソースコード管理システムからの、データやメタデータのインポートをサポートしています。また、通常ファイルやディレクトリの ClearCase へのインポートもサポートしています。

別の構成管理システムまたはファイル システムからファイルやディレクトリをインポートして、ClearCase で使用できます。詳しくは、『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』を参照してください。

4. ClearCase LT サーバーをセットアップしたら、『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』に記載されている、VOB とビュー記憶ディレクトリの管理手順を確認します。
5. ClearCase Web インターフェイスを設定するには、『ClearCase Web インターフェイスの設定』を参照してください。

## ClearCase LT のマニュアル

次のマニュアルは、Rational Solutions for Windows Online Documentation CD-ROM に収録されています。

- *IBM Rational ClearCase LT 入門*
- *IBM Rational ClearCase 管理ガイド*
- *IBM Rational ClearCase LT リリース ノート*

---

## ClearCase Web インターフェイスの設定

ほとんどのサイトで、ClearCase Web インターフェイスは特別な構成を必要としません。RWP がインストールされているあらゆるホストが、このインターフェイスをサポートできます。

`http://hostname[:port]/ccweb`

*hostname* は、RWP ホストの名前です。*port* はオプションのポート番号です。HTTP で 80 以外のポートを使用するように RWP を構成した場合は指定する必要があります (170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』を参照してください)。

**注:** Windows コンピュータで RWP を実行する場合は、ClearCase Web インターフェイスのユーザーに、RWP サーバーへの [ローカル ログオン] 権限を与える必要があります。デフォルトでは、この権限は付与されません。

この章のこれ以降では、以下の ClearCase Web インターフェイス構成ファイルの編集方法について説明します。

`ccase-home-dir/config/ccweb/ccweb.conf`

変更が必要になるのは、ClearCase Web インターフェイスのデフォルト構成を変更する必要がある場合です。

**注:** このファイルと RWP で使用する ClearCase Web インターフェイス サポート ファイルとを混同しないように注意してください。このサポート ファイルのパスは、`C:\Program Files\Rational Software\common\rwp\ccweb.conf` です。このファイルを変更しないでください。

## ClearCase プライマリ グループの指定

Windows 上の ClearCase ユーザーが `CLEARCASE_PRIMARY_GROUP` 環境変数を設定するサイトでは (『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』の「ClearCase プライマリ グループの設定」を参照してください)、`ccweb.conf` ファイルの以下の行を変更して、そのプライマリ グループを ClearCase Web インターフェイス ユーザーにも指定する必要があります。

**-primary\_group** *group-name*

ここで *group-name* は、このホストで ClearCase Web インターフェイスを使用するすべてのユーザーについて CLEARCASE\_PRIMARY\_GROUP として使用するドメイン グループの名前です。

**注:** 複数のドメインのユーザーが ClearCase Web インターフェイスにアクセスする場合は、RWP ホスト上のドメインを有効にして (『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』の「Windows NT ドメインでのプロキシ グループとドメイン マッピングの使用」を参照してください)、ccweb.conf の **-primary\_group** に適切な値を指定する必要があります。

## Web ビュー記憶域

ClearCase Web インターフェイスは通常、RWP サーバー ホスト上に Web ビューディレクトリを作成します。これは、チェックアウトされたファイルまたはエレメントとして作成される準備ができたファイルを一時的に格納するために使用されます。したがって、このディレクトリは、サポートする Web ビューの数に十分対応できるだけの空き容量があるディスク ボリューム上に存在する必要があります。Web ビュー 1 つ当たり 0.5 ~ 1 MB のディスク容量を割り当てることをお勧めします。

Windows の場合、このディレクトリは通常  
C:\Program Files\Rational Software\ClearCase\var\ccweb に作成されます。

デフォルトの Web ビュー記憶ディレクトリが適切でない場合は、ccweb.conf を変更することで異なる領域を指定できます。以下の行を追加してください。

**-view\_storage** *pathname*

*pathname* は Web ビュー ディレクトリを作成するディレクトリです。このディレクトリは RWP ホストに対してローカルである必要があります。

**注:** ClearCase Web インターフェイスは Web ビュー記憶域用に別のディレクトリを作成しますが、実行可能ファイルと管理ファイルは引き続き  
ccase-home-dir/ccweb に格納します。

## アップロード サイズの制限

Web ビュー記憶域のより効率的な管理や、サービス低下の可能性を低くするため、RWP サーバーにアップロードできるファイル サイズを制限することが考えられます。これを実現するには、ccweb.conf ファイルの次の行を変更します。

**-upload\_limit** *size*

*size* には、サイズの上限の概数をバイト単位で指定します。アップロードしようとしたファイルが大きすぎた場合、クライアント アップロード出力ウィンドウにエラー メッセージが表示されます。

## セッション タイムアウトの指定

セッション タイムアウト期間を設定して、ユーザー ログインの有効期間を制御できます。デフォルト値は 14400 秒 (4 時間) です。デフォルトの設定を変更するには、ccweb.confDTPでフォントを変更 の次の行を変更します。

**-session\_timeout** *seconds*

*seconds* には、秒を表す整数値 (600 (10 分) ~ 2147483647 (約 68 年)) を指定します。600 未満の数は 600 と解釈されます。

## 一時記憶用ディレクトリの指定

ClearCase Web インターフェイスが一時ファイルを格納するディレクトリを指定できます。このためには、ccweb.confDTP でフォントを変更 に次の形式の行を追加します。

**-tmpdir** *directory-name*

*directory-name* は、ClearCase Web インターフェイスがファイルの作成と削除を行う権限を持っている RWP ホスト上のディレクトリです。この行が ccweb.conf にないない場合、ClearCase Web インターフェイスは TMP または TEMP 環境変数に値が指定されていればそれを使用します。

## Windows でのアプレット ダウンロードの許可

Internet Explorer では、ClearCase Web インターフェイスで使用するものも含めてアプレットをダウンロードするには、ユーザーにローカル管理者権限が必要です。アプレットがダウンロードされると (Web インターフェイスが初めて使用されたとき)、ClearCase パッチまたは新しい ClearCase リリースでの変更がない限り、再度ダウンロードする必要はありません。

---

## 第 5 章 インストール後に必要な作業: データベースの設定とその他の ClearQuest タスク

IBM Rational ClearQuest のインストール後、ClearQuest、New ClearQuest Web、ClearQuest MultiSite 用の製造元データベースを作成して設定する必要があります。

ClearQuest、New ClearQuest Web、ClearQuest MultiSite には、少なくとも次の 2 つのデータベースが必要です。

- スキーマ リポジトリ: ClearQuest と ClearQuest MultiSite でスキーマが保存されるマスター データベースです。
- ユーザー データベース: ClearQuest ユーザーが入力したデータが保存されます。ユーザー データベースは、必要な数だけ設定できます。

この章では、次の設定タスクについて説明します。

- データベースの大文字/小文字の区別
- サポートされている文字セット
- 空の製造元データベース (Microsoft Access、Sybase SQL Anywhere、Microsoft SQL Server、Oracle Server、IBM DB2) の設定
- ClearQuest データベースの作成 (ClearQuest MultiSite 用にこれらのデータベースのレプリカを作成します)
- ClearQuest データベースへの接続
- 電子メール通知の有効化
- Rational ユーザー グループへの加入
- ClearQuest MultiSite 用の ClearQuest データベースのレプリカの作成
- MultiSite のコントロール パネルの設定 (Shipping Server のみ)

ClearQuest MultiSite のインストール後のオプションの設定手順は次のとおりです。

- レコードのマスターシップのセットアップ
- MultiSite のコントロール パネルの設定
- 同期の自動化

---

### 前提事項

ここでは、次のことを前提としています。

- 製造元データベース ソフトウェアがデータベース サーバーにインストールされていること。
- DB2 クライアント ソフトウェアがクライアント デスクトップ、ClearQuest Server、管理ツール コンピュータにインストールされていること。これらのコンピュータ上にクライアントの別名を作成する必要があります。『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールレーション ガイド』を参照してください。

- ClearQuest 管理ツールと ClearQuest MultiSite 管理ツールがデータベース サーバーまたは別のコンピュータにインストールされていること。30 ページの『ClearQuest 管理ツール』および 32 ページの『ClearQuest MultiSite 管理ツール』を参照してください。
- ユーザー アカウントが設定されていること。まだ設定していない場合は、『IBM Rational ClearQuest 管理ガイド』を参照してください。

## データベースの大文字/小文字の区別

次のような場合には、データベースの大文字/小文字の区別に関する設定がデータベース間で一貫している必要があります。

- ある製造元のデータベースから別の製造元のデータベースに移行する場合。
- ClearQuest MultiSite を使用し、異なる製造元データベースで作成した複数のデータベースを同期させる場合。

次の表に、サポートされている製造元データベースの大文字/小文字に関する特徴を示します。

データベース 製造元	デフォルト設定	可能な設定	コメント
Microsoft Access	大文字/小文字を区別しない	大文字/小文字を区別しない	Microsoft Access データベースでは大文字/小文字は区別されません。
SQL Anywhere	大文字/小文字を区別しない	大文字/小文字を区別しない、大文字/小文字を区別する	SQL Anywhere で作成されたデータベースでは大文字/小文字は区別されません。ただし、作成後に大文字/小文字を区別するように設定を変更できます。
DB2	大文字/小文字を区別する	大文字/小文字を区別する	データの大文字/小文字のみ区別され、データベース オブジェクト名の大文字/小文字は区別されません。
SQL Server	大文字/小文字を区別しない、大文字/小文字を区別する	大文字/小文字を区別しない、大文字/小文字を区別する	大文字/小文字の区別は、インストール時またはデータベースの作成時にオプションで指定できます。 <b>注:</b> データだけでなくデータベース オブジェクト名の大文字/小文字も区別されます。
Oracle	大文字/小文字を区別する	大文字/小文字を区別する	データの大文字/小文字のみ区別され、データベース オブジェクト名の大文字/小文字は区別されません。

---

## サポートされている文字セット

ClearQuest データベースでは、ClearQuest Windows 環境で次の文字セットがサポートされます。

- 1252 - 西ヨーロッパ/英語
- 932 - 日本語
- 936 - 中国語 (簡体字)
- 20127 - ASCII

詳しくは、『IBM Rational ClearQuest 管理ガイド』を参照してください。

---

## ClearQuest MultiSite のデータベースの設定

ClearQuest MultiSite をインストールする場合は、レプリカ サイトに ClearQuest データベースを作成しないでください。既存の ClearQuest データベース セットのレプリカを作成する場合は、新しいサイトで空の製造元データベースを作成する必要があります。新しいサイトで ClearQuest データベースを作成すると、レプリカ作成パケットのインポートが失敗します。

---

## ClearQuest 用の Microsoft Access の設定

**注:** New ClearQuest Web と ClearQuest MultiSite では、Microsoft Access データベースはサポートされていません。

ClearQuest を Microsoft Access で使用するには

1. Microsoft Access データベースを格納するディレクトリとして、マシン上に共有ディレクトリを作成します。
2. 共有ディレクトリの UNC パスを記録します。パスの形式は次のとおりです。

`\\machine_name\share_name\database_directory`

例を次に示します。

`\\developmentserver\project34share\clearquestdbs`

ClearQuest の初回起動時に、スキーマ リポジトリを作成するように指示するメッセージが表示されます。その際は、このパスを指定し、スキーマ リポジトリのファイル名を指定します。ClearQuest によって、指定したディレクトリに適切な Access データベースが作成され、初期化されます。

---

## ClearQuest 用の SQL Anywhere の設定

**注:** ClearQuest MultiSite は、SQL Anywhere データベースをサポートしていません。

SQL Anywhere データベース サーバーを作成するには、次の手順に従います。

- Sybase SQL Anywhere Server ソフトウェアをインストールします。

注: SQL Anywhere 8.0.2 は Rational Solutions for Windows の Disc 1 CD に収録されており、Rational Software のセットアップ ウィザードを使用してインストールできます。

- SQL Anywhere データベース サーバーを実行するためのユーザー アカウントを選択または作成し、そのアカウントにユーザー権限を設定します。詳しくは、94 ページの『ユーザー権限の定義』を参照してください。
- SQL Anywhere データベース サーバーを作成します。96 ページの『SQL Anywhere データベース サーバーの作成』を参照してください。

注: 作成直後の SQL Anywhere データベースでは、大文字/小文字は区別されません。別の製造元のデータベースに移行する場合は、両データベースの大文字/小文字の区別に関する設定を確認してください。詳しくは、92 ページの『データベースの大文字/小文字の区別』を参照してください。

## ユーザー権限の定義

SQL Anywhere データベース サーバーを実行するユーザー アカウントの権限を定義するには、次の手順に従います。

1. Sybase SQL Anywhere Server ソフトウェアがインストールされていることを確認します。
2. 以下のいずれかの操作を実行して、ユーザー アカウントを作成します。

### Windows ソフトウェア アクション

#### Windows NT Workstation

Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール (共通)] の順にポイントし、[ユーザー マネージャ] をクリックします。

#### Windows NT Server

Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール (共通)] の順にポイントし、[ドメイン ユーザー マネージャ] をクリックします。

[ユーザー] メニューの [ドメインの選択] をクリックし、[ドメイン] ボックスにローカル マシン名を入力して [OK] をクリックします。

ユーザーが存在しない場合は、[ユーザー] メニューの [新しいユーザー] をクリックしてユーザーを作成します。

#### Windows 2000 Workstation

Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。次に、[ユーザーとパスワード] をクリックします。

#### Windows 2000 Server

Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。次に、[コンピュータの管理]、[ローカル ユーザーとグループ] の順にクリックします。

[ユーザー] をクリックして、[操作] メニューの [新しいユーザー] をクリックし、ユーザー名とパスワードを入力して [作成] をクリックします。

### **Windows XP Professional**

Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。次に、[ユーザー アカウント] をクリックします。

[追加] をクリックし、新しいユーザーの追加ウィザードを実行します。

### **Windows NT Workstation または Windows NT Server の場合**

1. [ユーザー マネージャ] ウィンドウで、[原則] メニューの [ユーザーの権利] をクリックします。
2. [高度なユーザー権利の表示] オプションをクリックします。
3. [ユーザー権利の原則] ダイアログ ボックスの右側に表示されているリスト ボックスで、[ネットワーク経由でコンピュータへアクセス] を選択します。
4. [追加] をクリックします。
5. [ドメインまたはコンピュータ] リストから、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するアカウントのドメインを選択します。
6. [ユーザーの表示] をクリックします。
7. [名前] リストで、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するアカウントを選択します。
8. [追加] をクリックしてから、[OK] をクリックします。
9. [ユーザー権利の原則] ダイアログ ボックスの右側に表示されているリスト ボックスで、[サービスとしてログオン] をクリックします。
10. 手順 4 (95 ページ) から手順 8 (95 ページ) を繰り返します。
11. [ユーザー権利の原則] ダイアログ ボックスの右側に表示されているリスト ボックスで、[ローカル ログオン] をクリックします。
12. 手順 4 (95 ページ) から手順 8 (95 ページ) を繰り返します。
13. [OK] をクリックします。
14. [ユーザー] メニューの [ユーザー マネージャの終了] をクリックします。

### **Windows 2000 Workstation、Windows 2000 Server、Windows XP Professional の場合**

1. Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。次に、[管理ツール]、[ローカル セキュリティ ポリシー] の順にクリックします。
2. [セキュリティの設定] を展開し、[ローカル ポリシー] を展開して [ユーザー権利の割り当て] をクリックします。
3. 右側のペインで [ネットワーク経由でコンピュータへアクセス] を右クリックし、[セキュリティ] を選択します。
4. [追加] をクリックし、[場所] リストから、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するアカウントのドメインを選択します。

5. [名前] リストで、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するアカウントを選択します。[追加] をクリックしてから、[OK] をクリックします。
6. [ローカル セキュリティ設定] ダイアログ ボックスの右側に表示されているリスト ボックスで、[サービスとしてログオン] を選択します。
7. 手順 4 (95 ページ) から手順 5 (96 ページ) を繰り返します。
8. [ローカル セキュリティ設定] ダイアログ ボックスの右側に表示されているリスト ボックスで、[ローカル ログオン] を選択します。
9. 手順 4 (95 ページ) から手順 5 (96 ページ) を繰り返します。
10. [OK] をクリックします。[ローカル セキュリティ設定] ダイアログ ボックスを終了します。

## SQL Anywhere データベース サーバーの作成

SQL Anywhere データベース サーバーは、データベース サーバー マシン上で実行されるプロセスです。この機能により、SQL Anywhere データベースに対するすべてのアクティビティを調整します。作成した 1 台の SQL Anywhere サーバーから、すべてのデータベース ファイルにアクセスできるようになります。テスト データストアのすべてのファイルにもアクセス可能です。

SQL Anywhere データベース サーバーを作成するには

1. Windows の [スタート] メニューから [プログラム]、[Rational Software]、[SQL Anywhere 8.0] の順にポイントし、[Sybase Central] をクリックします。
2. 左側のペインで、[Adaptive Server Anywhere 8] の [Services] をクリックします。
3. 右側のペインで、[Add Service] をダブルクリックして Create New Service ウィザードを起動します。
4. [Choose Name] ダイアログ ボックスでサービスの名前を入力し、[Next] をクリックします。
5. [Choose Service Type] ダイアログ ボックスで [Network Database Server] をクリックし、[Next] をクリックします。
6. [Choose Path Name] ダイアログ ボックスに、新しいサービスの実行可能ファイルのデフォルトのパスが表示されます。これは、Rational インストール ディレクトリの SqlAnywhere8\WIN32 サブディレクトリにある SQL Anywhere データベース サーバーの実行ファイル (dbsrv8.exe) のパスです。これはデフォルト設定にしておく必要があります。
7. [Specify Parameters] ダイアログ ボックスで、次のオプションを入力します。

**-n name -gd level**

### オプション

**-n**

### 説明

データベース サービス名。ここに入力する名前は、ClearQuest データベースまたは IBM Rational Test データストアを作成するときに必要です。

**-gd**

データベース開始権限。指定できるレベルは、dba、all、または none です。すべてのユーザー

が新しいデータベースを起動できるようにするには、**all** を指定する必要があります。

8. [Choose Account] ダイアログ ボックスで [Other] をクリックし、[Administrator] または [Guest] を選択してパスワードを入力し、確認のためにもう一度同じパスワードを入力して [Next] をクリックします。

**注:** 指定するアカウントには、[サービスとしてログオン] の権限が必要です。アカウントにこの権限がない場合は、その旨を示すメッセージが表示されます。この権限をサービスのインストール時に付与するには、[Yes] をクリックします。

9. [Choose Startup Type] ダイアログ ボックスでサービスを開始する方法を選択し ([Automatic] を推奨)、[Next] をクリックします。
10. 最後に表示されるダイアログ ボックスで、[Start the service now] を選択することをお勧めします。[Finish] をクリックするとサービスが作成されます。

## SQL Anywhere データベースのバックアップと復元

SQL Anywhere データベースのバックアップと復元に関する情報を取得するには

1. Windows の [スタート] メニューから [プログラム]、[Rational Software]、[SQL Anywhere 8.0] の順にポイントし、[Sybase Central] をクリックします。
2. [Help] メニューから [Adaptive Server Anywhere 8 Plug-in]、[Help Topics] の順にクリックします。
3. [Adaptive Server Anywhere Data Administration Guide] をクリックし、[Backup and Data Recover] の章をクリックして表示します。

---

## Microsoft SQL Server (ClearQuest 用) の設定

サポートされているプラットフォーム (5 ページの『サーバー システムとソフトウェアの要件』を参照) に SQL Server 7 または 2000 をインストールします。手順については、製造元のマニュアルを参照してください。

SQL Server をインストールする場合は、次のガイドラインに従ってください。

- SQL Server データベースのネットワーク ドメインが、ClearQuest Web サーバー、すべての ClearQuest クライアント、データベースへの接続に必要なツールと同じであることが必要です。ドメインが異なる場合は、エラーが発生します。詳細については、以下の情報を参照してください。
  - <http://www.microsoft.com/> で、Microsoft KnowledgeBase の記事 Q152828 を参照してください。この記事参照するには、ページの上部にある [Search] をクリックし、記事の番号を入力します。
  - <http://www.ibm.com/software/rational/support/> で、IBM Rational Customer Support TechNote 8148、「How do I access an SQL Server database in another domain?」を参照してください。
- 次を示すソート順オプションのいずれかを選択してください。
  - [辞書順、大文字小文字を区別する]
  - [辞書順、大文字小文字を区別しない]

SQL Server のインストール後にソート順を変更する場合は、SQL データベースを再構築し、データを再ロードします。

**注:** ソート順を変更すると、ClearQuest クエリーに対する大文字/小文字の区別に影響します。ClearQuest クエリーで大文字/小文字を区別しないようにするには、ここでそのソート順を設定してください。詳しくは、92 ページの『データベースの大文字/小文字の区別』を参照してください。

- ClearQuest スキーマ リポジトリ用に空の SQL Server データベースを 1 つと、ユーザー データベースごとに 1 つずつ空の SQL Server データベースをセットアップする必要があります。データベースを作成するには、次の手順に従います。
  1. サーバー登録について確認します。
  2. 空のデータベースを作成します。
  3. データベースのバックアップ手順をセットアップします。
- ClearQuest データベースのログイン時に使用する、**db\_owner** 権限を割り当てた SQL Server ログインを作成します。すべての接続に同じログインが使用されます。

**注:** SA (システム管理者) ログインは使用しないでください。ClearQuest では、データベースのアップグレードや移行を行う際、対象のデータベースが空でなければなりません。SA ログインを使用している場合は、ClearQuest でシステム テーブルを参照可能なため、データベースが空ではないとみなされ、処理を続行できません。

SQL Server 2000 をインストールする際は、必ず、データベース サーバーにデフォルトの登録名を選択してください。デフォルトの登録名を選択すれば、サーバーのホスト名と同じ名前を指定できます。

## SQL Server コンピュータの登録

初めに、コンピュータが登録されているかどうかを確認する必要があります。そのためには、[プログラム] をポイントして [Microsoft SQL Server 7.0] の [Enterprise Manager] をクリックするか、[プログラム] をポイントして [Microsoft SQL Server] の [Enterprise Manager] をクリックします。

SQL Server 2000 の場合は、[プログラム] をポイントして [Microsoft SQL Server] の [Enterprise Manager] をクリックします。[SQL Server グループ] で、Windows サーバーを選択します。

サーバーが登録されている場合は、99 ページの『SQL Server データベースの作成』に進みます。サーバーが表示されない場合は、ここでサーバーを登録します。サーバーを登録するには、次の手順に従います。

1. [SQL Server グループ] を右クリックし、[SQL Server の新規登録] をクリックします。[SQL Server 登録ウィザード] が表示されます。[次へ] をクリックします。

SQL Server 2000 をインストールする際は、データベース サーバーにデフォルトの登録名を選択してください。デフォルトの登録名を選択すれば、サーバーのホスト名と同じ名前を指定できます。

2. サーバー名を選択して、[次へ] をクリックします。

サーバー名を記録しておいてください。このサーバー名は、ClearQuest をインストールするときに使用します。

3. [認証モードの選択] ページで [SQL Server 認証] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. [SQL Server のアカウント情報を使用して自動的にログインする] を選択します。[ログイン名] ボックスに「SA」、[パスワード] ボックスに SA のパスワードを入力します。それから、[次へ] をクリックします。SA ユーザーにはログインとデータベースを作成する権限があります。
5. 既存のグループにこのサーバーを追加するか、または新規グループを作成します。それから、[次へ] をクリックします。
6. [完了] をクリックします。登録したサーバーが、サーバーのリストに表示されます。
7. ステータス ウィンドウで、登録が正常に終了したことを確認し、[閉じる] をクリックします。

## SQL Server データベースの作成

スキーマ リポジトリとユーザー データベース用の空のデータベースを作成するには

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Microsoft SQL Server 7.0] の順にポイントして [Enterprise Manager] をクリックするか、[プログラム]、[Microsoft SQL Server] の順にポイントして [Enterprise Manager] をクリックします。
2. SQL Server 7 の場合は、[SQL Server グループ] でサーバー名をダブルクリックし、右側のペインに [入門タスクパッド] を表示します。[SQL Server の管理] をポイントし、[データベースの作成] をクリックしてデータベース作成ウィザードを起動します。

SQL Server 2000 の場合は、[SQL Server グループ] でサーバー名をダブルクリックして、右側のペインで [ウィザード] タブをクリックします。[データベースのセットアップ]、[データベースの作成] の順にクリックしてデータベース作成ウィザードを起動します。[次へ] をクリックします。

3. [データベース名] ボックスに対象のデータベース名を入力し、データベースとログのファイル システム上の保存場所を指定します。[次へ] をクリックします。

**注:** データベース名にスペースや英数字以外の文字を使用しないでください。アンダースコア (\_) は使用できます。

4. デフォルトのデータベース ファイル名をそのまま使用し、[次へ] をクリックします。データベース ファイルの拡張パラメータを定義して、[次へ] をクリックします。

**注:** スキーマ リポジトリに 50 MB 以上の領域を割り当て、さらにユーザー データベースに格納されると予想されるレコード数 1,000 レコードごとに 15 MB 以上の領域を割り当ててください。

5. トランザクション ログ ファイルの拡張パラメータを定義して、[次へ] をクリックします。

6. [完了] をクリックします。
7. データベース保守計画を作成します。

データベース保守計画を作成するように指示するメッセージが表示されます。  
[データベース保守計画ウィザード] を使用してデータベースのバックアップ ルーチンをセットアップしてください。すべての ClearQuest データベースのデータを夜間に自動的にバックアップするようにセットアップすることをお勧めします。

## SQL Server 7 の場合

新規データベースのプロパティを設定するには

1. サーバーのデータベース フォルダで新しいデータベースを選択します。
2. データベースを右クリックし、[プロパティ] をクリックします。
3. [オプション] タブで、ログ ファイルのサイズが大きくなり過ぎないように次のオプションをオンにします。
  - [Select into/bulk copy]
  - [チェックポイント時のログ切り捨て]
4. [適用] をクリックします。

## SQL Server 2000 の場合

SQL 2000 でログ ファイルのサイズを管理するには、データベースとログ ファイルの両方を毎日バックアップする保守計画を作成してください。ログ ファイルは毎日のバックアップが終了するたびに切り捨てられます。

作成する空のユーザー データベースごとに、手順 1 (99 ページ) から手順 6 (100 ページ) を繰り返します。

## SQL Server ログインの作成

各 ClearQuest データベース (スキーマ リポジトリと各ユーザー データベース) 用に db\_owner ログインを作成する必要があります。そのためには、作成する各ログインに db\_owner ロールを割り当てます。

**注:** このログインに ClearQuest データベースの SA (システム管理者) を使用することは避けてください。ClearQuest では、データベースのアップグレードや移行を行う際、対象のデータベースが空でなければなりません。SA ログインを使用している場合は、ClearQuest でシステム テーブルを参照可能なため、データベースが空ではないとみなされ、処理を続行できません。

スキーマ リポジトリとユーザー データベース用の空のデータベースに対する db\_owner ログインを作成するには

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Microsoft SQL Server 7.0] の順にポイントして [Enterprise Manager] をクリックするか、[プログラム]、[Microsoft SQL Server] の順にポイントして [Enterprise Manager] をクリックします。
2. **Enterprise Manager** の左側のペインで [セキュリティ] フォルダを展開します。[ログイン] を右クリックして、[新規ログイン] をクリックし、スキーマ リ

ポジトリ データベースの新しいユーザーを作成します。[SQL Server ログインのプロパティ - 新規ログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。

3. [全般] タブで [SQL Server 認証] を選択します。

**注:** ClearQuest では、データベースごとに SQL Server のログインが必要であり、Windows NT 認証はサポートされていません。SQL Server は、混合モード (Windows NT 認証と SQL Server 認証) で動作するように設定する必要があります。[Enterprise Manager] でこのプロパティを設定するには、対象のサーバーを右クリックして [プロパティ] を選択します。[セキュリティ] タブの [プロパティ] ダイアログ ボックスで、[Windows NT 認証] と [SQL Server 認証] をクリックします。

4. [全般] タブで、ユーザー名とパスワードを [名前] と [パスワード] ボックスに入力します。

[規定値] 領域で、データベースを選択し、[言語] の設定を [<既定値>] のままにします。

5. [サーバー ロール] タブの [サーバー ロール] リストで、サーバー ロールが何も付与されていないことを確認します。
6. [データベース アクセス] タブで、[許可] リストから新規データベースを選択し、ログイン権限を許可します。[データベース ロール内の権限] で、db\_owner と public を選択します。このユーザーにはその他の権限を付与しないでください。
7. [OK] をクリックして、パスワードを確認します。
8. 作成した ClearQuest ユーザー データベースごとに、手順 1 (100 ページ) から手順 7 (101 ページ) を繰り返します。2 (100 ページ) の手順を繰り返すときに、[Enterprise Manager] の右側のペインで、スキーマ リポジトリ用に作成したユーザー名をダブルクリックします。[全般] タブの [名前] と [パスワード] ボックスに情報が入力されます。

## SQL Server クライアントの接続の確認

ClearQuest データベースへの接続を確認するには、ClearQuest クライアントに Microsoft Data Access Components (MDAC) 2.7 がインストールされている必要があります。ClearQuest のインストール時に MDAC 2.7 がホスト上に存在していない場合は、MDAC 2.7 がインストールされます。

---

## ClearQuest 用の Oracle Server の設定

Oracle データベースを使用している場合は、データベースの作成とインストール方法について、Oracle のマニュアルを参照してください。データベース フィールドの複数行検索をサポートする場合は、CLOB サポートを使用することをお勧めします。複数行検索をサポートする際に CLOB データ型を使用しない場合は、Oracle のマニュアルで IntermediaText の設定に関する情報を参照してください。

Oracle データベースをセットアップする場合は、次のガイドラインに従ってください。

- ClearQuest のデータを格納する Oracle データベース インスタンスを作成するか、既存の Oracle インスタンスをデータ格納用として指定します。

- 次のログインごとに Oracle データベース ユーザー アカウントを作成します。
  - ClearQuest スキーマ リポジトリ用のユーザー ログイン
  - 各 ClearQuest ユーザー データベースに対して 1 つのユーザー ログイン
- 各ユーザー ログインに、接続とリソースのロールのみを付与します。

**注:** 各データベース ユーザーに、固有のデフォルトのテーブル領域を関連付けることをお勧めします。Oracle データベースでは、ユーザーは一時テーブル領域を共有できますが、それらの一時テーブル領域は、Oracle システム テーブル領域とは別にしておく必要があります。

Oracle データベースでは、大文字/小文字が区別されます。ClearQuest MultiSite を使用している場合や、別の製造元に移行する場合は、データベースの大文字/小文字の区別の設定について事前に確認する必要があります。詳しくは、92 ページの『データベースの大文字/小文字の区別』を参照してください。

## Oracle CLOB データ型サポートの有効化

このリリースでは、Oracle データベースに対する CLOB (Character Large Object) サポートを提供します。このリリースでは、列タイプを **CLOB** として設定することにより、**multiline\_text** フィールド タイプの列を作成できます。そのためには、メンテナンス ツールまたは Designer を使用してスキーマ リポジトリまたはユーザー データベースを作成する際に、[接続オプション] フィールドで **LOB\_TYPE** を **CLOB** として指定する必要があります。新しい Oracle データベースのデータ型として、**CLOB** または **LONG** を指定する場合は、『IBM Rational ClearQuest リリース ノート』を参照してください。

---

## ClearQuest 用 IBM DB2 データベースの作成

ClearQuest で IBM DB2 データベースを使用するには、サポートされているリリースの DB2 をデータベース サーバーにインストールする必要があります。DB2 データベースでは、大文字/小文字が区別されます。

**注:** サポートされる AIX プラットフォームに DB2 データベースをインストールする場合は、データベースが常駐するファイル システムが、2 GB 以上のデータベース制御ファイルを格納できるくらい**大きいファイル**であることを確認してください。

ClearQuest MultiSite を使用している場合や、別のデータベース製造元に移行する場合は、データベースの大文字/小文字の区別の設定について事前に確認する必要があります。詳しくは、92 ページの『データベースの大文字/小文字の区別』を参照してください。

DB2 データベース ソフトウェアを ClearQuest 用に構成する方法は 2 つあります。最初の方法は、パフォーマンス上の理由からお勧めします。セットアップや管理も、より簡単です。最初の方法では、1 つの DB2 データベース サーバーに単一 DB2 データベースを作成する必要があります。次に、ClearQuest スキーマ リポジトリと 1 つ以上のユーザー データベースを単一 DB2 データベースに作成します。2 番目の方法では、ClearQuest データベース用に複数の DB2 データベースを DB2 データベース サーバーに作成する必要があります。ClearQuest クライアント

が v2003.06.00 よりも古い ClearQuest ソフトウェアがインストールされた ClearQuest データベースと相互運用する必要がある場合は、2 番目の方法を使用しなければならない可能性があります。

以降では、バージョン 7.x、8.1 (フルと Express) の空の DB2 データベースの作成方法について説明します。ここでは、DB2 サーバーがインストールされたマシンで以下の手順を実行することと、データベースにアクセスするユーザーは公開グループのメンバーであることを想定しています。

- 単一 DB2 データベースの方法を選択する場合は、インストールされた DB2 バージョンに該当する手順に従って、空の DB2 データベースを 1 つ作成します。次に、オペレーティング システム レベルで、各 ClearQuest データベースのユーザー アカウントを作成します。これらの手順については、オペレーティング システムのマニュアルを参照してください。ClearQuest スキーマ リポジトリとユーザー データベースを後で作成するときは、同じデータベース名を使用しますが、ClearQuest データベースを所有するユーザー アカウントには、システム レベルで作成された別々のアカウントを使用します。たとえば、オペレーティング システム レベルでユーザー ID 「cqrepo」と「cqdata」を作成する場合、単一 DB2 データベース「cqdb」で「cqrepo」はスキーマ リポジトリ データベースを所有し、「cqdata」はユーザー データベースを所有します。
- 2 番目の方法を使用する場合は、インストールされた DB2 バージョン用の一連の同一手順を実行して、各 ClearQuest データベース (スキーマ リポジトリと 1 つ以上のユーザー データベース) ごとに空の DB2 データベースを作成します。

## DB2 7.x の場合

単一 DB2 の方法を使用する場合は、前に説明した通りに ClearQuest データベースのユーザー ID を作成します。以下の手順では、公開グループにデフォルトで権限が割り当てられていることを想定しています。データベースにアクセスする DB2 ユーザー名に権限を割り当てるときは、その権限が公開グループの権限と一致しなければなりません。複数データベースの方法を使用する場合は、各 ClearQuest データベースごとにこれらの手順を繰り返します。

DB2 データベースを作成するには

1. [スタート] メニューから、[プログラム]、[IBM DB2] の順にポイントし、[コントロールセンター] をクリックします。
2. DB2 管理者アカウントのログイン名とパスワードを入力して、[了解] をクリックします。
3. DB2 コントロール センターで、[すべてのカタログ システム (All Cataloged Systems)] タブを展開し、データベース サーバー名に対応するホスト名タブを展開します。[インスタンス (Instances)] タブを展開して、[DB2] タブを展開します。
4. DB2 サーバー コンピュータ上ですべての DB2 サービスが実行されていることを確認します。[データベース] フォルダを右クリックし、[作成] をポイントして [データベース(ウィザードを使用)] をクリックします。

**注:** データベースを正常に作成できなかった場合は、次のコマンドを実行します。

**db2**

db2> **connect to** *database-name*

db2>**bind db2schema.bnd blocking all grant public**

db2> **disconnect all**

5. [データベース名] ボックスにデータベースの名前を入力します。

**注:** DB2 のデータベース名は、8 文字以内で指定する必要があります。

6. デフォルトのドライブを選択し、別名を [別名] ボックスに入力します。必要に応じて、[注釈] ボックスにコメントを入力します。[完了] をクリックします。
7. 作成したデータベースの [データベース名] フォルダを展開します。
8. [バッファークール] フォルダを右クリックし、[作成] をクリックします。[バッファークールの作成] ダイアログ ボックスで、次の操作を行います。
  - a. バッファークール名を入力し (BFP16K など)、[ページ サイズ] = 16 を選択します。
  - b. デフォルトのページ サイズ である 16 KB をそのまま使用します。
  - c. [拡張記憶域の使用] と [デフォルト バッファークール サイズの使用] チェック ボックスがオンになっている場合は、それらをオフにします。
  - d. [OK] をクリックします。
9. [DB2] フォルダを右クリックし、[停止] をクリックします。[停止の確認] ダイアログ ボックスで、[すべてのアプリケーションを切断] チェック ボックスをオンにします。次に、[DB2] フォルダから [開始] をクリックし、バッファークールをアクティブ状態にしてデータベースを再起動します。
10. 作成したデータベースの *database-name* フォルダの下にある [表スペース] フォルダを右クリックし、[作成] をポイントして [表スペースの作成] をクリックします。[表スペースの作成] ダイアログ ボックスで、次の操作を行います。
  - a. [表スペース名] ボックスに名前 (たとえば、TSPRGR16K) を入力し、[表スペースのタイプ] を [通常] に設定して、[スペース管理] を [システム] に設定します。
  - b. [コンテナ名] セクションで、[追加] をクリックします。[コンテナの追加] ダイアログ ボックスで、[コンテナ] ボックスに名前 (たとえば、cntrl1a\_16K) を入力して [了解] をクリックします。[表スペースの作成] ダイアログ ボックスに、指定したコンテナ名が表示されます。
11. [拡張] をクリックして、[拡張] ダイアログ ボックスを表示します。
  - a. [ページ サイズ] を **16** に設定し、手順 8 で作成したバッファークール名を選択して、[了解] をクリックします。
  - b. [了解] をクリックし、[表スペースの作成] ダイアログ ボックスを終了します。
  - c. [コントロールセンター] の右側のペインで、作成した新しい表スペースの名前を右クリックし、[Privileges] をクリックします。
  - d. [Group] タブで、[追加] をクリックし、[Public] グループを選択して、[了解] をクリックします。[Privileges: Use] 領域を [Yes] に設定し、[了解] をクリックします。

12. 作成したデータベースの *database-name* フォルダの下にある [表スペース] フォルダを右クリックし、[作成] をポイントして [表スペースの作成] をクリックします。[表スペースの作成] ダイアログ ボックスで、次の操作を行います。
  - a. [表スペース名] ボックスに名前 (たとえば、TSPTMP16K) を入力し、[表スペースのタイプ] を [System Temporary] に設定して、[スペース管理] を [システム] に設定します。
  - b. [コンテナ名] セクションで、[追加] をクリックします。[コンテナの追加] ダイアログ ボックスで、[コンテナ] ボックスに名前 (たとえば cntrlb\_16K) を入力して [了解] をクリックします。[表スペースの作成] ダイアログ ボックスに、指定したコンテナ名が表示されます。
13. [拡張] ダイアログ ボックスで、[拡張] をクリックします。
  - a. [ページ サイズ] を **16** に設定し、手順 8 で作成したバッファークール名を選択して、[了解] をクリックします。
  - b. [了解] をクリックし、[表スペースの作成] ダイアログ ボックスを終了します。
14. [インスタンス名] を右クリックし、[停止] をクリックします ([停止の確認] ダイアログ ボックスで、必ず [すべてのアプリケーションを切断] チェック ボックスをオンにしてください)。次に、[インスタンス名] から [開始] をクリックし、大きいページ サイズを指定してデータベースを再起動します。
15. [コントロールセンター] の左側のペインで、作成したデータベースごとに、*database-name* フォルダを右クリックして [構成] をクリックし、[Configure Database] ダイアログ ボックスを表示します。
  - a. [パフォーマンス] タブで、[アプリケーション ヒープサイズ]、[アプリケーション制御ヒープサイズ]、[Sort heap size] の値を **1024** に設定します。
  - b. [ログ] タブで、次のパラメータの値を設定します。[ログ ファイル サイズ] を **1000**、[一次ログ ファイル数] を **15**、[二次ログ ファイル数] を **10** に設定します。
16. [コントロールセンター] の右側のペインで、作成した新しいデータベースを右クリックし、[Privileges] をクリックします。
17. [Group] タブで、[追加] をクリックし、[Public] グループを選択して、[了解] をクリックします。[Privileges: Use] 領域を [Yes] に設定し、[了解] をクリックします。
18. [OK] をクリックします。
19. 作成した最初の [表スペース (Tablespace)] をドロップします。
20. [DB2] フォルダを右クリックし、[停止] をクリックします。[開始] をクリックして、データベースを再起動し、指定したパラメータを有効にします。

## DB2 と DB2 UDB Express 8.1 の場合

単一 DB2 の方法を使用する場合は、前に説明した通りに ClearQuest データベースのユーザー ID を作成します。以下の手順では、公開グループにデフォルトで権限が割り当てられていることを想定しています。データベースにアクセスする DB2 ユーザー名に権限を割り当てるときは、その権限が公開グループの権限と一致しなければなりません。複数データベースの方法を使用する場合は、各 ClearQuest データベースごとにこれらの手順を繰り返します。

DB2 データベースを作成するには

1. [スタート] メニューから、[プログラム]、[IBM DB2]、[General Administration Tools] の順にポイントし、[コントロールセンター] をクリックします。
2. DB2 管理者アカウントのログイン名とパスワードを入力して、[了解] をクリックします。
3. DB2 コントロール センターで、[すべてのカタログ システム (All Cataloged Systems)] タブを展開し、データベース サーバー名に対応するホスト名タブを展開します。[インスタンス (Instances)] タブを展開して、[DB2] タブを展開します。
4. DB2 サーバー ホスト上ですべての DB2 サービスが実行されていることを確認します。[データベース] フォルダを右クリックし、[作成] をポイントして [データベース(ウィザードを使用)] をクリックします。

**注:** データベースを正常に作成できなかった場合は、次のコマンドを実行します。

**db2**

db2> **connect to** *database-name*

db2> **bind db2schema.bnd blocking all grant public**

db2> **disconnect all**

5. [データベース名] ボックスにデータベースの名前を入力します。

**注:** DB2 のデータベース名は、8 文字以内で指定する必要があります。

6. デフォルトのドライブを選択し、別名を [別名] ボックスに入力します。必要に応じて、[注釈] ボックスにコメントを入力します。[完了] をクリックします。  
**Configuration Advisor** を起動するように要求されたら [いいえ] をクリックします。
7. 作成したデータベースの [データベース名] フォルダを展開します。
8. [バッファークール] フォルダを右クリックし、[作成] をクリックします。[バッファークールの作成] ダイアログ ボックスで、次の操作を行います。
  - a. バッファークール名を入力し (BFP16K など)、[ページサイズ] = **16** に設定します。
  - b. デフォルトのページ サイズ である **16 KB** をそのまま使用します。
  - c. [拡張記憶域の使用] と [デフォルト バッファークール サイズの使用] チェック ボックスがオンになっている場合は、それらをオフにします。
  - d. [OK] をクリックします。
9. [DB2] フォルダを右クリックし、[停止] をクリックします。[停止の確認] ダイアログ ボックスで、[すべてのアプリケーションを切断] チェック ボックスをオンにします。次に、[DB2] フォルダから [開始] をクリックし、バッファークールをアクティブ状態にしてデータベースを再起動します。
10. 作成したデータベースの *database-name* フォルダの下にある [表スペース] フォルダを右クリックし、[作成] をポイントして [表スペースの作成] をクリックします。[表スペースの作成] ウィザードで、次の操作を行います。

- a. [表スペース名] ボックスに名前 (TSPRGR16K など) を入力し、[次へ] をクリックします。
  - b. [表スペースのタイプ] を [通常] に設定し、[次へ] をクリックします。
  - c. 手順 8 で作成したバッファ プールを選択し、[次へ] をクリックします。
  - d. [スペース管理] を [System-managed space] に設定し、[次へ] をクリックします。
  - e. [Define containers for this table space] ページで [Add] をクリックします。  
[Define Container] ダイアログ ボックスで、[コンテナ] ボックスに名前 (たとえば、cntr1a\_16K) を入力して [了解] をクリックします。[Define containers for this table space] ページに、指定したコンテナ名が表示されます。このコンテナ名をクリックし、[次へ] をクリックします。
  - f. [Specify the extent and prefetch sizes for this table space] ページで、この表スペース内の表の平均サイズをクリックして選択します。[次へ] をクリックします。
  - g. [Describe hard drive specification] ページで、DB2 データベースが配置されているハード ドライブの仕様を定義します。[次へ] をクリックします。
  - h. 表スペースを復元する場合は、[Specify the dropped table recovery option for your new table space] ページで、[Enable dropped table recovery] オプションをクリックします。[次へ] をクリックしてから、[完了] をクリックします。
11. [コントロールセンター] の右側のペインで、作成した新しい表スペースの名前を右クリックし、[Privileges] をクリックします。[Group] タブで、[追加] をクリックし、[Public] グループを選択して、[了解] をクリックします。[Privileges: Use] 領域を [Yes] に設定し、[了解] をクリックします。
  12. 作成したデータベースの *database-name* フォルダの下にある [表スペース] フォルダを右クリックし、[作成] をポイントして [表スペースの作成] をクリックします。[表スペースの作成] ウィザードで、次の操作を行います。
    - a. [表スペース名] ボックスに名前 (TSPTMP16K など) を入力し、[次へ] をクリックします。
    - b. [表スペースのタイプ] を [System temporary] に設定し、[次へ] をクリックします。
    - c. 手順 8 で作成したバッファ プールを選択し、[次へ] をクリックします。
    - d. [スペース管理] を [System-managed space] に設定し、[次へ] をクリックします。
    - e. [Define containers for this table space] ページで [Add] をクリックします。  
[Define Container] ダイアログ ボックスで、[コンテナ] ボックスに名前 (たとえば、cntr1b\_16K) を入力して [了解] をクリックします。[Define containers for this table space] ページに、指定したコンテナ名が表示されます。このコンテナ名をクリックし、[次へ] をクリックします。
    - f. [Specify the extent and prefetch sizes for this table space] ページで、この表スペース内の表の平均サイズをクリックして選択します。[次へ] をクリックします。
    - g. [Describe hard drive specification] ページで、DB2 データベースが配置されているハード ドライブの仕様を定義します。[次へ] をクリックします。

- h. 表スペースを復元する場合は、[Specify the dropped table recovery option for your new table space] ページで、[Enable dropped table recovery] オプションをクリックします。[次へ] をクリックしてから、[完了] をクリックします。
13. [DB2] フォルダを右クリックし、[停止] をクリックします。[停止の確認] ダイアログ ボックスで、[すべてのアプリケーションを切断] チェック ボックスをオンにします。次に、[DB2] から [開始] をクリックし、大きいページ サイズを指定してデータベースを再起動します。
14. [コントロールセンター] の左側のペインで、作成したデータベースごとに、*database-name* フォルダを右クリックして [Configure Parameters] をクリックし、[Database Configuration] ダイアログ ボックスを表示します。
  - a. [パフォーマンス] セクションで、APP\_CTL\_HEAP\_SZ、APPLHEAPSZ、SORTHEAP の値を **1024** に設定します。
  - b. [ログ] セクションで、LOGFILSIZ を **1000**、LOGPRIMARY を **15**、LOGSECOND を **10** に設定します。
  - c. [OK] をクリックします。
15. [コントロールセンター] の右側のペインで、作成した新しいデータベースを右クリックし、[Privileges] をクリックします。
16. [Group] タブで、[追加] をクリックし、[Public] グループを選択して、[了解] をクリックします。[Privileges: Use] 領域を [Yes] に設定し、[了解] をクリックします。
17. 作成した最初の [表スペース (Tablespace)] をドロップします。

---

## DB2 クライアントのインストール

DB2 データベースを使用するには、Windows 上のすべての ClearQuest クライアント ホストで、ローカル コンピュータに DB2 クライアント ソフトウェアをインストールする必要があります。DB2 クライアント ソフトウェアをインストールする方法については、IBM のマニュアルを参照してください。

**注:** さらに、DB2 データベースにアクセスするすべてのホストに DB2 Administration Client をインストールする必要があります。

インストールが完了したら、108 ページの『DB2 データベース別名の作成』を参照してください。

## DB2 データベース別名の作成

ClearQuest Windows クライアントを使用して ClearQuest DB2 バージョンのデータベースにアクセスするには、Client Configuration Assistant を使用して、使用する ClearQuest 物理データベースごとにデータベース別名を作成する必要があります。管理者が、DB2 データベース別名を作成するときに使用する特定の DB2 別名を割り当てます。

**注:** DB2 8.1 クライアントと DB2 7.2 サーバーの間のデータベース接続を作成することは許可されません。DB2 8.1 クライアントと DB2 7.2 サーバー間は接続できません。サポートされる組み合わせを以下に示します。

- DB2 7.x クライアントと DB2 7.x サーバー

- DB2 7.x クライアントと DB2 8.1 サーバー
- DB2 8.1 クライアントと DB2 8.1 サーバー

これ以外のクライアントとサーバーのバージョンの組み合わせはサポートされないため、お勧めできません。

1. DB2 7.x の場合は、Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[IBM DB2] の順にポイントし、[クライアント構成アシスタント] をクリックします。DB2 8.1 の場合は、Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[IBM DB2]、[Set-up Tools] の順にポイントし、[Configuration Assistant] をクリックします。
2. DB2 7.x の場合は、[クライアント構成アシスタント] ダイアログ ボックスで [追加] をクリックします。次に、[ネットワークを検索する] をクリックし、[次へ] をクリックします。DB2 8.1 の場合は、[DB2 Message] ダイアログ ボックスで [Yes] をクリックします。次に、[ネットワークを検索する] をクリックし、[次へ] をクリックします。
3. [識別されたシステム] フォルダを展開します。ClearQuest データベースが配置されている DB2 データベース サーバー ホストが表示されている場合は、そのサーバーのフォルダを展開し、別名を作成するデータベース名を選択します。[次へ] をクリックします。

**注:** 対象の DB2 サーバー ホストが見つからない場合は、[他のシステム] を展開してください。それでもホストが見つからない場合は、ClearQuest データベース管理者に問い合わせてください。ネットワークに問題があることも考えられます。

4. [データベース別名] ボックスに別名を入力します。[注釈] ボックスに任意の注釈を入力し、[次へ] をクリックします。
5. [このデータベースを ODBC に登録] オプションがオンになっている場合は、オフにします。[完了] をクリックします。
6. 確認のダイアログ ボックスが表示されます。DB2 データベースへのアクセスをテストするには、[Test Connection] をクリックし、[User ID] ボックスにユーザー名を入力して、[Password] ボックスにパスワードを入力します。

接続が失敗した場合は、次のコマンドを使用して接続を再試行します。

## db2

```
db2> catalog TCPIP node node-name remote host-name server
port-number
```

```
db2> catalog database database-alias at node node-name
```

```
db2> terminate
```

ClearQuest クライアントで、ClearQuest メンテナンス ツールを使用してスキーマ リポジトリを作成するか、DB2 データベース サーバーへの接続を設定する場合、DB2 クライアントの使用時に作成したデータベース別名がメンテナンス ツールの [データベースの別名] ボックスに設定されます。

---

## ClearQuest と ClearQuest MultiSite のインストール後のその他の作業

ClearQuest のインストール後に必ず実行する必要がある作業がいくつかあります。その他のインストール後の設定手順はオプションです。実行する必要があるかどうかは、選択したインストール オプションによって決まります。

ClearQuest のインストール後に必ず実行する必要がある手順は次のとおりです。

- ClearQuest データベース (スキーマ リポジトリとユーザー データベース) の作成
- ClearQuest データベースへの接続
- Windows ユーザー向けの電子メール通知の有効化

ClearQuest MultiSite のインストール後に必ず実行する必要がある作業もいくつかあります。その他のインストール後の設定手順はオプションです。実行する必要があるかどうかは、選択したインストール オプションによって決まります。

ClearQuest MultiSite のインストール後に必ず実行する必要がある手順は次のとおりです。

- ClearQuest データベースの作成
- ClearQuest データベースのレプリカの作成
- MultiSite のコントロール パネルの設定 (Shipping Server のみ)

ClearQuest MultiSite のインストール後のオプションの設定手順は次のとおりです。

- レコードのマスターシップのセットアップ
- MultiSite のコントロール パネルの設定
- 同期の自動化

## Rational ユーザー グループへの加入

ClearQuest をインストールした後で、Rational ユーザー グループに参加できます。Rational ユーザー グループは、経験の共有、質問の提起、ほかの ClearQuest ユーザーからの情報の入手に役立つ電子メール フォーラムです。グループに加入するには、IBM developerWorkspaces の Web サイト (<http://www-136.ibm.com/developerworks/rational/community/>) を参照してください。

---

## ClearQuest の必須の設定手順

ClearQuest の必須の設定手順は次のとおりです。

- ClearQuest データベースの作成
- ClearQuest データベースへの接続
- 電子メール通知の有効化

---

## ClearQuest データベースの作成

ClearQuest をインストールし、必要な空の製造元データベースを作成したら、次に ClearQuest データベース (スキーマ リポジトリとユーザー データベース) を作成します。まず、製品についての理解を深めるために、サンプル データベースを作成してみる方法もあります。その場合、後からユーザー データベースを作成できます。

評価用のデータベースの設定方法については、34 ページの『評価用 IBM Rational ClearQuest のインストール』を参照してください。

## スキーマ リポジトリの作成

新しいスキーマ リポジトリを作成するには

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[ClearQuest メンテナンス ツール] をクリックします。
2. [スキーマ リポジトリ] メニューの [作成]をクリックします。
3. [既存の接続] 領域で、スキーマ リポジトリ接続の名前を入力し、[Enter] を押します。
4. [スキーマ リポジトリのプロパティ] 領域で、[製造元] リストから製造元データベースを選択します。

次に、製造元データベースに関する必要な情報を入力します。

### Access の場合

[物理データベース名] ボックスに、UNC スタイルのパスを使用して、スキーマ リポジトリの完全なパスを入力します。例を次に示します。

```
¥¥DevServer¥ProjectShare¥CQ_DBS¥schema_repo.mdb
```

データベースを格納するディレクトリを参照して指定することもできます。UNC スタイルのパス名になるように、Windows の [ネットワーク コンピュータ] でパス名を確認してください。

### SQL\_Anywhere の場合

1. [物理データベース名] ボックスに、UNC スタイルのパスを使用して、スキーマ リポジトリのパスを入力します。例を次に示します。

```
¥¥DevServer¥Project¥CQ_DBS¥schema_repo.db
```

UNC スタイルのパス名になるように、Windows の [ネットワーク コンピュータ] で、データベースを格納しているディレクトリを参照して指定することもできます。次の処理を実行します。

2. データベース サーバーの名前を入力します。
3. SQL Anywhere サーバーとの通信に使用するプロトコルを選択します。
4. データベース ホストの名前を入力します。
5. [接続オプション] ボックスに、接続オプションを入力します。デフォルトの接続オプションは **SERVER\_VER=8.0** です。このオプションは、SQL Anywhere 8.0.1 または 8.0.2 データベースに接続するために使用します。接続オプションの使用の詳細については、『IBM Rational ClearQuest ガイド補足』を参照してください。

### SQL\_SERVER の場合

1. [物理データベース名] ボックスに、SQL Server のスキーマ リポジトリのデータベース名を入力します。

2. [データベース サーバー名] ボックスにデータベース サーバーの名前を入力します。

**注:** 各 ClearQuest ネイティブ クライアントが、このエントリに表示されているとおりの名前を使用して、サーバー ホストにアクセスする必要があります。

3. [管理者名] ボックスに、データベース所有者 (DBO または管理者) のユーザー名を入力します。
4. [管理者パスワード] ボックスに、データベース所有者 (DBO または管理者) のパスワードを入力します。
5. [接続オプション] ボックスに、接続オプションを入力します。接続オプションの使用の詳細については、『IBM Rational ClearQuest ガイド補足』を参照してください。

## ORACLE の場合

1. [サーバー] ボックスに、サーバー名を入力します。
2. [SID] ボックスに、SID またはデータベース インスタンス名を入力します。
3. [ユーザー名] ボックスに、スキーマ リポジトリ用に作成したユーザー名を入力します。
4. [パスワード] ボックスに、指定したユーザー名のパスワードを入力します。
5. [接続オプション] ボックスに、接続オプションを入力します。デフォルトの接続オプションは **LOB\_TYPE=CLOB** です。CLOB (Character Large Object) は、Oracle データベースの複数行検索をサポートしています。接続オプションの使用の詳細については、『IBM Rational ClearQuest ガイド補足』を参照してください。

## DB2 の場合

1. [製造元 (Vendor)] ボックスで、DB2 を選択します。
2. データベース別名 (DB2 データベースを指すデータベース別名) を入力します。
3. スキーマ リポジトリ用に作成した DB2 ログインを入力します。
4. 指定したログイン パスワードを入力します。
5. [次へ] をクリックします。
6. スキーマ定義領域で、以下の処理を実行します。
  - a. [ClearQuest データ コード ページ] ボックスから ClearQuest データ コード ページを選択します。
  - b. (オプション) [サンプル データベースの作成] オプションを選択します。
  - c. [使用するスキーマ] リストから、使用するスキーマを選択します。スキーマのオプションについては、『IBM Rational ClearQuest 管理ガイド』を参照してください。
  - d. [データベース名] ボックスに、スキーマ リポジトリのデータベース名を入力します。
  - e. [説明] ボックスに、説明を入力します。

7. (オプション) [サンプル データベースの作成] オプションを選択した場合は、[サンプル データベースの作成] 領域に、サンプル データベースに指定したデータベースのプロパティを入力します。
8. [完了] をクリックします。[ステータス] ダイアログ ボックスで、スキーマ リポジトリが正常に作成されたことを確認します。

## ユーザー データベースの作成

スキーマ リポジトリを作成した後は、ClearQuest Designer を使用して ClearQuest ユーザー データベースを作成できます。

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[ClearQuest Designer] をクリックします。
2. [スキーマ リポジトリ] ダイアログ ボックスで、ユーザー データベースの作成に使用するスキーマ リポジトリを選択します。
3. [ClearQuest Designer ログイン] ダイアログ ボックスで、デフォルトの ClearQuest 管理者のログイン名とパスワードでログオンします。デフォルトのユーザー名は **admin** です。デフォルトのパスワードは **NULL** なので、空白のままにします。このパスワードはなるべく早く変更し、新規のログインを作成するようにしてください。[OK] をクリックします。
4. [スキーマを開く] ダイアログ ボックスが表示されたら、[キャンセル] をクリックします。
5. [データベース] メニューの [新規データベース] をクリックします。
6. [論理データベース名] ボックスに、作成するユーザー データベースの論理データベース名を入力します。この名前は、5 文字以内で指定します。[次へ] をクリックします。
7. 使用する製造元データベースを選択し、その製造元に応じたプロパティを入力します。(詳しくは、111 ページの『スキーマ リポジトリの作成』を参照してください。) 次に、[実動データベース] または [テスト データベース] をクリックします。[次へ] をクリックします。
8. [次へ] をクリックし、デフォルトの [タイムアウト] と [ポーリング間隔] を確定します。
9. ユーザー データベースに関連付けるスキーマを選択します。
10. [完了] をクリックします。

## ClearQuest データベースへの接続

ClearQuest をインストールしたら、クライアント ユーザーは既存のスキーマ リポジトリに接続する必要があります。ClearQuest 管理者は、ClearQuest Windows のクライアント ユーザーに次の 2 つの方法でデータベースのプロパティ情報を提供できます。

- ClearQuest 管理者が ClearQuest クライアント ユーザーにスキーマ リポジトリのデータベース プロパティを提供し、クライアント ユーザーが新しい接続を作成できます (114 ページの『新規接続の作成』を参照)。
- ClearQuest 管理者が、クライアント ユーザーがスキーマ リポジトリに接続するための接続プロファイルを作成できます (115 ページの『接続プロファイルの使用』を参照)。

**注:** DB2 を ClearQuest データベースとして使用している場合、ユーザーは ClearQuest に接続する前に、DB2 クライアント ソフトウェアをインストールする必要があります。『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』の「インストール前に必要な作業」と「インストール後に必要な作業」の詳細情報を参照するように、ユーザーに指示してください。

ClearQuest Windows ユーザー用のスキーマ リポジトリへの接続を作成するには、ClearQuest メンテナンス ツールを使用してください。

## 新規接続の作成

新規接続を作成するには

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[ClearQuest メンテナンス ツール] をクリックします。
2. [接続] メニューの [新規作成] をクリックします。
3. [既存の接続] 領域で、強調表示されている項目にエイリアス名を入力します。
4. [スキーマ リポジトリのプロパティ] グループ ボックスで、スキーマ リポジトリとして指定されている製造元データベースのプロパティを指定します。ドロップダウン リストから製造元データベースを選択し、そのデータベースの必須プロパティを入力します。

### データベース プロパティ

**MS\_ACCESS** UNC スタイルのパスを使用して、スキーマ リポジトリの完全なパスを入力します。例を次に示します。

¥¥DevServer¥ProjectShare¥CQ\_DBS¥schema\_repo.mdb

データベースを格納するディレクトリを参照して指定することもできます。UNC スタイルのパス名になるように、Windows の [ネットワーク コンピュータ] でパス名を確認してください。

### SQL\_ANYWHERE

UNC スタイルのパスを使用して、スキーマ リポジトリの完全なパスを入力します。例を次に示します。

¥¥DevServer¥ProjectShare¥CQ\_DBS¥schema\_repo.mdb

UNC スタイルのパス名になるように、Windows の [ネットワーク コンピュータ] で、データベースを格納しているディレクトリを参照して指定することもできます。次の処理を実行します。

- データベース サーバーの名前を入力します。
- SQL Anywhere サーバーとの通信に使用するプロトコルを指定します。
- データベース ホストの名前を入力します。
- 接続オプションを入力します。接続オプションの使用の詳細については、『IBM Rational ClearQuest ガイド補足』を参照してください。

### SQL\_SERVER

スキーマ リポジトリを格納するデータベースの SQL Server データベース名を入力します。

- 物理データベースの名前を入力します。
- データベース サーバーの名前を入力します。
- スキーマ リポジトリ用または読み取り専用のユーザー ログイン名を入力します。
- スキーマ リポジトリ用または読み取り専用のユーザー ログイン パスワードを入力します。
- 接続オプションを入力します。接続オプションの使用の詳細については、『IBM Rational ClearQuest ガイド補足』を参照してください。

## ORACLE

スキーマ リポジトリを含むデータベースの Oracle サーバー名と SID (データベース インスタンス名) を入力します。

- スキーマ リポジトリ用に作成した Oracle ログインを入力します。
- 指定したログイン パスワードを入力します。
- 接続オプションを入力します。接続オプションの使用の詳細については、『IBM Rational ClearQuest ガイド補足』を参照してください。

## DB2

DB2 の場合は、データベース別名 (DB2 データベースを指すデータベース別名)、DB2 ログイン、パスワードを入力します。

- スキーマ リポジトリ用に作成した DB2 ログインを入力します。
- 指定したログイン パスワードを入力します。

5. [完了] をクリックします。

## 接続プロファイルの使用

ClearQuest 管理者は、スキーマ リポジトリへの接続時にユーザーにデータベース接続情報を入力させる代わりに、ショートカットとして使用できる接続プロファイルを作成できます。

接続プロファイルを作成することによって、データベースの設定を後で使用したりチームに配布したりするために保存しておくことができ、ClearQuest スキーマ リポジトリに簡単に再接続できるようになります。

ClearQuest 管理者と ClearQuest クライアント ユーザーのいずれでも、接続プロファイルをインポート/エクスポートして後で使うことができます。

接続プロファイルをインポート/エクスポートするには、ClearQuest メンテナンス ツールを使用します。

## 接続プロファイルの作成

接続プロファイルを作成するときは、接続情報をファイルにエクスポートし、後でインポートできるようにしておきます。

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[ClearQuest メンテナンス ツール] をクリックします。
2. [ファイル] メニューの [プロファイルのエクスポート] をクリックします。

3. [接続のエクスポート] 領域で、プロファイルに含める接続を選択します。
4. [ファイル名] ボックスに、プロファイルのパス名とファイル名を入力します。接続プロファイルは、.ini 拡張子を付けて保存する必要があります。

必要に応じて、[参照] ボタンをクリックしてプロファイルの保存場所を指定できます。

5. このプロファイルは、ClearQuest Windows クライアント ユーザーが ClearQuest データベースへの接続情報をインポートする目的で使用できるようにしておきます。

## 接続プロファイルのインポート

以前に作成した接続プロファイルを使用するには、接続プロファイルをインポートします。

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[ClearQuest メンテナンス ツール] をクリックします。
2. [ファイル] メニューの [プロファイルのインポート] をクリックします。
3. [プロファイル情報のインポート] 領域で、インポートするプロファイルのパスとファイル名を入力します。

**注:** リリース領域からの ClearQuest クライアント インストールを完了すると、[インポート] ページの [プロファイル情報のインポート] には、プロファイルのデフォルトの場所 (SitePrep ウィザードを使用して定義した場所) が表示されています。

4. [次へ] をクリックします。
5. インポートする接続を選択し、[スキーマ リポジトリのプロパティ] に表示されている情報を確認して [終了] をクリックします。

## ClearQuest へのログイン

管理者が、ClearQuest メンテナンス ツールを使用してスキーマ リポジトリへの新しい接続を作成した後は、管理者とユーザーが、スキーマ リポジトリにログインして、アクセスするユーザー データベースを選択できます。ログインするには、次の手順に従います。

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[Rational Software]、[Rational ClearQuest] の順にポイントし、[ClearQuest] をクリックします。
2. 複数のスキーマ リポジトリへの接続を作成した場合は、[Rational ClearQuest スキーマ リポジトリ] ダイアログ ボックスでスキーマ リポジトリを選択して [次へ] をクリックします。
3. ユーザー名とパスワードを入力し、ユーザー データベースを選択して、[OK] をクリックします。ClearQuest クライアントが開き、ClearQuest の使用を開始できます。

**注:** [警告 - 無効なログイン] ダイアログ ボックスが表示された場合は、[詳細] をクリックして、情報を確認します。

## 電子メール通知を受信するための ClearQuest クライアントの設定

Windows 上で稼働している ClearQuest クライアントに電子メール通知の受信を設定する方法については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ション ガイド』の「IBM Rational ClearQuest のインストール後に必要な作業」を参照してください。

## 電子メール通知を送信するための ClearQuest クライアントの設定

リリース領域の作成時にサイトに対するデフォルトの電子メール アドレスを設定した場合、ClearQuest Windows 版のクライアント ソフトウェアのインストール時にこの電子メール アドレスがデフォルトとして設定されます。

ユーザーは、ClearQuest Windows 版をインストールした後で、電子メール通知を有効にするか (サイトのデフォルト電子メール アドレスが定義されていない場合)、デフォルト電子メール アドレスを変更することができます。詳細については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ション ガイド』の「IBM Rational ClearQuest のインストール後に必要な作業」を参照してください。

---

## ClearQuest MultiSite の必須の設定手順

ClearQuest MultiSite のインストール後に必ず実行する必要がある手順は次のとおりです。

- ClearQuest データベースの作成
- ClearQuest データベースのレプリカの作成

### ClearQuest データベースの作成

ClearQuest データベースの作成方法については、110 ページの『ClearQuest データベースの作成』を参照してください。

### ClearQuest データベースのレプリカの作成

ClearQuest MultiSite を使用する前に、ClearQuest データベースのレプリカを作成してください。この手順については、『IBM Rational ClearQuest MultiSite 管理ガイド』を参照してください。

IBM Rational Shipping Server を使用してレプリカ作成パケットを送信する場合は、最初に MultiSite のコントロール パネルを設定します。この手順については、118 ページの『MultiSite のコントロール パネルの設定』を参照してください。

---

## ClearQuest MultiSite のオプションの設定手順

ClearQuest MultiSite のインストール後のオプションの設定手順は次のとおりです。

- レコードのマスターシップのセットアップ
- MultiSite のコントロール パネルの設定
- 同期の自動化

## レコードのマスターシップのセットアップ

作業スキーマ リポジトリのサイトで、スキーマを変更し、ClearQuest MultiSite で使用するレコード タイプのレコード フォームに `ratl_mastership` フィールドを追加します。レコード フォーム上のこのフィールドにユーザーがアクセスできるようにすることで、ClearQuest ユーザーが、レコードのマスター レプリカにいて正しい権限を持っている場合であれば、レコードのマスターシップを変更できるようになります。

マスターシップの詳細については、『IBM Rational ClearQuest MultiSite 管理ガイド』を参照してください。

## MultiSite のコントロール パネルの設定

MultiSite のコントロール パネルで、サーバー コンピュータの同期に関する保存および転送機能を制御します。これにより、ほかのレプリカとの間で送受信される更新パッケージを保存および受信する記憶ベイの場所を管理します。IBM Rational Shipping Server を使用してレプリカ作成パッケージを送信する場合は、データベースのレプリカを作成する前に、MultiSite の保存および転送機能を設定してください。

MultiSite のコントロール パネルを開くには

1. Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。
2. [MultiSite] アイコンをダブルクリックします。

MultiSite のコントロール パネルの設定については、『IBM Rational ClearQuest MultiSite 管理ガイド』で MultiSite のコントロール パネルに関するリファレンス ページを参照してください。

## 同期の自動化

MultiSite のスクリプトやユーティリティを使用して、レプリカの同期処理の全フェーズを自動化することができます。同期処理を自動化する方法については、『IBM Rational ClearQuest MultiSite 管理ガイド』を参照してください。

---

## 第 6 章 インストール後に必要な作業: ProjectConsole の設定

この章では、インストール後に ProjectConsole ソフトウェアを設定する方法について説明します。ProjectConsole を、ProjectConsole Web サーバー (レポート サーバーと収集エージェント ソフトウェアを含みます)、リポジトリ、さらにオプションで別々のレポート サーバーと収集エージェント コンピュータにセットアップする方法について説明します。

---

### 前提事項

ここでは、次のことを前提にしています。

- 本書の ClearQuest の項の手順に従ってデータ ウェアハウスをセットアップしていること。
- サーバー コンピュータに ProjectConsole サーバー、レポート サーバー、データ収集エージェントがインストールされていること。

---

### Microsoft Access のサンプル データの表示

ProjectConsole サーバー コンポーネントのインストール中に、IBM Rational セットアップ ウィザードによって、ProjectConsole リポジトリに含まれる次の 2 つの Microsoft Access ProjectConsole サンプル データベース ファイルが自動的に作成されます。

- *InstallDir%sample\_db\_files%InitialPjcMaster.mdb* (スキーマ リポジトリ データベース)
- *InstallDir%sample\_db\_files%InitialPjcWarehouse.mdb* (データ ウェアハウス)

ProjectConsole コンポーネントをサーバーにインストールしたら、ProjectConsole サーバーを再起動します。この手順については、174 ページの『RWP の停止と再開』を参照してください。(サーバーが開始しない場合は、125 ページの『ProjectConsole サーバーのスタートアップ エラー情報の表示』を参照してください。)

ProjectConsole クライアントから ProjectConsole Web サイトにログインし、サンプル リポジトリ データの参照を開始できます。クライアントから ProjectConsole Web サイトにログインする方法については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』の「ProjectConsole Web サイトへのログイン」を参照してください。

---

### ユーザーとグループのセットアップ

ProjectConsole サーバーをインストールし、セットアップしたら、[ユーザー ID] ボックスに **admin**、[パスワード] ボックスに **changeit** と入力すると、管理者としてログインできます。ProjectConsole Web サイトのセキュリティを確保するために、ProjectConsole サーバーのセットアップ後すぐに、開発チーム用に (ユーザー ID とパスワードによって) ユーザーとグループをセットアップすることをお勧めします。

ユーザーとグループのセットアップおよび、サイトのセキュリティの管理については、ProjectConsole のヘルプを参照してください。

---

## ProjectConsole サービスの設定

ここでは、ProjectConsole メンテナンス ツールを使用して、ProjectConsole サーバー上と、レポート サーバーと収集エージェントをインストールした個々のコンピュータ上で、ProjectConsole ソフトウェアを設定する方法について説明します。

- ProjectConsole の Web サーバー コンポーネントでもある IBM Rational Web Platform (RWP) の詳細については、169 ページの『第 9 章 Rational Web Platform のカスタマイズ』を参照してください。
- ProjectConsole メンテナンス ツールで利用できるオプションの詳細については、Rational ProjectConsole メンテナンス ツールのヘルプを参照してください。
- ProjectConsole コンポーネントをサーバーにインストールしたら、ProjectConsole サーバーを再起動します (開始しない場合は、125 ページの『ProjectConsole サーバーのスタートアップ エラー情報の表示』を参照)。

---

## ProjectConsole サーバーと追加のレポート サーバー、収集エージェントの設定

ProjectConsole サービスをサーバー上に設定するか、追加のレポート サーバー、収集エージェント上に設定するには

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム] をポイントします。次に、[Rational Software]、[Rational ProjectConsole] の順にポイントし、[Rational ProjectConsole Maintenance Tool] をクリックします。
2. [Configure the ProjectConsole services] をオンにしたまま、[Next] をクリックします。[次へ] をクリックします。
3. [Web server name] ボックスに、ProjectConsole サーバーの名前を入力します。
4. ProjectConsole Web サーバーがデフォルトのポート (http の場合は 80、https の場合は 443) 以外のポートを使用する場合は、[Web server port] ボックスのデフォルトのポート番号をクリアして、正しい番号を入力します。
5. データ処理のセキュリティを設定するには、[Web server protocol] の横にある [http] をオンにします。

**注:** [https] をクリックすると、[Web server port] ボックスの値が「80」から「443」に変わります。

6. ProjectConsole サーバーがファイアウォールの内側で実行されていて、このサーバー コンピュータの名前がファイアウォールの外側から見えない場合は、次の手順を実行します。それ以外の場合は、手順 7 (121 ページ) に進みます。
  - a. [RMI server name] ボックスに、ProjectConsole サーバー ホスト名または RMI 接続応答メッセージで送信する RMI サーバーの IP アドレスを入力します。
  - b. [RMI server port] ボックスに、RMI サーバーで、動的クライアント接続ポートの代わりに使用する必要がある ProjectConsole サーバー上のポート番号を入力します。

**注:** これらの値は、server.ini ファイルに設定されます。

- c. 静的 ProjectConsole RMI サーバー ポートと動的 RMI サーバー ポートの両方のポート上の要求が ProjectConsole サーバー コンピュータに転送されるようにファイアウォールを設定します。
- d. http (または https) リスニング ポート上の要求を ProjectConsole サーバーに転送するようにファイアウォールを設定します。

この手順が完了すると、http 要求は ProjectConsole サーバー上の Rational Web Platform サーバー コンポーネントに転送され、Dashboard と Designer への RMI 接続は ProjectConsole サーバーに正しく転送されます。

7. [Connection retry interval]ボックスに、Web サーバーへの接続が失敗してから接続を再試行するまでのレポート サーバーと収集エージェントの待機時間を分単位で入力します。
8. Web サーバー (および、レポート サーバーと収集エージェント) が生成し、ログ ファイルに保存するデバッグ情報を制御するには、[Trace level] リストで、以下の追跡レベル値からいずれかを選択します。
  - [Tracing is disabled]: ログ情報からエラーと診断メッセージが除外されます。
  - [Trace errors only]: ログ情報としてエラーは記録されますが、メッセージは除外されます。
  - [Trace errors and warnings]: ログ情報として、エラーとメッセージの両方が記録されます。
  - [Trace all messages]: ログ情報として、すべての診断メッセージが記録されます。
  - [Trace all messages (with call stack)]: ログ情報として、すべての診断メッセージと、エラーの原因の追跡に役立つコール スタックが記録されます。
9. [Log file directory] ボックスで、生成されるログ ファイル用のディレクトリとして、デフォルトのディレクトリ パス (C:\Programs\Rational\ProjectConsole\logs) をそのまま使用するか、別のディレクトリを入力します。
10. [Text template directory] ボックスで、テキスト テンプレート用のディレクトリとして、デフォルトの値 (C:\Programs\Rational\ProjectConsole\templates\Designer) をそのまま使用するか、別のディレクトリを入力します。
11. [Artifact repository] ボックスで、開発成果物の格納用のディレクトリとして、デフォルトの値 (C:\Classics\Projects\Webshop) をそのまま使用するか、別のディレクトリを入力します。
12. 必要な情報を入力したら、[完了] をクリックします。

---

## ProjectConsole リポジトリの作成

ここでは、Microsoft Access、SQL Anywhere、SQL Server、Oracle、DB2 など、データベースのタイプに基づいて ProjectConsole リポジトリを作成する方法について説明します。既存の ProjectConsole リポジトリに接続する必要がある場合は、

『IBM Rational ProjectConsole Release Notes』を参照して、Rational ProjectConsole メンテナンス ツールを捜します。

ProjectConsole メンテナンス ツールを使用して、サポートされる各データベース タイプに合わせてリポジトリを作成することができます。

ProjectConsole リポジトリを作成するには

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム] をポイントします。次に、[Rational Software]、[Rational ProjectConsole] の順にポイントし、[Rational ProjectConsole Maintenance Tool] をクリックします。

ProjectConsole メンテナンス ツールが起動します。

2. [Create or Copy a ProjectConsole repository] をクリックします。[次へ] をクリックします。
3. [ProjectConsole repository information] の [Copy from repository] リストで、新しいリポジトリを初期化するために以下のリポジトリからいずれかを選択します。

- PjC Sample Site - このリポジトリには、ClassicsCD.com のサンプル ProjectConsole Web サイトのすべての要素が含まれます。含まれるものには、サンプル ユーザーとグループ、Web サイト ナビゲーション ツリー、ソース テンプレート、マッピング、ターゲット テーブル、スケジューリングされたタスク、メトリクス パネル、収集されたサンプル測定データがあります。

**注:** PjC Sample Site を使用して新しいリポジトリを初期化した場合は、自分のデータで使用するために後から変更することができます。

- PjC Empty Site: このリポジトリには、空の ProjectConsole サイトが、空の Web サイト ナビゲーション ツリー、最小限のユーザーとグループ、空のデータ ウェアハウスと共に含まれます。

**注:** PjC Empty Site は、ProjectConsole Web サイトを最初から構築するための開始点として使用できます。

- [PjC Demo]: PjC Demo は、ProjectConsole のサンプル サイトです。インストールが完了したときに、ProjectConsole が接続されるサイトです。

**注:** [Copy from repository] リストにあるこれら 3 つの便利なりポジトリは読み取り専用であり、新しくリポジトリを構築する際のたたき台として使用できます。

次元テーブルと測定テーブルについては、Rational ProjectConsole Designer のヘルプを参照してください。メトリクス表示については、Rational ProjectConsole Dashboard のヘルプを参照してください。

4. [New repository name] ボックスに、新しいリポジトリの名前を入力します。
5. [Data warehouse information] の [Database type] リストで、新しい ProjectConsole リポジトリのデータベースの製造元を選択します。
6. [Data warehouse information] で入力する必要のあるその他の情報は、選択したデータベースのタイプによって異なります。

Microsoft Access データベースの場合

- a. [Schema repository] ボックスに、作成したスキーマ リポジトリの完全な共有 UNC (汎用名前付け規則) 名を、次の構文で入力します。

¥¥servername¥sharename¥directory¥databasename

例:

```
¥¥server1¥share1¥directory1¥PjCschemarepository.mdb
```

**注:** スキーマ リポジトリ データベースを指定しない場合、メンテナンス ツールでは次のデフォルト値を使用します。

```
ProjectConsole install directory¥DataRepository¥< new repository  
name>¥SchemaRepository.mdb
```

- b. [Data warehouse] ボックスに、作成したデータ ウェアハウスの完全な共有 UNC 名を、次の構文で入力します。

```
¥¥servername¥sharename¥directory¥databasename
```

例:

```
¥¥server1¥share1¥directory1¥PjCdatawarehouse.mdb
```

**注:** データ ウェアハウス データベースを指定しない場合、メンテナンス ツールでは次のデフォルト値を使用します。

```
ProjectConsole install directory¥DataRepository¥< new repository  
name>¥SchemaRepository.mdb
```

```
ProjectConsole install directory¥DataRepository¥< new repository  
name>¥DataRepository.mdb
```

**注:** ProjectConsole がデフォルトのディレクトリ以外の場所にインストールされた場合、メンテナンス ツールでは正しいディレクトリを使用します。

## DB2 データベースの場合

- [Schema repository information] に、作成した DB2 スキーマ リポジトリの名前を入力します。
- [Schema repository information] の [Username] ボックスに、スキーマ リポジトリへのログインに必要なユーザー名を入力します。
- [Schema repository information] の [Password] ボックスに、スキーマ リポジトリへのログインに必要なパスワードを入力します。
- [Data warehouse information] の [Data warehouse] ボックスに、作成した DB2 データ ウェアハウスの名前を入力します。
- [Data warehouse information] の [Username] ボックスに、データ ウェアハウスへのログインに必要なユーザー名を入力します。
- [Data warehouse information] の [Password] ボックスに、データ ウェアハウスへのログインに必要なユーザー名を入力します。

## Oracle データベースの場合

- [Schema repository information] に、作成した Oracle スキーマ リポジトリを指す SQLNet のエイリアスを入力します。
- [Schema repository information] の [Username] ボックスに、スキーマ リポジトリ用に作成した Oracle ログインを入力します。
- [Schema repository information] の [Password] ボックスに、作成した Oracle ログインのパスワードを入力します。

- d. [Data warehouse information] の [Data warehouse] ボックスに、作成した Oracle データ ウェアハウスを指す SQLNet のエイリアスを入力します。
- e. [Data warehouse information] の [Username] ボックスに、データ ウェアハウス用に作成した Oracle ログインを入力します。
- f. [Data warehouse information] の [Password] ボックスに、作成した Oracle ログインのパスワードを入力します。
- g. [Connect options] ボックスに、データベース サーバーとクライアント コンピュータにインストールされている Oracle のバージョンを、次の形式で入力します。

**SERVER\_VER=8.X**

**CLIENT\_VER=8.X**

データベース サーバーが ProjectConsole サーバー以外のコンピュータの場合は、ProjectConsole サーバーがクライアントです。

**注:** ProjectConsole は Oracle バージョン 8.0 と 8.1 をサポートしています。

SQL Anywhere データベースの場合

- a. [Schema repository] ボックスに、作成したスキーマ リポジトリの完全な共有 UNC (汎用名前付け規則) 名を、次の構文で入力します。

¥¥servername¥sharename¥directory¥filename

例:

¥¥server1¥share1¥directory1¥PjCschemarepository

**注:** スキーマ リポジトリ データベースを指定しない場合、メンテナンス ツールでは次のデフォルト値を使用します。

ProjectConsole install directory¥DataRepository¥< new repository name>¥SchemaRepository.db

- b. [Data warehouse] ボックスに、作成したウェアハウス データベースの完全な共有 UNC 名を、次の構文で入力します。

¥¥servername¥sharename¥directory¥filename

例:

¥¥server1¥share1¥directory1¥PjCdatawarehouse

**注:** データ ウェアハウス データベースを指定しない場合、メンテナンス ツールでは次のデフォルト値を使用します。

ProjectConsole install directory¥DataRepository¥< new repository name>¥DataRepository.db

- c. [Database server] ボックスに、SQL Anywhere データベース サーバーの名前を入力します。
- d. [Protocol(s)] の横にある、SQL Anywhere サーバーとの通信に使用するプロトコルのチェック ボックスをオンにします。

- e. [Hostname(s) (n1, n2,-) ] ボックスに、データベース サーバーの名前 (複数可) を入力します。複数の名前を入力する場合は、カンマで区切ります。
- f. [Connect options] ボックスで、データベース サーバー コンピュータにインストールされている SQL Anywhere のバージョンを、次の形式で指定します。

#### **SERVER\_VER=8.X**

- g. SQL Anywhere サービスを作成します。異なるポート -x TCPIP(ServerPort=3644) で稼働するように、データ ウェアハウスの SQL Anywhere サービスにパラメータを追加します。それからサービスを開始します。

#### **SQL Server データベースの場合**

- a. [Database server] ボックスに、SQL Server データベース サーバーの名前を入力します。
  - b. [Schema repository information] の [Schema repository] ボックスに、スキーマ リポジトリ用に作成した SQL Server データベースの名前を入力します。
  - c. [Schema repository information] の [Username] ボックスに、スキーマ リポジトリ用に作成したデータベース所有者 (DBO または管理者) ログインを入力します。
  - d. [Schema repository information] の [Password] ボックスに、データベース所有者ログインのパスワードを入力します。
  - e. [Data warehouse information] の [Data warehouse] ボックスに、作成した SQL Server データ ウェアハウスの名前を入力します。
  - f. [Data warehouse information] の [Username] ボックスに、データ ウェアハウスに db\_ownerとしてログインするためにセットアップした SQL Server のユーザー名を入力します。
  - g. [Data warehouse information] の [Password] ボックスに、データ ウェアハウスに db\_ownerとしてログインするためにセットアップしたパスワードを入力します。
7. [完了] をクリックします。

ProjectConsole は、リポジトリを作成した後、「Operation complete」というメッセージを表示します。(空のリポジトリを作成するか、データを含んだリポジトリを作成するかによって、時間がかかる場合があります。)

- 8. メンテナンス ツールを終了するには、[Exit] をクリックします。最初の画面に戻るには、[Done] をクリックします。

---

## **ProjectConsole サーバーのスタートアップ エラー情報の表示**

ProjectConsole サーバーのスタートアップ中にエラー メッセージが表示された場合は、エラー ログ ファイルを使用して原因を調べます。

サーバーのスタートアップ中にエラーが発生した場合は、次の操作を行います。

- 1. デスクトップで [マイ コンピュータ] を右クリックし、次にショートカット メニューの [管理] をクリックします。

[コンピュータの管理] ウィンドウが表示されます。

2. 左側のペインの [ツリー] タブで、[サービスとアプリケーション] を展開し、[サービス] タブをダブルクリックします。
3. 右側のペインで、[Rational Web Platform, ReqWeb Servlet engine] を右クリックし、ショートカット メニューの [停止] をクリックします。
4. [サービス] ウィンドウを閉じます。
5. 次のディレクトリにあるエラー ログ ファイルを開きます。

`InstallDir¥logs¥server.log`

6. ログ ファイルの内容を調べて、エラーの原因を確認します。

---

## 第 7 章 インストール後に必要な作業: RequisitePro の設定

この章では、RequisitePro プロジェクト用の DB2 データベース、Oracle データベース、および Microsoft SQL Server データベース、Rational E-Mail Reader、RequisiteWeb を設定する方法について説明します。

**注:** RequisiteWeb を設定する前に、プロジェクト データベースをセットアップする必要があります。

---

### 前提事項

ここでは、次のことを前提にしています。

- DB2 UDB、Oracle または Microsoft SQL Server がデータベース サーバーにインストールされていること。Oracle または Microsoft SQL Server のインストールについては、DB2、Oracle または Microsoft のマニュアルを参照してください。
- クライアント ソフトウェアが、クライアント デスクトップと RequisiteWeb サーバーにインストールされていること (選択したデータベースが DB2 または Oracle の場合)。製品の詳細については、DB2 または Oracle のマニュアルを参照してください。DB2 または Oracle データベースに保存されている RequisitePro プロジェクトにアクセスするには、Web サーバー上で DB2 または Oracle クライアント ソフトウェアを設定する必要があります。
- DB2 データベース、Oracle データベース、または SQL Server データベースの構成スクリプトが、データベース サーバーにインストールされていること (45 ページの『RequisitePro のインストールの準備』と 61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください)。

---

### IBM Rational RequisitePro 用の DB2 の設定

RequisitePro では、RequisitePro プロジェクト データベースで DB2 UDB を使用する機能が用意されています。DB2 データベースで RequisitePro プロジェクトを作成してアクセスするには、このドキュメントで示す DB2 データベースの互換性の使用可能化に関する説明に従ってください。RequisitePro では、1 つの DB2 スキーマでの複数のプロジェクトの使用をサポートしています。RequisitePro プロジェクト作成についての詳細は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』を参照してください。以下の手順には、Requisite プロジェクトを収容する DB2 スキーマの設定時に必要なデータベース管理情報が含まれます。

DB2 データベースの設定に関する最新情報については、『Configuring DB2 for IBM Rational RequisitePro』を参照してください。このドキュメント ファイルは、インストールの実行後、コンピュータの次のデフォルトの場所に格納されます。

C:\Program Files\Rational\RequisitePro\help\DB2Setup.html

## DB2 データベース管理

RequisitePro プロジェクト用に DB2 へのアクセスを設定するには、データベース管理者が次の設定を行う必要があります。

- DB2 データベース サーバー
- RequisitePro プロジェクトを保存する DB2 データベースの名前 (次の手順を参照)

注: デフォルトのインスタンスに RequisitePro データベースが作成されます。

- DB2 データベースにログインするための DB2 サーバー上のオペレーティングシステムのユーザー ID とパスワード

### セキュリティ

データベース管理者のみがデータベース操作 (データベースの除去など) を実行できるようにするには、次の手順を実行します。

1. オペレーティング システム グループ (例: DB2ADS) を作成します。

注: グループ名は 8 文字以内にする必要があります。

2. このグループに DB2 管理者ユーザー ID を割り当てます。
3. DB2 コントロール センターから、RequisitePro データベースが含まれるインスタンスを右マウス ボタン クリックして、[Configure Parameters] を選択します。
4. 管理者ノードで、SYSADM\_GROUP に、ステップ 1 で作成したオペレーティング システム グループと同じ値 (例: DB2ADS) を設定します。

## RequisitePro 用 DB2 スキーマの作成

RequisitePro DB2 スクリプトを使用すると、DB2 サーバーに複数のデータベースとスキーマを作成できます。プロジェクトを保存する **RequisitePro データベースとスキーマ**を DB2 内に作成するには、後に示すスクリプトを使用します。これらの RequisitePro DB2 スクリプトは、RequisitePro によって使用される各種のデータベース テーブルとインデックス用の初期ディスク領域を割り当てることを目的にしています。割り当てられる領域のサイズは、次の概算値に基づいています。

- 25 のプロジェクト
- 250 のドキュメント (各プロジェクトにつき 10)
- 125 のドキュメント タイプ (各プロジェクトにつき 5)
- 125 の要求タイプ (各プロジェクトにつき 5)
- 1,250 のユーザー定義の属性 (各要求タイプにつき 10)
- 125 の ユーザー グループ (各プロジェクトにつき 5)
- 100 人のユーザー
- 12,500 の要求 (各プロジェクトにつき 500)
- 12,500 のディスカッション (各プロジェクトにつき 500)

このスクリプトは、単に RequisitePro スキーマの初期サイズを設定するためのものです。プロジェクトの数とサイズを制限するものではありません。

データベース管理者として、企業内での RequisitePro の用途に合わせてスクリプトをカスタマイズし、バッファプールサイズのサイズとテーブルやインデックスに割り当てるテーブル領域を調整することができます。以下の『スクリプトの編集』の項を参照してください。

## スキーマ作成スクリプト

次のスクリプトは、DB2 データベース内に RequisitePro スキーマを作成するときに使用されます。

**CREATEDB.SQL** データベースを作成します。

**BUFFPOOL.SQL** データベース クエリーの実行に使用するメモリを割り振ります。

**TABLESPACE.SQL** データとインデックス用のテーブル領域を作成します。テーブル領域をサポートするためのディスク ファイルを作成します。

**TABLES.SQL** テーブルごとにテーブルと基本キーを作成します。

注: このスクリプトにより、DB2 サーバーのオペレーティング システム ユーザー ID と同じ名前のスキーマが作成されます。

**INDEXES.SQL** パフォーマンスを改善するために、テーブルにインデックスを作成します。

**FOREIGN.SQL** テーブル間での外部キーの関係を作成します。

**DATA.SQL** データベースに初期データを挿入します。

**TRIGGERS.SQL** トリガを作成します。

**PUTPROCS.SQL** スキーマにストアード プロシージャをロードします。

**PACKAGE.SQL** GRANT.SQL を生成します。

**GRANT.SQL** ストアド プロシージャを実行する権限を付与します。

## RequisitePro スクリプトのコピー

データベース作成スクリプトは、デフォルトでは、  
C:\Program Files\Rational\RequisitePro\database\Oracle ディレクトリに配置されています。スクリプトを DB2 データベース サーバーのサブディレクトリにコピーします。

### メモ:

- 各スクリプトの「読み取り専用」オプションは除去してください。
- スクリプトのサブディレクトリのパスにはスペースを含めないでください。
- データベース サーバーが日本語版以外のオペレーティング システム上で稼働する場合は、スクリプトへのパスに 2 バイト文字の名前が付いたフォルダが含まれないようにしてください。

## スクリプトの編集

次のタスクを順序どおりに実行する必要があります。

1. DB2 サーバーにオペレーティング システム ユーザー (例: reqpro) を作成します。
2. 各スクリプトを開いて、以下のタグを置換します。

ユーザー	置換後の値
<database>	作成されるデータベース名
<instance>	データベースを作成するインスタンス。 注: インスタンスはすでに存在している必要があります。
<user>	DB2 サーバー オペレーティング システム ユーザー
<password>	DB2 サーバー オペレーティング システム ユーザー パスワード
<db2admin>	DB2 のインストール時に指定された管理者ユーザー ID
<db2admin_pwd>	DB2 のインストール時に指定された管理者ユーザー パスワード
<path1>	ソート情報などの一時データ用のシステム管理テーブル領域ファイルを保管するためのドライブとパス (path2、path3 とは異なる必要がある)
<path2>	ソート情報などの一時データ用のシステム管理テーブル領域ファイルを保管するためのドライブとパス (path1、path3 とは異なる必要がある)
<path3>	テーブルやインデックスの保管用のデータベース管理テーブル領域ファイルを保管するためのドライブとパス (path1、path2 とは異なる必要がある)
<script_path>	データベース サーバー上のスクリプトの場所

3. 先に説明した <path1>、<path2>、<path3> のディレクトリが存在することを確認してください。

**注:** 次の 2 つのステップはオプションです。

4. DB2 チューニング ガイドラインに従って、buffpool.sql の SIZE 文節を更新します。
5. 各データ ファイルのページ数を増やして tablespace.sql を更新します。

スクリプトを編集した後は、スクリプトを実行するために管理者として DB2 サーバーにログインしてください。DB2 コマンド ウィンドウを使用してスクリプトコマンドを実行します。スクリプトを以下に示す構文で、この順序で実行します。

**注:** tables.sql スクリプトの実行後に「sql0598w」の警告を受け取った場合、無視してください。

```
db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%createdb.sql
```

```
db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%buffpool.sql
```

```
db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%tablespace.sql
```

```
db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%tables.sql
```

```
db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tvf C:%scripts%foreign.sql
```

```
db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%indexes.sql
```

```
db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%data.sql

db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -td@ -f C:%scripts%triggers.sql

db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%putprocs.sql

db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -td@ -f C:%scripts%package.sql

db2 -l <path_to_scripts>%createdb.log -tf C:%scripts%grant.sql

db2 terminate
```

## DB2 データベースにアクセスするためのユーザー ID

すべての RequisitePro プロジェクトは、同じ DB2 サーバー ユーザー ID を使用して DB2 データベースにアクセスする必要があります。この DB2 サーバー ユーザー ID は、先に説明したとおり、スキーマ作成プロセスで作成されます。

DB2 データベースに接続したら、RequisitePro は、独自のユーザーやユーザー グループの情報をを使用してプロジェクトへのアクセスを制御します。

## DB2 データベース内での複数プロジェクトの使用

RequisitePro では、1 つの DB2 スキーマでの複数のプロジェクトの使用をサポートしています。RequisitePro 内の DB2 データベースへのプロジェクトの追加に関する、『DB2 アクセス用 PC のセットアップ』の手順を参照してください。

## DB2 アクセス用 PC のセットアップ

DB2 Connect Personal Edition を使用して、クライアント PC 上に DB2 データベース サーバーにアクセスするための DB2 別名を作成します。他のユーザーとプロジェクトを共有する場合は、データベース管理者かプロジェクト管理者が決めた整合したデータベース別名を使用してください。

**注:** [このデータベースを ODBC に登録] チェック ボックスがオフであることを確認してください。

## DB2 でのプロジェクトの作成

DB2 での RequisitePro プロジェクトの作成に関する情報は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』の「インストール後に必要な作業」の「Creating a Project in DB2」を参照してください。各 RequisitePro プロジェクトには同じスキーマ名を使用します。

---

## RequisitePro を使用するための Oracle の設定

Oracle データベースで RequisitePro プロジェクトを作成してアクセスするには、ここで示す Oracle データベースとの互換性に関する説明に従ってください。RequisitePro では、1 つの Oracle スキーマでの複数のプロジェクトの使用をサポートしています。次の項では、Requisite プロジェクトを収容する Oracle スキーマの設定時に必要なデータベース管理情報を提供します。Oracle データベースに

RequisitePro プロジェクトを作成する場合は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド』を参照してください。

Oracle データベースの設定に関する最新情報については、『Configuring Oracle for IBM Rational RequisitePro』を参照してください。このドキュメント ファイルは、インストールの実行後、コンピュータの次のデフォルトの場所に格納されます。

C:\Program Files\Rational\RequisitePro\help\OracleSetup.html

## Oracle データベース管理

初期化パラメータ OPEN\_CURSORS を少なくとも 110 に設定する必要があります。

RequisitePro プロジェクト用に Oracle へのアクセスを設定するには、次の構成を行う必要があります。

- Oracle データベース サーバー名 (TCP/IP ホスト名)
- Oracle データベースのエイリアスまたはサービス名
- RequisitePro プロジェクトを保存する Oracle スキーマの名前 (次の手順を参照)
- Oracle データベースへのログオン時に使用するユーザー ID
- Oracle データベースへのログオン時に使用するユーザー パスワード

後の各項では、最後の 3 項目の設定について説明します。

## RequisitePro 用の Oracle スキーマの作成

Oracle データベース管理情報により、Oracle データベース内に複数のスキーマを作成できます。RequisitePro データベース実装は、Oracle でサポートされるすべてのプラットフォームと互換性があります。プロジェクトを保存する RequisitePro ユーザーとスキーマを Oracle 内に作成するには、後に示すスクリプトを使用します。これらの RequisitePro スクリプトは、RequisitePro によって使用される各種のデータベース テーブルとインデックス用の初期ディスク領域を割り当てることを目的にしています。割り当てられる領域のサイズは、次の概算値に基づいています。

- 25 のプロジェクト
- 250 のドキュメント (各プロジェクトにつき 10)
- 125 のドキュメント タイプ (各プロジェクトにつき 5)
- 125 の要求タイプ (各プロジェクトにつき 5)
- 1,250 のユーザー定義の属性 (各要求タイプにつき 10)
- 125 の ユーザー グループ (各プロジェクトにつき 5)
- 100 人のユーザー
- 12,500 の要求 (各プロジェクトにつき 500)
- 12,500 のディスカッション (各プロジェクトにつき 500)

このスクリプトは、RequisitePro スキーマの初期サイズを設定するためのものであり、プロジェクトの数とサイズを制限するものではありません。

エクステンツは、初期割り当て時のサイズに設定されます。これにより、初期割り当て時の領域が不足する場合に Oracle によって割り当てられる追加分のテーブル領域

域が定義されます。組織内での RequisitePro の用途に合わせて、スクリプトの設定を変更することによって、テーブルとインデックス用に割り当てるテーブル領域を調整できます。134 ページの『スクリプトの編集』の項を参照してください。

## スキーマ作成スクリプト

次のスクリプトは、Oracle データベース内に RequisitePro スキーマを作成するときに使用されます。135 ページの『スキーマの作成』で説明されているように、メイン スクリプト CREATE\_REQPRO を実行することによって、これらのスクリプトを自動的に実行できます。また、必要に応じて、これらのスクリプトを個別に実行することもできます。

<b>CREATE_REQPRO.</b>	スクリプトの実行結果を確認するときに使用するログを作成し、後に示すその他のスクリプトを実行します。
<b>TABLESPACE.</b>	データとインデックス用のテーブル領域を作成します。テーブル領域をサポートするためのディスクファイルを作成します。
<b>CREATE_USER.</b>	デフォルトの RequisitePro ユーザー (REQPRO) とパスワード (REQPRO) を作成し、そのユーザー ID でデータベースに接続します。
<b>TABLES.</b>	RequisitePro データベース用のテーブルを作成します。
<b>PRIMARY.</b>	RequisitePro の各テーブルのプライマリ キーを作成します。
<b>INDEXES.</b>	RequisitePro データベース用のインデックスを作成します。
<b>FOREIGN.</b>	テーブル間での外部キーの関係を作成します。
<b>FUNCTIONS.</b>	RequisitePro 内で使用されるユーザー定義関数を作成します。
<b>SEQUENCE.</b>	プライマリ キーを自動的に順次編成するためのシーケンスとトリガを作成します。
<b>PROCEDURES.</b>	RequisitePro 内で使用するストアド プロシージャを作成します。
<b>DATA.</b>	RqKeys テーブルと RqRequisite テーブルにデータを挿入します。
<b>GRANT_ROLE.</b>	RequisitePro スキーマ オブジェクトへのアクセスをユーザーに許可します。

## RequisitePro スクリプトのコピー

RequisitePro のインストール時にデフォルトのインストールを選択した場合、データベース作成スクリプトはデフォルトで

C:\Program Files\Rational\RequisitePro\database\Oracle に保存されます。

スクリプトを Oracle データベース サーバーのサブディレクトリにコピーします。コピー先として、サーバーのホーム ディレクトリの下に「Oracle」というディレクトリを作成することをお勧めします。

**注:** データベース サーバーが日本語版以外のオペレーティング システム上で稼働する場合は、スクリプトへのパスに 2 バイト文字の名前が付いたフォルダが含まれないようにしてください。

## スクリプトの編集

**スキーマ名の変更 (オプション):** スキーマの名前をデフォルト以外の名前に変更するには、Create\_ReqPro スクリプトの次のエントリを修正します。

```
#DEFINE ReqPro_Data= schemaName_DATA
#DEFINE ReqPro_Index=schemaName_INDEX
```

**ユーザー名とパスワードの修正 (オプション):** デフォルトのユーザー名とパスワード値である「ReqPro」とは異なるエントリを使用してスキーマを作成するには、次のエントリを修正します。

```
DEFINE USR=reqpro
DEFINE PWD=reqpro
```

**注:** スキーマのパスワードを入力するときには、英語以外の文字は使用しないでください。

**スキーマ スクリプトのパスの指定:** DEFINE PATH エントリを編集して、RequisitePro の Oracle スクリプトを格納する場所をフル パスで指定します。133 ページの『RequisitePro スクリプトのコピー』に示したパスの場合、推奨されるパスは、次のとおりです。

```
DEFINE PATH="$HOME/sql/"
```

**注:** RequisitePro SQL スクリプトの存在場所のフル パスを入力する際、スペースは使用しないでください。ディレクトリ名に 8 文字までしか使用できない場合は、エントリにこの書式を使用してください。

**データとインデックス ファイルのディレクトリの指定:** DEFINE ORACLE\_DATA エントリを編集して、データ テーブル領域用のデータ ファイルが作成されるパスとディレクトリを指定します。例を次に示します。

```
DEFINE ORACLE_DATA=<full path>/ORACLE_DATA/
```

DEFINE ORACLE\_INDEX エントリを編集して、インデックス テーブル領域用のデータ ファイルが作成されるパスとディレクトリを指定します。例を次に示します。

```
DEFINE ORACLE_INDEX=<full path>/ORACLE_INDEX/
```

**注:** スクリプトを実行する前に、パス内の ORACLE\_DATA と ORACLE\_INDEX サブディレクトリを作成する必要があります。

**一時テーブル領域の指定:** CREATE\_REQPRO スクリプト内の DEFINE TEMP エントリを編集して、ユーザーが使用する一時オブジェクト保存用の一時テーブル領域を割り当てます。

```
DEFINE TEMP=TEMP
```

このエントリの値が、Oracle データベース内に存在する有効なテーブル領域を示すことを確認してください。Oracle のバージョンによっては、「TEMP」ではなく、「TEMPORARY\_DATA」が使用されている場合があります。Oracle のインストールの状況によっては、一時テーブル領域にユーザー定義の名前が使用されている場合もあります。

#### **データベース オブジェクト用ディスク領域の割り当ての変更:** 132 ページの

『RequisitePro 用の Oracle スキーマの作成』で説明されるスキーマ作成スクリプトは、平均的な RequisitePro プロジェクトのセットによって使用される各種のデータベース テーブルとインデックス用のディスク領域を割り当てるためのスクリプトです。

組織内での RequisitePro の用途により、必要な初期ディスク領域のサイズが前に示した概算サイズよりもかなり大きくなる (またはかなり小さくなる) と予想される場合には、CREATE\_REQPRO スクリプトに指定されたディスク領域の割り当てを変更して、予想される容量を収容できるようにできます。

ディスク領域の割り当てを変更するには、サイズに関連する次の変数を編集します。

<b>SMALL</b>	= 10K
<b>MEDIUM</b>	= 100K
<b>LARGE</b>	= 1000K
<b>REQS</b>	= 6000K
<b>REQHIST</b>	= 75000K

**注:** 最後の 2 つの変数 REQS と REQHIST は、要求 (RqRequirements) テーブルと要求の履歴 (RqRequirementHistory) テーブルでそれぞれ使用します。

DEFINE DATA\_SIZE と DEFINE INDEX\_SIZE のエントリを編集し、サイズ関連の変数を編集した結果生じたデータベース全体のサイズ変更を反映させます。

**VARCHAR2 データ型の制限の変更:** RequisitePro は、VARCHAR2 データ型を使用して、要求テキスト、改訂履歴の理由、テキスト形式の属性値に関して検索可能なテキストを保存します。

RequisitePro Oracle スクリプトでは、このデータ型の文字数を 2000 までに制限しています。現在のバージョンの Oracle では、4000 文字までサポートしており、検索可能なテキストの最大文字数に関する制限が緩和されています。この制限を修正するには、CREATE\_REQPRO スクリプトで MAX\_VARCHAR 値を 2000 から最大 4000 まで増やします。

## **スキーマの作成**

次の手順に従って、Oracle 内部に RequisitePro スキーマを作成します。

1. 134 ページの『スクリプトの編集』の説明に従って、CREATE\_REQPRO スクリプトを編集します。
2. Oracle データベース サーバー上で、システム管理者権限により SQL\*Plus にログオンします。

注: リモート クライアントから SQL\*Plus を実行する場合は、RequisitePro の CREATE\_USER スクリプトを編集する必要があります。connect &3/&4 のエントリを、次のように変更します。

**connect &3/&4@<target Oracle database server alias>**

3. 次のコマンドを使用して、CREATE\_REQPRO スクリプトを実行します。

**@<setup directory>%CREATE\_REQPRO**

このスクリプトによって、スキーマ作成スクリプトが実行されます。スキーマ作成処理が正常に終了すると、メッセージが表示されます。エラーが発生した場合または完了メッセージが表示されない場合は、CREATE\_REQPRO.LOG ログを確認してください。

## Oracle データベースにアクセスするためのユーザー ID

すべての RequisitePro プロジェクトから、共通のユーザー ID を使用して Oracle データベースにアクセスする必要があります。この ID は、先に説明したスキーマ作成処理で作成されるものです。134 ページの『スクリプトの編集』で説明したように、CREATE\_REQPRO スクリプトを変更しない限り、スクリプトが作成する初期設定のユーザー名とパスワードはそれぞれ「reqpro」と「reqpro」です。Oracle データベース ユーティリティを使用してパスワードの変更もできます。

RequisitePro では独自のユーザーやユーザー グループのテーブルを使用してプロジェクトへのアクセスを制御するため、各ユーザーが個別に Oracle のアカウントを持つ必要はありません。

## Oracle データベース内での複数のプロジェクトの使用法

RequisitePro では、1 つの Oracle スキーマでの複数のプロジェクトの使用をサポートしています。RequisitePro 内に Oracle データベース プロジェクトを追加する手順については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストレーション ガイド』の「Oracle でのプロジェクトの作成」を参照してください。各 RequisitePro プロジェクトには同じスキーマ名を使用します。

## 異なるデータベース内にある複数のプロジェクトの接続

次の手順に従って、Oracle の分散データベース環境下の複数プロジェクト間の追跡可能性を使用できるようにします。詳細については、以下の各項を参照してください。

- ・ リモート データベースへの参照の作成
- ・ リモート データベースへのデータベース リンクの作成
- ・ RequisitePro の各クライアントでのデータベースのエイリアスの定義

### リモート データベースへの参照の作成

Oracle の分散データベース環境下のプロジェクト間で追跡可能性のクエリーを実行するには、リモート データベースを示す参照を各データベースに定義します。

Oracle サーバー上にある tnsnames.ora ファイルを編集して、リモート サービスの名前、ホスト、ポート、プロトコルを定義します。

次に、データベース「server02」を「server01」のリモート データベース サーバーとして tnsnames.ora ファイルに定義するときの構文例を示します。

```

Server02.world =
(DESCRIPTION =
(ADDRESS_LIST =
(ADDRESS =
(COMMUNITY = tcp.world)
(PROTOCOL = TCP)
(Host = server02)
(Port = 1521)))
(CONNECT_DATA = (SID = ORCL)))

```

同様に、データベース「server02」についても、「server01」をリモート データベースとして定義するエントリを記述する必要があります。

```

Server01.world =
(DESCRIPTION =
(ADDRESS_LIST =
(ADDRESS =
(COMMUNITY = tcp.world)
(PROTOCOL = TCP)
(Host = server01)
(Port = 1521)))
(CONNECT_DATA = (SID = ORCL)))

```

注: この機能は、TNSNAMES によるサービスの名前解決を使用したテストで確認されています。Oracle Names Server またはその他のネーム サーバー メカニズムを使用する場合は、別の方法でセットアップする必要があります。

## リモート データベースへのデータベース リンクの作成

次に、SQL ユーティリティを使用して、各データベースに、各リモート データベースへのデータベース リンクを作成します。このリンクは、RequisitePro スキーマを所有しているユーザー アカウントで定義する必要があります。次に、「server01」から「server02」へのリンクを作成するときの構文例を示します。

```

CREATE DATABASE LINK server02.world
CONNECT TO reqpro IDENTIFIED BY reqpro
USING 'server02.world';

```

server02 データベースでも同様のステートメントを実行して、server01 へのリンクを定義します。

**db\_name.db\_domain** 構文によって、リンクが必要になる各データベースに固有な名前が作成されない場合は、**@connection\_qualifier** 構文を使用して固有の名前を作成します。

この命名規則は、`initiorcl.ora` ファイルの `global_names` パラメータの設定に関係なく適用されます。

## RequisitePro の各クライアントでのデータベースのエイリアスの定義

RequisitePro の各クライアント（またはネットワークの中心で共有されるコンピュータ）上で、各データベースについての SQL\*Net データベースのエイリアスまたは Net8 のサービス名（ローカルの `tnsnames.ora` ファイルのエントリ）を定義します。クライアント上に定義したデータベースのエイリアスまたはサービス名は、136 ページの『リモート データベースへの参照の作成』と137 ページの『リモート データベースへのデータベース リンクの作成』で示した手順で定義したデータベースリンクと一致させる必要があります。これにより、RequisitePro の複数プロジェクト間の追跡可能性機能が正常に動作します。

## Oracle にアクセスするためのデスクトップの設定

Oracle の SQL\*Net または Net8 Easy Configuration ツールを使用して、クライアントから Oracle データベース サーバーへのアクセスを設定するように、ユーザーに指示します。ユーザーがほかのユーザーとプロジェクトを共有する場合は、整合性のあるデータベースのエイリアスまたはサービス名を使用する必要があります。

## Oracle でのプロジェクトの作成

Oracle での RequisitePro プロジェクトの作成に関する情報は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド』の「インストール後に必要な作業」の「Oracle でのプロジェクトの作成」を参照してください。各 RequisitePro プロジェクトには同じスキーマ名を使用します。

---

## RequisitePro を使用するための SQL Server の設定

SQL Server データベースで RequisitePro プロジェクトを作成してアクセスするには、ここで示す SQL Server データベースとの互換性に関する説明に従ってください。RequisitePro では、1 つの SQL Server スキーマでの複数プロジェクトの使用をサポートしています。RequisitePro データベース実装は、Microsoft SQL Server でサポートされるすべてのプラットフォームと互換性があります。この項には、RequisitePro プロジェクトを収容する SQL Server スキーマの設定時に必要なデータベース管理情報が含まれます。SQL Server データベースに RequisitePro プロジェクトを作成する場合は、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド』を参照してください。

SQL Server データベースの設定に関する最新情報については、『Configuring SQL Server for IBM Rational RequisitePro』を参照してください。このドキュメント ファイルは、デフォルトでは、インストールの実行後、システムの次の場所に格納されます。

`C:\Program Files\Rational\RequisitePro\help\SQLsetup.html`

**注:** SQL Server に既存の RequisitePro データベースがあり、SQL Server ソフトウェアが以前のバージョンからバージョン 7.0 に既にアップグレードされている場合、次のストアード プロシージャを SQL Server で実行して、データベース互換性レベルを SQL Server 7.0 に設定する必要があります。

```
sp_dbcmptlevel <database name>, 70
```

例を次に示します。

```
sp_dbcmptlevel RequisitePro, 70
```

この処理は、RequisitePro で SQL Server 構文エラーを防ぐために必要です。

本書で示す RequisitePro と SQL Server の統合を行うには、後に示すインストールと設定に関するタスクを行う必要があります。

**注:** RequisitePro は、SQL Server 2000 の「名前付きインスタンス」で使用できません。

## SQL Server データベース管理

RequisitePro から SQL Server へのアクセスを設定する前に、次の構成を行う必要があります。

- SQL Server コンピュータ名 (TCP/IP ホスト名)
- SQL Server での RequisitePro プロジェクト用のデフォルト データベース (「RequisitePro」など)
- SQL Server データベースへのログオン時に使用するユーザー ID (「ReqPro」など)
- SQL Server データベースへのログオン時に使用するユーザー パスワード (「reqpro」など)

**注:** スペースを含むデータベース名は、RequisitePro プロジェクトでは使用できません。

後の各項では、最後の 3 項目の設定について説明します。

## RequisitePro 用の SQL Server スキーマの作成

次の手順に従って、RequisitePro プロジェクト用の SQL Server データベースとスキーマを作成します。RequisitePro 用の初期データベース サイズは、次の概算値に基づいています。

- 25 のプロジェクト
- 250 のドキュメント (各プロジェクトにつき 10)
- 125 のドキュメント タイプ (各プロジェクトにつき 5)
- 125 の要求タイプ (各プロジェクトにつき 5)
- 1,250 のユーザー定義の属性 (各要求タイプにつき 10)
- 125 の ユーザー グループ (各プロジェクトにつき 5)
- 100 人のユーザー
- 12,500 の要求 (各プロジェクトにつき 500)
- 12,500 のディスカッション (各プロジェクトにつき 500)

SQL Server 7.0 にデータベースを作成するには、次のようにします。

1. RequisitePro データベースの名前を入力します。データベースの拡張子は .MDF です。推奨するデータベース名は「RequisitePro」です。

**注:** 異なるデータベース名を使用する場合は、データベース構成スクリプトを変更し、実際に使用する名前を反映させます。

2. データベースの初期サイズを 150 MB に設定します。
3. トランザクション ログ ファイル (.LDF) の初期サイズには、データベース サイズの 3 分の 1 を設定します (この場合は 50 MB になります)。

## スキーマ作成スクリプト

次のスクリプトは、SQL Server データベースに RequisitePro スキーマを作成するために使用します。

- Login and User。デフォルトの RequisitePro ログインとユーザーを作成します。詳細については、「デフォルトのログイン名とユーザー名」を参照してください。
- Tables and Indexes。RequisitePro で必要なテーブルとインデックスを作成します。
- Triggers。連鎖削除を実行するトリガを作成します。
- Initial Data。RequisitePro の初期実行時に必要なデータを挿入します。

## RequisitePro スクリプトのコピー

RequisitePro のインストール時にデフォルトのインストールを選択した場合、データベース作成スクリプトはデフォルトで

C:\Program Files\Rational\RequisitePro\database\sqlserver に保存されます。

スクリプトを SQL Server データベース サーバーのサブディレクトリにコピーします。コピー先として、サーバーのホーム ディレクトリの下に「sql」というディレクトリを作成することをお勧めします。

## スキーマ作成スクリプトの実行

次のスクリプトは、SQL Server データベースに RequisitePro スキーマを作成するために使用します。これらのスクリプトを、示されている順番どおりに実行します。SQL Server Query Analyzer を使用して、スクリプトを個々に実行します。スクリプト実行時に、データベースのドロップダウン リストで RequisitePro データベースを選択します。

**注:** 提供されている SQL Server データベース スクリプトを実行するには、「sa」としてログインするか、「システム管理者」の権限と「セキュリティ管理者」の権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

1. login and user.sql
2. tables and indexes.sql
3. triggers.sql
4. initial data.sql

## デフォルトのログインとユーザー

前に説明したスキーマ作成スクリプトにより、SQL Server でプロジェクトを作成してアクセスするためのデフォルトのユーザー情報が作成されます。ユーザー名によって、スキーマの所有権と名前が決定します (デフォルトでは「reqpro」)。RequisitePro で使用するには、デフォルトのユーザー権限が必要です。

**注:** login and user.sql スクリプトを変更して別のログイン名とユーザー名を使用する場合は、それ以降のスクリプトも変更する必要があります。

**注:** スキーマのパスワードを入力するときには、英語以外の文字は使用しないでください。

スクリプトによって次のデフォルト ユーザー情報が作成されます。

ユーザー	ログイン	パスワード
ReqPro	ReqPro	reqpro

ReqPro ユーザーには、SQL Server で次のステートメント権限が割り当てられます。

**ユーザー**            **ステートメント権限**

**ReqPro**            Create Default、Create Procedure、Create Rule、Create Table、  
Create View

RequisitePro データベース オブジェクトの所有者である ReqPro ユーザーには、SQL Server で次のデータベース権限が自動的に割り当てられます。

**ユーザー**            **データベース権限**

**ReqPro**            すべてのテーブルとビューでの選択、挿入、更新、削除、DRI

## SQL Server でのプロジェクトの作成

SQL Server 内に RequisitePro プロジェクトを作成する方法については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストール ガイド』の「インストール後に必要な作業」の「SQL Server でのプロジェクトの作成」を参照してください。各 RequisitePro プロジェクトには同じスキーマ名を使用します。

---

## Rational E-Mail Reader の設定

Rational E-mail Reader アプリケーションによって、RequisitePro ユーザー情報の中の有効な電子メール アドレスをすべてのディスカッション参加者の電子メールに設定できます。Rational E-mail Reader アプリケーションは、Rational ソフトウェア インストールに付属しています。デフォルトの格納場所は次のとおりです。

c:\Program Files\Rational\common\mailreader.exe

## ディスカッション用の電子メールの設定のための要件

- RequisitePro の各プロジェクトに対して独自の電子メール アドレスを設定する必要があります。

- RequisitePro と RequisiteWeb: RequisiteWeb でのディスカッションのために電子メールを使用できるようにするには、Rational E-mail Reader で SMTP プロトコル オプションを使用してディスカッション用電子メール システムを設定します。MAPI プロトコル オプションは RequisitePro と RequisiteWeb に対してサポートされていません。
- SMTP プロトコルに対応するよう Rational E-mail Reader をセットアップするには、電子メール管理者から次の情報入手する必要があります。
  - SMTP サーバー名
  - POP3 サーバー名
  - 電子メール アドレス (RequisitePro の各プロジェクトにつき 1 つ)
  - 電子メール アドレスに対応する POP3 サーバーのログイン名とパスワード
- Rational E-mail Reader の [サービス情報とオプション] タブでログ ファイル パスを指定します。
- Rational ClearQuest Mail サービスで使用する電子メールを設定する場合は、設定する前にサービスを停止し、設定後にサービスを再開します。
- ネットワーク ベースのプロジェクトの場合は、[ログオン] タブで、Rational ClearQuest Mail サービスのプロパティを設定します。[アカウント] をクリックし、ドメイン ユーザー名とパスワードを入力します。アカウント名を参照する場合は、[ユーザーの選択] ダイアログ ボックスで、[examples] リンクを参照してください。
- RequisitePro の [ツール] メニューの [電子メールの設定] オプションでは、RequisiteWeb ディスカッションの電子メールは設定しません。Rational E-mail Reader を使用して、RequisiteWeb ディスカッションの電子メールを設定してください。

**注:** 詳細については、Rational E-mail Reader のオンライン ヘルプを参照してください。

---

## RequisiteWeb の設定

RequisiteWeb の操作については、以下の項を参照してください。

- Rational Web Platform (RWP) での RequisiteWeb サーバーの設定
- RequisiteWeb のテスト
- RequisiteWeb 用 RequisitePro プロジェクトの管理

Rational Web Platform の詳細については、169 ページの『第 9 章 Rational Web Platform のカスタマイズ』を参照してください。

インストール、設定、既知の問題など、RequisiteWeb に関する最新情報については、IBM Rational Solutions for Windows の CD-ROM の次の場所に収録されている『IBM Rational RequisiteWeb のインストールと設定』を参照してください。

¥Doc¥RequisiteWebInstall.html

また、このガイドは、デフォルトで RequisiteWeb のインストール先の次の場所にも格納されます。

C:\Program Files\Rational\Doc\RequisiteWebInstall.html

『IBM Rational RequisiteWeb のインストールと設定』は、RequisitePro のオンラインでも、『IBM Rational RequisitePro Release Notes』でも参照できます。

## 前提事項

以降で説明する手順では、以下の操作が完了していることを前提としています。

- RequisitePro プロジェクト データベースが設定済みである。
- RequisiteWeb コンポーネントがインストール済みである。これらのコンポーネントがインストールされていない場合は、「インストール前に必要な作業」と 61 ページの『第 3 章 IBM Rational 製品のインストール』を参照してください。
- クライアントから RequisiteWeb にアクセスするには、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストレーション ガイド』のデスクトップ要件と推奨事項の表にリストされている、サポート対象の Web ブラウザのいずれかをインストールする必要がある。これ以外にクライアント システムにインストールする必要があるものはありません。
- Word ドキュメントをオフラインで編集するためには、Microsoft Word をクライアント システムにインストールする必要がある。
- RequisiteWeb が正常に動作するには、クライアント ユーザーは、ブラウザで cookie と JavaScript が有効になるように設定する必要がある。

## RequisiteWeb サーバーの設定

この項では、RequisiteWeb コンポーネントを Rational Web Server にインストールする方法と以下のタスクを実行する方法について説明します。

- ReqWebUser の作成
- ローカル管理者グループへの ReqWebUser の追加
- ローカル管理者グループへの DCOM 権限の割り当て
- RequisiteWeb 構成ファイルの編集 (オプション)
- Secure Socket Layer (SSL) 有効化
- ReqWebUser への、ネットワーク プロジェクトへのアクセス権限の付与
- インターネットを使用するための RequisiteWeb の設定

**注:** DB2 または Oracle データベースに保存されている RequisitePro プロジェクトにアクセスするには、サーバー上でクライアント ソフトウェアを設定する必要があります。Oracle バージョン 8.1.7 を使用している場合は、RequisiteWeb をインストールする前に Oracle クライアント ソフトウェアをインストールしてください。

### ReqWebUser の作成

RequisiteWeb では、管理者による RequisiteWeb ユーザーの作成が必要です。RequisiteWeb ユーザーの名前は自由です。ここでは、このユーザーを ReqWebUser と呼びます。このユーザーには、RequisiteWeb が正常に動作するために必要な権限が付与されます。ReqWeb 経由でアクセス可能なすべての RequisitePro プロジェクト

トを RequisiteWeb サーバーのローカル ドライブに置く場合は、ReqWebUser を RequisiteWeb サーバーのローカル ユーザーとして作成します。そうでない場合は (ReqWeb 経由でアクセス可能なプロジェクトの中に、ドメイン内のネットワーク ファイル共有に置かれるものがある場合)、ReqWebUser をプライマリ ドメイン コントロール サーバーのドメイン ユーザーとして作成し、プロジェクト ディレクトリに権限を付与します。

**注:** Windows ドメイン サーバーで ReqWebUser ユーザーを作成する場合は、Windows ドメイン サーバーに管理者としてログインします。

表 27 では、ReqWeb ユーザーを作成する方法について説明します。

表 27. RequisiteWeb ユーザーの作成

手順	Windows NT 4.0	Windows 2000 Server/Windows Server 2003
1	ドメイン サーバーで、[スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール (共通)] の順にポイントし、[ドメイン ユーザー マネージャ] をクリックします。	ドメイン サーバーで、[スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール] の順にポイントし、[コンピュータの管理] をクリックします。
2	[ユーザー] メニューの [新しいユーザー] をクリックします。	[ドメイン ユーザー グループ] を展開します。[ユーザー] を右クリックし、[新しいユーザー] をクリックします。
3	[ユーザー名] ボックスで、「ReqWebUser」と入力してから、任意のパスワードを入力します。	[ユーザー名] ボックスで、「ReqWebUser」と入力してから、任意のパスワードを入力します。
4	[ユーザーは次回ログオン時にパスワード変更が必要] チェック ボックスをオフにし、[パスワードを無期限にする] チェック ボックスをオンにします。[追加] をクリックし、[閉じる] をクリックします。	[ユーザーは次回ログオン時にパスワード変更が必要] チェック ボックスをオフにし、[パスワードを無期限にする] チェック ボックスをオンにします。[作成] をクリックし、[閉じる] をクリックします。
5	ユーザー マネージャのアプリケーションを閉じます。	コンピュータの管理のアプリケーションを閉じます。

## ローカル管理者グループへの ReqWebUser の追加

表 28 に ReqWebUser をローカル管理者グループに追加する方法を示します。

**注:** 次の操作を行う場合は、RequisiteWeb サーバーに管理者としてログインする必要があります。

表 28. ローカル管理者グループへの ReqWebUser の追加

手順	Windows NT 4.0	Windows 2000 Server/Windows Server 2003
1	Windows サーバーで、[スタート] メニューから [プログラム]、[管理ツール (共通)] の順にポイントし、[ドメイン ユーザー マネージャ] をクリックします。	Windows サーバーで、[スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール] の順にポイントし、[コンピュータの管理] をクリックします。
2	[ユーザー]、[ドメインの選択] をクリックして、ドメイン サーバーを選択し、コンピュータ名を入力します。[OK] をクリックします。	[ローカル ユーザーとグループ] を展開します。[グループ] をクリックします。[Administrators] を右クリックし、[グループに追加] をクリックします。[Administrators のプロパティ] ダイアログ ボックスで、[追加] をクリックします。

表 28. ローカル管理者グループへの ReqWebUser の追加 (続き)

手順	Windows NT 4.0	Windows 2000 Server/Windows Server 2003
3	[グループ] 列の [Administrators] をダブルクリックします。	ユーザー選択ダイアログ ボックスが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows 2000 Server: [参照] ボックスから、ReqWebUser を作成したドメインを選択します。</li> <li>• Windows 2003 Server: [詳細] をクリックします。[場所 (Locations)] をクリックして、ReqWebUser を作成したドメインを選択します。[OK] をクリックします。[今すぐ検索] をクリックします。</li> </ul>
4	[ローカル グループのプロパティ] ダイアログ ボックスで、[追加] をクリックします。[ドメインまたはコンピュータ] リストで、ドメイン サーバーを選択します。[名前] リストで [ReqWebUser] をクリックし、[追加] をクリックします。[OK] をクリックします。	[ReqWebUser] を選択して [追加] をクリックします。
5	[ローカル グループのプロパティ] ダイアログ ボックスの [OK] をクリックし、ダイアログ ボックスを閉じます。	[OK] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。終了するには [OK] をクリックしてください。
6	ユーザー マネージャのアプリケーションを閉じます。	コンピュータの管理のアプリケーションを閉じます。

## ローカル管理者グループへの DCOM 権限の割り当て

RequisiteWeb では DCOM を使用して Microsoft Word を起動します。これを実行するためには、ReqWebUser が RequisiteWeb で管理者グループのメンバーである必要があります。

**注:** Microsoft Word を RequisiteWeb サーバーにインストールしていない場合は、ここでインストールする必要があります。

### Windows Server 2003 の場合:

ローカル管理者グループにアクセス権限を割り当てるには (Windows Server 2003 の場合)

1. [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックします。次に、「**dcomcnfg**」を入力します。[コンポーネント サービス] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. [コンソール ルート]、[コンポーネント サービス]、[コンピュータ] の順に展開します。
3. [マイ コンピュータ] を右マウス ボタン クリックして、[プロパティ] を選択します。

**注:** [DCOM 構成の警告] ダイアログ ボックスが表示されたら、警告を閉じて次のステップに進んでください。

4. [既定の COM セキュリティ (Default COM Security)] タブを選択します。[アクセス許可] で [既定値の編集] をクリックします。[アクセス許可] ダイアログ ボックスで、[追加] をクリックします。

5. [ユーザーまたはグループの選択] ダイアログ ボックスで、[場所] をクリックします。
6. [場所] ダイアログ ボックスで、[場所] リストから使用しているローカル マシンを選択します。[OK] をクリックします。
7. [ユーザーまたはグループの選択] ダイアログ ボックスで、[詳細設定] をクリックします。[今すぐ検索] をクリックします。
8. [名前] リストで管理者グループを選択して [OK] をクリックします。[OK] をクリックします。
9. [アクセス許可] ボックスで、[アクセス許可] チェック ボックスがオンになっていることを確認します。
10. [OK] をクリックして、[マイ コンピュータ] の [プロパティ] ダイアログ ボックスに戻ります。

ローカル管理者グループに起動権限を割り当てるには (Windows Server 2003 の場合)

1. [既定の COM セキュリティ (Default COM Security)] タブの [起動アクセス許可 (Launch Permissions)] で、[既定値の編集] をクリックします。
2. [起動アクセス許可 (Launch Permissions)] ダイアログ ボックスで、[起動アクセス許可 (Launch Permissions)] チェック ボックスがオンになっていることを確認します。
3. [OK] を 2 度クリックします。
4. [コンポーネント サービス] ダイアログ ボックスを閉じて、システムを再起動します。

#### **Windows 2000 サーバーと Windows NT サーバーの場合:**

ローカル管理者グループにアクセス権限を割り当てるには (Windows 2000 と NT の場合)

1. [スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] をクリックします。次に、「**dcomcnfg**」を入力します。

**注:** この時点で、[DCOM 構成の警告] ダイアログ ボックスが表示されることがあります。警告を閉じて、次の手順に進みます。

2. [既定のセキュリティ] タブをクリックします。[既定のアクセス権] (NT 4.0) または [既定のアクセス許可] (Windows 2000) で、[既定値の編集] をクリックします。
3. [レジストリ値のアクセス許可] ダイアログ ボックスで、[追加] をクリックします。
4. [ユーザーとグループの追加] ダイアログ ボックスの [ドメインまたはコンピュータ] ボックスでローカル コンピュータを選択します。
5. [名前] リストで Administrators グループを選択し、[追加] をクリックします。
6. [アクセスの種類] ボックスで、[アクセスの許可] をクリックします。[OK] を 2 回クリックし、[分散 COM の構成のプロパティ] ダイアログ ボックスに戻ります。

ローカル管理者グループに起動権限を割り当てるには (Windows 2000 と NT の場合)

1. [既定のセキュリティ] タブをクリックします。[既定の起動アクセス許可] で、[既定値の編集] ボタンをクリックします。
2. [レジストリ値のアクセス許可] ダイアログ ボックスで、[追加] をクリックします。
3. [ユーザーとグループの追加] ダイアログ ボックスの [ドメインまたはコンピュータ] ボックスでローカル コンピュータを選択します。
4. [名前] リストで Administrators グループを選択し、[追加] をクリックします。
5. [アクセス権の種類] フィールドで、[起動の許可] をクリックします。[OK] を 2 回クリックし、[分散 COM の構成のプロパティ] ダイアログ ボックスに戻ります。
6. DCOM を閉じ、システムを再起動します。

## RequisiteWeb 構成ファイルの編集 (オプション)

RequisiteWeb 構成ファイルを編集して、catalog.txt ファイルを再配置します。このファイルは、RequisitePro プロジェクトを配置するのに使用します。

カスタマイズされた RequisiteWeb 設定を使用するには、テキスト エディタで以下のファイルを開きます (デフォルトの場所が表示されています)。

C:¥Program

Files¥Rational¥common¥rwp¥webapps2¥ReqWeb¥WEB-INF¥classes¥config.txt

### 注意事項

- 設定の変更を適用するには、Rational Web Platform を再起動する必要があります。このマニュアルの「RWP の停止と再開」の手順に従ってください。
- 変更前に config.txt ファイルのバックアップを取ることをお勧めします。
- この表にリストされていない config.txt の設定を変更する場合には、RequisiteWeb カスタマ サポートに連絡することをお勧めします。
- この手順では、コンピュータの C:¥ ドライブに RequisiteWeb アプリケーションがインストールされていることを前提にしています。この手順を実行するときは、必要に応じて、該当するドライブを指定してください。

Settings	説明	デフォルト
RPXCatalog	RequisitePro プロジェクトの指定に使用するプロジェクト カタログ ファイルへのパス。例: RPXCatalog=C:¥Program Files¥Rational ¥RequisitePro¥ReqWeb¥Projects¥catalog.txt	<空白>

## SSL (Secure Socket Layer) を有効にする

RequisiteWeb では SSL という暗号化システムをサポートしているので、RequisiteWeb とクライアント Web ブラウザとのデータのやり取りの秘密性を確保できます。RequisiteWeb で SSL を 使用するには、169 ページの『第 9 章 Rational Web Platform のカスタマイズ』の手順に従います。

**注:** プロキシ サーバーを使用している場合、RWP で SSL を使用可能に設定する必要はありません。その代わりに、プロキシ サーバーで SSL を使用可能に設定してください。

## ReqWebUser へのネットワーク プロジェクト アクセスの付与

RequisiteWeb 経由でアクセス可能なドメイン内のネットワーク ファイル共有にプロジェクトがある場合は、この項の指示に従ってください。

表 29. ReqWebUser へのネットワーク プロジェクト アクセスの付与

手順	Windows NT 4.0	Windows 2000 Server/Windows Server 2003
1	[スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックし、[サービス] をダブルクリックします。	[スタート] メニューから、[設定]、[コントロール パネル]、[管理ツール]、[サービス] の順にアクセスします。
2	[Rational Web Platform, ReqWeb servlet engine] サービスをダブルクリックし、[サービス] ダイアログ ボックスを表示します。	Rational Web Platform, ReqWeb servlet engine サービスを探し、そのアイコンをダブルクリックして、[プロパティ] ダイアログボックスを表示します。
3	[サービス] ウィンドウの [ログオン] で、[アカウント] をクリックし、作成した ReqWebUser とパスワードを入力します。[OK] をクリックして、サービス ウィンドウを閉じます。	[ログオン] タブをクリックし、[アカウント] をクリックします。作成した ReqWebUser とパスワードを入力して [適用] をクリックします。[OK] をクリックして、Rational Web Platform ウィンドウを閉じます。
4	[Rational Web Platform, ReqWeb servlet engine] サービスを停止して開始し、[Rational Web Platform, HTTP server] サービスを開始して、完了です。	Rational Web Platform, ReqWeb servlet engine サービスを開始または再開して、完了です。

**再起動の実行:** この時点で、システムを再起動する必要があります。再起動後、同じユーザー名でログインすると、インストール処理は完了します。

## インターネットの使用のための RequisiteWeb の設定

このセクションでは、ネットワークに RequisiteWeb へのインターネット アクセスを設定する方法について説明します。以下の概要に加え、手順についても説明しています。

- IBM HTTP Server のリバース プロキシ サーバーとしての使用
- Apache 2.x のリバース プロキシ サーバーとしての使用
- RequisiteWeb の URL の決定

企業の顧客、請負業者、遠距離のチーム メンバーがインターネットを使用して RequisiteWeb にアクセスすることができます。RequisiteWeb を使用してインターネット経由でリアルタイムの要求データにアクセスすることにより、開発チームとその他の要求の関係者の間で、時宜を得た価値あるフィードバックの交換が可能となります。

RequisiteWeb へのインターネット アクセスを設定するときには、企業の知的所有権や知的インフラストラクチャを保護する手順に注意する必要があります。このた

め、企業のネットワークを保護するファイアウォールを設定することをお勧めします。リバース プロキシ サーバーを使用して、インターネットと企業のネットワーク上の RequisiteWeb のようなリソースとの間のファイアウォール経由のアクセスを監視し、制御する必要があります。このような中央アクセス ポイントにより、企業ネットワーク上にあるすべてのマシンではなく、プロキシ サーバーの保護に重点を置くことができます。プロキシ サーバーで、企業のネットワーク上にあるリソースの名前、場所、実装の詳細などの情報をインターネット ユーザーから見えなくすることもできます。

**注:** ネットワーク セキュリティー、ファイアウォール構成、プロキシ サーバー構成は、技術を持った IT スタッフの注意が必要な複雑な問題です。

以下のステップでは、RequisiteWeb へのインターネット アクセスを定義する設定タスクについて要約しています。

1. ファイアウォールのソフトウェアまたはハードウェアをインストールし、設定して、企業のネットワークを無許可アクセスから保護します。ファイアウォールにより、インターネット ユーザーは HTTP または HTTPS を使用してプロキシ サーバーに接続できます。
2. 適切なリバース プロキシ サーバーを識別し、設定します。このマシンは、インターネットと企業ネットワーク (LAN または WAN) に対して異なるインターフェイスで接続されています。適切なソフトウェアを稼働させると、このマシンはファイアウォールとしても機能します。
3. リバース HTTP プロキシ ソフトウェアを選択、インストール、設定して、インターネットから RequisiteWeb へのアクセスを可能にします。要求データの機密性を保護するために、インターネット ユーザーが、暗号化された HTTPS プロトコルを使用して RequisiteWeb に接続しなければならないようにこのソフトウェアを設定します。

このドキュメントでは、以下のリバース HTTP プロキシ ソフトウェア ソリューションを RequisiteWeb と連動させるための設定に関するガイダンスを説明します。

- Apache 2
- IBM HTTP Server バージョン 2.0.42.2 またはそれ以上。バージョン 2.0.42.2 にはパッチが必要です。サポート Web サイト (<http://www.ibm.com/software/webservers/httpservers/support.html>) で PQ77489 を検索してください。それ以降のバージョンにはこのパッチは必要ありません。

### **IBM HTTP Server のリバース プロキシ サーバーとしての使用:**

IBM HTTP Server をリバース プロキシ サーバーとして使用して RequisiteWeb にアクセスするには、以下の処理を行います。

1. プロキシ サーバーに IBM HTTP Server バージョン 2.0.42.2 またはそれ以上をインストールします。先に説明したように、バージョン 2.0.42.2 にはパッチが必要です。

**注:** インストール手順の詳細については、IBM HTTP Server のマニュアルを参照してください。

2. httpd.conf のサーバー構成のコンテキストに以下の行を記述することによって、必要なモジュールをロードするように IBM HTTP Server を設定します。

```
LoadModule ibm_ssl_module modules/mod_ibm_ssl.so LoadModule proxy_module  
modules/mod_proxy.so LoadModule proxy_http_module  
modules/mod_proxy_http.so
```

3. セキュア接続を使用するように IBM HTTP Server を設定します。IBM HTTP Server のマニュアルの「Getting started quickly with secure connections」のセクションを参照してください。
4. 以下の例のように、RequisiteWeb のリバース プロキシとして機能するように IBM HTTP Server を設定します。

以下は、httpd.conf のサーバー構成コンテキストからの引用例です。RequisiteWeb 要求を「rw.rational.com」という名前のサーバーにプロキシするように IBM HTTP Server を設定しています。

```
<IfModule mod_proxy.c>  
  
# フォワード プロキシ要求を無効にする  
  
ProxyRequests Off  
  
# 選択されたホストまたはドメインからの要求を許可する  
  
<Proxy *>  
  
Order Allow,Deny  
  
# rational.com から許可する  
  
</Proxy>  
  
# RequisiteWeb へのアクセスを設定する  
  
ProxyPass /ReqWeb http://rw.rational.com/ReqWeb  
  
ProxyPass /reqweb http://rw.rational.com/reqweb  
  
ProxyPassReverse /ReqWeb http://rw.rational.com/ReqWeb  
  
ProxyPassReverse /reqweb http://rw.rational.com/reqweb  
  
ProxyPass /ReqWebSetup http://rw.rational.com/ReqWebSetup  
  
</IfModule>
```

**注:** どのホストからの RequisiteWeb へのアクセスを許可するかに基づいて独自の「Allow from」指示文を指定する必要があります。

**注:** 「rw.rational.com」を企業のネットワーク上にある実際の RequisiteWeb サーバーの名前に置き換える必要があります。

**注意:** 上記の例では、暗号化されていない RequisiteWeb への HTTP アクセスが許可されています。暗号化された HTTPS 接続を要求するには、上記の設定行を、セキュア接続で使用する仮想ホストの仮想ホスト コンテキストに移動させる必要があ

ります。セキュア接続の仮想ホスト コンテキストには通常 KeyFile と SSLEnable の指示文が含まれており、その内容は以下のとおりです。

```
# ポート 443 での接続を受け入れる

Listen 443

# セキュア接続の仮想ホストを作成する

<VirtualHost _default_:443>

# 証明書が含まれるキー データベース ファイルを設定する

KeyFile "C:/Program Files/IBM HTTP Server 2.0/key.kdb"

# SSL を有効にする

SSLEnable

# HTTPS を要求する move RequisiteWeb プロキシ指示文

</VirtualHost>
```

### **Apache 2 のリバース プロキシ サーバーとしての使用:**

1. Apache 2 をプロキシ サーバーにインストールします。インストールされるのは以下のモジュールです。

- mod\_ssl - このモジュールによって HTTPS 接続が使用可能になります。SSL を使用して、インターネットとプロキシ サーバー間のトラフィックを暗号化します。
- mod\_proxy - このモジュールによって、Apache がフォワード プロキシ サーバーまたはリバース プロキシ サーバーとして機能できます。
- mod\_proxy\_http - このモジュールによって、プロキシ サーバーと RequisiteWeb サーバー間の HTTP 接続が可能になります。

**注:** mod\_ssl が含まれる Apache 2 のバイナリ バージョンを取得するには、ソースから Apache 2 をビルドする必要があります。http://www.apache.org から Apache 2 のマニュアルを参照してください。

2. httpd.conf のサーバー構成コンテキストに以下の行を記述することによって、必要なモジュールをロードするように Apache 2 を設定します。

```
LoadModule ssl_module modules/mod_ssl.so
```

```
LoadModule proxy_module modules/mod_proxy.so
```

```
LoadModule proxy_http_module modules/mod_proxy_http.so
```

3. mod\_ssl を標準に設定します。Apache 2 の該当のリリースのマニュアルを参照してください。

4. Apache 2 を RequisiteWeb のリバース プロキシとして設定します。以下は、httpd.conf のサーバー構成コンテキストからの引用例です。RequisiteWeb の要求を「rw.rational.com」という名前のサーバーにプロキシするように Apache を設定しています。

```

<IfModule mod_proxy.c>

# フォワード プロキシ要求を無効にする

ProxyRequests Off

# 選択されたホストまたはドメインからの要求を許可する

<Proxy *>

Order Allow,Deny

# rational.com から許可する

</Proxy>

# RequisiteWeb のリバース プロキシ要求を設定する

ProxyPass /reqweb http://rw.rational.com/ReqWeb

ProxyPass /ReqWeb http://rw.rational.com/ReqWeb

ProxyPassReverse /reqweb http://rw.rational.com/ReqWeb

ProxyPassReverse /ReqWeb http://rw.rational.com/ReqWeb

ProxyPass /ReqWebSetup http://rw.rational.com/ReqWebSetup

# ブラウザと ReqWeb 用プロキシ サーバーの間の SSL を要求する

<Location ~ "^(ReqWeb|reqweb)">

SSLRequireSSL

</Location>

</IfModule>

```

**注:** どのホストからの **RequisiteWeb** へのアクセスを許可するかに基づいて独自の「Allow from」指示文を指定する必要があります。

**注:** 「rw.rational.com」を企業のネットワーク上にある実際の **RequisiteWeb** サーバーの名前に置き換える必要があります。

**注:** 「SSLRequireSSL」の指示文はオプションです。暗号化された HTTPS 接続を必要としない場合、この文はコメントアウトします。

**RequisiteWeb の URL の決定:** プロキシ サーバーに **RequisiteWeb** へのアクセスを設定したら、インターネット ユーザーからはプロキシ サーバーが **RequisiteWeb** サーバーのように見えます。インターネット ユーザーは、URL を使用して **RequisiteWeb** にアクセスできます。その URL は、「http://」または「https://」で始まり、その後に rw.rational.com のようなプロキシ サーバーの完全修飾されたインターネット ホスト名が続き、「/ReqWeb」または「/reqweb」で終わります。

企業 LAN または WAN 内のローカル ユーザーは、同じ URL を使用することもできますが、完全修飾されたプロキシ サーバー名をプロキシ サーバーまたは RequisiteWeb サーバーの内部名に置き換えることもできます。RequisiteWeb サーバーの内部名を使用するとプロキシ サーバーがう回されるため、最高のパフォーマンスを実現できます。ただし、RequisiteWeb 管理者は、すべてのユーザーがプロキシ サーバー ホスト名を使用して RequisiteWeb にアクセスすることを望みます。なぜなら、そうすると管理者が RequisiteWeb サーバーの置き換えや RequisiteWeb サーバー名の変更を透過的に行うことができるためです。

## RequisiteWeb と IIS

RequisiteWeb では Rational Web Platform (RWP) を Web サービスとして使用します。RWP と IIS は競合するので、RequisiteWeb を IIS が実行されているサーバーで実行するには、以下のいずれかの操作を実行する必要があります。

- IIS を無効にする
- RWP HTTP ポートを変更しリダイレクトする

### IIS を無効にする:

IIS を無効にすると、IIS を使用するすべてのプログラムが動作しなくなります。表 30に、IIS を無効にする方法を示します。

表 30. IIS を無効にする

手順	Windows NT 4.0	Windows 2000 Server/Windows Server 2003
1	[スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリック、[サービス] をクリックします。	[スタート] メニューから、[設定]、[コントロール パネル]、[管理ツール]、[サービス] をクリックします。
2	World Wide Web Publishing サービスを探し、これを選択します。	World Wide Web Publishing サービスを探し、そのアイコンをダブルクリックして、[プロパティ] ダイアログ ボックスを表示します。
3	[サービス] ウィンドウで、[停止] ボタンをクリックして、[スタートアップの種類] を [無効] に変更します。	[全般] タブの [サーバーの状態] で、[停止] ボタンをクリックして、[スタートアップの種類] を [無効] に変更します。 [OK] をクリックして、サービス ウィンドウを閉じます。
4	[閉じる] をクリックします。	[OK] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。[インターネット サービス マネージャ] を閉じます。

**RWP HTTP ポートの変更とリダイレクト:** 次の手順では、RequisiteWeb と IIS が共存できます。デフォルト RWP HTTP ポートを変更し、リダイレクトするには、次の手順に従います。

1. rwp.conf ファイルのデフォルト RWP HTTP ポート (80) を変更します。170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』の手順に従ってください。
2. 以下の手順に従って、RequisiteWeb 用のディレクトリを RequisiteWeb サーバー上に作成します。

- a. 以下のいずれかの操作を実行して、インターネット サービス マネージャを起動します。
  - Windows NT 4.0 の場合は、[スタート] メニューから、[プログラム]、[Windows NT 4.0 Option Pack]、[Microsoft Internet Information Server] の順にポイントし、[インターネット サービス マネージャ] をクリックします。
  - Windows 2000 Server の場合は、[スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール] の順にポイントし、[インターネット サービス マネージャ] をクリックします。
- b. [既定の Web サイト] を右クリックして、[新規作成] をポイントし、[仮想ディレクトリ] を選択します。
- c. [仮想ディレクトリの作成] ウィザードで、[次へ] をクリックして、別名に **ReqWeb** と入力します。
- d. [次へ] をクリックして目を通し、
 

C:\Program Files\Rational\common\RWP\webapps2\ReqWeb を選択して [次へ] をクリックします。
- e. [次へ] と [完了] をクリックして、ウィザードを完了します。
3. 新しく作成した仮想ディレクトリのプロパティで、URL へのリダイレクトを選択し、 `http:// <server name>:<new port>/reqweb` にリダイレクトします。
4. インターネット サービス マネージャを閉じ、Rational Web Platform を再起動します。174 ページの『RWP の停止と再開』の手順に従ってください。

## RequisiteWeb のテスト

RequisiteWeb 内の RequisitePro プロジェクトをテストするには

1. Web ブラウザを開きます。
2. RequisiteWeb サーバーで URL アドレスを「`http://<server name>/reqweb`」に設定して、[Enter] を押します。
 

**注:** Internet Explorer ウィンドウが空白の場合は、[ツール] メニューの [インターネット オプション] をクリックします。[セキュリティ] タブで、信頼できるサイトのリストに [RequisiteWeb] を追加します。必要な場合は、RequisiteWeb のブラウザ表示を更新してください。
3. [プロジェクト] ボックスで、ドキュメントを含む RequisitePro プロジェクトを選択します。プロジェクトがリストに表示されない場合は、155 ページの『RequisiteWeb 用 RequisitePro プロジェクトの管理』の手順を参照してください。
4. RequisitePro の [ユーザー名] と [パスワード] を入力し、[ログイン] をクリックします。
5. ドキュメントをエクスプローラで選択して開きます。ドキュメントが正常に開いた場合、テストは成功です。RequisiteWeb は正しくインストールされています。

**注:** Microsoft Word インストーラが開いたら、完了する必要があります。

## RequisiteWeb 用 RequisitePro プロジェクトの管理

RequisiteWeb により、プロジェクトの要求やドキュメントにアクセスしたり編集することはできますが、プロジェクトやドキュメントを作成するには、RequisitePro コンピュータ クライアント アプリケーションの完全版を使用する必要があります。RequisitePro では、プロジェクト構造やセキュリティを作成、修正するためのプロジェクト テンプレートやほかの管理ツールが利用できます。詳細については、『*Rational RequisitePro ユーザーズ ガイド*』または RequisitePro のオンライン ヘルプを参照してください。

## RequisiteWeb プロジェクト カタログの使用法

RequisiteWeb では、カタログ テキスト ファイルを使用しているため、RequisitePro プロジェクトにアクセスすることができます。デフォルトでは、このファイルに RequisitePro 学習プロジェクトのエントリとほかのサンプル プロジェクトが含まれています。カタログ ファイルに表示されるプロジェクトは、RequisiteWeb のログオン ページの [プロジェクト] ドロップダウン リスト ボックスに表示されます。

カタログに独自のプロジェクトを追加するには、.rqs 拡張子を持つプロジェクト ファイル用のフル パスを入力する必要があります。

**注:** Web サーバーの catalog.txt にリストされているすべてのプロジェクトは、いつでもアクセス可能にしておいてください。このファイルに使用不可のプロジェクトがあると、使用可能なプロジェクトに対する Web サーバーのパフォーマンスに影響する可能性があります。

## RequisitePro プロジェクト カタログの編集

カタログを編集するには、RequisiteWeb サーバーで次の操作を行います。

1. 次のディレクトリに移動します。

`C:\Program Files\Rational\RequisitePro\ReqWeb\Projects`

**注:** プロジェクトが C:\ 以外のディレクトリにインストールされている場合は、catalog.txt ファイルを編集して、正しいインストール ディレクトリを設定する必要があります。

2. テキスト エディタで catalog.txt ファイルを開きます。
3. 各行で、RequisitePro プロジェクト ファイルのフル パスを持つエントリを作成します。デフォルトのプロジェクト エントリの形式をコピーします。

**注:** RequisiteWeb サーバーのローカル プロジェクトへのフル パスを使用します。別のサーバーのプロジェクトにアクセスするには、RequisitePro .rqs ファイルが格納されている共有フォルダへの Universal Naming Convention (UNC) パスを指定する必要があります。たとえば、`\\server_name\full_path\my_project.rqs`です。

4. catalog.txt ファイルを保存して閉じます。

**注:** catalog.txt ファイルへの更新を表示するには、RequisiteWeb からログオフして、RequisiteWeb プロジェクトの「ログイン」ページでプロジェクトを選択する必要があります。

## データベース プロジェクト

RequisiteWeb では、RequisiteWeb サーバーに物理的に格納されていない Access ベース、SQL Server ベース、DB2 ベース、Oracle ベースのプロジェクトを開くことができますが、この場合、ReqWebUser ドメイン ユーザーは、RequisitePro (.rqs) プロジェクト ファイルが格納されているリモート プロジェクト サーバーのディレクトリに対する変更権限または修正権限が必要です。

**注:** SQL Server データベース スクリプトを実行するには、**sa** としてログインするか、「システム管理者」の権限と「セキュリティ管理者」の権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

---

## 第 8 章 インストール後に必要な作業: IBM Rational テスト ツールの設定

テスト環境のセットアップを完了するには、IBM Rational ManualTest Web Execution 用に、テスト データストアと Web サーバーを設定します。この章の前半部分では、IBM Rational Administrator を使用してテスト データストアを構成する方法について説明します。後半部分では、Rational TestManager のコンポーネントである ManualTest Web Execution 用の Web サーバーのインストール方法と構成方法について説明します。

---

### テスト データストアの設定

次の手順に従って、Microsoft Access または Sybase SQL Anywhere のテスト データストアを作成するか、Microsoft Access のテスト データストアを Sybase SQL Anywhere のテスト データストアに変換します。

#### 新しいデータベースを作成するための前提条件

ここでは、次のことを前提としています。

- データベース サーバーに Sybase SQL Anywhere がインストールされていること (Sybase SQL Anywhere データベースをテスト データストアとして使用する場合)。
- IBM Rational Administrator が含まれる製品がインストールされていること。Rational Administrator は、RequisitePro、Robot、SQL Anywhere、TestManager、Rational Suite 製品と共にインストールされます。テスト データストアをセットアップするためには Rational Administrator が必要です。Rational Administrator の詳細については、『IBM Rational Suite 管理ガイド』を参照してください。

#### Microsoft Access テスト データストアの作成

Microsoft Access テスト データストアを作成するには

1. [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Rational 製品] をポイントし、[Rational Administrator] をクリックします。
2. 左側のペインで、設定するプロジェクトを右クリックし、[設定] をクリックします。
3. [Test アセット] の [作成] をクリックします。Rational Administrator によって、[テスト データストアの作成] ウィザードが起動されます。
4. [Microsoft Access] をクリックします。[次へ] をクリックします。
5. 新しいテスト データストアのパスを入力するか、[参照]をクリックします。
6. [完了] をクリックします。

#### SQL Anywhere の設定

SQL Anywhere データベース サーバーを作成するには、次の手順に従います。

- SQL Anywhere データベース サーバーを実行するためのユーザー アカウントを選択または作成し、そのアカウントにユーザー権限を設定します。158 ページの『Windows NT でのユーザー権限の定義』または 159 ページの『Windows 2000 と Windows XP でのユーザー権限の定義』を参照してください。
- SQL Anywhere データベース サーバーを作成します 159 ページの『SQL Anywhere データベース サーバーの作成』を参照してください。

**注:** SQL Anywhere サーバー プロセスは、データストアが格納されているものと同じファイル サーバーで実行することをお勧めします。

## Windows NT でのユーザー権限の定義

SQL Anywhere データベース サーバーを実行するユーザー アカウントの権限を定義するには、次の手順に従います。

1. Sybase SQL Anywhere Server ソフトウェアがインストールされていることを確認します。
2. Windows NT コンピュータで Windows NT Workstation ソフトウェアを実行している場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[管理ツール (共通)] をポイントし、[ユーザー マネージャ] をクリックします。
3. Windows NT コンピュータで Windows NT Server ソフトウェアを実行している場合は、次の操作を行います。
  - a. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール (共通)] の順にポイントし、[ドメイン ユーザー マネージャ] をクリックします。
  - b. [ユーザー] メニューの [ドメインの選択] をクリックし、[ドメイン] ボックスにローカル マシン名を入力します。[OK] をクリックします。

**注:** ユーザーが存在しない場合には、ユーザーを作成します ([ユーザー] メニューの [新しいユーザー] をクリックします)。

4. [原則] メニューの [ユーザーの権利] をクリックし、[ユーザー権利の原則] ダイアログ ボックスを開きます。
5. [高度なユーザー権利の表示] をクリックします。
6. [ユーザー権利の原則] ダイアログ ボックスの [権利] ボックスで、[ネットワーク経由でコンピュータへアクセス] をクリックします。
7. [追加] をクリックします。
8. [ドメインまたはコンピュータ] ボックスで、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するアカウントのドメインを選択します。
9. [ユーザーの表示] をクリックします。
10. [名前] リストで、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するアカウントを選択します。
11. [追加] をクリックして、[OK] をクリックします。
12. [ユーザー権利の原則] ダイアログ ボックスの [権利] ボックスで、[サービスとしてログオン] をクリックします。
13. 手順 7 (158 ページ) から手順 10 (158 ページ) を繰り返します。
14. [ユーザー権利の原則] ダイアログ ボックスの [権利] ボックスで、[ローカルログオン] をクリックします。

15. 手順 7 (158 ページ) から手順 10 (158 ページ) を繰り返します。
16. [OK] をクリックします。
17. [ユーザー] メニューの [ユーザー マネージャの終了] をクリックします。

## Windows 2000 と Windows XP でのユーザー権限の定義

SQL Anywhere データベース サーバーを実行するユーザー アカountの権限を定義するには

1. Sybase SQL Anywhere Server ソフトウェアがインストールされていることを確認します。
2. Windows 2000 Server の場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[管理ツール] をポイントし、[ローカル セキュリティ ポリシー] をクリックします。
3. Windows 2000 Professional の場合は、次の操作を行います。
  - a. Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。
  - b. [管理ツール] を選択します。
  - c. [ローカル セキュリティ ポリシー] を選択します。
4. [ローカル ポリシー] をクリックし、[ユーザー権利の割り当て] をクリックします。
5. [ローカル セキュリティ設定] ダイアログ ボックスの右側のペインで、[サービスとしてログオン] をダブルクリックし、[追加] をクリックします。
6. [ユーザーまたはグループの選択] ダイアログ ボックスの [場所] ボックス (Windows 2000) または [場所を指定してください] ボックス (Windows XP) で、SQL Anywhere ドメイン サーバーを実行するアカウントのドメインを選択します。
7. [名前リスト] で、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するアカウントを選択し、[追加] をクリックします。
8. [OK] を 2 回クリックし、[ローカル セキュリティ設定] ダイアログ ボックスに戻ります。
9. [ローカル セキュリティ設定] ダイアログ ボックスを閉じます。

## SQL Anywhere データベース サーバーの作成

SQL Anywhere データベース サーバーは、データベース サーバー コンピュータ上で実行されるプロセスです。この機能により、SQL Anywhere データベースに対するすべてのアクティビティを調整します。作成した 1 台の SQL Anywhere サーバーから、すべてのデータベース ファイルにアクセスできるようになります。テスト データストアのすべてのファイルにもアクセス可能です。

SQL Anywhere データベース サーバーを作成するには

1. [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Rational Software]、[SQL Anywhere 8.0] の順にポイントし、[Sybase Central] をクリックします。
2. 左側のペインで、[Sybase SQL Anywhere] の [Services] をクリックします。
3. 右側のペインで [Add Service] をダブルクリックして、Create New Service ウィザードを起動します。

4. 新しいサービスの名前を入力して、[Next] をクリックします。

サーバー名にスペースや英数字以外の文字を使用しないでください。アンダースコア ( \_ ) は使用できます。

5. 作成するサービスのタイプとして [Network Database Server] を選択して [Next] をクリックします。
6. 次のウィンドウに、新しいサービスの実行可能ファイルのデフォルトのパスが表示されます。パスをそのまま使用する場合は、[Next] をクリックします。

このパスはデフォルトで設定されます。SQL Anywhere データベース サーバーの実行ファイル (DBSRV8.EXE) は、IBM Rational インストール ディレクトリである SQLANYWHERE8\WIN32 にあります。

7. データベース パラメータ **-n** と **-gd** を指定して、データベース サーバー名と、すべてのユーザーがデータベースを変更できることを指定します。例を次に示します。

```
-n MyDBServer -gd all
```

**注:** ここで入力する名前は、Rational Test データストアの SQL Anywhere データベースを作成するときに必要です。

8. データベースのユーザー アカウントを指定します。[Other] をクリックし、[Administrator] を選択します。そして、パスワードを 2 回入力して、[Next] をクリックします。

**注:** 指定したアカウントは、サーバーが存在するシステムの管理者権限を持っている必要があります。また、少なくとも、関連付けられているテスト データストアが存在するシステムの読み込みと書き込み権限を持っている必要があります。

指定するアカウントには、[サービスとしてログオン] の権限が必要です。アカウントにこの権限がない場合は、その旨を示すメッセージが表示されます。この権限をサービスのインストール時に付与するには、[Yes] をクリックします。

9. サービスを開始する方法を選択して、[Next] をクリックします。IBM では、[Automatic] を選択することをお勧めします。
10. [Start service when created] をクリックし、[Finish] をクリックします。

## SQL Anywhere テスト データストアの作成

SQL Anywhere テスト データストアを作成する前に、Sybase SQL Anywhere ソフトウェアをインストールし、SQL Anywhere データベース サーバーを作成する必要があります。

SQL Anywhere テスト データストアを作成するには

1. [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Rational ソフトウェア] をポイントし、[Rational Administrator] をクリックします。
2. 左側のペインで、設定するプロジェクトを右クリックし、[設定] をクリックします。

3. [Test アセット] の [作成] をクリックします。Rational Administrator によって、[テスト データストアの作成] ウィザードが起動されます。
4. [次へ] をクリックします。
5. 新しいテスト データストアのパスを入力するか、[参照] をクリックして **¥testdatastore** と入力します。
6. SQL Anywhere データベース サーバーの名前を指定します。これは、159 ページの『SQL Anywhere データベース サーバーの作成』のステップ 7 (160 ページ)で SQL Anywhere データベース サーバーを作成するときに指定した名前と同じである必要があります。
  - Rational Test を実行するクライアント コンピュータが SQL Anywhere データベース サーバーとの通信に使用するプロトコルを選択します。IT 部署またはネットワーク スペシャリストとの協議が必要な場合があります。
  - オプションで、迅速に検索するために、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するコンピュータの名前または IP アドレスのカンマ区切りのリストを指定します。これは、SQL Anywhere サーバーを実行するコンピュータが直近のネットワーク セグメント (またはサブネットワーク) 内に存在しない場合に特に重要です。
7. [次へ] をクリックします。初期化するプロジェクトまたはデータストアを指定します。[次へ] をクリックします。
8. [完了] をクリックします。

## Microsoft Access から SQL Anywhere へのテスト データストアの変換

[Rational Test データストアのプロパティ] ダイアログ ボックスを使用して、既存の Microsoft Access テスト データストアを SQL Anywhere テスト データストアに変換できます。

変換を開始する前に、次のことを実行します。

- 変換を開始する前に、テスト データストアをバックアップします。
- Sybase SQL Anywhere ソフトウェアをインストールし、既存の Microsoft Access テスト データストアを SQL Anywhere テスト データストアに変換する前に、SQL Anywhere データベース サーバーを作成します。詳しくは、157 ページの『SQL Anywhere の設定』を参照してください。
- Rational Test データストアのデータベース エンジンを変更する前に、すべてのテスト データストア ユーザーが Rational プロジェクトからログオフしていることを確認します。

既存の Microsoft Access テスト データストアを SQL Anywhere テスト データストアに変換するには

1. 接続するプロジェクトを選択します。[ファイル] メニューの [接続] をクリックします。
2. 左側のペイン (プロジェクト ペイン) のプロジェクト階層で、テスト データストアを選択します。
3. [編集] メニューの [プロパティ] をクリックします。
4. [Advanced Database Setup] をクリックします。

5. [Advanced Database Setup] ダイアログ ボックスで、次の操作を行います。
  - a. [Use Sybase SQL Anywhere for database engine] をクリックします。
  - b. SQL Anywhere データベース サーバーの名前を指定します。これは、159 ページの『SQL Anywhere データベース サーバーの作成』のステップ 7 (160 ページ)で SQL Anywhere データベース サーバーを作成するときに指定した名前と同じである必要があります。
  - c. Rational Test を実行するクライアント コンピュータが SQL Anywhere データベース サーバーとの通信に使用するプロトコルを選択します。IT 部署または適切なネットワーク スペシャリストとの協議が必要な場合があります。
  - d. オプションで、迅速に検索するために、SQL Anywhere データベース サーバーを実行するコンピュータの名前または IP アドレスのカンマ区切りのリストを指定します。これは、SQL Anywhere サーバーを実行するコンピュータが直近のネットワーク セグメント (またはサブネットワーク) 内に存在しない場合に特に重要です。
6. [OK] をクリックして、テスト データストアを SQL Anywhere に変換します。処理が正常に終了しなかった場合は、元の設定に戻され、Microsoft Access がデータベース エンジンとしてそのまま使用されます。
7. [OK] をクリックし、[Rational Test データストアのプロパティ] ダイアログ ボックスを閉じます。

## SQL Anywhere データベース サーバーの管理

SQL Anywhere データベース サーバーの管理の詳細については、Sybase のオンライン ヘルプを参照してください。

---

## IBM Rational ManualTest Web Execution の設定

次の項の手順に従って、ManualTest Web サーバーをインストールして設定します。

### 前提事項

ここでは、サーバーに ManualTest Web Execution ソフトウェアがインストールされていることを前提としています。

### Web サーバーのインストール

Web サーバーをインストールするには

1. 次のいずれかの手順を実行して、Microsoft Windows NT 4.0 Option Pack または Microsoft Internet Information Services 5.0 を Web サーバーにインストールします。
  - Windows XP または Windows 2000 を実行している Web サーバーの場合は、Windows CD から Microsoft Internet Information Services 5.0 をインストールします。
  - Windows NT 4.0 Server を実行している Web サーバーの場合は、Windows NT 4.0 Option Pack の Microsoft Internet Information Server (IIS) をインストールします。

- Windows 98 または Windows NT 4.0 Workstation を実行している Web サーバーの場合は、Windows NT 4.0 Option Pack の Microsoft Personal Web Server (PWS) をインストールします。
2. Web サーバーに Microsoft Internet Explorer 5.0 以上をインストールします。
 

**注:** クライアントでは Microsoft Internet Explorer 4.0 を使用できますが、Web サーバーには Microsoft Internet Explorer 5.0 以上をインストールしてください。
  3. 以下の手順に従って、Microsoft Access Driver を設定します。
    - a. Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。
    - b. 次のいずれかの手順を実行します。
      - Windows 2000 の場合は [管理ツール] をダブルクリックし、次に [データ ソース (ODBC)] をダブルクリックします。
      - Windows 98、Windows NT 4.0 Workstation、Windows NT 4.0 Server の場合は、[ODBC データ ソース] をダブルクリックします。
    - a. [接続プール] タブをクリックします。
    - b. [ODBC ドライバ] で、[Microsoft Access Driver (\*.mdb)] をダブルクリックします。
    - c. [このドライバに接続をプールしない] をクリックし、[OK] をクリックします。
    - d. [OK] をクリックします。
    - e. システムを再起動します。
  4. 次のいずれかの参照先の手順に従って、Web ブラウザからテスト ケースを実行するように Web サーバーを設定します。
    - Windows 2000 Professional、Windows 98、Windows NT 4.0 Workstation のいずれかが稼働している Web サーバーの場合は、166 ページの『Microsoft Personal Web Server の設定』を参照してください。
    - Windows NT 4.0 Server、Windows XP Professional、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server のいずれかが稼働している Web サーバーの場合は、次のセクションである 163 ページの『Microsoft Internet Information Server の設定』を参照してください。

## Microsoft Internet Information Server の設定

Windows XP、Windows 2000、Windows NT 4.0 Server のすべてのバージョンで Microsoft Internet Information Server (IIS) を設定するには

1. 次のいずれかの手順を実行します。
  - Windows XP システムの場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[コントロール パネル] をクリックします。
 

[管理ツール] をダブルクリックします。[インターネット サービス マネージャ] をダブルクリックします。
  - Windows 2000 システムの場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[設定] をポイントします。次に、[コントロール パネル] をクリックします。

[管理ツール] をダブルクリックします。[インターネット サービス マネージャ] をダブルクリックします。

- Windows NT 4.0 の場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Windows NT 4.0 Option Pack]、[Microsoft Internet Information Server] の順にポイントし、[インターネット サービス マネージャ] をクリックします。
2. オプションで、[Internet Information Server] をダブルクリックして、すべてのコンピュータを表示します。
  3. 次のいずれかの手順を実行します。
    - Windows XP システムの場合は、*computername* をダブルクリックします。*computername* は、Web サーバーのネットワーク名です。
    - Windows 2000 と Windows NT 4.0 システムの場合は、*computername* をダブルクリックします。*computername* は、Web サーバーのネットワーク名です。
  4. [既定の Web サイト] をクリックします。
  5. 右クリックして [新規作成] をポイントし、[仮想ディレクトリ] をクリックします。
  6. 次のいずれかの手順を実行します。
    - Windows XP と Windows 2000 の場合は、[次へ] をクリックして次の手順に進みます。
    - Windows NT 4.0 の場合は、次の手順に進みます。
  7. IBM Rational ソフトウェアをインストールした、Web サーバー上のディレクトリのエイリアスを入力します。

例を次に示します。

TM

**注:** このエイリアスを書き留めておいてください。Web ブラウザからテスト ケースを実行するときに、このエイリアスを使用する必要があります。

8. [次へ] をクリックします。
9. IBM Rational ソフトウェアをインストールした場所のドライブとパスを入力するか、[参照] をクリックしてドライブとパスを選択します。

デフォルトの場所は、たとえば次のようになります。

C:\Program Files\Rational Software\Rational Test\www\manual script

10. [次へ] をクリックします。
11. 次のいずれかの手順を実行します。
  - Windows XP と Windows 2000 の場合は、Rational プロジェクトに対する権限として、[読み取り]、[ASP などのスクリプトを実行する] のオプションを選択します。
  - Windows NT 4.0 Server の場合は、Rational プロジェクトに対する権限として、[読み取りアクセスを許可する]、[スクリプト アクセスを許可する]、[実行アクセスを許可する] のオプションを選択します。
12. 次のいずれかの手順を実行します。

- Windows XP と Windows 2000 の場合は、[次へ] をクリックし、[完了] をクリックします。
  - Windows NT の場合は、[完了] をクリックします。
13. 新しいエイリアスを右クリックし、[プロパティ] をクリックします。
  14. [ドキュメント] タブをクリックします。

次のファイルが [既定のドキュメントを有効にする] の下のボックスに表示されていることを確認します。

- Default.asp
- Default.htm

これらのファイルが表示されていない場合は、次の手順を実行します。

- a. [追加] をクリックします。
  - b. **DEFAULT.ASP** と入力して [OK] をクリックします。
15. [ディレクトリ セキュリティ] タブをクリックします。
  16. [匿名アクセスおよび認証コントロール] の [編集] をクリックします。
  17. [匿名アクセスを許可する] をクリックし、[編集] をクリックします。
  18. 次のいずれかの手順を実行します。
    - Windows XP と Windows 2000 の場合は、[IIS によるパスワードの管理を許可する] チェック ボックスをオフにして、次のステップに進みます。
    - Windows NT 4.0 の場合は、[自動パスワード同期を有効にする] チェック ボックスをオフにして、次のステップに進みます。
  19. この Web サーバー (プロジェクトが Web サーバー上にある場合) またはドメイン (ドメインのほかのコンピュータ上の共有プロジェクトにアクセスする場合) のユーザー アカウントのユーザー名とパスワードを入力します。

**注:** Windows XP では、Web クライアントのアクセス ユーザーとして管理者 ユーザーを割り当てることはサポートされていません。

すべての Web クライアントは、このユーザー アカウントを使用して、Web サーバーまたはドメイン (ドメインのほかのシステム上の共有プロジェクトにアクセスする場合) の Rational プロジェクトにアクセスします。このユーザー アカウントで Rational プロジェクトに対して読み取りと書き込みを行うには、管理者権限が必要です。Web クライアントが Rational プロジェクトにアクセスできるようにするには、新しい Rational プロジェクトを作成するときはこのアカウントにログオンするか、Administrator を使用して既存の Rational プロジェクトを登録する必要があります。

**注:** このアカウントに権限を設定することによって、特定の共有プロジェクトへのアクセスを制限できます。権限の設定の詳細については、Microsoft Windows 2000 または Windows NT 4.0 のマニュアルを参照してください。

20. [OK] をクリックして、すべてのウィンドウを閉じます。

## Microsoft Personal Web Server の設定

**注:** Windows NT 4.0 Workstation または Windows 2000 Professional を Personal Web Server と共に使用する場合は、ローカル プロジェクトにのみアクセスできます。Windows 2000 Professional または Windows 98 で共有プロジェクトにアクセスするには、PWS をドメイン ユーザー アカウントの下で実行する必要があります。

Microsoft Personal Web Server (PWS) を Windows 98 または Windows NT 4.0 Workstation サーバーで設定するには

1. Windows 98 または Windows NT 4.0 Workstation の場合は、Windows NT 4.0 Option Pack の Microsoft Personal Web Server (PWS) をインストールします (Microsoft の Web サイト [www.microsoft.com](http://www.microsoft.com) から入手可能)。
2. 次のいずれかの手順を実行します。
  - Windows 98 の場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Microsoft Personal Web Server] をポイントし、[パーソナル Web マネージャ] をクリックします。
  - Windows NT 4.0 Workstation の場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Windows NT 4.0 Option Pack]、[Microsoft Personal Web Server] の順にポイントし、[パーソナル Web マネージャ] をクリックします。
3. [詳細] をクリックします。
4. [<ホーム>] をクリックします。
5. [追加] をクリックします。
6. [ディレクトリ] に、IBM Rational ソフトウェアをインストールした場所のドライブとパスを入力するか、[参照] をクリックしてドライブとパスを選択します。

デフォルトの場所は、たとえば次のようになります。

`C:\Program Files\Rational Software\Rational Test\www\manual script`

7. [エイリアス] に、IBM Rational ソフトウェアをインストールした、Web サーバー上のディレクトリのエイリアスを入力します。

例を次に示します。

TM

**注:** このエイリアスを書き留めておいてください。Web ブラウザからこの Web サーバー上で手動テスト スクリプトを実行するときに、このエイリアスを使用する必要があります。

8. Windows 98 または Windows NT 4.0 Workstation の場合は、[アクセス] の [読み取り]、[実行]、[スクリプト] の各チェック ボックスをオンにします。
9. [OK] をクリックします。
10. [プロパティ] メニューの [終了] をクリックします。
11. Windows 98 または Windows NT 4.0 Workstation に対して、次の手順を完了します。

Windows 98 の場合は、設定は終了です。Windows NT 4.0 Workstation の場合は、次の手順を実行します。

- a. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール (共通)] の順にポイントし、[ユーザー マネージャ] をクリックします。
- b. [ユーザー名] 列で、次のものを選択します。

**IUSR\_computername** ここで *computername* は、Web サーバーの名前です。

- c. [ユーザー] メニューの [プロパティ] をクリックします。
  - d. [グループ] をクリックします。
  - e. [所属しないグループ] の [Administrators] をクリックし、[追加] をクリックします。
  - f. [OK] をクリックします。再度 [OK] をクリックします。
12. [ユーザー] メニューの [ユーザー マネージャの終了] をクリックします。
  13. [OK] をクリックします。再度 [OK] をクリックします。

## Web サーバーのトラブルシューティング

Web サーバーに問題がある場合は、Web サーバーがソフトウェアの要件を満たしていることを確認してください。

問題	エラー メッセージ	解決法
Web ブラウザから、Microsoft Personal Web Server (PWS) を実行している Web サーバーに接続できない。	なし。	PWS を実行している Web サーバーを再起動した場合、サーバーの再起動時に PWS が自動的に開始しない場合があります。これは、断続的に発生する問題です。問題を解決するには、PWS を再開します。

PWS を再開するには

1. [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Windows NT 4.0 Option Pack]、[Microsoft Personal Web Server] の順にポイントし、[パーソナル Web マネージャ] をクリックします。
2. [発行] の [開始] をクリックします。
3. [プロパティ] メニューの [終了] をクリックします。



---

## 第 9 章 Rational Web Platform のカスタマイズ

IBM Rational Web Platform (RWP) は、Rational 製品、Rational ClearCase、Rational ProjectConsole、Rational RequisiteWeb への Web インターフェイスをサーバー側でサポートします。RWP はデフォルトの構成でインストールされますが、その構成はほとんどのサイトに適しています。サイトによっては、インストール後に RWP の構成を変更して、ホストまたはサイトに固有のさまざまな要件に合わせる必要があります。例を次に示します。

- RWP で別の HTTP ポート番号を使用する。
- RWP のログのデフォルトを変更する。
- プロキシとして機能する別の Web サーバーから RWP へのアクセスを設定する。
- RWP でセキュア ソケットを使用するように構成する。

この項では、RWP 構成ファイルを編集して、デフォルトの構成にいくつかの一般的な変更を行う方法について説明します。さらに、ClearCase Web インターフェイスの設定についても説明します。

Rational Web Platform には、Apache HTTP Server バージョン 2.x に基づく Web サーバーと、Tomcat サブレット コンテナ バージョン 4.x. に基づくサブレット エンジンが含まれています。Apache HTTP Server に関する詳細情報は、[www.apache.org](http://www.apache.org) から入手できます。Tomcat サブレット コンテナに関する詳細情報は、[jakarta.apache.org](http://jakarta.apache.org) から入手できます。

Windows では、RWP は必要に応じて第 2 のサブレット エンジンのインスタンスを実行します。

**注:** IBM Rational Web Platform は、IBM Rational 製品への Web インターフェイスのみをサポートします。それ以外の Web アプリケーションまたはコンテンツに対するサービスはサポートしません。

---

### RWP インストール ディレクトリ

RWP は通常、以下のディレクトリにインストールされます。

デフォルトの RWP のインストール ディレクトリを変更するには、インストール時にインストール プログラムからの要求に対して別のパスを指定します。

---

### RWP 構成ファイル

RWP の構成は、複数のファイルで指定されます。以下のファイルは、通常 RWP のインストール ディレクトリの conf サブディレクトリにインストールされます。

- `rwpl.conf` は、RWP サーバーに関する構成パラメータを指定します。
- `ssl.conf` は、セキュア ソケットを RWP サーバーで使用する場合にその構成パラメータを指定します。

- `server.xml` は、RWP サブレット エンジンに関する構成パラメータを指定します。
- Windows の場合、`server2.xml` は、RWP ReqWeb サブレット エンジンに関する構成パラメータを指定します。
- `workers.properties` は、RWP と RWP サブレット エンジン (複数可) との間の接続に関する構成パラメータを指定します。

これらのファイルは、任意のテキスト エディタを使用して編集することができます。これらのファイルには、すべての構成パラメータに関する説明が含まれています。この項では、変更が必要な場合があるいくつかのパラメータについて説明します。

**注:** これらのファイルの構成パラメータを変更した後で、変更内容を有効にするには、RWP を停止して再開する必要があります。174 ページの『RWP の停止と再開』を参照してください。

## 構成ファイルの参照用バージョン

RWP のインストール ディレクトリには、すべての構成ファイルについて参照用バージョンが含まれています。

インストール プログラムでは、これらの参照用バージョンを使用して、構成ファイルがカスタマイズされているかどうかを判別します。これらのファイルは変更しないでください。

## デフォルトの RWP HTTP ポートの変更

RWP が HTTP の要求をリッスン (受信の監視) するポートは、`rwpcnf` の **Listen** パラメータによって定義されます。例を次に示します。

### Listen 80

これは、RWP がポート 80 (HTTP のデフォルト) でリッスン (受信の監視) することを指定します。これを変更して、利用可能な任意のポート番号を指定することができます。例を次に示します。

### Listen 8000

これは、RWP がポート 8000 でリッスン (受信の監視) することを指定します。

**注:** RWP HTTP ポート番号を 80 以外に変更する場合は、RWP を参照するすべての URL にそのポート番号を含める必要があります。例を次に示します。

`http://RWP_host.domain:8000/ccweb`

## デフォルトの RWP サブレット エンジン ポートの変更

RWP サブレット エンジンが RWP と通信するポートは、`workers.properties` ファイルのほか、`server.xml` ファイルと `server2.xml` ファイルでも定義されます。表 31 に、デフォルトのポート番号、ポートの使用、ポート番号が定義されているファイルを一覧表示します。

表 31. デフォルトの RWP サブレット エンジン ポート

ポート番号	説明	場所
8009 (HP-UX では 0616)	RWP と RWP サブレット エンジンとの間の通信に使用	server.xml、workers.properties
8010	RWP と RWP ReqWeb サブレット エンジンとの間の通信に使用 (Windows のみ)	server2.xml、workers.properties
8005 (HP-UX では 8006)	RWP サブレット エンジンのシャットダウン ポート	server.xml

これらのポートが RWP ホスト上のほかのアプリケーションで使用されている場合は、別のポートを使用するようにそのアプリケーションを再設定することをお勧めします。アプリケーションを再設定できない場合は、RWP が使用するポートを変更する必要があります。

次の server.xml の例では、ポート 8009 を、RWP と RWP サブレット エンジン との内部通信に使用するポートとして定義しています。

```
<Connector className="org.apache.jsp.tomcat4.Ajp13Connector"
    port="8009" minProcessors="5" maxProcessors="75"
    acceptCount="10" debug="0"/>
```

いずれかのポートを変更するには、該当する Connector エLEMENTの port 属性の値を変更します。たとえば、次の行では **port="8088"** 属性が指定されています。

```
<Connector className="org.apache.jsp.tomcat4.Ajp13Connector"
    port="8088" minProcessors="5" maxProcessors="75"
    acceptCount="10" debug="0"/>
```

これにより、RWP とサブレット エンジンとの間の内部通信にポート 8088 が使用されるようになります。

**注:** server.xml の **Ajp13Connector** ELEMENTのポート属性を変更する場合は、workers.properties ファイルのこの行のポートも変更する必要があります。

```
worker.ajp13.port=8009
```

server2.xml の **Ajp13Connector** ELEMENTのポート属性を変更する場合は、workers.properties の **worker.ajp13\_2.port** 行のポートも変更する必要があります。これらのファイルは、RWP が RWP サブレット エンジンの 2 番目のインスタンスをサポートしている Windows ホスト上にのみ存在します。

## RWP のログの設定

アクセス、エラー、イベントのログに関する rwp.conf 内の多数の設定パラメータは、見出し **"Logging-related directives"** の下にグループ化されています。以下は変更可能です。

- **ErrorLog** は、エラーが記録されるファイルの名前を指定します。例を次に示します。

```
ErrorLog logs/error.log
```

これは、エラーを RWP インストール ディレクトリの下のファイル logs/error.log に記録することを指定します。

注: RWP のログ ファイルは、172 ページの『ログの循環とログのクリーンアップ』で説明するように、rotatelog コマンドにパイプ処理で渡される場合があります。

- **LogLevel** は、ログに記録されるエラーのタイプと重大度を指定します。例を次に示します。

```
LogLevel warn
```

これは、警告以下のエラーをログに記録することを指定します。表 32 に、さまざまなログ レベルを重大度の高いものから順に一覧表示します。**LogLevel** ログ イベントにこれらの値のいずれかを指定すると、その重大度以下のすべての重大度のイベントがログに記録されます。

表 32. RWP ログ レベル

LogLevel	ログに記録されるメッセージ
<b>emerg</b>	サーバーが動作しなくなる可能性のあるイベントに関する緊急メッセージ (最高の重大度)
<b>alert</b>	即座に修正する必要がある状態
<b>crit</b>	ハードウェア エラーまたはシステム エラーなどの重大な状態
<b>error</b>	その他すべてのエラー
<b>warn</b>	警告メッセージ
<b>notice</b>	特別な処置が必要な可能性のある状態
<b>info</b>	情報メッセージ (最低の重大度)
<b>debug</b>	RWP のデバッグ

- **LogFormat** は、イベントをログに記録するときの形式を指定します。事前に定義された形式の 1 つを選択するか (たとえば、**common**)、独自の形式を指定します。ログ ファイルの文字列を構成するための形式のトークンとルールの詳細については、[www.apache.org](http://www.apache.org) で **mod\_log\_config** に関するドキュメントを参照してください。
- **CustomLog** は、RWP アクセス要求が記録されるファイルの名前を指定します。例を次に示します。

```
CustomLog logs/access.log common
```

これは、アクセス要求を、RWP のインストール ディレクトリのファイル logs/access.log に、**common** ログ ファイル形式で記録することを指定します。

## ログの循環とログのクリーンアップ

ClearCase がインストールされている RWP ホストでは、スケジュールされている Weekly Log Scrubbing ジョブによって、30 日を超えたすべての RWP ログ ファイルが削除されます。『IBM Rational ClearCase 管理ガイド』で説明しているように、このジョブを修正して、ジョブの実行頻度や削除するログ ファイルの経過日数など、操作の詳細を変更することができます。

**注:** ClearCase がインストールされているホストでデフォルトの RWP ログの場所を変更する場合は、新しい場所でこれらのログを検索するために `cleanuplogs` スクリプトの修正も必要になります。

ClearCase がインストールされていない RWP ホストでは、以下のプログラムを定期的に行って、古いログ ファイルを削除する必要があります。

n Windows の場合は、RWP の `bin` ディレクトリにある Perl スクリプト `cleanuplogs.pl`

オペレーティング システムから提供される、スケジュール実行プログラム (Windows の **at** など) を使用してこれらのスクリプトを実行するか、手動で実行します。

---

## RWP で使用するユーザー ID の変更

インストール時に、RWP は組み込みユーザー アカウントの ID によって実行されるように構成されます。このアカウントは必要に応じて変更できます。変更する場合は、この項で説明する手順に従ってください。

### Windows での RWP ユーザー アカウントの変更

Windows コンピュータでは、RWP はブート時に Windows サービス コントロール マネージャによって起動され、ID として組み込みの **LocalSystem** アカウント (NT AUTHORITY\SYSTEM) を使用して実行されます。

Windows で RWP を実行する ID を変更するには

1. サービス アプリケーションを実行します ([コントロール パネル] の [サービス] をクリックするか、[コントロール パネル] の [管理ツール] をクリックし、[サービス] をクリックします)。RWP には以下のサービスがあります。
  - Rational Web Platform, HTTP Server
  - Rational Web Platform, servlet engine
  - Rational Web Platform, ReqWeb servlet engine

**注意:** ClearCase Web インターフェイスをサポートしている Windows RWP ホスト上では、HTTP Server と servlet engine は LocalSystem で実行する必要があります。RWP がその他のユーザーとして実行されると、ClearCaseWeb インターフェイスは失敗します。ReqWeb サーブレット エンジンには、必要に応じて別のアカウントで実行することができます。

2. 各サービスの **[ログオン]** プロパティを編集して、ローカル アカウントまたはドメイン アカウントを指定します。
3. **rwp\_restart** を実行して、RWP を停止し再起動します (174 ページの『RWP の停止と再開』を参照してください)。

---

## RWP の停止と再開

RWP は通常、ブート時に開始されます。RWP を停止または再開する必要がある場合は (たとえば、変更した構成ファイルを再読み込みさせる場合など)、次のコマンドのうちの 1 つを使用します。これらのコマンドは通常 RWP の bin ディレクトリにインストールされています。

- **rwp\_startup** は、RWP が実行されていない場合に、RWP を開始します。
- **rwp\_shutdown** は、RWP と、関連付けられたサーブレット エンジン プロセスを停止します。
- **rwp\_restart** は、**rwp\_shutdown** コマンドと **rwp\_startup** コマンドをこの順序で実行して、RWP を再開します。

注: ClearCase を停止、開始するコマンドは、RWP には影響しません。

---

## ほかの Web サーバーから RWP へのアクセスの構成

サイトによっては、ほかの Web サーバーからプロキシまたはリダイレクトによって、RWP にアクセスする必要がある場合があります。この構成では、ほかの Web サーバーは、同じサーバー上で稼働しているが別のポートを使用している RWP プロセス、または別のサーバー上で稼働している RWP プロセスに特定の URL をリダイレクトします。このタイプのアクセスが必要になる一般的なユース ケースには、以下の 2 つがあります。

- **RWP と別の Web サーバーとを同一ホスト上で実行する必要がある場合。** RWP は、別の Web サーバーを実行する必要のないホスト上にインストールすることをお勧めします。このようなインストールが不可能な場合は、別の Web サーバーでは RWP が使用していないポートを使用するように設定することをお勧めします。これが不可能な場合は、ほかの Web サーバーが使用していないポートを RWP が使用するよう構成する必要があります (170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』を参照)。また、オプションで、ほかの Web サーバーが Rational Web クライアントで使用する URL を RWP にリダイレクトするよう構成します。
- **RWP をファイアウォールの内側で稼働する必要がある場合。** RWP へのアクセスを制限するために、ファイアウォールの外側で稼働している Web サーバーについて、特定の URL をファイアウォールの内側で稼働している RWP インスタンスに渡すように構成することができます。

この項の手順に従って、以下のいずれかの Web サーバーから RWP へのアクセスを提供するプロキシまたはリダイレクトの構成を有効にします。

- Apache HTTP Server
- Microsoft Internet Information Server (IIS)

注: Rational Web アプリケーションへのプロキシ アクセスまたはリダイレクト アクセスを構成する方法は、そのアプリケーションと、プロキシとして動作する Web サーバーに固有のものです。この項で具体的に上げられている Web サーバーと Rational 製品のみが、プロキシまたはリダイレクトの構成においてサポートされます。

## Apache の mod\_proxy サポートの構成

Apache HTTP Server のインスタンスを構成して RWP へのプロキシ アクセスをサポートするには、Apache の **mod\_proxy** モジュールが提供するプロキシ サポートによって Apache HTTP Server を構成する必要があります。この方法の詳細については、[www.apache.org](http://www.apache.org) で入手できます。必要になる手順の概要は次のとおりです。

1. mod\_proxy モジュールなどの必要なモジュールをロードするために、Apache HTTP Server を構成します。通常は、Apache の httpd.conf ファイル内の **mod\_proxy** サポートに関するさまざまな **LoadModule** 指示文をコメント解除する必要があります。たとえば次のような場合です。

```
LoadModule proxy_module modules/mod_proxy.so

LoadModule proxy_connect_module modules/mod_proxy_connect.so

LoadModule proxy_http_module modules/mod_proxy_http.so
```

また、httpd.conf 内の **<IfModule mod\_Proxy.c>** ブロックの **ProxyRequests On** 指示文もコメント解除する必要があります。

```
<IfModule mod_Proxy.c>

ProxyRequests On

</IfModule>
```

2. httpd.conf 内の **<IfModule mod\_proxy.c>** ブロックに適切な **ProxyPass** 指示文と **ProxyPassReverse** 指示文を追加します。**ProxyPass** 指示文と **ProxyPassReverse** 指示文はアプリケーションに固有です。

ClearCase Web インターフェイスの場合は、次の **ProxyPass** 指示文と **ProxyPassReverse** 指示文を追加します。

```
ProxyPass /ccweb http://hostname[:port]/ccweb
ProxyPassReverse /ccweb http://hostname[:port]/ccweb
ProxyPass /Java_Plugins http://hostname[:port]/Java_Plugins
ProxyPassReverse /Java_Plugins http://hostname[:port]/Java_Plugins
```

*hostname* は RWP サーバー ホストの名前です。*port* はオプションのポート番号で、RWP が HTTP の要求をリッスン (受信の監視) するデフォルトのポートを変更した場合には指定する必要があります (170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』を参照)。たとえば、次の指示文により、プロキシ サーバーは、**RWP\_host** という名前のホストのポート 81 でリッスン (受信の監視) している RWP プロセスへの、ClearCase Web インターフェイスによるアクセスをサポートします。

```
ProxyPass          /ccweb http://RWP_host:81/ccweb

ProxyPassReverse   /ccweb http://RWP_host:81/ccweb

ProxyPass          /Java_Plugins http://RWP_host:81/Java_Plugins

ProxyPassReverse   /Java_Plugins http://RWP_host:81/Java_Plugins
```

**注:** この例で指定されている URL は、ホスト名とオプションのポート番号を除き、指定されているとおりに httpd.conf ファイルに記述する必要があります。

## Internet Information Server の URL リダイレクトの設定

HTTP 要求をポート 80 でリッスン (受信を監視) する Microsoft Internet Information Server (IIS) のインスタンスと RWP とが共存する必要がある場合、RWP を再構成して HTTP 要求を別のポートでリッスンするようにして (170 ページの『デフォルトの RWP HTTP ポートの変更』を参照)、以下の手順のいずれかを実行します。

- RWP のこのインスタンスによって処理される Rational Web インターフェイスが使用する URL に、ポート指定子 (`http://hostname:81/ccweb/` など) を含める。
- IIS のリダイレクト機能を使用して、ポート 80 にリダイレクトされ (IIS により受信され) た Rational Web インターフェイスの URL が強制的に RWP にリダイレクトされるようにする。

IIS でリダイレクトを使用するように構成するには

1. IIS の構成ユーティリティ (インターネット サービス マネージャ) を実行します。
  2. IIS の [既定の Web サイト] フォルダに新しい仮想ディレクトリを作成します。
    - [仮想ディレクトリ エイリアス] で、仮想フォルダを使用する Web クライアント名が分かるような名前を指定します (**ccweb** など)。
    - [Web サイトのコンテンツのディレクトリ パス] に、Web サーバー上の物理ディレクトリを指定する必要があります。このディレクトリは、ホスト上に存在している必要がありますが、Step 4 でリダイレクトを設定した後は、Web サイト コンテンツの格納には使用されません。この処理を行うために、新しいディレクトリを作成し、誤って削除される危険性が減るように保護することをお勧めします。
- 注:** このディレクトリを RWP インストール ディレクトリのサブディレクトリとして作成すると、RWP がホスト上に再インストールされたときに削除されます。
- [アクセス許可] には、[読み取り] と [ASP 等のスクリプトを実行する] を指定します。
3. 手順 2 で作成した仮想ディレクトリを右クリックし、その [プロパティ] ダイアログ ボックスを開きます。
  4. [仮想ディレクトリ] タブの [このリソースへの接続時に使用されるコンテンツの場所] で、[URL へのリダイレクト] を選択します。
  5. [リダイレクト先] ボックスに、RWP へのリダイレクトのために Rational Web インターフェイスで使用する URL を入力します。たとえば、ClearCase Web インターフェイス (**ccweb**) をリダイレクトして、ポート 81 をリッスン (受信を監視) している RWP のインスタンスを使用する場合は、次のように入力します。

**`http://hostname:81/ccweb/`**

*hostname* は、RWP を IIS が稼働しているホスト名です。

6. [クライアントは以下に送信されます] で、[上で入力した URL] を選択します。
7. URL `http://hostname/ccweb` にアクセスした場合に、5 で指定した URL にある ClearCase Web インターフェイスにリダイレクトされることを確認します。

## RWP でセキュア ソケットを使用する構成

Rational Web クライアントと RWP との間で通信の安全性を確保するには、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルをサポートするよう RWP を構成します。これを実現するには、以下の手順を実行する必要があります。

1. RWP 構成ファイルを編集して、SSL サポートを有効にします。
2. 必要に応じて クライアントの URL を変更して、HTTPS プロトコルをサポートします。
3. RWP を停止して再開します。

RWP を構成して SSL をサポートする手順は、**mod\_ssl** モジュールを使用する Apache HTTPD を構成する手順と同じです。この手順は [mod\\_ssl.org](http://mod_ssl.org) で詳細に説明されています。ここでは、構成手順の要約を紹介します。

SSL を使用するための最初の手順は、認証局 (CA) から証明書を取得することです。RWP には **openssl** プログラムが用意されており (RWP bin ディレクトリにインストール済み)、試験用の自己署名証明書の生成と CA からの証明書とキーの取得に使用できます。**openssl** の詳細については、[openssl.org](http://openssl.org) を参照してください。

**openssl** を RWP の bin ディレクトリで実行して、自己署名証明書とそれに一致する秘密鍵を作成し、以下の手順の2 と3 で指定している場所にそれらをインストールします。

**注:** 指定した **-out** ディレクトリでファイルを作成できる権限がないと、このコマンドは失敗します。

SSL 接続を受け付けるように RWP を構成するには

1. **ssl.conf** 構成ファイルをインクルードするように RWP を構成します。  
**rwpp.conf** で、次の指示文をコメント解除します。

```
Include conf/ssl.conf
```

**注:** **ssl.conf** ファイルには、RWP が HTTPS 要求のリッスン (受信の監視) に使用するポートを指定する **Listen** 指示文があります。デフォルトのポートは 443 です。これを、デフォルトの HTTP ポートの変更と同じ要領で変更できます。RWP で HTTPS 要求のみをリッスン (受信を監視) するように設定するには、**rwpp.conf** ファイルの **Listen** 指示文をコメントアウトします。

2. 証明書をインストールします。証明書ファイルのデフォルトの場所は、**ssl.conf** ファイルの次の指示文に指定されています。

```
SSLCertificateFile rwpp-root-dir/conf/server.crt
```

*rwpp-root-dir* は、RWP がインストールされているホスト上のディレクトリを表します。証明書ファイルを別のディレクトリにインストールする場合は、**ssl.conf** のこの行がその場所を参照していることを確認してください。

3. 鍵をインストールします。鍵ファイルのデフォルトの場所は、**ssl.conf** ファイルの次の指示文に指定されています。

```
SSLCertificateKeyFile rwpp-root-dir/conf/server.key
```

鍵ファイルを別のディレクトリにインストールする場合は、この指示文がその場所を参照していることを確認してください。

4. RWP を停止して再開します。

注: Web アプリケーションを SSL を使用するように構成するには、アプリケーションの URL に **https** プロトコルを指定します。例を次に示します。

`https://RWP_host.domain/ccweb`

## RWP に対する安全なアクセスの設定

SSL を使用して **ccweb** などの Rational Web クライアントとの通信の安全性を確保するよう RWP を構成する方法は数多くあります。図 2 に、公共インターネット上の **ccweb** クライアントがファイアウォール経由で RWP にアクセスできる典型的な構成を示します。クライアント Web ブラウザと **ccweb** をサポートする RWP ホストとの通信には HTTPS を使用することで、SSL による安全性を確保します。RWP と企業イントラネット上の ClearCase サーバーとの通信には、通常の RPC (Remote Procedure Call) を使用しますが、これは安全ではありません。ClearCase RPC ではファイアウォール経由の通信は不可能なので、RWP と **ccweb** が使用する ClearCase サーバーとの間にファイアウォールは設置できません。

図 2 に示す構成の場合、ccweb の URL は次のようになります。

`https://hostname/ccweb`

*hostname* は、RWP サーバー ホスト名です。ClearCase Web クライアントと RWP との間の HTTPS 通信には、HTTPS のデフォルトであるポート 443 が使用されます。

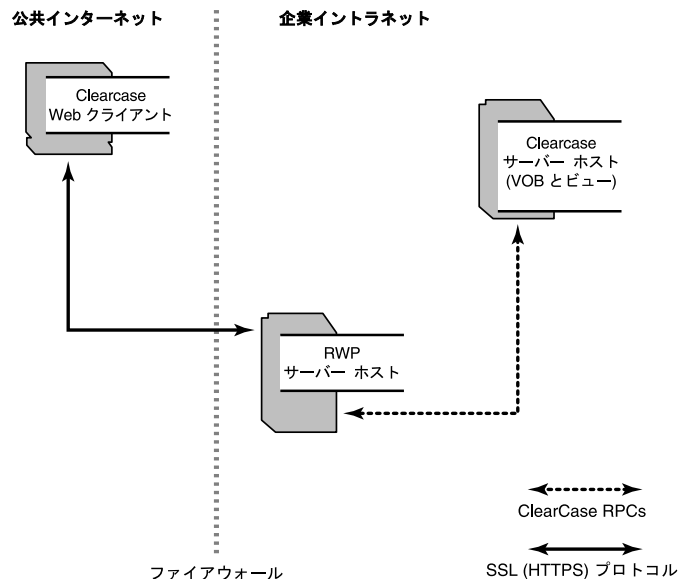


図 2. ccweb と RWP との間の安全な通信

---

## RWP へのその他の変更

ここで説明した RWP 構成ファイル以外は修正しないことをお勧めします。一部の構成オプションを変更すると、RWP の処理に悪影響を及ぼします。この項で推奨していない変更には、実働環境に導入する前に十分な評価が必要です。



---

## 第 10 章 IBM Rational 製品の削除

この章では、IBM Rational 製品をサーバーから削除する方法について説明します。デスクトップ製品またはクライアント製品の削除については、『IBM Rational Software デスクトップ製品インストールガイド』を参照してください。

---

### IBM Rational ソフトウェアを削除する前に

ここでは、IBM Rational サーバー製品を削除するための一般要件について説明します。また、セットアップ ウィザードによってコンピュータから削除されるコンポーネントと削除されないコンポーネントについても説明します。

- アプリケーションを別のシステムに移動する場合は、まず、ライセンス キー ファイルを IBM Rational Software アカウントに返却します。ノードロック ライセンス キーまたはフローティング ライセンス キーを返却するには、AccountLink を使用します (ただし、英語のみのご利用となります)。AccountLink を見つけるには、<https://www6.software.ibm.com/reg/rational/rational-i> にアクセスして (ただし、英語のみのご利用となります)、[ライセンス キーの要求と管理 (Request and Manage License Keys)] をクリックします。ライセンスの移動または返却の詳細については、『IBM Rational Software ライセンス管理ガイド』を参照してください。
- IBM Rational 製品を削除しても、ライセンス キー、プロジェクト データベース、製品の使用中に作成したその他のファイルは削除されません。IBM Rational 製品のアップグレード版を別のドライブにインストールする場合や、新しいインストール パスを使用する場合は、これらのファイルのバックアップを作成して手動で削除します。削除しないと、セットアップ ウィザードによってこれらのファイルが検出され、新しい場所ではなく、以前の場所にアプリケーションがインストールされる可能性があります。
- IBM Rational 製品 (IBM Rational ライセンス サーバーを含む) をクライアントから削除する前に、License Key Administrator (LKAD) で指定されたライセンスサーバーのホスト名を記録しておきます。
  1. [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Rational Software] をポイントし、[Rational License Key Administrator] をクリックして、LKAD を起動します。
  2. [設定] メニューの [クライアント/サーバーの構成] をクリックして、ホスト名を探します。
  3. 新しい IBM Rational 製品をインストールした後で、LKAD 内のライセンスサーバー名をリセットします。インストールが終了すると、LKAD ウィザードが起動します。ウィザードが起動しない場合は、[スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Rational Software] をポイントし、[Rational License Key Administrator] をクリックします。
- ClearCase LT を削除しても、コンピュータから ClearCase LT データは削除されません。同じコンピュータに ClearCase LT を再インストールする場合は、同じディレクトリに ClearCase LT をインストールして以前のデータを参照できるようにする必要があります。

- Windows NT、Windows 2000、Windows XP コンピュータから IBM Rational 製品を削除するには、ローカル システムに対する Windows 管理者権限が必要です。
- アプリケーションや関連ファイルを使用しているユーザーがいないことを確認します。使用中のファイルを削除することはできません。

## ClearCase LT サーバーから ClearCase データを削除する前に

データを評価用にのみ使用し、保存も実働環境での使用も行わない場合を除き、ClearCase データをコンピュータから削除しないでください。

ClearCase LT サーバーから ClearCase データを完全に削除するには、ClearCase LT を削除する前に次の手順を実行してください。

1. ClearCase 管理コンソールまたは **cleartool lsvo** コマンドを使用して、ClearCase LT サーバー上のすべての VOB を検索します。次に、ClearCase 管理コンソールまたは **cleartool rmvo** コマンドを使用して、これらの VOB を削除します。
2. ClearCase 管理コンソールまたは **cleartool lsview** コマンドを使用して、すべてのビューを検索します。次に、ClearCase 管理コンソールまたは **cleartool rmview** コマンドを使用して、これらのビューを削除します。
3. ClearCase LT 管理コンソールまたは **cleartool lsstgloc** コマンドを使用して、ClearCase LT サーバー上のすべてのサーバーの記憶場所を検索します。次に、ClearCase 管理コンソールまたは **cleartool rmstgloc** コマンドを使用して、これらの記憶場所を削除します。
4. レジストリ値を削除するには、**regedit** を使用して、次に示す行を削除します。

```
HKLM\Software\Atria\ClearCase\CurrentVersion\ServerSetupComplete
```

```
HKLM\Software\Atria\ClearCase\CurrentVersion\CredmapAllowedDomainList
```

5. インストール先ディレクトリから ClearCase/var ディレクトリを削除します。

## RequisiteWeb を削除する前に

RequisiteWeb によって、新しいサンプル プロジェクトのパスを含むプロジェクト カタログが新規にインストールされます。既存の catalog.txt ファイルのコピーを作成してから、RequisiteWeb を削除してください。RequisiteWeb の以前のバージョンからアップグレードする場合、catalog.txt ファイルは、デフォルト ディレクトリの C:\Program Files\Rational\RequisitePro\ReqWeb\Projects に格納されています。

古い catalog.txt ファイルのエントリを、新しいバージョンの RequisiteWeb と共に、次のデフォルト ディレクトリにインストールされる新しいカタログ ファイルに追加します。

```
C:\Program Files\Rational\RequisitePro\ReqWeb\Projects
```

**注:** RequisiteWeb を削除すると、既存の webapps2 ディレクトリも削除されます。webapps2 ディレクトリ内の構成ファイルまたはその他のファイルを保持するには、RequisiteWeb を削除する前にそれらのファイルを移動する必要があります。

詳しくは、155 ページの『RequisiteWeb 用 RequisitePro プロジェクトの管理』を参照してください。

---

## IBM Rational ソフトウェアの削除

Windows のコントロール パネルの [アプリケーションの追加と削除] を使用して、IBM Rational 製品を選択し、削除します。[スタート] ボタンをクリックし、[設定] をポイントします。次に、[コントロール パネル] をクリックし、[アプリケーションの追加と削除] をクリックします。製品を強調表示し、[削除] をクリックします。

RequisiteWeb のデータや追加のソフトウェアを削除する方法については、以下の各項を参照してください。

- 183 ページの『RequisiteWeb 2003.06.00 の削除』
- 183 ページの『RequisiteWeb 2002.05.X の削除』
- 185 ページの『RequisiteWeb 2001A の削除』

### RequisiteWeb 2003.06.00 の削除

1. Windows のコントロール パネルの [アプリケーションの追加と削除] を使用して、RequisiteWeb を選択し、削除します。
2. **dcomcnfg** を使用して、[既定の起動アクセス許可] と [既定のアクセス許可] から、Local Administrators Group を削除します。
3. ReqWebUser が不要になった場合は、このユーザーを削除します。
4. RequisitePro のプロジェクト データ、バックアップ ファイル、ログ ファイルは、サーバー上に残る場合があります。ログ ファイルは、  
C:\Program Files\Rational\common\rdp\logs\ にあります。

### RequisiteWeb 2002.05.X の削除

Windows NT または Windows 2000 サーバーから RequisiteWeb を削除するには、そのコンピュータに対する Windows 管理者権限が必要です。以下の操作を行うには、後に示す手順に従ってください。

- ReqWeb と Jakarta の仮想ディレクトリの削除
- Jakarta ISAPI フィルタの削除
- IIS 管理サービスの再起動
- RequisiteWeb プログラム ファイルの削除

**注:** RequisiteWeb 2001A を削除するには、185 ページの『RequisiteWeb 2001A の削除』を参照してください。

### ReqWeb と Jakarta の仮想ディレクトリの削除

1. 以下のいずれかの手順を実行して、インターネット サービス マネージャを起動します。
  - [スタート] メニューから、[ファイル名を指定して実行] をクリックします。次に、「inetmgr」と入力します。[OK] をクリックします。

- Windows NT 4.0 の場合は、[スタート] メニューから、[プログラム]、[Windows NT 4.0 Option Pack]、[Microsoft Internet Information Server] の順にポイントし、[インターネット サービス マネージャ] をクリックします。
  - Windows 2000 Server の場合は、[スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール] の順にポイントし、[インターネット サービス マネージャ] をクリックします。
2. [既定の Web サイト] をクリックし、ツールバーの [停止] ボタンをクリックします。
  3. ReqWeb 仮想ディレクトリを右クリックし、[削除] をクリックします。
  4. Jakarta 仮想ディレクトリを右クリックし、[削除] をクリックします。インターネット サービス マネージャを開いたままにします。

## Jakarta ISAPI フィルタの削除

1. [既定の Web サイト] を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。[既定の Web サイトのプロパティ] ダイアログ ボックスが開きます。[ISAPI フィルタ] タブをクリックし、**jakarta** フィルタを選択します。
2. [削除] をクリックし、[OK] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。

## IIS 管理サービスの再起動

次の表のタスクを実行します。ユーザーのオペレーティング システムに対応する列に記載された操作方法を実行してください。

手順	Windows NT 4.0	Windows 2000
1	インターネット サービス マネージャを閉じます。	インターネット サービス マネージャで、サーバー名を右クリックします。
2	[スタート] ボタンをクリックし、[ファイル名を指定して実行] をクリックします。次に、「 <b>cmd</b> 」と入力します。	[IIS を起動します] をクリックします。
3	MS-DOS ウィンドウで、「 <b>net stop w3svc</b> 」と入力します。	[停止/開始/再起動] ダイアログ ボックスで、[<server name> のインターネット サービスを再起動します] をクリックします。
4	「exit」と入力して、MS-DOS ウィンドウを閉じます。	[OK] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。  インターネット サービス マネージャを閉じます。

## RequisiteWeb プログラムの削除

Windows のコントロール パネルの [アプリケーションの追加と削除] を使用して RequisitePro を削除し、アンインストール プロセスが完了したら (サーバーの再起動も含まれます)、C:\Program Files\Rational\RequisitePro\ReqWeb ディレクトリがサーバー上に残っているかどうかを確認します。残っている場合は、ReqWeb ディレクトリとそのサブディレクトリを削除します。また、次の手順に従って、システム環境変数を編集する必要があります。

1. [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。コントロール パネルの [システム] アイコンをダブルクリックします。[システムのプロパティ] ダイアログ ボックスが開きます。
2. 次のいずれかの手順を実行します。
  - Windows 2000 の場合は、[詳細設定] タブで [環境変数] をクリックします。
  - Windows NT の場合は、[環境] タブをクリックします。

PATH システム変数を探し、PATH ディレクトリから以下を削除します。

C:¥Program Files¥Rational¥common¥java¥jre¥bin

## RequisiteWeb 2001A の削除

Windows NT または Windows 2000 サーバーから RequisiteWeb を削除するには、そのコンピュータに対する Windows 管理者権限が必要です。以下の操作を行うには、後に示す手順に従ってください。

- RqTomcat サービスの停止と削除
- ReqWeb と Jakarta の仮想ディレクトリの削除
- RequisiteWeb 2001A の削除
- Tomcat\_Home と Java\_Home システム変数の削除

## RqTomcat サービスの停止と削除

手順	Windows NT 4.0	Windows 2000
1	Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。次に、[サービス] をクリックします。	[スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックし、[管理ツール]、[サービス] の順にダブルクリックします。
2	<b>RqTomcat</b> サービスを検索して選択します。	RqTomcat サービスを探し、そのアイコンをダブルクリックして、[プロパティ] ダイアログ ボックスを表示します。
3	[サービス] ウィンドウで、[停止] をクリックします。	[全般] タブの [サービスの状態] で、[停止] をクリックします。[OK] をクリックして、サービス ウィンドウを閉じます。
4	終了するには [閉じる] をクリックします。	[OK] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。  インターネット サービス マネージャを閉じます。

RqTomcat サービスを停止したら、次の手順に従って、システムからサービスを削除します。

1. MS-DOS シェルを開き、次のディレクトリに移動します。

C:¥ProgramFiles¥Rational¥jakarta-tomcat¥bin

2. MS-DOS プロンプトが表示されたら、次のように入力します。

**jk\_nt\_service -R RqTomcat**

3. MS-DOS シェルを閉じます。

## ReqWeb と Jakarta の仮想ディレクトリの削除

1. 以下のいずれかの操作を実行して、インターネット サービス マネージャを起動します。
  - Windows NT 4.0 の場合は、[スタート] メニューから、[プログラム]、[Windows NT 4.0 Option Pack]、[Microsoft Internet Information Server] の順にポイントし、[インターネット サービス マネージャ] をクリックします。
  - Windows 2000 Server の場合は、[スタート] メニューから、[プログラム]、[管理ツール] の順にポイントし、[インターネット サービス マネージャ] をクリックします。
2. [既定の Web サイト] で、ReqWeb と Jakarta の仮想ディレクトリを探します。そのディレクトリを右クリックし、[削除] をクリックします。
3. [既定の Web サイト] を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。
4. [ISAPI フィルタ] タブで、**jakarta** フィルタを探します。**jakarta** フィルタを右クリックし、[削除] をクリックします。
5. [OK] をクリックして、インターネット サービス マネージャを終了します。

## RequisiteWeb 2001A の削除

Windows のコントロール パネルの [アプリケーションの追加と削除] を使用して RequisitePro を削除し、アンインストール プロセスが完了したら (サーバーの再起動も含みます)、以下のディレクトリがサーバー上に残っているかどうかを確認します。

C:\Program Files\Rational\RequisitePro

C:\Program Files\Rational\jakarta-tomcat

残っている場合は、ディレクトリとそのサブディレクトリを削除します。

## Tomcat\_Home と Java\_Home システム変数の削除

1. [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。コントロール パネルの [システム] アイコンをダブルクリックします。[システムのプロパティ] ダイアログ ボックスが開きます。
2. 次のいずれかの手順を実行します。
  - Windows 2000 の場合は、[詳細設定] タブで [環境変数] をクリックします。
  - Windows NT の場合は、[環境] タブをクリックします。
3. TOMCAT\_HOME と JAVA\_HOME システム変数を探し、システムから削除します。

**注:** バックアップ プロジェクトと catalog.txt ファイルを元の場所に復元します。

---

## TestManager の除去

TestManager を、以前のリリース (バージョン 2003.06) から今回のリリース (バージョン 2003.06.13) にアップグレードする場合は、新しいバージョンをインストールする前に、Nutcracker の実行可能ファイルを削除し、コンピュータを再起動します。Nutcracker の実行可能ファイルを削除するには、[OK] をクリックします。バージョン 2003.06.00 のインストールを始める前に、コンピュータを再始動します。

1. Windows の [スタート] メニューの [設定] をポイントし、[コントロール パネル] をクリックします。
2. コントロール パネルの [アプリケーションの追加と削除] をダブルクリックします。
3. [Nutcracker] を選択して、[削除] をクリックします。



---

## 付録. 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032  
東京都港区六本木 3-2-31  
IBM World Trade Asia Corporation  
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation  
Department BCFB  
20 Maguire Road  
Lexington, MA 02421  
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

#### 著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、このサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。お客様は、IBM のアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

(C) (お客様の会社名) (年).このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。(C) Copyright IBM Corp. \_年を入れる\_.All rights reserved.

追加の法的通知は、お客様の Rational ソフトウェア インストレーションに含まれています。

## 商標

IBM、ClearCase、ClearCase MultiSite、ClearQuest、DB2、Rational、RequisitePro は、IBM Corporation の商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。







Printed in Japan

G126-5492-03



日本アイ・ビー・エム株式会社  
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12